

ラブライブ 未来へ受け継ぐ奇跡の物語

杉並3世

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幕末から続く古武術『朝霧流剣術』師範代である朝霧悠斗はアルテールスでの3年間の修行を終えて日本へ帰国した。

海軍士官である父親の頼みで生徒数の減少で女子高である国立音ノ木坂学園にテスト生転入を果たしたが、想像以上に蝕られていたことに嘆いた時、いそこである穂乃果、幼馴染であることり、海末で廃校を回避するためスクールアイドル『μ、s』を始めた。だが、廃校問題に立ち向かうにつれてある少女の封じられた過去が開かれようとしている。

それは廃校問題の切り札でもあり開けてはならないパンドラの箱でもある。

100年ほど前から歴史の表舞台から消えていった一人の少女の思いと廃校問題が交差するとき真実は開かれる。

目次

第一章 ハジマリノメロデー

01 プロローグ | 1

02 家族 | 17

03 再会 | 30

04 対策 | 53

05 スクールアイドル!! | 70

06 始動 | 97

07 練習 | 114

08 思い | 130

09 始まりの歌 | 148

10 Fast Live | 168

10・5 後日談 | 188

第二章 ソレゾレノオモイ

11 やりたい事 | 208

12 決意 | 227

13 襲撃 | 246

14 雨上がり | 265

15 頂上決戦 | 282

16 開催 | 302

17 本音 | 325

18 オープンキャンパス | 350

19 依頼 | 372

20 我ココニ戦ヲ宣ス | 391

21 自由 | 411

22 合宿① | 431

23	合宿②	448
24	悠斗の過去	465
25	悪夢	482
26	悠斗の覚悟	498
27	先の事	516
28	追いかけっこ?	541
29	間近	562
30	戦い	576
31	終結	594
32	事後処理	629

第一章 ハジマリノメロデー

01プロローグ

懐かしい夢を見ていた

あれは彼がまだ小学校のころだった

あの日はアルテールスに渡るのが決まり、靖国神社にお参りに行った帰りの事だった。

帰り道の公園にその子はいた。

日本人離れの容姿の金髪碧眼の可愛らしい女の子

時々公園で見かけるけど、いつも1人だ

意を決して話しかけてもそっけない態度からあまり人と関わりを持ちたくないのか
なと思う

その目には私に関わらないでと訴えているようだった

おそらく日本人離れの容姿に子供特有の排他的な性格で常に独りぼっちだった

だけど今日は様子が違った

靖国神社帰り道の公園で同じ小学生の男女数人のグループがその子にいじめをして

いた。

しかも一人にはチャラチャラした高校生位の男もいた
この光景に我慢できなかつたのか彼は止めに入った。

一人対複数人

中には高校生も混じっている

敵いつこない

そう思つて女の子は目をつぶっていた

けど急に静かになつて恐る恐る目を開けると彼以外の子は全員蹲つていった

女の子は啞然とした

何で一人で全員を相手して無傷な上、年上の高校生を完膚なきまで叩きのめしていた
やがてグループは逃げるように立ち去つた

二人つきりになつた彼らは近くのベンチに座つた

しばらく無言が続き気分を変えるため彼は自販機で飲み物を買いにいった

戻つてきたとき、

彼女が意を決して質問してきた

「……………ねえ……………なんで助けて……………くれたの？」

せつかく話しかけてきていた彼にもそつけない態度をとつた自分を助けた

本当なら無視されてもおかしくはなかった

すると彼はこう答えた

「目の前で困つた人を助けるのが家訓で……痛い……」

かつこよく決めようとしたが偶々陥没していた地面に足が引つ掛かり転けてしまつた

余りの恥ずかしさに顔を真っ赤にするが普段は無表情な彼女だけどそのときは無邪気に笑っていた

ああ、これが彼女の本当の素顔なのか

思っていた通り

いや、思っていた以上にいい笑顔だった

ここで彼の意識が目覚める

「んあ……懐かしい夢を見ていたな」

俺の名前は朝霧悠斗

安全保障理事会常任理事国の一つであり、世界で類を見ない大国、日本皇国出身で、今年で18歳になる。

6年前、アルテールス近衛師団へ教官として訪れていた父さんのいところで、俺が師範代を勤めている古武術『朝霧流剣術』と兄弟とも言うべき流派御神流正統後継者である御神咲夜の下で修業を始めた。

元々御神流と朝霧流は一つの剣術だったが幕末前、正統後継者に悩んだ末2つの流派に分けてそれぞれ独立させた。

朝霧の剣は裏の剣。如何に人を効率に殺めることができる殺人剣術の極み。御神の剣は表の剣。如何に多くの人を守るために考案した活人剣。

アルテールスの空港から東京国際空港、通称羽田空港までは約12時間。

機械トラブルで予定より2時間遅れの到着。長いフライトを終え、入国審査も無事終わり空港の外を出ると春の暖かい風に澄み渡る蒼い空が悠斗を出迎えてくれる。

「懐かしいな」

思えばこの6年間、これまでの修行を一言で表すなら・・・

「よく生きていたな」

師匠の無茶振りの無茶振り修行を課せられ、何度も死に掛けたこともあった。むしろ何で生きていたか自分自身に問いたい。

本来なら後もう一年おつて大学進学と同時に戻ってくる予定だったのだけど、事の発端は1月前に遡る

3月初頭

師匠のコネ・・・推薦で修行の一環としてある一個部隊の体長をやっていた時だった。あの日もある事後処理をしている内に時刻は18時を過ぎていた。

一見当たり前の時間だと思いが俺の場合直も重なつて36時間の連続勤務。

まだ18時前だけど日没はとうに過ぎてあたりは真つ暗で、3月のアルテールスの冬は寒くてコートなしでは少しきつい。

だがそれ以上に夜空が澄んでいるので満天に広がる星空が目に入った。

「あく・・・今日も疲れた」

最寄の駅から電車を使って宿舎に入ると電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

『やっほー！悠君!!』

「父さん!!」

このハイテンションなのは俺の父さんの朝霧悠介。

海軍士官学校の学生長を勤め主席で卒業した期待のエリート。

今は国防大臣直轄部隊の練習艦隊第一練習隊司令を勤めている。

今は海軍士官学校卒業の初級士官を乗せて遠洋航海に出ていた筈だ。

「どうしたの？」

『ちよつと頼みたいことがあつてね』

「改まつてどうしたの？」

父さんらしくもない。

『うん。音ノ木坂学園つて覚えてる？』

「母さんの母校だろう。それが？」

・・・なんだろうなんかいやな予感しかしない。

『修行の過程見させてもらったけど予定より早めに切り上げて音ノ木坂学園へ転入して

くれ』

「・・・は。」

おいおいおい笑えない親父ギャクだな。

『既に手続きは終えていて、咲夜も了承を得ているから何にも気にするな！ちなみに音ノ木坂の理事長はことりのお母さんがやっていたこともあつて快く引き入れてくれた

よ』

「……色々聞きたいことがあるがまず先に……今どこにいるクソ親父!!」

今すぐ親父の下に行つて俺が編み出した新技を披露させてやる!!

『実はな……音ノ木坂学園が廃校の危機に瀕している』

「!?!」

『この間ある港に入港した時、国際電話で理事長から電話があつてね。それを打開するために共学化の話を進めているのだけど何にも下準備もできていない状態で入学させるわけには行かず……そこで信頼できる人物をテスト生として転入させる』

「……はあ、そういうことは先に言えよ」

『行つてくれる?』

「もう、結構話が進んでいるみたいだし。何より母さんの母校をなくすわけには行かない」

そういうこともあり急いで後釜を選定し、引継ぎ作業・帰国につくために荷物の最終整理をしていた。

個人の荷物は下宿先に送り、それ以外の家具とかの大きな荷物は横須賀の実家に送つた。

市場のアンティークショップで手に入れた懐中時計を見ると17時5分を指してい

た。

空港までの道のりを考えると丁度いい頃合いなので封筒を鞆の中にしまい込み、愛用している軍用のブラックトレンチコートと黒のソフト帽を被り、鞆を抱えて5年間お世話になった宿舎に一札をして宿舎を後にした。鍵は管理人さんに渡してそれでおいしい。

首都の4月上旬から段々寒くつていき気温の変化が激しい。だがそれ以上に夜空が澄んでいるので満天に広がる星空が目に入った。最寄りの駅から電車を使って空港に向かう。

1時間ぐらいで空港について空港のロビーに入ると・・・

「師匠！わざわざ見送って着て下さったのですか!？」

「愛弟子が帰国するのだ見送りに行かないと」

俺とあまり変わらないすらつとした身長に鮮やかな黒髪。

父さんのいところで同じ古武術き流派御神流正統後継者である御神咲夜さん。

「すみません。突然の帰国になってしまつて」

「元々君の修行は3年前のあの日に完成はしたし、この3年間で更に洗練されていていつてもう私から教えることはもうなくなつたからな」

「そういえばあいつらは？」

「ああ、3人はどうしても外せられない仕事があつて今日はこれないといつていた」

「そうですか……」

分かつていたが改めて聞かされると色々と残念だな。色々と言いたい事が合ったのだが仕方が無い。アイツにも立場があるからな。

「これをもつて行きなさい」

咲夜さんの手に持っていた刀袋から出てきたのは黄金色に拵えた刀……咲夜さんの愛刀である緋桜だ。

「待ってください！この刀は師匠の!？」

「もう私が持っていて使えないからな。それなら君に使われたほうがこの刀も本望だろう」

確かにここ最近の師匠は前線に出る機会がまるつきり減っていた。

「わかりました預からせていただきます」

「今度近々ニホンに行くとき案内お願いね！」

「はい、喜んで！」

別れの握手をして、搭乗手続きのため受付に向かった。無事に出国手続きを終えて飛

行機に乗り込み、アルテールスを離れて懐かしい日本に帰国した。

これがこの1ヶ月に起こった事の顛末だ。

「この街にくるものずいぶん久しぶりだな」

空港から電車に乗って最初に降りてきたのは日本一の電気街でありオタクの聖地である秋葉原。

俺の母さんの実家が神田町にあつて、アルテールスへ渡る前までここに住んでいたから6年前のことになるか・・・

今も昔も変わらないオタクの街・・・いや色んなところがグレートアップしているなところどころにもアイドルショップの増加が見受けられる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今日は土曜日とあつて人も多い。後何気にカップル連れが何か多い!!この風景を見て少し後悔したと心底思った。何でかつて言う・・・幸せそうだなって。カップル連れの連中を見るたびに殺意・・・じゃなく心底うらやましいと思つた。

大通りの裏から突如爆発音が聞こえた

「誰か捕まえてくれ!!強盗だ」

男性の声が響いていた

「クソ！あのオッサン!!」

この日本で爆破物を使った強盗とは珍しいというか大丈夫かよ警察は!!

強盗犯は丁度こっちに向かって来てるしな。

荷物を置いて、とりあえず背中忍ばせている小太刀で・・・っておい!!危ないぞ!

脇から飛び出してきた金髪の女の子が俺と犯人の間に割り込んだ。

「止まってください!」

間に合うか!?

「どけ!!」

「きゃー!」

彼女の身代わりになるためダッシュをしたが間に合わず、男は女の子を腕で払い飛ばして路地のほうに走り去った。

突き飛ばされた女の子を慌てて抱える

「怪我はないか?」

「はい」

「良かった。俺はあいつを追うから警察を呼んでくれ」

「でも」

「いいから」

路地に入らず通りのほうに走った。

同じ路地に入っても逃げ切られる可能性もある。

犯人等の思考をトレースし、自分が犯人の立場ならどうするかを考えルートを絞った。

人ごみの中じゃ逃げ切れないと踏んで、人通りが少ないところに出る路地に行けば・・・見つけた!!

「おんどりや！待たんか!!」

案の定犯人は人通りが少ないところから出てきた所までは良かったが・・・

「やっかいだな」

懐に何か隠している。

あの膨らみからだとおそらく9ミリ拳銃ぐらいだろう。

爆弾だけではなく拳銃まで揃えているとはバックにヤーさんでも控えているのか？

「あんなモノ街でぶっ放されたらシャレにならんぞ」

「ひっ!?な、なんだアイツ？」

俺のこのツラに驚いたのか犯人は少し・・・というか大分ビビっているな。

驚いた犯人はふらつき始めたのを見過ごさず一気に間合いを詰めて、相手が拳銃を取

り出すより速く鞘から小太刀を抜刀し、柄で顎に強打した。

すると脳震盪を起こし崩れ去るように倒れた

後ろからパトカーのサイレン音が響いてきた。あの子が呼んできたのか？

犯人を警察に引き渡した。久々の全力疾走に疲れて桜の木の根元に座り組んだ。

その時左手に違和感を感じて見ると・・・

「ありや・・・手の甲がすりむけている」

どこかで掠ったのか手の甲がすりむけて血が滲み出していた

確かティッシュがあつたはず・・・っとその前に傷口を洗わないと。

どこか水辺をを探そうと顔を上ると、さっきの女の荷物を持って息を切らしながら

立っている。

「よう、持ってきてくれたのか？ありがとう」

「いえ私こそ突き飛ばされたときに助けてくれてありがとうございます」

「気にするな・・・ただ」

「ただ？」

「ていつ！」

「あうっ!!？」

デコピンをした

「もう二度と無茶なマネはよしなさい。もしあの犯人がナイフとか持っていた場合取り返しが付かなくなるかも」

「は、え、めんなさい」

いかんいかん怖がらせてしまった

このツラのせいで泣かせてしまったことが一度や二度ではない

「でも、ありがとな」

俺の言葉につこりと微笑んだその笑顔にドキツとした。

改めて見ると可愛い子だな。日本人離れのその容姿。白く透き通っている肌、腰まで伸びている綺麗な金髪の髪を一部上頭部で束ねているがら服の上からでも分かるふっくらとした大きな胸。体と顔のギャップにもドキツとした。まさに美少女と相応しい女の子だ！……きつと彼氏がいるのだなって、いったい何考えているのだ！俺は！

「左手……大丈夫ですか？」

「これか……大丈夫大丈夫!!かすり傷だから」

「よかった……これ良かった使ってください」

目の前にすつとハンカチを差し出される。

「いやいや、そんな綺麗なハンカチ使えないから」

「い・い・か・ら!」

断ろうとしても女の子は顔を近づけて下から上目づかいで覗き込む。

「・・・それじゃありがたく使わせてもらおうよ」

結局落ちました。

美少女に上目づかいに迫られた頼みかと思いか! 否断れない!!

俺ってなんだかんだ言いながら女の子のお願いつて弱いからな。

まあ、上目づかいも素敵ゲフンゲフン・・・言った何考えていたのだから時計を見るとそろそろ家に着かないと遅くなるな。

「それじゃ、俺はこれで」

持ってきてもらった荷物を持って立ち去ろう・・・

「ちよつと待ってそこのあんた!!」

「なんですか」

来たのか中年のおじさん警官。

「あんたを銃刀法違反容疑で現行犯逮捕をする」

「・・・何言っているんだこのおっさんは」

「おいおい顔に似合わない冗談はよしてくださいよ。俺は銃火器類使用許可の国際ライ

センスを持っているのだぞ」

各国の問題になっている銃火器類の所持問題を各国で統一ルールを決め、それをライセンスで発行することによって個人の重火器類の所持が認められた。

「あんたみたいな餓鬼が日本でとれるわけがない」

このおっさんのいうことは一応正しい。

日本ではライセンス取得の要件が非常に厳しく最低ラインが25才からとなっている。

アルテールス王国等の欧州各国では15歳からだけど日本は他国に比べて厳しい。

「俺はアルテールス王国の正規手順でライセンスを取得し、これも正規手順で日本国に持ち込んだものだぞ！」

「ふん!!とりあえず言い訳は署で聞こうか」

「ふざけんじゃ」

「ここで抵抗したらきつとこいつらは公務執行妨害とかの別件で逮捕するに違いない。」

「あ、あの!?!」

「ごめんその・・・」

その子に何にもいえないまま所轄所に連行されていった。

02 家族

「はあ……やつと出れた」

あの後取り調べ室につれていかれ調書を受けたがそれは一方的に俺が悪と決め付けて全然聞く耳持たなかった。

父さんに連絡を取ってすぐにアルテールス国大使館に連絡して、秋葉原警察署に苦情の連絡をしてくれた。案の定このこと知った署長の耳に入って俺をすぐに開放して謝罪してくれた。あまりにも腹の虫がおさまらなかったので帰り際にそのおっさんに1発殴ってから所轄署を出た。本来それで暴行罪および公務執行妨害で逮捕できたが、いざ逮捕して裁判になったらこの誤認逮捕が明るみで警察の信用がガタ落ちになるどころか外交問題にもつながりかねない案件なので何もしなかった。

「……とりあえず荷物置きにいいっか」

いつまでも愚痴言っても何も始まらないので予定よりずれたが、俺が今日（本来なら昨日の筈が）から住む予定のマンションは駅から10分圏にある。

父さんの友人が所有する部屋なのだが急遽海外に行かなくてはならず、それならぜひ息子に貸してくれっというたら快く引き入れてくれた。

「今日からこの部屋で新しい生活か」

事前に父さんの友人から貫っていた部屋の鍵を開けるとアルテールスから送った荷物が来ている。

書類の手続きや荷物の搬入とかはその友人がやってくれていた。

「さて！一著やるか！」

俺は段ボール箱に詰め込まれている荷物の整理を始めた。

．．．

．．．．．

「．．．よし大体は終わったな」

何とか夜のうちに家具やベットを並べ終えることが出来た。

机とかは向こうで使っていたものを持ってきてテレビやパソコンとかの家電は流石に規格外だったのでここで買うことにした。掃除が終わって一旦シャワーを簡単に浴びた。

「久しぶりにあそこに行くか」

ジャケットを羽織ってある場所に出かけた。

―千代田区神田町―

「ここに来るもの久しぶりだな」

俺が今住んでいるマンションから徒歩20分ぐらいの所にある母さんの実家でもある神田町を訪れた。

元々俺は神田生まれの神田育ちで父さんが士官だったため単身赴任で全国の基地や艦艇を転々としていたので、アルテールスにわたる前は母さんの実家に住んでいた。

ここに来るもの実に6年ぶりになるけど、あまり街並みは変わっていないが……いやとところどころ道路の塗装とか新しくなっている。

こういうのを見ると年食ったなあ……と思う自分がおる。

甘味所『穂むら』

母親の実家であり幼馴染みの家でもある。名前のとおり和菓子屋で昭和初期から続く和菓子店で千代田区から歴史重要物件指定を受けている。

「いらっしや……!? お、お義兄さん!!」

「ご無沙汰しております。希衣さん。悠斗です」

「ゆ……うとくん!?!」

「ええ悠介と麻衣の息子で穂乃果達の兄貴分の悠斗です」

母さんの妹であり、幼馴染の母や親でもある高坂希衣さん。

もう2人の娘を持つている筈なのに若々しい

「悠斗くん！久しぶりね!!」

「はい、昨日戻ってまいりました」

「お母さん—どうしたの？」

2階の方から階段を下りてきている音が聞こえ、奥の方から赤髪のかかった茶髪の女の子が出てきた。

「ほ．．．のかと思つたら雪穂か？ずいぶんかわいくなつたな」

「え!?!」

「雪穂どうし．．．．痛つたーい!!」

更にオレンジ色の髪をサイドテールで結んでいる女の子が出てきたが．．．

躓いて壁に激突。

．．．．あれは痛そう

「お転婆なのは全然変わっていないな穂乃果!!」

「う．．．そ?!?ゆうにいい!!」

「そうだよ。みんなの兄貴分の悠斗だよ」

穂乃果は幼馴染の中でも行動的でみんな中心にいる明るく太陽な子．．．．なのだが時々突飛つな行動でみんなを振り回すことがあったが一度も悔いを味わつたこと

がないのが不思議!

.....俺が尻拭いをしていたのは別だが.....

穂乃果の妹の雪穂。

破天荒な姉を見てきたのか小さい頃からしつかり者な性格.....だけど変なところ
で姉に似ているところもあるんだよな。

「悠にい!いつ戻ってきたの!？」

「昨日だ。ちよつとトラブルがあつて今日になった」

2人とも美少女といえるほど成長してお兄さんうれしい」

「／／／／／／／／／」

「あら?大胆ね♪」

大胆?

「二人ともどうした?顔を真っ赤にして?」

「その.....ゆ、悠にいの心の声がもれていたよ／／／」

.....え!?

「わ、私や雪穂のことを.....その.....び、美少女って／／／」

し、しまった!!!

俺としたことは一緒の不覚

「ち、ちなみにおじさんはいらつしやいますか？」

「あの人は今町内会の会合に出かけていて不在よ」

よかつた!!

穂乃果達のお父さんである高坂大悟郎はこれまたうちの父さんと同じぐらいの親馬鹿で娘に不埒なまねをする人は一切容赦しない人だから。

俺も昔穂乃果と雪穂をつれて泥まみれになるまで遊んでいたら殴られたからな。

あれは俺も悪いけど。

更に困ったのがそのことで駆けつけた父さんと大喧嘩に発展して一時大修羅場になった。

最終的にはそれぞれの奥方様によって制裁されて沈静化した。

今でも思い出すと鳥肌モノのトラウマレベルだからな。

とりあえず俺は居間の方にお邪魔していた。

「うくん!!この味久しぶり」

お団子とほうじ茶を頬張つてを希衣さんを待っていた。

「それにしてもびつくりしましたよ。この6年間一切連絡がないと思ったら突然帰つてきつ」

「いめんよ」

当時、携帯なんて持っていなかったし手紙を書こうと思ったけどいつの間にか愚痴になっただけから出さずにそのまま無かったものとした。

「それにしても悠にい昔より大人っぽくなっているね」

「そうですね。昔から年上として引っ張ってくれていましたが今はなんとなく」

「うんうん」

自分でも思わないのだが美少女に進化を遂げたいとこの猛攻から思わず顔をそらしてしまった。

「あ、悠にいが照れている♪」

「う、ウルセ／＼／兄をからかうんじゃありません／＼／」

今、俺の顔は絶対に真っ赤だ。

「でも……こうして話をしてっていると昔を思い出すな……」

「そうだな……」

昔の記憶を頼りながら思い出していく。

穂乃果は元気な笑顔でみんなを引っ張っているが時々破天荒な行動でよく真面目な海末と言ひ争つてことりは温厚な性格なため、しよっちゆう喧嘩する2人の仲介役をして、俺はみんなの起こした（主に穂乃果）尻拭いをした。

「それで悠にいはこれからどうするの？」

「とりあえず父さんが用意したマンションに暮らして近くの高校に転入する予定」
「え!?どこどこ!!」

「はははっ、俺の知り合いが学生時代に通っていた高校で」

音ノ木坂のテスト生のことは黙っておこう

何故かって？

楽しいからだろう（カメラ目線）

「さて……そろそろお暇するよ」

「えくもう少しゆっくりしていったら？」

うん、俺ももう少しゆっくりしていききたいのだが……

「この後横須賀に行つて……母さん墓参りしようと思つて」

「そうだよね……ごめんね悠にい」

いつも容赦なくズゲズゲと踏み込んでくる穂乃果だけど触れちゃいけない領域には決して踏み込まない。

それも天然で……

「あ!!ちよつと待ってて!!」

何か思い出したかのように居間から出て行った。

そして直ぐに戻って来た。

「はい!」

「これは?」

「お供え物よ。おばさんによろしくお願いって言つといて」

そう言つて穂乃果が差し出したのは6個入りの手のひらサイズのお饅頭、穂むらの人氣商品の『穂むらまんじゅう』を渡してくれた

「ありがとう」

お礼言つて出る準備をしていたときあることを思い出した。

「そういえば他の2人は元気にしている?」

「海未ちゃんのことりちゃん?うん!2人とも元気にしているよ!」

「そっか」

「どうやら他の幼馴染たちも元気に過ごしているようで安心した。

「あいつらに近々会いに行くこと伝えてくれ」

「いえっさー!」

本当は明日にでも会えるけどいきなり驚かすのも悪くは無い！

少々ゲスな事を考えつつも穂乃果に見送られながら穂むらを後にし、近くの駅から電車に乗った。

電車であっていたのはまだ会っていない2人の幼馴染の事だ。

「こんなに楽しみと思っただけはいつ以来だろう」

あの穂乃果ですら美少女に進化を遂げたのだ（……性格は何も変わっていないが）

海末やことりはどんな風に成長しているか明日が待ち通しい。

1時間15分かけて横須賀駅に着いた。

そこからさらにバスに乗り継ぎ20分先のバス停に降りた。

この石段階段を登った先に見晴らしが良い高台がある。その高台ある墓地の一角にまだ真新しい墓石を前に俺は手を合わせて心の中でただいまと呟いた。墓石には朝霧家乃墓……つまり俺の母親である「朝霧穂佳」が眠っている。

手入れは希衣さんが定期的にしてくれたおかげでそれほど荒れてなかった。

母さんは子供の頃に病気を患って、それを治してくれた医師に感化し皇都大学医学部に入学。後に主席で卒業した優秀な外科医だけど大学の醜い権力争いに愛想を付かして野にくだりフリーランスとして活動していた。

父さんと出会ったのは赤十字の医者として亡国で医療活動していた時、海軍陸戦隊を指揮していた父さんと出会って惚れて帰国後結婚した。

この時に後輩夫婦に誘われて地域医療に徹し、患者目線の二人三脚医療を目的とした病院を作り、その外科部長を務めたが、ここでかなり無茶した影響で昔煩った病気が再発してしまった。

そして治療の甲斐もなく11歳の時に俺と父さんに見守れながら亡くなった。

「……さてそろそろ行くか」

再び、バスと電車に乗り継いで秋葉原に再び戻った。

マンションには一切の電化製品がおいでいなかったのでここ秋葉原で買い物をした。

電気街のアキバとも言われることもあって見つかるわ見つかるわ。

テレビ、レコーダ、パソコン、タブレット……日常生活に必要と思われるものを

まとめて購入した。

お金の心配？

それは無問題！

なぜなら修行の一環であるアルテールス軍の一部隊に放り込まれたからそれなりの貯蓄はある。それにやばかったらバイトでもはじめたらいいし。

「さて、こんなものか」

手で持つて帰れる。パソコンとタブレット以外は全部輸送してもらった。流石に一人じゃ持つて帰れないし。

「何か前見たときよりアイドルシヨップが増えている気がする」

オタクの街だから何も不思議とは思っていなかったがよくよく見るとアイドル系シヨップが乱立していた。

その内のひとつの店に入るとある一角にスクールアイドルコーナーが設けられていた。

「スクールアイドル?」

外国人観光客用に英文の説明書きが置かれていたので読んでみると・・・

「なるほどね」

どうやら世間一般的にいわゆる普通の芸能プロダクション所属のアイドルとは違い、一般学生で構成されたアイドルの事。つまり芸能人ではなく、ご当地アイドルに近いものみたいだ。

数年前から細々と存在していたが2011年に民社党の連立政権が崩壊した余韻ともいえる政権内・マスコミと芸の事務所との間にあった枕営業事件で芸能界マスコミ界が崩壊してしまった。

その後にある女子高中生グループが動画投稿サイトにパフォーマンス動画を公開。公開を機に徐々に人気が高まりほかの学生も乗り出して一気に全国にスクールアイドルが広まった。

「へえ……こんなことになっていたのか」
とても興味深い。

現に店のモニターに流れているアイドルもスクールアイドルで、そのパフォーマンスのキレもかつての本職とも差異はないように思える。

今は前政権の所業で殆どの芸能事務所が廃業に追い込まれ現在活動中なのは当時フリーで活動していた人か地下アイドルぐらいしか残っていない。

そう言った時代背景があったのかスクールアイドルブームは爆発的に高まった。

しかしそれほど遠くは感じない

スクールアイドルとはいえ本職のアイドルとは違い早退や時間外で授業を受けるわけではなく、同じ学校に通い同じように授業を受けて、それが身近に感じるかもしれない。

「面白い世の中になったものだ」

試しにCDとライブBD、雑誌を買ってマンションに戻った。

03 再会

『総員、起床』

突然悠斗の部屋に海軍伝統の起床ラツパ音が鳴り響いた瞬間に起き上がり、たちまち着替え始めたが……

「……あつ……何やっているだろう？」

いつもの癖でつい起きてしまった。

「なんとまあ……すごい目覚ましだな」

父さんからもらった目覚まし時計を恨めしそうに見つめる。

咲夜さんが指導の一環で軍隊訓練に放り込まれた時期があつて、その時の癖で軍隊ラツパの音に敏感に反応してしまう。そして父さんから餞別でこの目覚まし時計を貰ったがありがた迷惑しかない。

もう昔のことだから平気かなと思つたらどうやら条件反射レベルで染み付いているようだ。

「……これも職業病かな」

まだ学生の身分なのに嫌な癖が付いたな

「朝飯でも作るか」

昨日コンビニで買ってきたパンと電気ケルトで暖めたお湯でコーンスープとコーヒード朝食を取った。

「何かニユースやっていないかな？」

テレビのスイッチを入れて適当にチャンネルを切り替えていたらキャスターの音が聞こえてきた。

『先日行われたスクールアイドルA—R—I—Z—Eのライブがまたもや大盛況の中……』

「やっぱり有名なんだな」

俺の想像以上にスクールアイドルは世の中に浸透していた。

街角のインタビューで小さな女の子が将来何になりたいって聞かれるとスクールアイドルになりたいって答えた程だ。

凄い世の中になったものだ。

「さて、そろそろ行くか」

ポケットに締まっていた錨のマークをあしらった懐中時計で時間を確認してみたら7時を刺していた。

確か7時までには学校に着いたらいいが、初日だし早めに行こうと思いいりビングの机においてあつた上着を羽織り、鞆の中に入っている今日の転入に関する書類を確認して早めに学園に向かった。

「う〜ん!!いい天気」

学園までの道のりはここから20分の距離で非常に通いやすい。

—国立音ノ木坂学園—

秋葉原と御茶ノ水、神保町の間位置するその学園は古くからある由緒正しい伝統校である。

俺の母さんやおばあちゃんの母校でもあり、穂乃果が通っている学園でもある。

だけど昨今の少子化にドーナツツ化現象、さらに秋葉原駅の近くに出来たUTX学院といった時代の波に逆らえず入学者数の減少に歯止めがかからず一部では廃校の案まで浮上し始めた。

特にUTXが出来たのが一番の痛手らしい。

秋葉原に出来たUTX学園が出来上がったことによりパワーバランスが崩壊し、周辺の高校が統廃合を始めた。

幸いにも音ノ木坂学園理事長の政策と地盤が強かったのもあって持ちはしたがそれもいよいよ毒が体を蝕み始めた。

「それを打開するために俺が呼ばれてきた訳だか」

この理事長が取った案は音ノ木坂を共学化にして新たに男子生徒を取り込もうとした。

しかし女子高の施設にいきなり男子を入れるわけにはいかず内外に強いパイプを持ち且つ信用できる人物こそ俺の父さんである日本皇国海軍第二潜水戦隊司令官を勤めている朝霧悠介一等海佐と非公式に話を持ちかけて、息子である俺を派遣することになった。

「それにしても綺麗な校舎だな」

都内の学校にしては校舎も校庭も広く、校内の雰囲気も穏やかでこんな学校が廃校の危機なんて予も未だな。

「すみません。今年度から音ノ木坂学園にテスト生として通うことになった朝霧悠斗と申します。」

事務室で受付を済ましてまず向かったのは理事長室だ。

「久しぶりね。悠斗君」

「ご無沙汰しております。陽菜さん」

この人は南陽菜さん。この音ノ木坂学園の理事長でまだ会っていない幼馴染の母親でもあり、俺の母さんの後輩に当たる。

「突然の申し出に承諾してくれてありがとうございます」

「こちらこそ本来の予定より遅れて申し訳ございませんでした」

本来なら昨日の始業式に来る予定だったが秋葉原での誤認逮捕でその予定がすべて狂ってしまった。

「事情は悠介さんに聞いたわ。大変だったね」

「いえいえ、あの後直ぐに解放されましたので」

色々やった後で出たので無事とは言い難いけど……

「……」

「どうかなさいましたか？」

「ごめんなさい。両親の面影があつて見とれていたわ」

「父さんと母さんに？」

「ええ。顔の輪郭や雰囲気は悠介さんにそっくりで、目元が穂佳先輩にそっくりで懐かしいと思ったわ」

陽菜さんの目はどこか遠くを見ていた。

最後に会ったのは葬式以来だからかれこれ6年か。

母さんも実年齢より相当若く見られたが陽菜さんもすごく若く見えとても一児の母だとは到底思えない。

とてもよん……

「悠斗くん? どうかしましたか?」

「い、いえ何でもありません」

なんだ!? 今物凄く悪寒と殺気を感じたぞ!!

(いいか! 悠斗!! 女性の前で歳の話題は絶対にしてはならない。もししたら命はないと思え)

何故か父さんの言葉が走馬灯のように過る。

……演技が悪い。

「それで陽菜さん、父さんから聞いたのですが本当に廃校になるのですか?」

「……はい。6年前に秋葉原にUTX学園出来た当時は何とか耐え忍びました

が……」

「少し調べてもらいましたが……実際のところはどのようなのですか？」

「……やはりご存じなのですね？」

俺が音ノ木坂に転入を決めて暫くたった時、父さんからある資料が送られてきた。

「ええ……後は学園内勢力はどうなのですか？」

「恐らくですが……廃校派の先生が半数近くに達すると思われれます」

送られてきた資料の自身はここ7年間の推移と廃校派の現状についてがまとめられていたけど半数近くって……想像以上にヤバいな！

「正直申しまして私の人徳の無さが招いた結果でもあります」

「ですがこれは陽菜さんだけの問題ではないです!!元々を正せば前政権の……」

「それでも私には音ノ木坂学園を運営する義務があります。そして入学希望者の激減に歯止めをかけられませんでした」

組織のトップに立つものとしての責務の言葉に俺は何も返せれなかった。

「でもこれだけの離反者が出るということはスポンサーには相当力がある所というのがわかります」

「ええ、正直共学案も苦肉の策でして」

伝統ある女子高が共学校になるのだ。

当然保守的なOGは大反対をするに違いないからこれは妥協案で納まったのだろう。

暫く事務的な手続きを済ませた後に理事長室を出た。

「モニタリングはともかく例の件は骨が折れそうだな」

俺がテスト生徒として必要な情報をリストアップしていったいき、それらのデータを理事長が纏め上げ改装案に反映させていく。

そしてもう一つ父さんからある案件を預かっていた

3年前……

ある事件に関わった俺はその残党処理をしていたときその資金源をたどっている内に今日本国内で問題になっている『ユニオン共和国』や前政権である『民社党の連立政権』の一部の政治家にたどり着いた。

当初はお台場に建設予定だったがUTX学園が民社党の連立政権樹立後、突然予定地が変更になり秋葉原に変わっていた。

これに父さんは当初不信感を抱いていたが政府の目が合ってなかなか調査に踏み切れなかった。

そして今回出てきた廃校にあわせて俺を音ノ木坂学園に派遣した。

内債

そういう風に受け取れるかもしれない。

とりあえず父さんの頼みは廃校を回避してくれの一点でこの案件は片手間の時でいいといっていた。

「私があなたの担任である岡島美佐子です」

「朝霧悠斗です。よろしくお願ひします」

理事長室を出た後職員室に行き、担任である岡島先生にあつた。

先生はまだ大学出てから2年しか立っていない若手の先生。

「それと近いうちに親御さんとお話したいのだけど大丈夫かな？」

「うくん・・・難しいですね」

「どうして？」

「私の父が海軍士官でして今は海外にいるのです」

練習艦隊が遠洋航海で一度出たら1年は帰って来ない。

「それでは今は一人暮らしなの？」

「はい、マンションで暮らしています」

「そう・・・もし時間が空くのなら担任まで連絡を入れてください」

それはいつになることやら・・・

話が終わると直ぐに連れられて職員室を出た。校舎内をみて回ると本当に懐かしく感じる。

暫く歩いていたら3ー1と書かれたプレートの教室の前に止まった。先生は暫く待っていないさいと一言言い残して先に入る。

これから始まる朝のHRで転入生である俺のことを紹介するんだろう。不思議と緊張は殆んどしていないけど、外からでも聞こえてくるのは好奇心の声にある意味不安を感じる。

事実上、この音ノ木坂学園には男子生徒は俺一人・・・つまりハーレム状態なのだ。ああいうのはフィクションだからいいであって実際のはあんまりいいものじゃない。先生が入っていいぞと呼ばれ、教室に入るとクラスの視線は俺に押し寄せていた。覚悟はしていたけど・・・クラス全員女子学生のみ。

「・・・で、みんなも昨日知っていると思うがこの度共学テスト生として1年間一緒に勉強 こちらが転校生の朝霧悠斗君だ」

先生が黒板に俺の名前を書いて簡単な紹介された。

ここは悪友が使っていた手を使うか……

「今日からこのクラスで一緒に勉強することになりました朝霧悠斗です。暫く海外生活が長かったので色々なことを教えてもらえると助かります」

俺が女子高に行くことが決まった時、悪友（随一の女たらし）から（聞きもしないのに）教えてもたつら、営業スマイル。

実はそいつの実家は喫茶店を経営をされていてその時から我流で身につけた営業スマイルで女性客を口説いていたらしい。

モノの試しに使ってみたら効果は存分に発揮していた。

「こ……これは／＼／」

ただ一つ問題なのはあまりにも効きすぎて生徒だけではなく先生も心なしか顔が赤い。

「そ、れじゃ朝霧君の席は……絢瀬さんの隣で」

先生が指した席……教室の黒板に向かって左から2番目前から3番目のところ。なかなか丁度いい。

前の席に座っている特徴的な胸元まである金髪のロングヘアの少女が俺を見てい

た。

(あの子は確か?!)

髪型は違うが間違いない!あの子だ。まさか同じクラスなんて・・・これまた神様は粋なことをしてくださる。

「あ、あの先日はありがとうございます!ごさいました」

「い、いえいえそちらも怪我がなくてよかったです」

「まずい!!」

突然すぎて頭の演算が追いつかない。

「あの後・・・警察に連れて行かれてだいじょうぶでしたか?」

「ええ、誤解も解けて何とかまりました」

「おや?えりち、転校生と知り合いやったの?」

「この間買い物にいった時に助けてもらって」

「自己紹介がまだだったね。私は絢瀬絵里。生徒会長を勤めているのよ」

「うちは東條希、えりちと同じく生徒会の副会長を勤めているんやで」

絢瀬さんと東條さんを見ると幼馴染たちとは違うベクトルの美少女だ。

絢瀬さんはその日本人離れした容姿にスタイル抜群。

東條さんは何というか内から溢れる母性的でおそらく絢瀬さんより激しく自己主張しているある部分に目を奪われて・・・

「今何か失礼な事考えていまへんでした？」

「いいえ、何も考えていませんでした」

アブねえ!!

とつぎに誤かしたのはいいものの、もしばれたら転入初日で変態の称号をもらうところだった。

・・・そんな称号はいらないが。

「でもまさか転校生が女の落とし方を知っていたなんて」

「勘違いしないでくれ、友人が聞きもしないのにベラベラと教えた営業スマイル術を実践しただけだよ。それも初めてだよ」

シド眼でずっとにらんでくる絢瀬さんに弁解したがあまり信じてもらえなかつた。

今度会ったお礼と無人島（肉食猛獣付き）に送ってやると思ったが・・・まあ、こいつのおかげで雰囲気は緩和されたみたいだしシベリア（屈強なロシア国境警備兵との殺し合い）送りで済みますか。

それより少し気になったのが……

「ところで東條さんって出身はどこ？」

「大阪やで」

あれ？

どこか違和感を感じる関西弁なので関西以外の人かなと思ったけど……俺の勘違いだったのかな？

「というのは嘘や」

「嘘かい!!」

「元々親が転勤族で色んなところを回っているうちにコレになっちゃってな」

なんだかぬらりくらりしているというよりスピリチュアルな不思議な子だな。

「では。今年度最初の授業を始めます」

そして授業が淡々と終わり、昼休みに差し掛かる。

「そう言えば朝霧くんは廃校の話は……」

「ああ、転校前から知っていた」

「それやのにテスト生の話に乗ったんや」

確かにそれだけだと物好きと思われるっておかしくはないよな。

何にも接点がなければ………

「俺の母さんがここの卒業生で」

少しでも恩返しと思ってこの申し出を受けた理由のひとつでもある

「もしなにか妙案が有ったら教えてくれるかしら？」

「うちらも去年から案を練っているのけど成果が著しくなくてな」

「この際四の五のも言っていられなくてね、タイムリミットは……」

「7月のオープンスクール……だったな」

「ええ、それで結果が出るのであればどんな案も厭わないわ」

この子、生徒会長として、何より学校が好きで一生徒として廃校を回避させたい！

けど案がない。その思いと現実のギャップに苦しんでいる。

「分かった！何か妙案があれば直ぐに言う」

「本当に!!」

「こう見えても交友関係は広いからな」

現役の軍人である父さんや、アルテールス王室近衛兵教官の咲夜さんと一緒に行動していくうちにさまざまな業界の人とも知り合いがそれなりにいる。

「ありがとう」

初めて会ったとき気が付かなかったが彼女の目元に少し隈がある。

恐らくこここしばらくまともに寝れなかった

「どこかに行くのか？」

「ええ、理事長一人娘がいて、少しその子に聞いてくるわ」

「いくらなんでも子供は知らないと思うが・・・」

「確かにそうだけど、今手元にある情報が少なすぎてままならないわ」

「俺も一緒に行ってもいいか？」

「え？」

「実を言うと俺の母さんと理事長は先輩後輩の関係でね。その子とも幼馴染みだ」

「そうなんだ!!」

「おっと！因みに絢瀬さんの知りたがっている情報は持っていないぞ。俺もついさつき聞かされた口だから」

「本当は大まかの事は知っているがあまりにも一学生がどうにかできる問題を越えて
いる。」

いかに廃校派の先生を抑えて、入学者を増やすか・・・中々難しい問題だよ。

中庭に出ると陽菜さんと同じベージュ色の髪の子と青みが掛かった髪の子がいた。間違いない。

6年の月日は立っているが当時の面影が残っている。

「ちよつといいかしら？」

「は、はい」

「あなた、理事長の娘さんの南ことりさんだよね？」

「はい」

俺は2人に気が付かないように絢瀬さんと東條さんの後ろに隠れた。

「理事長から何か廃校の事聞いてないかしら？」

「ごめんなさい。私も全校集会で初めて知って」

「そう・・・」

「絢瀬さんや絢瀬さんや。少し怖がっているぞ」

「え？」

あまりにも必死になりすぎてちよつと顔が強張っている。

「ごめんなさい」

「い、いえいえ」

そして……

「久しぶりだなことり！」

「え？」

「海未も……もう6年ぐらいか」

「どうして私たちの名前を？」

突然自分たちの名前を言われてキョトンとなる。

「おいおいおい、幼馴染みの兄貴分の顔を忘れてしまったか？」

「幼馴染みの……」

「兄貴分!？」

どうやら合致したらしい

「悠にいい!!」

「そうだよ。ほのかの従兄で君たちの兄貴分の朝霧悠斗だよ!久しぶりだな2人とも」

俺の幼馴染で大切な妹分である大和撫子とも言うべき美貌を持つ園田海未とおっとりしていて脳が溶けるような甘々な声の持ち主の南ことり。

「本当に悠にいなのですか!？」

あまりに突然すぎたのか俺の肩をつかんで揺さぶってきた。

「あのく海未さんや、穂乃果から何も聞いていないのですか?」

「穂乃果から聞いたのですが半信半疑だったのです」

「私も」

おいおいどれだけ疑われているのだよといとこよ!

ちよつと心配になってきたぞ!

「でも悠にいい、どうして音ノ木坂学園にいますか?」

「今年から共学化に向けてテスト生を受け入れる話って知らない?」

「昨日の全校集会の時に理事長が話してくれていましたが」

「どうしてそのような重要な話をしないのですか穂乃果は!!」

「すまないが今回は穂乃果に一切の非はないのだよ」

「どうして?」

「それは「あ——!!」」

「悠にいい!どうして音ノ木坂に!!」

こつとりに質問を返すタイミングで穂乃果の元気な声で打ち消された。

タイミング良すぎるだろう。

「何て言っただって……黙っていたからな」

「……………」

あのく冷たい目で見るのはやめていただけませんか。

お兄さんが悪かったです。

はい……………ごめんなさい。

「まあ、あまり理事長を責めないでやってくれ。一応守秘義務はあるから」

「少し別の路線で聞いてみよう。ことり、最近陽菜さんの回りで変わったことはなかったかな？」

「変わったこと？」

「そう！どんな些細なことでも構わない。」

第三者から見た目線は時に貴重な情報源になりえる。

「そういえば……」

「何かあったのか!？」

「うん、春休み中家にコンサルタント会社から電話がかかってきたの」

「コンサルタント会社？」

「その電話以降かな……帰りが突然遅くなって。それ以外は思い付かないよ」

「そうか、ありがとうな」

ひとまずこの情報が入ればいいか。

問題はこのコンサルタント会社だけど、父さんが戻ってきたら一言言っておこう。

質問も終わった所で海未が………

「さて、悠にい!!この6年間なぜ連絡しなかったのか洗いざらい話してもらいます!!」

こえー!

幼馴染超こえー!!

ここまで怒った海未を見たのは寝ているところを起こしてしまったあの時以来だけ
ど。

その時より怒りのキレ具合が半端ねえ!!

「ま、まて!海未いったん落ち着こう!」

「時世の句は何ですか?」

時世の句!?

今時世の句っていたよね!この子!?

「海未ちゃん!せっかくゆうにいが戻ってきたからいいじやな」

「ですが……」

「これから一緒に登校したり出来るのだし……ね♪」

ことりがそういうと海未は拳を引つ込めてくれた。

おおっ!!海未神様のお怒りが沈んだ!!

ことり巫女よありがとう!!!

「それに、帰りのときにおごってもらえるし♡」

.....あれ?

これって海未神様の怒りが沈む代わりに、俺の財布も沈むのか!?

「やったー!!ねえねえ私!帰りにクレープ食べたい♪」

おい!!

「あら?それなら私もいいかしら?」

「え!?!」

「それならうちもやな。仲間はずれはよしてくな」

「おいおい!」

今まで傍観と決めていた絢瀬さんと東條さんがここぞと言うばかりに便乗して乗っ掛かってきた。

「それなさつきずいぶんうちの胸を見ていたことを子らに言ってもいいんやで!」

東條さんが小声でボソッと爆弾発現になる事を呟きやがったぞ!

悪魔だ！

ここに母性の皮をかぶった悪魔がいる！！

東條さんの顔を見るとしてやったといたはずらっ子の笑みを浮かべていた。

クッソ！！

ごまかしきれなかったか・・・

「ああ、もう！！クレープとはいわず帰りにファミレスに寄って好きなもの買っていきん

さい」

もう、気にかけることをやめた！！

久し振りに幼馴染みと再会し、クラスメイトと仲良くなれそうなんだ！

5人の喜ぶ顔を見ていたらこのぐらいの出費痛くも痒くもないと思う。

04 対策

父さんの頼みで廃校の危機に落ちている音ノ木坂学園に転入した俺、朝霧悠斗は転入先のクラスで以前秋葉原で助けた女の子、絢瀬絵里と再会した。そして幼馴染である園田海未と南ことりにも再会した。

そしてことりと東條さんの謀略？で帰りにファミレスに寄る事になった。

昼休みが終わりが近づいてそれぞれの教室に戻った。

「……ところで朝霧君」

「どうした？」

「どうしてさつき広島弁が出たの？」

正直今月だけでどれだけのお金が出て行くのか頭で計算していた時絢瀬さんが質問をかけたきた。

「それはな、前……と言っても7年ぐらい前かな？父さんが呉の方に住んでいた時、しゃべっているのをまねしたからかな」

あの時標準語しか知らなかった俺にとつてとても新鮮でついついまねしていくうちに時々出てしまうこともある

「でも本当によかったの？ ファミレスの話」

「もう言つたからには二言は無い」

一度言つた言葉を覆すのはやつてはならないことだ

「そうやでえりち。これも代金なわけやし」

「代金？」

何の事かわからず首をかしげる絢瀬さん。

よかった！ さっきの目線東條さんは気づいても絢瀬さんは気づいていなかった。

とりあえず命拾ひした。

「それより2人とも廃校回避にあたって一般生徒から何か相談会みたいのはしてみた？」

「相談会？」

「……してないね。基本生徒会内の会議で済ませていたから」

やっぱね。

「こういう組織にいると思考が固まってしまつて浮かぶ案も出てこなくなる傾向がある」

思考の硬化とも言って特に長くある組織なんかはその傾向が見られる。

「でもそのことに気がつける組織なんて極一部だけだよ」

現に現政権も前回敗戦した経験を生かして徹底的に己の悪かったところを直していった。

「だからちようどいい機会だしあの3人にも意見を聞いてみるといいよ」

「そうね・・・それがいいかも」

教室に戻って残りの授業を終わらせて放課後になった。

絢瀬さんと東條さんは生徒会の書類整理があつて遅れるので、その趣旨を穂乃果に伝えて先に行つといてつとメールをした。

その間俺は手持ち沙汰で暇潰しに校内を散策していた。

~~~~~♪

「あれ？」

今何かが聞こえた？

~~~~~♪

空耳と思つていたけど聞き間違いではないようだ。

「誰かが歌っているのか？」

~~~~~♪

清らかで澄んだ声

俺は歌声に導かれるように歩き出した

~~~~~♪

声を辿つていくと音楽室からその声が聞こえてきた

「いた……」

「さあ、大好きだ！ばんざーい！負けない勇氣！」

音楽室を覗くと一人の女子生徒が気持ち良さそうにピアノを演奏して歌っていた。

演奏が一段落した所を見計らって拍手しながら音楽室に入つていった。

「演奏……とても素敵だったよ」

「あ、アナタハ？」

「驚かせてすまない。俺はこの度、音ノ木坂学園テスト生として転入した3年生の朝霧悠斗」

リボンの色は緑、と言うことは今年入った1年生か・・・

「あなたが噂の転入生ですか・・・」

「・・・噂になっていたのか？」

「ええ、女子高でただ一人の男子生徒って・・・」

何れは1年生まで話は広がると思っていたけどたった半日で広がってしまうとは・・・

「そ、それより、他人の演奏を覗き見るなんていい趣味していますねセンパイ!!」
演奏を見られたのが恥ずかしかったのか顔を真っ赤にしながら抗議してきた。

「別に恥ずかしがる事はないよ。俺も昔少しかじっていたから」

「え?」

隣にある音楽準備室の備品からあるものを探した。

昔の話どおりならまだ残っているはず・・・

「・・・あつた!」

「あなた・・・バイオリンやっていたの?」

「ほんの少しだけね」

準備室から出したのはバイオリン。

昔、母さんがやっていたのを見よう見まねで覚えたけどな。

「さっきのいい演奏の代わりと言ってはなんだが少し演奏させてもらおうよ」

・・・さて、どれくらい鈍っているかな？

母さんが死んで、直ぐにアルテールスに渡ったからかれこれ6年は引いていない計算になる。

頭の中で昔母さんから教えて貰った楽譜を思い出し、引き出した

演奏曲は母さん自信が作曲したオリジナル曲で灼熱の太陽でも力強く咲く向日葵をイメージした曲。

「こんなものかな？」

長年のプランクがあるとはいえ何とか最後まで引かれた。

「あなた・・・なかなかやるじゃない」

「ありがとう。でも君の演奏に比べると月とすっぽんだよ」

自分でも久しぶりにいい演奏ができたけど手ごたえはあるけど、この子の技術に比べたら正直手も足も出ない。

「そんなことはいわよ」

そういう風に言われるのもなかなかいい気分だな。

時計を見ると待ち合わせ時間まで少ししかなかった

「さて、もうそろそろ行くよ」

「待って」

慌てずクールに去ろうとした瞬間彼女に呼び止められた。

「………」

「うん？」

「に、西木野真姫／＼／」

異性に慣れていないのか、顔を真っ赤にしながら自分の名前を告げた。

「それじゃ西木野さん、また機会があればセッション」

そう言っつて優雅で出たが……

「やばい！遅刻だ!!」

音楽室が見えなくなった辺りで全力で階段を下りて集合場所に向かった。

これで遅れると東條さんがどう出るのがわかったもんじやない!

「お待たせ」

「遅いよ」

「女の子を待たせるなんてデリカシーないな」

「ごめんごめんって」

やっぱり待ち合わせの時間に少し遅れてしまった。

「あの子達は？」

「待たせるのを悪いと思つて先に行かせてある……つてそれは？」

「参考になると思つて過去の部活の実績の資料をもつてきたの」

生徒会の資料整理つて言つていたけどこれのことだったのか。

言つてくれたらこれぐらい手伝えたのに……

結局、遅刻のペナルティーは無かった。

よかつたと思えばいいのかそれともこのファミレスでとんでもない命令がくるのか

!?

はたまた、時限爆弾となつて後に爆発するか……

……考えるの止めましょう。

精神衛生的によろしくない。

「そういえばあの子たちとは何年の付き合いなん？」

「もう、5歳のころからだな。穂乃果にいたつては生まれたときから一緒だからね」

「生まれたときというと親戚か何か？」

「俺と穂乃果はいとこでね。小さい頃から3人の兄貴分を通つてたからな」

．．．．．これは一体どういう状況だろう

「あ、悠にい」

待ち合わせのファミレスに着くと既に穂乃果達がいた。

．．．．．大量に頼んだデザートと一緒に。

「．．．．．これは？」

「待っている間にお腹が空いちやつて♪」

「わ、私は悪いと思って止めたのですが．．．．」

そう言っている割には君も一緒になつてデザート食べていたよね？

フォークが3本あるわけだし．．．

．．．．．気にするのは止めよう。

お互いの自己紹介を簡潔に済まして、本日の議題に入った。

「俺たちは次のオープンキャンパスで入学希望者数が下回った場合廃校となるが、逆を言えば入学希望者数が定員より増えれば廃校にならない．．．でいいよね」

「ええ、その話で上は納得しているみたい」

「さて、俺はまだ来て日が浅いから音ノ木坂学園のいい所をあげてくれないか」

「まず伝統がある」

俺の問いに穂乃果が答える。

確かに音ノ木坂学園は明治維新後からある由緒正しい学園の一つであるけど、見たような学園なら都内ならそれなりの数はあるから強みにならない。

「他には？」

そう尋ねると生徒会組みが資料を出した

「まず生徒会の資料だと・・・剣道部の関東大会で5位」

「・・・見事に中途半端だな」

これが3位以上なら話は変わるけど。

「他の運動部は？」

「うん・・・いい所まではいつているけど・・・あまり目立った成果は出ていない」

「最後はロボット研究部で書類審査・・・失格」

「・・・話にならないじゃない」

種類審査で失格っていったいどんなものを出したの!?

逆にそつちが気になったじゃないか!

こう聞くと全然目立った成果がないな。

「考えてみれば目立つところがあれば生徒ももう少しは集まっているわけだし」

「そうやね・・・」

元々1日で打開案が出るわけではなかったけど完全に出鼻を挫かれた形だな。

「例えば卒業生で有名な人はいるかな？」

「有名な人・・・あ! いたよ!!」

「本当!？」

穂乃果の話に絢瀬さんが食らいついたけど、穂乃果の答えに想像がつく。

「悠にいいお母さんだよ!」

「どんな人？」

「有名なお医者さんだよ!」

「確かに母さんなら知る人ぞ知る人だけど・・・」

「何かあるのですか？」

正直に幼馴染にこの話はしたくはないけど何れは知ることになるのだし・・・

・・・よし！

言おう!!

「元々母さんは皇都大学医学部を首席で卒業し、その卓越したオペ技術は10年・・・いや50年に一度の逸材といわれてきた」

「すごいわそれ!!」

「だけど母さんは皇都大学病院内での派閥争いが嫌気になって止めたんだよ」

「そうなの？」

この話は実は幼馴染には知らされていない。

「結構利害関係があつたらしく、辞めてフリーランスで活動しても暫くは嫌がらせも受けていた見たいだ」

特に音ノ木坂学園を管轄している文部科学省の官僚の中には皇都大学出身の人もいる。下手に母さんの名前を出して連中を刺激したくはない。

連中はプライドだけ高いからな。

「そっか・・・いい案だと思つただけだ」

すまない。

その件で父さんがガチ切れる可能性があるもので・・・

そうなったら廃校云々以前に焦土になる可能性も否定出来ない。

「それ以外なら海未のお母さんだつて日本舞踊の元家では」

「そうなのですけど・・・あまり父がメディアに露出したくは無いもので」

それぞれ家の事情はあるわけだしこの路線は使えないね。

「けど、元々は地盤が強いわけだし何かきつかけさえあればいけると思うのだけだな」

「ここまで部活動もぱつとしないにかかわらず明治から今日まで老舗の学園が存続していったんだ！」

「朝霧君ならどうする？」

「俺なら・・・ポーカーにたとえるのなら手持ちのカードではどうにもならないなら是ほとんど捨てるそして新たに引くカードを引くけど・・・問題はその代案がな」

結局はそこにたどり着く。

部活面でもうにもならないのなら別の手を打つ。けどその別の手が思いつかない。

生徒会の方も過去に近隣中学校に対して生徒目線での説明会に積極的に参加。学園祭の機能充実・・・いろいろな事やっていたけどどれも決定打とはならなかった。

「私・・・この学校好きなんだけどなあ」

「私もです」

「（こりも〜）」

親が全員音ノ木坂出身で小さい頃から学園に通うお姉さんに憧れていた3人だ。それぞれ思い入れも強い。

俺も母さんの母校がなくなるのは何としても避けたい！

「私もよ」

ふと絢瀬さんの顔を見ると懐かしそう・・・けど悲しそうな表情をしていた。

「私のお婆様も音ノ木坂学園出身なの」

「うちは家族とかが出身ではないが、3年間お世話になった学園がなくなるのはいややからな」

俺や穂乃果や海未、ことりだけではない！

絢瀬さんや東條さんも思いは同じ！

「ごめんなさい。いい案が思いつかなくて」

「いいえ、むしろ私こそありがとう」

「・・・え？」

「自分で言うのもなんだけど最近詰め寄りすぎて余裕がなかったと思うの」

「そうやでえりち。むしろ朝霧君がいなければ今日も生徒会に閉じこもっていたやろ？」

「うふふ．．．否定はしないわ」

転入初日の彼女の印象は美少女だけど明らか溜め込んでいたけど今回ののはいい機会になったに違いない。

「今日はここまでにしよう」

俺の言葉を皮切りに今日の話は終わりにしてそれぞれの家に帰ることになった。

そして俺の財布の中身の超スツキリ!!

．．．．．おかしいな？

月初めにそれなりの額が入っていたはずが

けど5人の嬉しそうな顔を見ていたらどうでもいいな！

本当にどうでもいい!!

そしてファミレスで分かれた後、俺は一人で秋葉原の街をうろうろしていた。

理由はもちろん廃校回避。

このまま家に帰っても思考が堂々巡りにしかならないし街に出たら多少はすつきりするだろう。

「どうするか．．．」

はつきり言ってもう使える手札がない。

残り3ヶ月間の間で学園の知名度を上げ、入学者数増やすなんて奇跡でもなければ無理だ！

「……て駄目だ駄目だ!!俺が弱気になつては!」

考えながら歩いていたらとある定期的建物の前にたどり着いた。

「……ここがUTXか」

そこにあつたのは校舎とは縁遠いビルで学校というより会社みたいなのが第一印象だ。

入り口にはICカードなどで厳重なセキュリティ体制を整えている

おそらく中の施設も充実しているだろう。

「話には聞いていたが……これほどとは」

入り口にある大型モニターから3人グループが映し出されていた。

「スクールアイドル……AIRIZEか」

黒髪ロングヘアにすらつとした長身のクール美少女の統堂英玲奈。

ウェーブが掛かった茶髪のロングヘアに甘々な雰囲気のおんわりガールの優木あ

んじゆ。

そしてグループの中で一番小柄ではあるがそれさえ感じさせない威風堂々たるその姿でステージを支配している綺羅ツバサ。

スクールアイドルが創成期の頃からスタートし、そしてスクールアイドルを世に広め、そしてその頂点に立っている自他共に認めるスクールアイドル界の絶対女王。

「……………これだな」

俺の頭に9人がステージに立つ姿が浮かぶ。

正直言つて賭けに等しいが可能性はある。

後はいつらの意思しただが

俺は3人にメールを打ち……………

「うん？」

何で9人が頭に過ぎつたのだ？

……………以前もあつたな

自分の意識とは関係なく予感というか、直感みたいなのが頭を巡ることがあつた。

これで救われたことも何回かあつた。

なら今回もこの直感を信じよう。

05 スクールアイドル!!

絢瀬さんの生徒会面子と穂乃果の幼馴染面子で近くのファミレスで廃校回避の案をそれぞれ出し合ってみただけど成果は無かったが有意義な話し合いができてそれぞれ帰路に着いた。俺はその帰りにUTX学院に立ち寄った事で一つの可能性を閃いた!

そして、この作戦を実現すべく行動を始めた。

.....だけど

「さて.....どういう風に話を進めるかな?」

あの3人ならそれぞれ個性はバラバラ且つ容姿もいい。

十二分にアイドルとしても通用するけど、穂乃果やことりは兎も角超恥ずかしがり屋の海未をどうやって説得するかよな。

断れるのは目に見えているから考え物だな。

「あう.....ど、どうしよう凛ちゃん!」

「こうなったら凜がよじ登るにやー」

考えながら通学路を歩いていたら桜の木の根元に音ノ木坂学園の生徒2人と後もう一人は幼稚園児かな?が困り果てた顔で佇んでいた。

「君たちどうしたの?」

「じ、実は……」

……

……

……

「……成程ね」

この子の帽子が風で飛ばされて、それが桜の木に引っかかってどうしようかと悩んでいた時に俺が現れた……か。

帽子が引っかかっている所の高さは大体3mぐらい……丁度バスケットリングの高さと一緒か……

これぐらいならいけるか。

「君たちちよつと荷物見てくれないか」

「え?」

「何するにや?」

突然の言葉に困惑する2人

「まあ見てって」

引つかかって木から少し離れてイメージトレーニングを始めた

「………よしー!」

減多にやらない事だから頭の中でイメージトレーニングは終了。

そしてクラウチングスタートの構えを取り、走り出す!

桜の木の手前側で踏み切って思いっきり飛ぶ!

「うわ!」

「た、高い!?!」

俺の身長は180も無い。

これでダンクを決めようと思つたら相当足に強力なバネや脚力が必要となるが、朝霧流剣術の基本は俊敏と筋力。

瞬時に最高スピードに達する加速力とそれをいきなり停止できる減速力の俊敏性と

普通の刀より硬く重いとされている朝霧流正統後継者に受け継がれる名刀「夜桜」を自由に使える筋力が必要とされている。

そして常日頃正統後継者になるべく訓練に励んでいる俺なら身長が足らなくても容易に届くことができる。

そして3m手前まで飛んだ俺は片手で帽子を取って着地した

「ほい、もう飛ばされることの無いようにな」

「うん！ありがとう！」

穢れの無い純度100%の笑顔

ああ子供って本当に無垢で……………

「おじちゃん!!」

止めの一撃を容赦なく与えてくれるな

……………正直泣きたかった

そりゃ歳食っている感はあるけどどうも見事におじさんって呼ばれると結構凹む

コラ!!

そこのお二人さん! 笑うな!!

「あ、ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いいって」

一通り落ち着いたら眼鏡をかけた女の子がお礼を言ってきた。

改めてみると結構可愛いよな。

何だかことりと同じ系統に見えるな。

「でもお兄さんすごいにやー! あんなに飛べて」

もう一人いたショートカットの女の子も可愛い。

けど・・・に、にやー!?

「前にバスケットをやっている。けど俺自身、あんまりダンクは使わないんだよな」

「え? なんでにや?」

「俺ってバスケットの選手から見たら小柄な分類なんだよな」

大体ダンクを決めるフォワードの身長は180cm以上で到底足りていない。

「それでダンクを決めようと思ったなら結構体力持っていられるし、普段は長距離シュー

ターとして………と自己紹介がまだだったね。俺は朝霧悠斗。音ノ木坂学園のテスト生で3年生だ」

「小泉花陽です」

「凜は星空凜にゃ!」

小泉さんに星空さんか……

ネクタイの色からまだ入りたての1年生か。

「2人って中いいよね?」

「うん! かよちゃんとは大親友だよ!」

元氣いっぱいなの笑みでそう答えた星空さんにデジャヴを感じた。

恐らく穂乃果と同じ位のバイタリティー溢れる子だな!

もう少し話をしたかったけど……

「それじゃ俺は少し寄るところがあるからここで失礼するよ」

「どこへですか?」

「コンビニ。ちよつと買いたいものがあつてね」

俺は見てもらっていたカバンを持ってクールに去った。

「………気にしないでくれ」

正直、今日の事は忘れたかった。

クールでかつこ良く決めたのに最後の最後にあんな失態を犯すなんて……
はあ………穴に入りたい。

つてもう穴に入ってしまったつけ………積んだな。

「そういえば生徒会ってこの時期大変だっけ？」

「そうよ！毎年新学期の度に書類が纏まって来て大変なの」

「そりゃご愁傷さまな事で」

「他人事みたい………そうだ!!」

何だろう………嫌な予感しかない

こういう時の感って外れた試がない。

「生徒会の仕事………手伝ってくれない♪」

………やっぱり

「つてか部外者がやってもいけるのか？」

「大丈夫よ」

ホントかよ!?

「昨日の事なのだけど・・・見ていたよね？」

「・・・え!？」

まさか!?

「実は・・・」

「分かった手伝おう!!」

絢瀬さんが言い終わる前にそう宣言した。

「本当!？」

俺の回答に絢瀬さんが大げさなりアクションを取った

「・・・つてか自分から誘っておいで驚きすぎだよ」

「ごめんごめんつて。昨日希が試しに使ってみてつて言ったから」

「・・・やっぱりね。」

とうとう来たよ・・・時限爆弾が!?

まあ、これだけ済んだからよしと考えよう!

「でも助かったら今日希が来ないからどうしようかと思つて」

「うん？東條さんつて部活兼任しているの？」

「ああ、そつか・・・まだ言っていないかったね」

言っていないかった？

何だろ？

「朝霧君、神田明神つて知っている？」

「この近くにある神社でしょ？」

神田明神

正式名称「神田神社」

東京都千代田区に鎮座する比較的大きな規模を誇る神社である。

旧神田市場や築地魚市場など108か町会の総氏神であり、旧准勅祭社の東京十社の一社でもある。

「そうそう。実は希・・・そこで巫女さんのアルバイトやっているの」

「そうなんだ！」

今日初めて知る衝撃の事実。

日本に戻つて来てからまだ一度も神田明神に行っていないかったな。

「それで時々朝もお手伝いで行くことがあつて」

だから人手が足りていなかったのか。

学校につくと一旦教室に行つてカバンを置いて資料室に入つていった。

「……実はこれなんだけど」

「こいつは凄いな……」

資料室に入るとダンボール箱が山積みされた現状を見てそうつぶやいた。

「……まさか俺がいなかったらコレを一人で運ぼうとしたの!？」

「そうなの」

それははつきり言つて酷だな

「それじゃ、たつたと終わらすか」

「ええ」

俺たち2人で気の遠くなる作業を始めた。

正直、HR始まる前には到底終わらず、昼休み・放課後使つて何とか片付いた。

昼休みから東條さんも手伝つてくれたおかげで何とか片付いたが、これは完全先生の嫌がらせに近いだろう!!

女の子だけでこの大量大荷物を運ばせようなんて！良心のかけらも残っていないのか!!

「ありがとう朝霧君たすかったよ」

「ほんまよ。うちらだけではキツかったよ」

「いいって、気にするな」

校庭のベンチに座ってジュースを飲みながら休憩していた。

「……………なあ、絢瀬さ「それよ!」……………なにが?」

「同じクラスメイトならさん付けは何だか他人行儀じゃない?」

「……………え?」

「あつ! それうちも思った」

「はい!?!」

ちよつと! どうしたお二人さん!?

何か変なスイツチ入っていない!?

「だからこの機会に私たちを名前で呼んでみて!」

「……………え!?!」

自慢じゃないがこの人生の中で幼馴染やアルテールス以外で女の子の名前を呼んだ

ことなんて一度もない!!

……………自分で言って悲しい人生だな

「え、絵里」

「うん♪」

「の、希」

「よくできました」

俺は子供か!?

……まあ、悪い気はしない。

「それじゃ俺の事も悠斗って呼んでみてよ!」

「悠斗」

やけくそになって俺の事を名前で呼んでみてって言ったら見事に2人同時にハモってちよつと……いや、だいぶこそばかった。

「ところで悠斗。話って?」

「ああ、そうだった」

危うく本来の議題を忘れるとこだった。

「廃校回避の案なんだけど……可能性の段階だけど見つけた」

「本当に!?!」

「どいう事!?!」

俺の言葉に反応して押し寄せてきた……って寄り過ぎなんだが!

2人共ナイスバディーで目の養護になるけど、有らぬ疑いはかかりたくない一心で離

した。

「…………正直もつたいない気はしたが。」

「まだ絵に描いた餅で、一先ずこれからその話を煮詰めに行かないといけなくて」

穂乃果達には生徒会の手伝いで遅れることをメールで伝えて放課後、穂むらに集まることになった。

「明日には詳細な報告ができると思う」

「…………分かったわ」

「それじゃ、首を長くして待つわ」

2人はそれ以上聞いてこなかった。

俺は急いで穂むらに向かった。

結局、一番難関な海未の説得材料は見つからなかったけどもう出たとこ勝負だ！

「スクールアイドルをやろう!!」

穂乃果の家に集まったがまさか開口一番穂乃果の口から言わされるとは!!

ふっ！

まさか俺と同じ結論に至ったとは！

なんだかんだ言って成長しているのだな！

「……………だつてとてもキラキラしているのだよ!!」

……………前言撤回

やっぱりア穂乃果らしく全然理由になつていない理由だ。

俺の感動を返せ!!

「悠に何も何か言つてやってく下さい!! 確か悠に何も妙案があるとおっしゃいましたよね!」

「どうやら海未は既に穂乃果の案を撤回させるためにこの話し合いに参加したみたいだ。」

目が据わつてちよつと怖いのですが……………

「……………ごめん。俺も穂乃果と同じ答えなんだ」

「……………どういふことですか悠にい」

怖い!

怖いっすよ！海未ちゃん!!

何か身体全体から鬼神如くの覇気が溢れているのですが!!

可愛い顔が台無しだよ」

「悠にい……心の声がただ漏れですよ」

なんでだろう？

こいつらと一緒にいると心の声が漏れてしまうのだろうか？

「まあ海未よ落ち着け。俺は穂乃果とは別の理由だよ」

「……本当ですか」

だから落ち着けて。

後、その殺気も収めてくれたらお兄さん嬉しいのですが……

ダメですね。

「俺のは正直に言ってもう残された手はスクールアイドルしかないと思っっている」

「なぜですか？」

「昨日も言ったが正攻法じゃどうにもならない。学校にそれほど特色もなく部活動も盛んではない。例え今、部活とかで全国優勝したとしてもその時点で廃校が決まってしまう

う」

時間もなく手札のカードは少ない、つまり今の手持ちでは勝負にならない。つまりどうしようが後付けで有名になるしかない。

「もう普通の手段では到底間に合わない！となれば残された手は……」
「スクールアイドルしかない……と言う訳ですネ」

正直それでも元々0%をほんの数%しか上がらない。博打も良いところ。

「それでも可能性があるのよね!？」

「ああー!」

3人のポテンシャルも十二分にある。

「ただ、覚悟はあるか？」

「覚悟……」

「そう中途半端な気持ちでやってしまうと余計に傷が広がって下手をしたら今の1年生が卒業する前に廃校になってしまいかもしれない」

今の音ノ木坂学園は民社党の連立政権の毒で体を蝕られている状態。

穂乃果たちがスクールアイドルという薬を投入するも要領用法を間違えば劇薬にもなりかねない諸刃の剣。

「だから中途半端ではだめ!やるなら本気で最後までやりとげる覚悟が必用」

少しキツめに言ったがここでちゃんとしていないと一番傷つくのこいつ等だ!

「正直言つてスクールアイドルで廃校救うといつても何をどうすればいいかわからないけど……」

穂乃果の瞳には見に覚えがあつた。

「学校を救いたいと言う気持ちは誰にも負けません!!」

あいつと同じ……どんなことでも乗りきつてやるぞと、覚悟の目を!

俺はまだ、ここの奥底で穂乃果を侮っていたかもしれない。

しかしそれは間違いだった。

今のこいつなら本当にやり通すだろう!

本人は自覚していないが小さい時から強いリーダーシップを發揮していた。

それは時に俺の足元にも及ばないほどの強く!そしてまつすぐだ!

昔父さんは言っていた朝霧家と高坂家の特徴。

それは家臣と君主と言っていた。

朝霧家は常に歴史の表舞台に出ず、軍人として国に貢献してきた所謂影の一族。

高坂家は人を引っ張つていく強いリーダーシップ又は母さんみたいに人々に貢献して

きて所謂太陽の一族……と揶揄していた。

だから俺が出来ることは……

「俺もできる限りの事は協力するよ」

「本当!?!」

こいつらのサポートを全力ですることだ!

いくら覚悟を持ってても3人だけでは色々きつい部分もあるだろう

ダンスの振りを考えたり作詞作曲広報、トレーニングメニュー……挙げたらキリがない。

これらの少しでも受け持てば彼女のたちの負担も減り、パフォーマンスに専念できるそれに……

廃校回避となるとそれをよしとしない勢力が絶対に出てくる。

俺が受け継いできた朝霧の剣は人切りの剣。

これは変わることも無い真理ではあるけど、この剣を振るのはいつの時代も常に未来を守るために振ってきた。

こいつらの夢や希望を壊すものなら、朝霧の継承者として全力で叩き潰す!!

「後、俺たちが今持っている課題はいくつかある」

タブレットのメモ帳アプリを開いて練習場所、作詞作曲、衣装、グループ名、学校の

承認、発表機会の課題点を書いた。

「これが俺たちに与えられている課題の概略だ」

正直どれも一朝一夕ではどうにもならない問題だけど・・・練習場所は学校の承認も兼ねているから必然的に後回しになる。

これは明日、絵里に言っておかないとな。

グループ名は今すぐに決まらないので次に持ち越しにした。

「とりあえず練習内容は俺が考えるよ」

「それでしたら私も・・・」

「いや、海未は練習の方に集中して」

「わかりました」

海未は海未で達成しないといけない課題がある

「ところで穂乃果とことりってどれくらい運動できる?」

「少なくとも不可にならないレベルは」

「分かった。それを考慮して考えてみる」

これで練習内容は終わり。

「次に衣装は・・・」

「衣装はことりがどうにかなるかも」

「え!?ことりって衣装とか作れるの?」

「うん!」

以外にも衣装系はことりに決まった。元々服飾関係に興味があつたらしく自作で色々な衣装の製作ができる。

「海未、作曲の件だけど俺が預かってもいいかな?」

「心当たりがあるのですか!」

「ああ」

あの時間聞いた曲・・・あの後検索にかけてみたけどどれもヒットはしなかった。

つまり彼女オリジナル曲の可能性がある。

スクールアイドル始めるのなら既存曲よりはオリジナル曲のほうが良い!

正直、本人の意思を尊重だから最終的にどうなるかわからないが・・・

「後は作詞か・・・」

「それも大丈夫だよ!!」

「当てがるのか?」

以外にも穂乃果とことりが当てがあつたらしく2人そろって海未の方に顔を向ける。

「な、なんですか?」

「海未ちゃんってさあ〜中学の時ポエムとか書いていたよね？」

「そうなのか!？」

「ここで知るまた新たな幼馴染の一面。」

「これは俺も知らない事実だ！」

海未の方を見ると・・・

「そ、そ、そんなこと・・・ありましたか？」

「・・・・・・目が超々泳いでいるよ海未さんや。」

「どうやらその話題は彼女にとつて触れてはいけない、開けてはならないパンドラの箱・・・封印していた黒歴史の一つだろう」

「中学の時・・・ことりにも見せてもらったこともあつたよねえ〜」

「更にブラックな笑みを浮かべていることりが追撃を加えるもの・・・」

「用事ができました。帰ります。さようなら」

穂乃果とことりの猛攻に耐え切れなくなつたのかカバンも持たず颯爽と逃げた。

「戦略的撤退としてはありだけど・・・」

「・・・さて海未を追うか」

正直この問題を解決しないことには話は進まないから今回は申し訳ないが心を鬼にして捕まえないとします。

．．．．．5分後

「お断りします」

首根っこ捕まえて部屋に戻ったのはいいもの断固拒否を貫き通している。

「え、何で何で？」

「恥ずかしかったのですよ!!正直言っと思って出しくもありませんでしたよ」

まあ、黒歴史を掘り起こしているんだから誰だってそうだよな。

．．．．．俺もある。

特に今朝の事なんて永久に封印して二度と日を見させはしない!

「それでしたら穂乃果がやればいいじゃないですか!」

「海未さんよ。こいつの小学生の作文覚えてるか?」

『饅頭、うぐいす団子、もう飽きた!』

自分の家の不満を作文という形で暴露させた。

まだそれだけなら良かった。

何故か俺のところへ苦情が来て2, 3時間も先生たちからお説教を受けたという理不

尽ぶりを味わったよ。

「そ、それでしたら悠にいが!」

「俺に歌詞なんて書けると思うか？」

自分でいうのもなんだけど

「しかし……」

思っていたとおりなかなか首を縦に振らない

うん？ことりの奴、胸元に手を持ってきて……

「海未ちゃん……おねえがあい!!」

脳を蕩かす様な超甘々なボイスで海未にお願いをしたが……

「ぐはっ!!!」

「悠にい!?!」

それを聞いた瞬間……何故か壁まで吹き飛ばされ大ダメージを追った。

「悠にい大丈夫!?!」

「大丈夫大丈夫……海軍第一種礼装を着ている曾爺さんが対岸で手を振っているよ」

「全然大丈夫じゃないよ!それ三途の川だよ!!」

先々代様、もうじきそちらへ行きます。

「悠にい……すみません」

「おふう!!……俺はいつたい何を」

鳩尾に強烈な衝撃と同時に意識は現実に戻ったが、3人はなにか恐ろしいモノを感じ取ったのか口を固く閉ざした。

「……………とりあえずこの件は考えるのをやめよう。」

「……………まったく、しようがないですね」

ため息交じりにつぶやいてようやく海未が折れてくれた。

「やったー!!」

「ありがとう、海未ちゃん!!」

「よし!」

一番難関だった海未が説得できた!

「今日はいったん帰るよ。明日は学校の承認と活動場所、グループ名を決めるぞ」

「「はい!」」

「全く!」

こいつらの目の輝きがまぶしくてありやしない。

未来にむかって一直線に進む彼女らとそれを守る喜びみたいな感情が俺の中にある。

俺のご先祖様も同じ気持ちだったのかな?

自分に問答しているので答えも出るわけではないがなんとなく思ってしまった。

直ぐに家に帰ってパソコンを起動させてスクールアイドルの情報を集めた

「凄いな」

AIRRISE以外の全国各地のスクールアイドルのサイトを見たがこれが高校生のクオリティ!?!と唸るモノのいくつも見受けられた。

中にはよさこい祭りをベースにしたものもある。

「人気が高いとは聞いていたがここまでものとは」

パフォーマンスのキレもかつての本職とも差異はないように思える

今は前政権の所業で殆どの芸能事務所が廃業に追い込まれ現在活動中なのは当時フリーで活動していた人か地下アイドルぐらいいしか残っていない。

そう言った時代背景があつたのかスクールアイドルブームは爆発的に高まった。

そして一つのサイト、スクールアイドルのランキングサイト『SIG』を覗いた。

別に強制登録ではないがスクールアイドルの全国大会である『ラブライブ』に出場するにはこのサイトに登録して各地域のランキング上位に入らないと参加資格を得られない為、全国のスクールアイドルの殆どはこのサイトに登録している。

登録したら『ラブライブ』予選の出場資格を得るがその代わり各地にあるスクールア

アイドルショップに自分たちのグッズが販売されその売り上げが大会運営費に充てられるシステムになっている。

「さうして……どこが管理しているのかな？」

運営会社は一般企業だけど……

「うそ?!:公安委員会も一枚噛んでいるのかよ!!」

協力一覧に考案や文部科学省、内閣府の名前もあった。

やっぱ前政権の所業で政府内でも危惧しているところがあつてなのかその会社の上層部の一部に元公安や情報員関係者が何人か見受けられる。

過去の事件を見るとちよつかい出したり私利私欲に利用した人たちは全て闇に葬られているな。

それ以外にもトレーニングのサイトを覗いて夜遅くまで試案を考えた。

06 始動

翌日、俺たちは昨日の話し合った結果を伝えるため朝一で生徒会室に向かった。

昨日の段階で絵里には詳細な話は一切語っていない。話し合いの結果次第で没になる可能性も否定できなかったのであまり語れなかったけど、今日のははっきり言える！

「し、失礼します」

あの穂乃果がきちんとノックをして丁寧語使ってきたと入室出来ている!!

小さい頃から知っているけど本当にお転婆娘だったが本当に成長している

「あら？悠斗。それに……」

「突然お邪魔してすまない。今取り込み中だったかな？」

「いえ、特にないわ。それよりこの間は怖がらせてごめんなさいね」

「さて絵里。本題に入ってもいいかな？」

「構わないわ。それで話しとは？」

「昨日言っていた案についてだ」

必要事項を書いた部活申請書を渡し、穂乃果の口からスクールアイドルについて語っ

た

「事情は分かったわ・・・スクールアイドルで学校を盛り上げて入学者を増やす・・・ね、その発想は正直思いつかなかったわ」

「この際はつきり言わせて貰うけど今の音ノ木坂には時間がない上、持っているカードだけではどうにもならない」

なんにもやらずにただ単に廃校に向かっていくぐらいなら最後まで抗って勝ち取る。

「・・・分かったわ。生徒会の方でも可能な限り協力を惜しまないよ」

「ほ、本当ですか!？」

「ただ、部活の承認はできないのよ」

「何ですか!？」

絢瀬さんとはとても言いづらそう若しくは申し訳なさそうな

「何か学校側で提示があったのだな」

絢瀬さんは何も言わず1枚の書類を渡してきた。

題名には『廃校に伴う部活動規定の変更に達する通知』

「絵里!!これは!？」

「見ての通りよ。今朝の職員会議で急遽決まった事よ」

内容も酷いものばかりで現状の申請人数も3名から7名まで上がり、様々な部活動の

予算も削られ、同好会も廃止が確定された。

「こんな重要な案件！生徒には一切の意見交換会も行わなかったのか!!」

「本当よ」

陽菜さんから廃校派が半数近くに達している事は聞いていたがまさかここまで!!

「……………」

「ゆうにいどちらへ？」

「決まっちよるじゃろう!!」

幾ら温厚の俺でもこれはもう我慢の限界だな。

「「え!?!」」

「今からその三下どもを血祭りにあげたるさかい」

「落ち着いてください」

海未に止められるがはつきり言ってもう我慢ならん

「このまま黙って見ちよれつといたいんか!」

「彼……………どうなっているの?」

「普段は温厚なのですが……………大人たちの汚い姿を見かけたらまるでヤの付く職業さんみ

たいに……………」

数分後……

「見苦しい姿を見せて申し訳ありませんでした」

あの後、頭が冷えて己のやった事を反省した。

自分でいうのも何だけどキレるまで沸点は高いけど一度キレてしまつたら手の施しようがない（父談）

危なかつた。

今ここで手を出したら全てが水の泡になってしまうところだった。

「正直言つて私たちは貴女達を利用するわ」

「利用ですか？」

「ええ、スクールアイドルは数年前の前政権が起こした事件で一番シビアになつていて、下手にちよつかいだそうなら直ぐ公安が介入するのよ」

「そうなのですか!？」

そう、スクールアイドルが広まつたころ政府与党が一番懸念していたのがくそ汚い大人の道具にされないか心配されていて、与党が取つた手が運営する会社に元公安を入れて不埒な真似をする企業には問答無用の制裁と逮捕をする。

「と言つても別に生徒たちの活動に制限をかけるものではなくて、食い潰す大人たちから守るため」

なるほど読めて来たぞ。

その制度を利用して廃校派を牽制する狙いか。

「なら私たちは構いません」

そう穂乃果はつきり言った

「私たちは同じ目標を目指しているはずですよ。ならお互いがみ合うより助け合う方が」

「ありがとう。高坂さん」

お互いに握手した。

部活申請は叶わなかったが、生徒会からの協力を取り付けられたのは非常に大きい。「俺も父さんからいろんな情報を集める！こう見えてもうちの親父は海軍士官だからな。色々政府内や財政会に知り合いが多いから」

部活申請は改訂により部室や教室が使えないとなるとまた一から考え直さないといけない。

「悠斗はここに残って。転入の時の書類で書き漏らしがあった」

「分かった」

書き漏らしの書類？

おかしいな。もらった書類は全部貰って記入したはず

「それでは悠にい、私たちは戻ります」

「ああ、また後で」

穂乃果が生徒会室を出て行った

「それで、書きもらしの書類とは？」

「ごめん。それ・・・嘘よ♪」

「嘘!？」

おいおいどうした絵里さんや!!

ちよつとぼん・・・はっちゃけてないか!?

「本当はあなたとゆつくり話がしたくて」

・・・まあ確かにクラスに帰れば質問の的に、絢瀬さんは生徒会の仕事で中々話せる機会が

「緑茶でいいかな？」

「いただきます」

「でも驚いたわ。まさか悠斗の口からスクールアイドルが出てくるなんて」

「そんなに以外か？」

「そやで。いつもはクールで・・・でも時々抜けている」

・・・希、褒めているのか貶しているのかどっちなんだ？

「ま、成り行きでね」

正直、UTXに行かなければこの案は浮かばなかっただろう。

何が幸いするかわからないな。

「ねえねえ、アルテールスってどんなどころなの？」

「そうだな・・・ある意味日本に近いな」

「日本に近い？」

「そうそう、欧州圏ってキリスト教が多いだろう」

「そうね。イメージ的に・・・」

「だけどアルテールス王国は昔から独自の自然崇拝の宗教を信仰している」

アルテールス王国は主に5つ島で構成されており、一部がロシアの国境に面している。

国土は日本の半分ぐらいでだけど領海内に天然資源が豊富で国力もある。

昔から資源を狙ってロシア（旧ソ連）とにらみ合いを続けており常に不利な条件下の戦闘が続いて負った。それでも要所要所で撃退し続けて今日まで独立を保ち続けている。

日本との交流は江戸時代から続いており今日まで交友関係は続いている。

「いいところなのね」

「いい国さ。俺も6年は居たけど日本以外であそこまでいい国は他にないと思ってる。絵里も希の機会があれば行ってみるといい」

教室に帰る前に穂乃果の教室を覗いて見るとスケッチブックとにらめっこしていることりがいた。

「ことり、名に書いているんだ？」

「あ、ゆうにいい！見て、ステージの衣装を考えていたの」

相変わらず脳を蕩かすような素敵なボイスに意識が別世界に飛ばされそうになりそうになる。

「かわいい!!」

「いかにもアイドルです！って感じの衣装だな」

「うん！最後の仕上げには仕立て屋さんに任せることになるけど」

昔から裁縫が得意だったがここまでとは！

ことりさんの裁縫センス半端ないな

「ことり……」

「どうした海未？」

今まで無言を貫いていた海未が口を開いた

「こ、このスーッと伸びているものは？」

「足だよ」

だよね。

むしろそれ以外に何に見えるかと問いたい。

初めて海未がボケているところを見た

「大丈夫だよ！海未ちゃんそんなに足太くないし」

そんなに！！

そんなにつてなんだよ！ここは普通全然とかじやないのかよ！

「穂乃果だつて人の事言えるのですか！！」

「え？・・・ああ・・・ふん、ふんふんふん・・・」

顔を真っ赤にして海未に反論された穂乃果は自分で足を触つて確認しているけど・・・

男のいる前にそういう行動はやめんさい。

「よし！ダイエツトだ」

そう思うならまずこの間食べたデザート分のカロリーを消費しないとな。

「2人共大丈夫だと思っただ」

ことりの言う通り穂乃果や海未は太い訳ではなく、むしろ細いぐらいだ。

やっぱり年頃の女の子ってそういうところに気にするのかな？

少なくともアルテールスで知り合ったあいつらはそんなのに無頓着。

まだ作曲、作詞の件は残っているとはいえ衣装も決まったのは大きい

「それよりも肝心なのが決まってないよ」

「肝心なもの？」

「グループ名……決めてないしい」

「……あ」

「こっぴどに言われて肝心なことを忘れていた。」

「グループ名決まらないよ」

「困りましたね」

俺たちは昼休み中庭でご飯を食べながらグループ名を考えているのだけど……

「うくん……なかなか思いつかないよね」

「何か特徴があればいいんだけど」

「見事に3人共性格はバラバラですし」

「ここは単純に3人の名前と取ってことほのうみは

「……漫才師みたいです」

「だよね」

自分の安直なネーミングセンスに泣けてきた。

というより、正真正銘美少女たちに囲まれて食事って経験はじめてなんですけど

「どうしたのゆうにいい」

「いや……何でもないよ」

昨日から煮詰まっているとはいえやはり、こだわりがあるらしく

頭を捻らせてもいい案が思い浮かばない。結局最後まで決まらず、廊下に投票箱を置

いて皆の意見で決める事になった

「……最後は丸投げか」

「でもこれなら興味もつてくれると思うよ」

物は言いようだね。

「そういえばトレーニングメニューってどうなっています?」

「それなら問題ない。あともう少し考案したいから明日から」

「よーし!それなら明日から朝練しようよ」

あの朝が苦手な穂乃果が朝練だと!?
ヤバイ何か泣けてくる。

そうとなれば練習場所を探さないとな。

グラウンドには陸上部や野球部で使われていた。

つてか、今日初めて知ったがソフトじゃなくて野球なんだこの学園は!?

別の意味で驚いたの!

「ここは邪魔になりそうですね」

「ですね」

広い校内と言っても限られているな。

体育館に赴くと・・・

「ダメだな。もうバスケット部やバドミントン部で埋められているな」

空き教室

「うくん!!開かないよ」

「普段は使われていない教室だからな。カギは先生が」

空き教室のカギの管理人は学年主任の黒井先生が持っているらしい。

「高坂と・・・君が噂の転入生か」

職員室に行くと黒井先生がめんどくさそうに言ってきた。

俺が事情を説明すると・・・

「スクールアイドルの練習場所に」

「お前らがスクールアイドル？・・・ふっ!!」

「あー!鼻で笑った!!」

穂乃果だけでなくことりも海未も顔を赤らめていた。

正直キレそうだけど、こいつらの事もあるからここは我慢だ。

「ちよつと待つて朝霧」

「・・・何ででしょうか?」

正直キレ気味で早く職員室から出たいのが本音だけど

「どうして何にも関係ないあいつらに協力する?」

「・・・可能性を見たからです」

「可能性?まだ子供だぞ!いったい何ができる!?!」

「もう既に諦めてしまった先生方がやるよりかは確立はあると思いますが・・・」

「・・・貴様」

「おっと。暴力ですか?今暴力沙汰になりますと次の再就職先はなくなります」

「・・・もう行け!!」

「失礼します」

取りあえず言いたいことを言って職員室を出た。

父さんが置いてあつた資料によるとあの教師は廃校派の一人らしい。

母さんが学生時代の時からここの先生で6年前に出戻りしたらしい。

評判は最悪で、ダメな生徒を次々と見捨てて優秀な生徒には媚びを売ると書かれていた。

「どうしたの悠にい？先生と何か大事な事でも」

「ちよつとした世間話だよ。ほら俺って唯一の男子生徒だし」

取りあえず嘘を言っておく。

学年主任と喧嘩腰になりましたなんてとてもじゃないけど言えない。

「さて……次の場所を探しに行きましょう」

「まあまあ！このままでは埒が明かない」

「ではどうするのですか？」

「こうなつたら別の手を使おう！」

「練習場所？」

「そうなんだ絵里。今色んなところを当たってみたのだけど成果がなくて」

体育館や運動場といった定番場所も既に使われているので無理。

空き教室もこれもまた部活動しか貸せれないと場所がほとんど残っていない。

となったら残された手は生徒会が管轄する所をしかなく、そう思つて絵里に聞いて見た。

「ねえくえりち。屋上ならどうやん？」

「屋上？」

書類を整理していた希から一言、屋上という単語が出てきた。

「そうね、確かに屋上は生徒会も学園側の管轄外で誰でも自由に使えるの」

「珍しいね。普通そういうのはどこかが管理して普段は入れないモノだと思つていた」

「普通はね、だけど音ノ木坂は定期的にフェンスや花壇の手入れも行つていて」

「つまり、早い者勝ち……ということかな？」

「そうやね。最近是利用する人も減つて来ているから苦情は来ないとおもうやけど、注意だけしといてね」

「了解。助かったよ」

生徒会室を出た後屋上に向かう

「ここが屋上か・・・」

言われた通りフェンスも整備されていていい環境だけど、唯一の懸念事項は・・・

「日陰がないし、雨が降ったら練習できないけどこの際贅沢は言つてられないよね」

「でも、ここなら回りに気にしないで思いつきり練習できる」

「よーし!!練習頑張るぞ」

「ねえ、悠にい、ことりちゃん、海未ちゃん」

ふと、穂乃果が俺たちに語り掛けてきて・・・

「やり遂げようね最後まで!!」

「そうだな!」

「ええ!」

「うん!」

俺がこいつらに賭けた理由はやはり従妹のこの揺るぎない炎が灯った目に当てられたかもしれない。

俺は見てみたいかも知れないこの子達が行き着くところまで・・・

07 練習

「ん……んは？」

ベットで寝ていたが突然目覚まし時計のベルが鳴り響き、俺の意識は少しずつはつきりし始めた。大きく背筋を伸ばし時計を見てみると4時といつもより大分早い。

ロッカーから制服を取り出した。

以外にも今日から朝練始めようと言い出したのは他ならぬ穂乃果の口からだ。

それだけ今回の事は本気なんだと思う。

早速昨日に製作した練習メニューを鞆にいれて家を出た。メニューといつても最初ということもありみんながどれだけの体力があるか計測系の軽い項目にしている。

これの製作にはさすがに手間取った。

かつての面子ならいつもものやっているメニューがあるが、まだ体ができていない子供且つ女性にはキツイので一から作成することになった。

一足早く神田明神に訪れて、自分の日課でもある体力維持の自分用のトレーニングで体を慣らし始めた。

「おはようございませう悠にい」

「おはよう。ゆうにい」

「おはよう！悠にい!!」

「通りのメニューを終えたところにジャージ姿の3人が来た。

「おつ!!穂乃果!ちゃんと起きられたのだな」

「うん!!目覚まし」

「……おいおいおいそれ、近所迷惑より雪穂や紀衣さんに迷惑じゃない？」

「まず今日のメニューなんだが3人がどれだけ体力があるか計る計測メニューだ」

「計測ですか？」

「正直言つて、昨日あれこれメニュー考えていたのだけど、時間がないとはいえやはりみんなの体に合わせて調整していくしかなくて」

「私はずきり階段ダッシュやるかと思っただけですが」

「それは将来的にやるけど今はやらないよ」

「何で？」

「確かに足腰鍛えられて良いのだけど如何せん足や膝に負担が大きい。運動部の海未はともかくあまり体を動かしていないのかやことりだと痛める可能性がある」

だから最初は腕立て伏せや腹筋、ランニングそれから徐々にならして行くけど3人は余り納得していない

「焦る気持ちは分かるよ。でも少しずつ体をならしていけないと 壊してしまう恐れもあるから」

怪我が原因で変な癖が付いてしまったらライブどころか将来にも影響をお呼びしかねない3人を預かる者としては絶対に避けたいといけない!

「朝は基本走り込みと柔軟といった体力錬成、夕方は走り込みと発声練習やダンスの練習」

「「はー!」」

「よし、いったん休憩」

一先ず測定用の内容でやらせてみたけど、やっぱり体育以外で運動していなかった穂乃果やことりは激しく息切れを起こして肩で呼吸をして境内に倒れこんでしまった。

「海未、どう思った?」

「やはり、悠にいの言う通り少しずつ慣らしていくしかありませんね」

「そうだな、朝夕方は当分基礎体力錬成でいいだろう昼休みとかは逆に運動系はやらずに発声練習がいいかもしれない」

「そうですね」

歌やダンスに才能を持っていても結局最後に言うのは基礎練習、基礎体力の積み重ね、常日頃の努力がモノを言う。

「ほい、3人ともスポーツドリンクだよ」

「ありがとう」

「よし!!もう一セットやるぞ!!」

一度エンジンに火が付いた穂乃果にはもう止まらない

止める術がないとも言うけど、特に気を付けないと際限なくやってしまうからな海未と協力して上手くブレーキをかけないと。

再びランニングを再開した直後……

「……………いつまで陰で見ているんだ希?」

「あら?バレてたん?」

「残念だけど俺に除きの類は通用しないぞ」

後ろの境内から潜んでいたのは巫女服姿の希だった。

「絵里から聞いていたけど本当に巫女さんやっていたのか」

「ええ、ちよつとしたお手伝いやけど。ここはスピリチュアルパワーが集まるところやからな」

希の独特なオーラにマッチして本当に似合っているな。

「階段使わせて貰ってるんやらか、後でお参り位していき」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

「ほなな」

希と別れた後、入れ違いで穂乃果たちが戻ってきた。

「も、モウ……ダメだ」

今度こそ完全に力尽きて境内に座り込んだ

初日はこんなものでいいか。

「朝の練習はここまでにしよう」

「後、休憩が終わったらお参りして行こう」

「お参りですか？」

「さつき神社関係者から使わせてもらっているのだからお参りして行きと言われてね」

休憩が終わって、境内にある御賽銭箱の前に立ち、小銭を投げ入れて、二礼二拍した

後、穂乃果とことりと海未は音ノ木坂学園がなくなりませんように願ひ、俺は3人の願ひが叶いますように・・・と願った。

練習もお参りも終わり荷物をまとめて学校に行く準備をしていた時ある事を思い出した

「そうそう。言い忘れていたけど3人共このサイトに登録するよ」

「これってスクールアイドルのランキングサイトですか？」

「そう、これには動画以外にも写真活動日記等が投稿できる」

「これの運用会社って大丈夫なのですか？」

「それも大丈夫。既に調べて確認もできていて真つ当な会社だよ」

政府も公安も一枚噛んでいるような会社が普通とは言えないが・・・少なくとも俺は安心出来る。

「悠にいいお任せします」

「了解」

手元を持っていたスマホで海未の写真を撮った

「・・・ってなに写真撮っているのですか／＼」

「こいつに登録するには各個人の写真が必要だから」

「ですからそういうのは言ってから取ってくださいよ／＼」

・・・あつ、ヤバい！

なんだか海未をいじるの凄い快感。

「・・・・・・・・悠にい」

・・・だけど凄まじい殺気がこれ以上弄るなど、本能が警告した。

後に引けなくなる前にもうやめよう。

海未をいじるときは命を賭けないといけない。

その後、穂乃果とことりにも一通り説明して写真を撮って登録した。

学校に着くと上履きに履き替え自分の教室に向かった。

「この分じや教室には一番乗りかな？」

「おはよう絵里。いつも早いなの？」

「ええ、生徒会の仕事でね。そう言う悠斗も早いよ」

「今日はあいつらの朝練があつてね」

「そうだったんだ。で・・・どんな感じだった？」

「まだまだこれからさ」

全ては始まったばかり。

慌てず、かといってゆっくりもダメ。

HRが始まるまで暇つぶしにカバンから一冊の本を取り出した。

「それって何の本？」

「これ？」

「ドイツ語の原書？」

「第一次世界大戦の旧ドイツ海軍のある潜水艦隊司令官が書いた『Das Unterseeboot』……つまり潜水艦論の本だ」

父さんが送ってもらった資料と一緒に入っていて暇つぶしに呼んでいくうちになかなか面白くて暇なときに読んでいる。

「どんなことが書かれているの？」

興味を持ったのか絵里が聞いていた。

「そうだな……潜水艦の特性はヘンザイ性にある」

「そのヘンザイはニンベンのほう？」

「いや……シンニユウの方だ」

「遍在ですね」

「そうだ。どこにでもいる……正確に言えばどこにでもいる可能性があるのが潜水艦の

特性と彼は言っている」

「それはどういう意味？」

「これはちよつと言いが難しかったかな？」

「そうだな・・・潜水艦のイメージって分かるかな？」

「潜っていて見えません」

「そうだ！それが水上艦と違うところだ。広い海原にどこにでも現れる可能性がある。よつて狙われるほうは、出没するしなに関係なくずっと警戒を続けなければならぬ。神経すり減らしながら搜索し、迂回航路を取れば燃料や時間のロスは計り知れないものである」

「なるほど」

「更に面白いのはこの本には偽装潜望鏡の海中投下案まである」

「偽装・・・偽者の!？」

「ああ、この本を見ているととても100年前に書かれた本とは思えなくてな
今でも戦術的に応用できるものも見受けられる。

「そうそう、絵里。相談なんだがけど・・・ファーストライブの会場を探しているのだけ
どいいところある？」

「ファーストライブの会場ね……それだったら新入生歓迎会の後なら講堂が空いているよ」

「講堂ね……キャパはどのくらいある？」

「確か1000名は大丈夫なはず」

1000人も入るのならファーストライブには十分な量だ。

それ以外にも照明も音響機材も一通り揃っているのもありがたい。

レンタルはお金もかかるし学園の備品で賄えるなら賄っておきたい。

「でも部活動でもないのに借りられるの？」

「それも大丈夫。よほどの行事等が重ならない限りきちんと申請さえしたら生徒なら借りられるの」

これは学園の規則で決まっているみたいで最近改正もされていない。

いい条件なのだけど屋上といい結構変わっているのだな。

正直言って講堂が借りられて教室が借りられないのは納得いかないが……

雑談しているうちにチャイムが鳴り響いたと同時に先生が教室に入ってきて今日の授業が始まった。

昼休み、教室で昼食を食べ終わった後に本来の任務であるモニタリングの一環で校内

をウロウロしていた。

今は屋上で穂乃果たちが発声練習をやっているけど、テスト生としての仕事もきちん
とこなさないと。

それが条件でここにいる訳だし。

ある程度データを集計が終わって教室に戻る途中、『部員募集中』と書かれているポス
ターの前に止まっている女の子に見覚えがあった。

「はあ……私には無理かな」

「何が無理かな？」

「ひゃ!!……って朝霧先輩」

「ごめんごめん！驚かせて。いやなにポスターを真剣に見ているものだから興味あるの
かなと思って」

ポスターの前に佇んでいた女の子……この間偶然知り合った小泉さん。

顔見知りもあつてか最初に比べてビクビクさはなくなっていた。

「そういえば先輩……あの後どうなりました？」

「……何にもなかった」

「え？」

「本当に何にもなかった！」

「そ、そうでしたか」

ちよつと大きな声を出してびつくりさせたのは申し訳ないがあ的事件はなかったことにはしたい。

「かよちくん一緒に戻ろ！」

「よつ星空さん」

「おっ!!朝霧先輩だにゃ！」

相変わらず元気いっぱいだな！

「かよちんと朝霧先輩と何話していたの？」

「あ……えつと……」

「小泉さんが熱心にこのポスターを見ていたからスクールアイドルに誘っていたんだ」

「そうなの!?!よかったねかよちん！」

「え……いや……でも」

出来上がったばかりのスクールアイドルのポスターを真剣に見ていたのだ

でも自己主張できない子だし……なかなか自分の意思が言いにくいんだろうな。」

だったら・・・

「それじゃ・・・星空さんも一緒にどう?」

小泉さんの幼馴染で大親友の小泉さんも誘う作戦に打って出た。

「凛には無理ですよ。だってこんなに髪も短い・・・それに女の子っぽくない女の子っぽくないか。」

この子も悩みがなさそうでもあるものだな。

でもな・・・星空さん。

世界には見た目超絶美女でも性格大破綻している人が結構いるよ。

俺も前に被害受けたし・・・

正直言つて小泉さんと星空さんもアイドルで十二分にも通用する可愛いし!」

／／／／／／

／／／／／／

「・・・つてどうした2人とも?顔を赤くして」

「き、気付いていなのですか?」

「何が?」

俺何か変なこと言つたかな?

「そ、その／／／り、凛たちの事を／／／か、可愛いって／／／」

「……え!?!」

また心の声が漏れてしまったと思ったが遅かったみたいだ。

「これはどう言うことのですか?」

後ろから海未声が聞こえたが振り返ってはならない!

俺の感がそう告げている。

正直言つて今すぐにでもここを離れたかったが、凄いプレッシャーで体が動かない。

「確か悠にいつてテスト生のモニタリングの仕事をやるから練習には参加しなかつたよね?」

いつも元氣満点の穂乃果の声にすら違和感がある。

こう……なんだかドス黒い気配を感じる。

「ゆうにいくことりたちが屋上で一生懸命練習しているときに後輩をナンパする悪い子は……ことりのおやつにしちゃうぞ♪」

いつも天使のような脳トロボイスのことりでさえ鳥肌が立つ!

というよりおやつってなに!?

3人の中で意味深で一番怖いぞ!ことりさんや!!

恐る恐る振り返るとニコニコ笑顔の幼馴染3人がいた。

笑顔のはずなのに目が笑っていないうえハイライトが映っていない。

その後ろから禍々しい覇気があふれている。

幼馴染の一言一言にまるで死神の釜が首筋に当てられる感覚だ！

廊下の窓から春の爽やかな風が入ってきているが今の俺には地獄の風にしかない。

・・・・・・・・・・さて俺の採るべき行動はただひとつ！

「それでは諸君！さらばじゃ!!次はヴアルハラで会おう」

俺は逃g・・・・戦術的撤退を選び、偶然開いていた窓から飛び降りていった。

高さ的には3階からだけど難なく受身を取って着地に成功した。

あのままいたらそりや恐ろしいものを味わうことになるだろう。

ひとまず一時散開して落ち着いてから代弁を言おう。

―後日談―

結果論でいったらあの後、結局つかまって数時間は尋問された挙句海未に関節技を決められて心身ともにぼろぼろになった。

何とかスカウトしていたという理由で幼馴染に許してもらったが次はないと言われてしまった。

父さんへ、俺は日本に戻ってきてモニタリングのテスト生はとでも大変です。

女の子しかいない環境ですので幼馴染以外の子と話しただけで嫉妬のプレッシャーを今日それを初めて味わいました。

08 思い

結成から数日が立ち、最近日課になりつつある朝練に顔を出しに早めに出た。

ファーストライブの会場も絵里に頼んで新入生歓迎会終了後なら講堂を使っているという約束もしてもらって新入生歓迎会を目標にして練習に励んでいる。

今は既存曲で練習しているが、やっぱりオリジナル曲の方がいいけど一向に進んでいない。

「よ、海未！」

「悠にい！おはようございます」

我らの幼馴染みでThe 大和撫子の海未。

相変わらず凜としたその姿に見惚れてしまう。

「作詞の方はどんな感じ？」

「……できたのは出来たのですが」

「おっ！見せてくれない」

「……笑いませんか？」

「笑う訳ないだろう」

そこまで信用されてないとお兄さん泣きたくなりますよ。

この道端では泣かないけど。

カバンの中に折りたたんでいた紙を渡してきて目を通した。

「……………!?!」

「、こいつは!?!」

「ちよ、ちよつと悠に何か言ってください!不安になります」

「あ、ああ……………ごめんごめん」

あまりにも凄い内容だったので言葉が出なかった。

「はつきり言うぞ」

「……………」

緊張した面持ちで俺の言葉を待っていた。

「言葉が出ないほど素晴らしい!!」

「……………え?」

ひたすら夢に向かって駆けめくっていくその途中にも困難があっても挫けてしまっても走り続けば必ず道が開かれる。

今の俺たちに必要なフレーズが詰まっている。

若干17歳でここまで完成度の高い者ができるとは思わなかった

「そう、そうですか」

「ああ！よく頑張ったよ」

余程嬉しかったのか目には涙が浮かんでいた。

自分の黒歴史をほじくり返されて強引に頼んだ俺らが言うのも何なんだけど、よくやった！

昼休み・・・俺は図書室で昔の卒業アルバムを見ていた。

授業中にふと気になって母さんがどんな時代を過ごしていたのか急に見たくなってきた。

アルバムには母さんだけではなく紀衣さんや陽菜さん、海未の母親である汐さんも楽しそうな写真があった。

「悠にいい!!」

暫く卒アルを目に通していたら穂乃果が図書室を奇襲した。

「……穂乃果、ここ図書室だよ。もう少し……あのねあのね!!」

こりやだめだ!

まったく聞き耳持たずだな。

「……はあ……何があつたの?」

幸いにも図書室は誰もいなかったのいなかったのでそのまま話を続けた。

「入っていたの!」

「何が?」

「グループ名が!!」

「何だと!」

穂乃果からの一言に俺も驚き叫ぶ!!

って俺まで大声を出してどうする!

「うん!それで悠にいを探していたの」

「よし!行こう!!」

図書室で昔の卒業アルバムを片付けて急いで海未たちのところに向かった。

「海未!あの投票箱に入っていたって本当か!」

「はい！一枚ありました」

まさか飛びついてくるもの好きの人が……おっと失礼だな

海末からもらった一枚の紙を広げるとそこに記載していたのは……

『μ、s』

「ミューズ？あのギリシャ神話に出てくる9人の女神の？」

「良くご存じですね」

「知り合いにギリシャに詳しい考古学者がいて前に聞いたことがある」

「……悠にいつて本当にいろんな知り合いが多いですね」

うん。

自分でもそう思った。

「μ、sか……いい響きね」

「みんな……異論はないな」

3人の顔を見ると異議なしといった表情だった。

「うん！今日から私たちは？、sだ！」

3人はグループ名が決まって喜んでいたが俺は別の意味で気になった。

いったいこれは誰が入れたのかな？

μ、s って言葉を知っているという事はそれなりにもそつち方面精通している人の筈だ。

あの時、9人が頭に浮かんだのはこれの事だったのか？

と言う事は最終的には9人になるのかな？

自問自答した所で答えは出るわけでもなかったが考えずにいられなかった。

放課後、海未に今日の練習メニューを渡してある場所に向かった。

練習・歌詞・ライブ会場・衣装などの問題はクリアしているがまだ作曲が残っている。

今は既存曲で練習しているとはいえやっぱオリジナル曲が望ましい。

いや！

廃校回避を目指している以上既存曲では話にならない！

俺の知り合いの中で作曲できるセンスの持ち主は一人しかいない。

「相変わらずいい演奏だな」

「あらか先輩、ずいぶん久しぶりですね」

音楽室を覗くといつもの通り一人でピアノを弾いていた西木野さんが居た。

暇な時に彼女の演奏を聞いていたけど未だにこの子の底が見えない。

もう少し聞きかったが本題に入ろう。

「今日は西木野さんに頼みたいことがあってね」

「頼みごと……ですか？」

「ああ、スクールアイドルの歌を作ってほしい」

「……はい？」

余りにも予想外の答えだったのはすっぽけな声を出した。

「今この学校が廃校に瀕しているのは知っているよね？」

「ええ、告知もされていましたし」

「それを打開するために俺の幼馴染たちがスクールアイドルを始めたのだけど作曲の問題が出てきた。そこで君に依頼にいたわけなのだが……」

「お断りします」

「……まあ、大体予想通りの回答だけど最後まで言い切ってから返事して！」

「そもそも私はクラシックしかやらないですし、アイドルみたいな薄っぺらい曲はきらいなのです」

薄っぺらいか……

確かにそういう曲しか聞かない人にとってはそういう感想かもな。

「試しにこのPV見てくれないか？」

俺は持ってきたタブレットからスクールアイドルの総集編のPVを再生した。

音楽を携わる人なら分かるものは分かる。

「これ見てもまだ薄っぺらい曲って言えるかな？」

「……………」

正直いやらしい手段だけど百聞は一見に如かず。

「……………確かにその発言は訂正します。ですがそれと作曲の件は別問題です」

うん。

まさしくその通りだな。

「……………先輩は何でこの学校に面入れがあるのですか？」

前に先生に聞かれた同じことだ。

あの時はあまり多くは言わなかったが、この子には正直に話そう。

「俺の……………死んだ母さんの母校だね」

「……………え？」

突然の答えに西木野さんは困惑した。

「俺は何にも親孝行ができなかった……だから少なくとも面入れのあるこの学園を残したいしそれ以外もあるぞ」

「どんなことですか？」

「君たちだよ」

「……私たち？」

「廃校が決定したら来年から新入生が入ってこなくなる。つまり君たちに後輩が入ってこない。残りの学生生活をそんな寂しい思いはさせたくない。させてはならないのだ！」

これが俺の今の気持ち。

無論穂乃果の助けたい気持ちも嘘じゃないし、それも行動原理のひとつであるけど、寂しい思いをさせてほしくないのも本当の気持ちだ。

「これ……俺たちが作った歌詞だ。これを見て気が変わらなかつたらその時は言うて……きつぱり諦めるから」

「気が変わると思いませんが」

「それでも構わないさ。そしたらまた歌……聞かせてくれないか？」

「え？」

「西木野さんの曲を聞いたからあの時俺はバイオリンを弾いた。君の曲には力がある」

それだけ伝えて、音楽室を後にした。

言いたいことは全て言った。

後は結果を待つのみだけど、どんな結果になっても俺は彼女の意思を尊重する。

俺は学園を後にして神田明神へ向かった。

「ハア……ハア……」

「もう……動かな……い」

「ダメです。まだ2往復残っているのです」

明神男坂を上ると仁王立ちしている鬼軍曹化した海未と、ぐったり倒れている穂乃果とことりがいた。

「といより穂乃果、年頃の女の子なんだから大の字で寝転ぶなよ！」

「もう少し恥じらいを覚えなないとお兄さん君の将来心配だよ!!」

「悠にい!!早かったのですね」

「ああ……それでどんな感じ?」

「……見たまんまです」

今日の練習は気づかないレベルだけどキツめに設定していた。

それを何セットもやったら完全に死屍累々化になってしまう。

「どうした？もうあきらめるか？」

「もー、悠にいの悪代官！」

「それを言うなら、鬼教官のような・・・」

文句言っている割にはこのきつい練習を確実にこなしているじゃないか

「海未・・・予定より早いが、明日の朝練から軽くダンス系も取り入れて見て」

「わかりました」

「本当!!」

「ああ、みんな基礎体力は上がって来てるしそろそろ頃合いだろう」

トレーニングを初めて1週間と少して、最初の方は全然規定回数をこなすのに時間がかかっていたがその時に比べると短期間でここまでできるようになっていいる。

そろそろ変化を取り付けるものいい・・・

「キャ——!!」

「!？」

「何・・・今の？」

「女の子の・・・悲鳴よね？」

夕暮れの境内に響く女性の悲鳴

「3人はここに残つていてくれ！俺が確認に行つてくる」

シヨルダーホルスターに収めていた拳銃・・・コルト・パイソン357を取り出し、シリンダー内にあらかじめ弾丸を込めていたスピードローダーで素早く弾丸を装填して、猛スピードで階段を駆け下りた。

「早すぎる」

穂乃果たちが廃校回避のためにスクールアイドルを始めたのは既に先生や生徒に知られているはず。いずれ廃校派の先生が何らかの妨害をすることは思っていたが、想定したより早すぎる。

せめてファーストライブ終了後の結果を見てそれが良薬なら潰すかもしれないが劇薬ならば自分たちでは手を出さず、自滅するまで待つはずだ。

ほんの少しでもスクールアイドルにちよっかい出すものなら即公安が介入して自分たちの所業が明るみになるから、ギリギリまで手を出さないと踏んでいたが・・・

「不確定要素は全て排除か!!」

これは思っていたより闇が深いな。

気配を感じるに女性らしき気配が2人だけどー人は拘束されている

「動くな!!手を・・・拳・・・げろ?」

さて・・・これはいったいどういう状況だろうか

「な、ナニスルノヨ」

「・・・中々のモノだけどまだ発展途中やな」

「・・・おんどりや！いったい何しちよるんじや」

ありのまま今起こった話をする。

突然悲鳴が聞こえて何事かと思いきや下にいつてみると巫女服着た女の子が音ノ木坂学園の制服を着た赤髪の女の子の胸をもんでいた。

・・・しかも

「お、やっぼー悠斗」

「!?／／／／／／／／／／」

その巫女服も制服の子も見覚えがあった。

同じ学園の同じクラスメイトの希とピアノが上手い西木野さんだ！

おい!!そこ変わ・・・ゲフンゲフン・・・早く離れろ!!

そして西木野さんは異性の俺に胸を揉られている姿を見られたのか一気に顔を真っ赤になった。

「はあ・・・希、そろそろ話してやりんさい」

「ほーい」

構えていた拳銃の弾丸を全部抜いて安全装置をかけてシオルダーホルスターに収めた。

コイツが無駄に成らずによかった。

国内じゃ弾丸の購入も一苦労だからな。

「………つたく悲鳴が聞こえて駆けつけてみると……はああ……希もうやめてくれ」

「後輩の成長を確かめるのも先輩の役目やし」

「余計なお世話よ!!」

これ……普通にセクハラじゃない？

と思いつつも俺の知り合いにも同じようなセクハラ（女性限定）をしていたから何か見慣れた光景だった。

そんなのにも慣れたくはなかったが。

ちなみに希はこの状況を楽しんでいるふうに見受けられるのでとりあえず制裁で頭部にチョップをくれてやった。

「ひどいなくちよつとしたジョークやんか」

「ジョークでも笑える奴にしてくれ」

今のは正直焦ったぞ。

それに……………

「先輩は……警察関係者なの？」

「いや警察関係者じゃないが銃の所持使用許可のライセンスは持っている」

2人に国際銃火器使用ライセンスを見せて非合法でないことを証明した。

「本当は3人の様子を見に来たのやろ」

「つ!!な、ナンノコト」

なるほどね。

余り素直な性格じゃないのだな

見た感じツンデレだもんな。

「ありがとうな!あいつらの事見にきて」

「べ、別にお礼言われることじゃないよ」

はい!本場のツンデレ来ました!!

.....本場って何だ!?

自分自身にどうでもいいツツコミをいれていた

「それで3人を見てどうだった?」

「.....」

西木野さんは何も答えない。

答えないということは恐らく彼女の中でまだ悩んでいるのだろう。

「そ、それでは私はこれで失礼します」

「ほなね〜」

「巫女さんに気をつけて帰れよ」

俺の言葉に横から希が講義したが受け流した。

結局何も答えなかったけどあいつらの練習見て何か感じ取れたと思う。
楽観的観測だと思われるけど、別れ際の目を見て思ったよ。

「さて………希」

「なに？」

「………いつたい何を企んでいる」

こいつの行動は読めない所がある。

今の行動も本当に冗談でやっているのかと疑問を感じる。

同性といえども一歩間違えたら刑事事件に発展しかねない。

「企んでいるの何も……ただ迷える子羊を導いているだけやな」

「まるで何でも知っているような口調だな」

「どうやろ？」

なかなか心の奥で思っていること言わないからこの子も以外にも一癖もあるね。

だけど悪意の類いは感じ取れない。

普段からスピリチュアルと公言しているだけあって、まるで神秘的でミステリアスな

感じだな。

「それじゃ、俺は練習に戻るよ」

「ほな。また明日ね」

そういつて階段を登ってみんなのところに戻った。

「どうでした？悠にい？」

境内の隅つこで隠れていた海未が聞いてきた。

「……ただ女子高生がじゃれあっていただけで何もなかった」

「よかった」

「うん」

「ええ、本当ですね」

嘘はついていない。嘘はついていない！

大事な事なので2度言いました

あれは端から見たら本当にじゃれあっていたただけにしか見えない！

……と思う。

戻ってきて残りのトレーニングを消化して帰りの準備をしていた。

09 始まりの歌

「何かニュースやっついていないかな？」

何時も通り朝練に参加するため早く起床して、洗面所で顔を洗終えると、ウインナーを焼いてインスタントの味噌汁で朝食を食べ終り、お茶を飲みながらテレビのニュースチャンネルに切り替えると堅苦しいキャスターの声があまり嬉しくない内容のニュースが聞こえてきた。

「世も末だね」

ピンポーン

うん？

ニュースの内容に嘆いていたときインターホンが鳴った。

こんな朝早く誰だ？

モニターで確認するとジャージ姿の穂乃果がたっていた

「おはよう悠にい!!」

「どうしたのだ穂乃果？練習時間に余裕があるけど」

「あのね！これなんだ!!」

穂乃果の家のポスターに、s宛てに1枚のCD届けられていた

「これって!？」

「うん！悠にいの予想通りだと思うよ」

確かに届くとは予想していたけど昨日の今日だよ!!

幾らなんでも早すぎる！

「この中身は聞いた？」

「まだだよ。みんなで聞こうと思って」

「ちよつと待ってろ」

直ぐに支度をして鞆の中にもいつも使っているタブレット以外にタブレット専用の外付けドライブも一緒に鞆中に入れて、穂乃果と一緒に家を出た。

残りの2人にも走りながら連絡して神田明神に集合した。

「……………行くぞ」

俺が持ってきたタブレットにドライブを繋げCDを入れて再生し、イントロが流れ出した。

ピアノの音と……………そして海未が作った作詞を西木野さんが歌い出した

前々から彼女の才能に一目を置いていたが、たった一日……いや、下手したらた僅か数時間でここまでの物が仕上がるなんて！

海未のひたすら走り続ける始まりのフレーズに西木野さんのメロディーが加わり始まりを告げる歌になった！

「……………すごい!!」

初めて聞く穂乃果たちも呆気を取られていた。

理由？

そんなのねえよ!!

これは理屈云々じゃなく、俺たちの心に西木野さんが奏でるピアノや歌声にほれ込んでしまった。

それだけ魅力のある！

「票が入った!?!」

ついさつきまでランク外だったのが1票入ってランクが999になった。

まだまだ先への道のりは長いがこれが始まりの一步だ!!

「さあ!!練習を始めよう!!」

穂乃果の一声で開始の合図をした。

空を見上げると雲ひとつもない大空に3羽の鳥が力強く羽ばたいていた。まるで3人を現す象徴的な光景だ。

4羽目がなかったけどそれでいいかもしれない。

光があれば陰はある。

俺は影に徹し・・・マネージャーとして最後まで尽くす。

つと話がずれたが、これですべてのカードがそろった。

この日からμ、sの最初の曲『START・DASH!!』を使った練習に切り替えた。この数日間で3人の基礎体力も体作りも出来上がりモチベーションを見折る限り、ここから本格的にパフォーマンスの練習に切り替える方がいい。

歌はともかく慣れないダンスに最初は戸惑ったがいい感じになってきた。

「ことりーワンテンポ遅れている。海未体が縮こまっているー！穂乃果は前に出過ぎ」俺の役割はタイミングを調整して個別に指示を飛ばしたりする。

みんなの表情は先週とは全然違う。

前までは頑張っているもの本当に出来るのか？って心の奥底で誰しも思っていた。

あの穂乃果でも表には出さないだけで時折仕草とかに出ていた。でも、今は違う！

3人ともが目を輝きながら活気のある力強くいい表情だ！

「お疲れさん」

「ふう〜」

「随分できるようになりましたね」

「うん♪」

スクールアイドルを初めて大分立つけど最初に比べると、よく短い期間でダンス未経験者である3人が体力もダンスのキレも上がっている。

なんだか感無量なところもある。

「でも、穂乃果がここまで朝練に大幅に遅れてきていないのが感心する」

「うん。その分授業中にぐっすり寝てい——いた〜い!!」

ア穂乃果のこめかみに思いつきりグリグリした。

毎度のことながら俺の感動を返せこのヤロウ!!

いずれ纏めて利子を請求するぞ。

.....無論トイチで!!

冗談もさしておいて……

「海末も穂乃果が授業中に居眠りしていたら遠慮なしに叩き起こしてくれ」

「ええ、もちろんですわ」

「そんな！悠にい海未ちゃんの鬼教官」

「ほおく鬼教官か……俺がアルテールスでどんなことをしてきたか知っている？」

「……え!?!」

俺がアルテールスで受けた訓練内容や出来事を言うと、ビビったのか3人の表情が硬い。

「流石に3人にはやらないよ」

「……ほっ」

いくら俺でもそこまで鬼じゃないよ。

……こいつらに手を出す不当な輩には生き地獄を味合わせてやるけどな

ふふふっ

「悠にい……顔が怖いですよ」

海末嗜められたけど、君も大概こんなものよ。

………つと思いつつも声に出さなかった。

何か微妙な空気になってしまった時、階段から顔を出している西木野さんの姿が見えた

に見られたのを気付いたのか慌てて瞬間階段から降りようとし………ちよつと待つてよ！

逃げることはないじゃない!!

「あっ！西木野さくん！真姫ちゃ——ん!!」

「ヴェエエ!!」

穂乃果も西木野さんに気が付いて大声で呼ぶと顔を真っ赤にしながらこっちに来た。

「大声で呼ばないでよ！」

「何で？」

「何でって……恥ずかしいからよ／＼／＼」

呼び止めてくれたことには感謝するけど、穂乃果よ。こんな朝早くに大声出したら近所迷惑だよ。

「でも、毎日見に来てくれてありがとうな」

「ヴェエエ……ナ、ナンノコト」

「え？何時も階段の隙間とかで見ているのは君だろうか？」

とぼけたようにいつているけど、本当のことを言うのと対不審者探知のためこの周辺に意識を張り巡らせていて近づく人間の気配を読み取っている。

既に西木野さんの気配は覚えているからたとえ隠れていても気配でバレバレなのだ
よ

「そうだ！この曲3人で歌ってみたから聴いて」

西木野さんからももらったCDを持ち帰りパソコンにDTMに詳しい人がいたのでその人から機材一式を借りてきた。

基本ベースとなる曲さえあれば後はそれをイメージしつつ打ち込めばいい。

多少時間はかかったがライブに使う音源は完成し2日前に初めて録音した。

「……なんで私が？」

「だってこの曲作ったの真姫ちゃんでしょう？」

「わ、私じゃないわよ!!もう何度言ったらわかるのですか!!」

「またですか」

「また？」

海未の言葉に首をかしげた。

「実は穂乃果ちゃん西木野さんに会う度、曲のお礼言っているのだけど」
「作ったのは私じゃないって何時も言っているのです」

そういうことか。

本当に西木野さんは見た目どおりこのツンデレお嬢様は本当に素直じゃないんだから！

そんなことも言つてこのピアノのセンスと声で一目瞭然だよ！

えっ!? ツンデレお嬢様って何かって？

そりゃー彼女の雰囲気はどこかお嬢様っぽいところあるし、それでツンデレだろう！
だからツンデレお嬢様だよ!!

……割とどうでもよかつたな。

そんなことを考えているうちに穂乃果がうなりだした……つておい穂乃果ちゃん……

そのケモノのように西木野さんに飛びつくのもお止めなさい。
こつそり撮影しとくから人気のないところでやれ。

「ぐふふふふふ」

後そのうす気味悪い笑みはやめなさい。

正直アイドルにはあるまじきな力才だぞ！

「えい♪」

「………ぶええ？」

虚を突かれたのか西木野さんの耳にイヤホンを付けた

「うまく歌えたと思うよ」

納得いかない表情していてもイヤホンを外す気配はない

なんだかんだ言って気になっていたのだな。

「……μ、s ミュージック・スタート」

「μ、s ファーストライブやりまーす！よろしくお願いします！」

場面変わって神田明神での練習を終えて、校門のところでチラシを配っていた。

練習だけではなくライブの告知も重要なファクターだからこれも疎かにしてはいけ
ない。

今のところは曲もダンスも順調に進んでいる。

衣装の方も今日中には仕上がるとは言っていたし、照明の準備や操作も生徒会や穂乃
果の友達が協力してくれている。

唯一懸念事項だった廃校派の妨害も今の所は確認されていない。

だけど最後まで何が起こるかわからない。

ある人は言った………

魔物は以外にも天界に住んでいる。

全てが上手くいつている時に魔物が襲ってくる。

ファーストライブが終わるまで気を緩めるわけにはいかない。

そしてファーストライブ前日までやってきた。

「悠にいい、いよいよ明日」

「ああ、ここまで来たな」

夕方の練習はで早めに終わって穂乃果の家に集まっていた。

本番前日にハードワークやってライブ影響は出したくないので本番用に一回踊ってステツプの確認だけにした。

それでもやれる事は全部やった。

後はベストコンディションで明日を迎えればいい。

「そっういえば、ひとりば？」

「衣装が仕上がったと言う事で取りに行っているそうです」

「そうか……」

これで全てのピースが揃う。

正直衣装を見る暇がなかったからことりに一任と言う名の丸投げ状態だ。

ことりはふわふわしているけどしっかりしているし安心出来た。

「やっぱりA—RISEは凄いですね」

「ああ、ダンスのキレ具合もステージでも堂々さも格が違うな」

ことりを待っている間に穂乃果が他のスクールアイドルのPVを見ていた。

ランキングチェックするついでに他の新着PVがあれば研究で見ているが、他の子達ももしい動きしているけどそれをも超えてA—RISEがいる。

UTXには芸能界の復活を夢見ている芸能科があり彼女らもその学科に所属している。

「うくん……こう？　こうかな？」

穂乃果がA—RISEのPVを見ながら踊りの真似をしていたが俺が座っているのに立って踊るのやめんさい!!

スカートの中が見えてしまうだろう！

こう見えるか見えないギリギリのラインで踊っているからどうしても目がそつちに
行ってしまう。

「悠にい……どこを見ているのですか？」

「何も見えていないぞ海未よ」

アブね!!

ほんの少しだけ目線を向けたただけなのに気がついたよこの子は!!

さすが文武両道の大和撫子だ!

「おっ!ランクが上がったぞ!!」

「本当!?!」

「ああ、きつとチラシを見てくれた人が投稿してくれたのだ」

たまたまランクが上がった音がしてくれたおかげでみんながそつちに釘付けになっ
た。

……正直助かった。

あのまま話を続いていたらどうなっていたか分かったもんじやない!

「お待たせ!」

しばらくほうじ茶を飲んで待つていたら袋を抱えたことりが

「ことり、もしかしてその袋の中が」

「うん！さっきお店で最後の仕上げしてもらって」

袋の中から一着だけみんなに見せる形で出した。

「かわいい!!」

「いい感じじゃないか」

アイドルをイメージしたのかノースリーブにミニスカート状のワンピースといった可愛いらしいものに仕上がっている。裁縫が得意といってもこのレベルだと正直店に出しても十二分に通用する出来具合だ。

海末といいことりといい、西木野さんといい俺らの周りにはすごいセンスの持ち主で溢れているな。

俺、ことり、穂乃果は高評価なのだが一人だけ……

「海末さんやどうした？」

「……………ことり」

「うん？」

「そのスカート丈は？」

「……………あ」

ことりがやらかしちやつた感満載の顔になっていた。

そう……

前に、衣装の原案ができたとき海末が『いいですか！スカートは最低膝下でなければ穿きません！いいですね!!』とことにキツくお願いをしたのだが当の本人が忘れていた。

確かにアイドルをイメージし過ぎたのか結構露出の激しいものになっている。

ことりの肩を掴み、迫力のある顔で迫る海末問い詰めているが……

「海末さんや海末さんや！さすがに今から直すのは時間が足りないよ」

「なら私は一人で制服で歌います!!」

まさかここに来て問題が出てくるのか!?

勘弁してくれ!

海末の恥ずかしがり屋の性格は昔に比べたら大分マシにはなったけど、もう衣装は完成した且つライブは明日に控えているって時間はない!

俺も編曲や広報案を考えていて衣装まで回らなかつた……つてまさかことりのやつわざと!?

この間の海末の歌詞依頼の時に腹黒さの垣間見た気がするから可能性はなきにしも

あらず。

もしそうなら天使のことがわざと仕事をしなかったことになるから悪魔とも違うし……

……あ!?

だからこれこそ俗に言う『ペ天使』というやつか!!

自分でも心底どうでもいいと思った。

あれこれ言ってみたものの首を縦に振らず冗談抜きであくどい方法も考え始めた時穂乃果が……

「成功させたいもの」

「穂乃果」

「だって成功させたいの! 曲も出来て衣装も仕上がってダンスも覚えてここまで来たの!」

それは紛れもない穂乃果の正直な本音だった。

穂乃果は考えなしで行動をしてみんなを困らせていたけど逆を言えば自分が感じたことを直接現している。

それを天然でやっている。

これが高坂穂乃果の最大の魅力と思う！

「海未俺からも頼むよ」

「悠にい」

「海未の恥ずかしがりやの事を考慮しなければいけないが正直衣装まで目が回らなかった。言い訳にしか聞こえないけどせっかくなかなかここまでかんばって来たのだから3人とも同じ衣装でステージで輝いている姿が見てみたい」

「本当に卑怯ですね」

海未が俺たちを見て、ため息ついた。

「そんなこと言われたら・・・断れじゃないのですか」

よかった・・・

「でも海未よひとつ思ったのだが・・・」

「何でしょうか？」

「この衣装のスカート丈と制服のスカート丈って・・・一緒じゃない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あ、あれ？

何で無言になるのですか？

お兄さん不安ですよ!!

「そ、そうだ！今から神田明神にお参りに行かない？」

「いい、いいですね」

「う、うん」

え?!

スルーですか！

お兄さんの発言は無かったことなのですか!?

涙は出ていないもの心の中は浸水してしまったよ！

もう俺の心に隔壁閉鎖して遮断するよ！

・・・・・・・・・・実際に閉じないが。

こうして一緒に神田明神に行く事になった。

境内にも人影が一切なく俺たちしかいない。

夜の神社も昼とは違って静かでも神秘的に見える。

前に希がスピリチュアルパワーが集まると言っていたがあながち間違いではなさそうだ。

お賽銭箱にお金を入れてそれぞれが手を合わせて各々の願いを口にした。

「どうか、ファーストライブが成功しますように」

「緊張しませんように」

「みんなが楽しんでくれますように」

一言一言に思いを乗せて祈った。

俺は自分の願いをあえて口に出さず心の中で願った。

「そういえば悠には何も言っていないんですけどが」

「一体何てお願いしたの？」

「あんまりこういう願掛けのときは声に出さないようにしているの」

「何で？」

「何か……こう……口で言ったら叶わないと思つて」

無論俺もライブが成功しますようにと願ったけどもう一個願ったのだ。

われながら欲深いとは思ったがこれも願わないといけないと思つた。

『3人の思いがみんなに届くように』

我ながら小つ恥ずかしい願いをしたのもだと思つたけど願わずにいられなかつた。

10Fast Live

ライブ当日の朝、今日は朝練の予定は入れなかったが俺はいつも通りの時間に起きた。

学校に行く前にどうしても行くところができってしまったからだ。

いつもはブレザーの制服だけど今日だけはもう一着支給されたフアスナータイプの詰襟学生服を着た。

テスト生ということもあって学生服の選定もしないといけなくて、一応試験的にブレザーと詰襟の2種類を用意されていた。

「……………久しぶりに来たな！」

俺が早めに起きて地下鉄に乗って向かったのは市ヶ谷国防省の近くにあり、明治以降日本の軍属民間問わず国のために尽くし、そして戦死した英霊達を祀っている靖国神社に到着した。

この靖国神社は俺たち朝霧一族に所縁のある神社で、俺の曾祖父さんやそのまた爺さん……………ご先祖様が祀っている。

幕末から続く戦闘一族朝霧家……幕末明治維新の動乱から前大戦までの間、数々の戦いに参加していき、全盛期は本家分家合わせて100名近くいたが今では本家の俺と父さん……隠居生活しているじいさんしか残っていない。

父さんが海外派遣へ行く時や俺がアルテールスに渡る前といった何か重要なことがあれば必ずここにお参りに来て無事を願うのが習慣になっていた。

神社内にはの数々の記録や展示がある博物館があり、桜の名称でも有名である。

朝早くもあつてかまだ参拝者は少なかった。本殿の参拝を終えて、地下鉄で音ノ木坂学園に戻った。

学園に着くと直ぐに上履きに履き替えて生徒会室に向かった。

「おはよう悠斗」

「おはようさん」

「おはよう。絵里、希」

今日早く起きたのは靖国神社参拝以外にも生徒会の手伝いも兼ねていた。

このファーストライブは部活でも無いのにも関わらず、絵里達生徒会が規則違反ギリギリで支援してくれた。

その恩返しと言うわけではないが新入生歓迎会の準備を手伝うことになった。

「お！その制服どうしたの？」

「これも音ノ木坂学園男子制服（仮）だよ。試験運用が目的だからタイプ別を持っている」

「ハラシヨー！とてもカッコいいよ!!」

「そうやね」

「//////ありがとう」

ここまで真つ正面に誉められると恥ずかしいな！

柄にもない！

生徒会役員と関係生徒のが全員集まった所で各示達事項を言った。

頭脳明晰の絵里が的確に指示をし、希が各サポートここまで息がっているのは凄いなと思った。

「それじゃ悠斗には電装系のチェックと微調整をお願いできる？ちよつと型が古くて動作が不安定な事があって不安なの」

「どうやら昨年度の卒業式の時に式が始まる30分前に電装系が故障した事態に発展したときがあったらしく、その時はどうにかこうにかその場しのぎでどうにかなったけど予算が無くて未だに更新されないらしい。」

「私たちは備品のチェックをしているわ。何かあったら呼んでね」
「了解」

さて、たつたと仕事を終わらせませるか。

俺は講堂に入ると舞台裏に設置している電装機器の調整に入り、絵里たちは新入生歓迎会用の冊子、校内の案内看板個数の確認。

コンソールスイッチを一つ一つ確認していつていつた。

幾つか実践テストを終えて、生徒会役員たちの集合時間になったので一度集合した。

「どう?問題なかった?」

「今のところ目だったものはない、反応も好調だ」

年代相応の不具合はあったものの特に気にするレベルではなく目立った問題はなかった。

ただ一度オーバーホールした方がいい印象だった。

それ以外にもパンフレットや机の持ち運びの力仕事を終えて準備は終了した。

「ありがとう悠斗。おかげで助かったよ」

「気にするなよ。俺だってファーストライブを手伝ってもらうのだからお相子だよ」
「期待しているわ」

「はい。ほうじ茶やで」

「サンキュー希」

出されたほうじ茶を飲んで一息ついた

「ふう〜」

今頃穂乃果達は用意されている別室で着替えている

「以上を持ちまして、新入生歓迎会を終了いたします。」

遂にこの時が来た。

ファーストライブは終了後の1時間後・・・つまり丁度1年生たちの下校時間に合わせた
「ここからは俺たちの時間だ」

音響室に向かう途中で更衣室にいくところの穂乃果達とすれ違った。

流石に一時間前なのかそれぞれ緊張した面持ちだ。

「でも、本当に歌えるのですかね？」

海未が少し不安な気持ちをつつけてきたが、俺は不安を感じさせないように笑顔でこう言った。

「大丈夫だ。これまでも軌跡を思いだ知ってみろ！お前達はこの1ヶ月本当に頑張ってきた！後はそれを出し尽くすのみ」

「はい！」

3人の元気な返事をして更衣室に駆けていくのを見終わった後に俺も早足で音響室に向かった。

新入生歓迎会用にセッティングしていた音響機材の直ぐにライブ用に再調整を始めた。

「朝霧先輩！」

「やあヒデコ。今日は手伝ってくれてありがとう」

「いいですよ」

準備初めて直ぐに穂乃果のクラスメイトであるヒデコちゃんが入ってきた。俺とヒデコちゃんとは前にDMT機材を借りに行った時に知り合った。その時にソフトや機材を借りて

一緒に機械の調整していたときに携帯が鳴った。

「失礼」

宛名を見ると父さんからだ!?

「ごめん。父から電話がかかってきたか。音響のセッティングの調整は全て済ましている。残りの調整もこのリストに従って」

「はい。ありがとうございます」

なんだろうと思う少し離れたところで電話に出た。

「もしもどうしたの?」

『悠君!?無事だったのね?』

「無事って……何があったの?」

俺の父さんは超くが付く程の親バカだけど声のトーンがいつもと違うなだけに不安になり始めた。

『何かあったじゃない!!今音ノ木坂学園周辺で不審者が目撃されたと』

「何だと!」

父さんの知らせに同様を隠し切れなかった。

不審者!?

「ちよつと待て!?!なんで父さんがそんなこと知っている?」

軍艦の行動は一切機密事項でいつ出ていつ戻ってくるのかも家族に明かせれない。

入港はまだ先かなと思っていたが……

『ついさつき横須賀に戻ってきて、少しこつちでも調べていたら知り合いから不審者が出たって話だから……それで今、僕の後輩が警視庁にいて確認取ってみたのだけど、警察の初動より早く学園側が帰宅命令が出したみたいだ』

「警察が動く前に!?!普通警察が動いたことを確認しないと危なくて帰宅指示は出さないとはいえない!!」

『そこまでは分からない。だけど大分警察も困惑していたみたいだ』

「それ以外に何か情報入っている?」

「いや……今のところはそれだけだ」

今日はファーストライブ当日だろう? タイミング良すぎのでは!?

狙っていたな! 連中!!

「……ごめんね悠くん」

突然の父親からの謝罪に驚いた。

「一度成らず二度までも闇が深いと知りつつもこの仕事を受け持った」

「父さん……俺は朝霧の人間だぞ!あの時も……今回も……そこに守りたいものがあるから」

この世は綺麗事では成り立たない。

生きていれば必ずどこかで世界の理不尽を味わう事になる。俺のはそれが早かっただけの事……ただそれだけさ。

「……………そうだったな……………ごめん」

「何かあつたら直ぐに連絡くれ」

今後は父さんからくる情報が必要不可欠になってくる。

情報を制するものが戦を制するってね。

「分かった。僕も早めにそっちに向かう」

「無理はしないでよ」

「僕はいつだって平気さ」

父さんの電話を切つてすぐに絵里の携帯にかけ直した。

「もしもし絵里!!」

『どうしたの悠斗』

「今どこにいるの?」

『今?更衣室にいるけど?』

「緊急事態だ!音ノ木坂学園周辺に不審者が出て生徒が強制下校になっている」

『うそ!!でもそんな放送一切流れては…………』

もしも!?!とは思っていたけどやっぱり知らされていなかったか。

「おそらく各担任だけ知らせたのだろう。今日は関係者以外の在校生は来ていないのだから」

『でもなんでそんなこと』

「今、去る筋の情報からの推測だけど、おそらくこの不審者騒動は廃校派が作った自作自演の可能性がある。そして学園は管轄の警察が動く前に帰宅指示を出した!穂乃果たちは?。」

「高坂さん達ならもう既にステージに向かったけど」

クッソ!!

一歩遅かったか!!

とりあえず絵里と合流すべく、音響の方をヒデコちゃんに一任して客席入り口に向かった。

「ごめんなさい!待たせてしまって」

「いいえ」

程よいタイミングで絵里と合流できた。

「現状どうなっている?」

「悠斗の言う通り、新入生歓迎会終了後にこの付近に不審者が出て自宅待機が命じられていたよ」

「歓迎会終了後?!」

ますますタイミングが良すぎる!!

「それで生徒会まで話が来なかった理由は分かっただけ?」

「学年主任の黒井先生曰く『安全に登下校させるために優先したため講堂にいる生徒への報告は遅れた』って言っていた」

「うんなのが曲がり通ると思ってるのか?!」

こんな案件、本当にただ単に知らされていないだけかもしれないが、生徒会まで情報が降りてこなかったら黒と思うけど何かここまで来ると全て疑ってしまう程の疑心暗鬼に見舞われる。

絵里の表情も怒りや困惑・悲しみがごちゃ混ぜになったような表情になっていた。

絵里と一緒に講堂にたどり着くがやけに静かすぎる。

恐る恐る扉を開けると中の光景に愕然とした。

これまで入っている情報を来いても予想は出来ていたけど、ほんの少しでも可能性を信じていたかった。

けどその希望すら無残に打ち砕かれた。

誰の騒ぎもなくしんみりとした無人の観客席

「くっ!!」

こんなことがあつていいのか!!

この日の為に、あいつらは頑張つてここまで来たのに!!

むしろ俺のほうが認識が甘かったかもしれない

まだ駆け出しのスクールアイドルのライブに一体何人が興味持つてくれていると思
う。

ステージ、音響と言った言葉に目がくらんでしまつて俺の作戦ミスだったかもしれない。
い。

ここからでも、穂乃果たちの表情が泣きそうなのは分かる。

俺が悲しんでどうする!!

一番つらいのはあいつらなんだ!!

「俺にライブを見せてくれ——!!」

「悠にいい!」

予定では音響室にいる予定の俺が着ているとは思っていなかったので驚いた表情をしていた。

「ここまで頑張ってきたのだろう!!俺にお前たちの成果を見せてくれ!!」
僅かな可能性から始まったスクールアイドルμ's……

最初は体力もダンスの経験なかった3人が準備期間は短かったとはいえここまで来た。

俺は一度……どん底の絶望感を味わった。

「ここで諦めたら……今までの努力が無駄になってしまう!!そうならない為に……俺に見せてくれ!!」

それ以上に辛いのはここで諦めてしまったことだ

「悠にい……」

今日!この日の為に練習していた時のあいつらは輝いていた。

無論辛いことも楽しいこともあったけどそれら一つ一つ思い出になっていた。

「あ、あれ?ライブ終わっちゃいました?」

小泉さんが星空さんの手を引っ張って一緒に慌てて講堂に入ってきた。

お客さんがいない光景にもう終わったのか勘違いしたの

「……つて小泉さん！ 星空さん！ 下校しんじゃないなかったの!？」

「え?! 何のことですか？」

「かよちん……歓迎会が終わった後、教室に戻らずにずっとポスターをみていたにやだから強制下校の話には彼女たちの耳に入らなかったわけか。

でもこれでこの不審者騒動が自作自演というのがはつきりした。

もし不審者が本当且つ教室に2人の生徒が戻ってこなかったら総動員で探すはず。

確認をせずに帰らせたあたりを見るとやっぱり廃校派の作戦と思う。

だけど今はそんなことより……

「これで4人だ!! お前たちのライブを見に来てくれる人もおる」

「いや。5人やで」

後ろから声を掛けられて振り返ると……

「希!」

「せつかく一生懸命練習してきたのやから、それを見せんともつたないで」

「そうだ!」

この子もまた、神田明神で練習風景を見守っていたのだ。

「まだ聞きたい人たちがいるんだ!!どんな人数だろうと!どんな結果だろうと最後までやり遂げる・・・それが覚悟なんだ」

「・・・覚悟」

泣きそうだった3人の顔は涙を拭い・・・

「行くよ・・・とりちゃん!!海未ちゃん」

穂乃果の目はいつもと同じ・・・いやそれ以上に輝いていた。

証明が落ちて辺りが暗くなり、それぞれの定位置につき・・・

「それでは聞いてください——」

「「START:DASH!!」」

イントロが始まり一瞬とも彼女達の姿を見逃さない。

隣にいる絵里はどこか懐かしい表情をしていた。

希はタロットカードをもってまるで確信たような顔だった。

小泉さんは興奮して、一緒に来た星空さんも物珍しいそうに見ていた。

この子たちが来なかったら本当に最悪な事態になっていたかもしれない。

ありがとう!!

入口には作曲してくれた西木野さんがいつの間にか来ていた。

最初は興味がないと言いつつも何だかんだいっても自分が作曲した歌が気になったのだろう。

慌てていて気付かなかったが、よく視るとツインテールの子も隠れて見ていた。

・・・そんな隠れなくてもいいのに。

観客は10人も満たないが間違いない、sファーストライブが行われた。

3人は一度絶望を味わったが、諦めずひたすら前に進めば必ず道は開ける。

少しずつ歩めばいい！道を遠回りしてもいい！それは脱落ではなく道を模索しているだけ。

時折涙を必死に堪えているが一生懸命輝こうとする。

自分達の思いを歌に・・・ダンスに載せて必死に伝えようとしている。

経験者からすれば歌もダンスもまだまだ未熟な面があるものの何か人を引き付けるものがある。

やがて曲は終わった。

穂乃果たちの顔に疲労感はあるものそれは全てやりきった感のあるいい表情だ。

会場内から拍手が送られた。

少ない拍手でもここに来た人たちはそれぞれの思いがあるはずだ。
俺はゆつくステージに近づいていき……

「悠にい」

「いいライブだったよ。よくやった」

本当に良くやり遂げてくれたよ。

「どうする穂乃果。引くとしたら今ならまだ間に合うが——」

「ううん。続ける!!」

俺の言葉を遮り、即答した

「私、こんな気持ち初めてなの!!もつと踊りたい、もつと歌いたいって思ったの!!やって良かったって、本気で思えたの!!」

己の思いを俺にぶつけてくる。

「このまま誰も見向きもしてくれないかもしれない……でも、私達がとにかく頑張つて届けたい、今、私達がここにいる、この想いをみんなに伝えたいの!!」

どうやら俺は妹たちを見くびっていたようだ!

これほど絶望感を味わってもやり遂げ、そして前に進もうとしている。

兄としてもこれほどうれしい事はない

今はまだ、ほんの小さな光ではあるが・・・力強い光は決して消えることはない！
そして光があれば影が出来上がる。

俺はμ、sの影として最後まで尽くす。

これからまだまだやることはたくさんあるが、この悔しさをバネに必ず這い上がる。
完敗からのスタートだ。

「仕切り直しだ。もう一度鍛え直すぞ」

この子達ならきつと叶う。

直感ではなく確信だ。

一度絶望を味わいそれでもなお立ち上がる人間は本当に強い！

「お前たち・・・いつかこの講堂を満員にさせるぞ」

「はー!!」

μ、sのファーストライブの結果はこの子達の思い描いたどおりにはならなかった
が、少なくとも来てくれた子達に何かを伝えられたはずだ。

「・・・よし！今日は頑張ったのだから俺のおごりで食べに行くぞ!!」

「いいの!？」

「やった♪」

「ですが」

穂乃果とことりは年相応に喜んでいたが海未だけ遠慮がちだった。

「海未。今日ぐらい変な遠慮は気にするな」

この子は気が真面目過ぎるからな。

と言うよりこの間結構もの頼んでいたよね？

・・・・・・・・・・・・・・・・まあそれはきのせいだとして・・・

俺たちの会話の終了を見計らって絵里と希もステージ近くによった。

「お疲れ様でした」

「絵里、今回は本当に助かった。希も・・・・いつも見守ってくれてありがとうな」

改めて2人にお礼と感謝の言葉を述べた。

「いいえ。私もいいものが見られて良かったわ」

「なんかてれくさいやな／＼／」

思えばこの2人がいなかったと思うとゾットする。

「よかったら2人とも一緒に行かない？」

「いいの？」

「こういうのはみんな楽しんでむものやで」

「あ！うちの真似／＼／」

いつかの仕返しだ！希！！

「3人はいいよね？」

「はい！絢瀬先輩たちなら歓迎です！」

ことりも海未も頷いてくれて決定した。

講堂の片付けを終わらせて一旦私服に着替えにそれぞれ家に戻ってから、再度秋葉原駅に集合と言う形になった。

今回のライブは完敗の完敗を喫した。

しかし、この完敗で自分の足りない所、ダメな所、良かった所、伸ばすところが見えてきたはずだ。

だからこのファーストライブはある意味いい経験なつたと思う。

俺も含めて反省会はまた改めて、今日は騒ぎまくりますか！！

10. 5 後日談

「よし！揃ったな」

μ、sのファーストライブが終わって数時間後、俺たちは一度私服に着替えた後に秋葉原駅に再度集合した。

地区内で不審者騒動が起こり全校生徒に対し自宅待機が命じられた結果、会場には数名しか来なかった。無論それが無くても正直微妙なところはあったかもしていないが

成果と言えば正直言ってボロボロの惨敗だったけど再びこの講堂一杯にしようと誓った。

「それでどうします?」

「そうだな・・・ここは定番で」

ファミレスと言おうとした時、俺たちの方へ騒がしい足音が近づいてきた

「ゆ、ゆ、悠く——ん!!」

「え? 父さん!」

ついさっき電話で横須賀へ戻ったばかりの筈の父さんが何故か秋葉原駅に!?

「「おじさん!」」

「穂乃果ちゃんにことりちゃん、海未ちゃん、久しぶりだね!!この間は世話に」

屈託の

「この間って、父さん最近穂乃果たちに会ったの?」

「うん。4年前に指揮官上級課程に行っていた時に下宿として使わせてもらった事があつて」

「悠斗・・・この人は?」

絵里や希が完全に

「絵里、希紹介するよ俺の父さん」

「朝霧君と同じクラスメイトの絢瀬絵里と申します」

「同じく東條希です。」

「初めまして悠くんの父親である朝霧悠介です」

「それでどうしたの?電話じゃもう暫くは横須賀にいるんじゃないの?」

「それがさく急に明日市ヶ谷に顔を出してくれて親父さんが言ってきたんだよ」

あの人からの呼び出し!?あんまり穏やかではないけど大丈夫かな?

「それだったら朝一で出て間合うんじゃない?」

「折角だしこれを大義名分で悠君に会いに来たわけだよ」

ドヤ顔でいた言葉に俺は頭を抱えた。

本当にこの子煩惱が艦隊の司令を務めているのかな？

「あれ？悠にいいおじいさんって市ヶ谷に住んでいたのですか？」

「ああ、父さんがいう親父さんはじいさんじゃないよ」

「え!?じゃ、どういうこと？」

父さんが隠語？使うから幼馴染3人は混乱した。余り分かり難かったので俺が説明した。

「父さんの言う親父さんは市ヶ谷にある行政組織……日本皇国防軍の最高司令部……統合幕僚監部のトップ高野洋介元帥大将」

「え？悠斗のお父さんって軍人」

「そう。海軍士官で艦長、司令、幕僚も務めたこともある。さっき言った指揮官課程はこういう上級指揮者になるためには必要な課程だよ」

見た目はどこにでもいる子離れができていない父親だけど、士官学校を主席で卒業したエリート。

「それでこんなに美少女をはぶらかせてどうしたの？」

「人聞きの悪い。今からご飯を食べに行こうとしただけだよ！」

悪気の無い発言だけど

「それだったら僕の行き着けの店に行ってみない？」

「行き着けですか？」

「そう！僕が前に行っていた店でなのだけど」

「みんな異存はない？」

みんなの問題ないので父さんに連れ添う形で移動した。

しばらく歩くとビルの前に止まった。

「ここですか？」

「おそう！僕の馴染みの店・・・カフェ&バーの『Secret Liqueur』だ。

名前の通り昼は喫茶店で夜はバーをやっている」

父さんと一緒に店の中に入っていく。

「いらつしやいませ。お久しぶりですね朝霧さん!!」

「お久し振りマスター。今日は6人だけど大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ」

カウンターではなく6人掛けの席に座る。

「朝霧さんこちらの方は？」

「僕の息子の悠斗と、その学友の穂乃果ちゃん、ことりちゃん、海未ちゃん、絵里ちゃん

希ちゃん」

「いらつしやいませ。ようこそ『Secret Liqueur』へ。マスターの戸松正

明と申します」

父さんにはブランクな口調にいきなり丁寧口調に切り替わった。

「しかし本当に久し振りですね」

「僕が指揮官課程の時だから4年前の10ヶ月間だけか」

「本当に毎週来てくださいますありがとうございます。売り上げを貢献する力モが来なくなったのは寂しかったです」

「酷いよマスター。紳士のくせにあくどいことを考えていたのかよ」

「あはは、冗談だよ」

「だよな」

10か月間週一で行っていたのか軽い冗談の突きあいしているのを見ると長い付き合いなのかもしれない。

マスターがお絞りとメニュー表を渡してくれた。

「飲み物は何にしますか？朝霧さんいつものので良いとして、彼女達はどうしますか？」

「うん……どうしよつか」

メニューをにらめっこしているけど全然知らない名前であぐねている

「ほな私はウイスキーのスーパーにk」

おい！巫女さん!?

「こらこらこらその巫女さんや！飲酒は成人後だぞ」

「ちよつとしたジョークやって」

希の場合本気なのか冗談なのか正直分からなくなることがある。

そもそも巫女さんにウイスキーって

「学生でよくその名前をご存じですね」

「うちの雇い主・・・神主さんが大のウイスキー好きで」

「もしかしてその神主は・・・神田明神の千堂さんでは？」

「そうです！」

「やっぱりこの辺で神主でウイスキー好きはあの人しかいないので」

このままでは決まりそうになかったので父さんにアイコンタクトを取ってみた。

「マスター、何かおすすりめつてありますか？」

「そうですね・・・」

冷蔵庫の中にある清涼飲料水を見ながらあれこれ考えて・・・

「それでは、クランベリーキューティーはいかががでしょうか？クランベリージュースとレモンソーダをベースにしたもので、名前の通り見た目はピンクでキュートなカクテルで女の子に人気の一品になります」

「じゃあそれで！」

シェーカーに克蘭ベリージュースと氷、オレンジライムの絞り汁を入れてシェイクを始めた。

「ほえ〜」

初めて見るバーテンダーのシェイク姿に3人は見惚れていた

一端シェイクを止めてレモンソーダを加えて再び軽くシェイク

グラスのふちにオレンジで湿らせた砂糖を付け、グラスにシェイクしたジュースを注いだ。

そこから更にオレンジを飾って完成。

「克蘭ベリーキユートです」

それぞれグラスを片手に……

「では、乾杯」

「乾杯」

お互いのグラスを軽く合わせて一口飲んだ

「美味しいです!」

「ありがとうございます。料理も間もなく持つてまいります」

奥から大量の皿を持った女性店員が来た。

「よ!久しぶりだな朝霧さん」

「愛理ちゃん！久しぶりだね」

「だからちゃん付けはやめてくれよ」

「ははは・・・それはできない相談だよ。なんせ僕から見たらまだまだ子供だもん」

父さんと仲良く雑談？しているあたり古手の人なのかな？

「この子は水戸部愛理ちゃん。うちのスタッフです」

「ど、どうも水戸部愛理です」

長い髪の毛をポニーテールした凛々しい女性

あいさつが終わると次々と食べ物運ばれてきた。

「美味しそう！」

「今日は愛理ちゃんの改心の出来ですよ」

「ちよ、ちよつとマスターまで何あおっているの／＼／＼」

どうやら水戸部さんはここではいじられキャラなんだな。

「父さんはいつものここで飲んでいたの？」

「そうだよ。よつぽど課題で立て込んでいない限りはここで飲んでる」

ここのバーはフードメニューが豊富で値段も安い（一般的なバーに比べて）事から隠れた人気店であるらしい（父さん曰く）

「でもジュースだけでもしつかりした味なのですわね」

海末がマスターに素朴な質問をぶつけてきた。

「無論何でもかんでもそう言うわけではありません。何百種類のお酒や清涼飲料水の特性を理解しておかないと種類によつては味同士が喧嘩する事もありますし、同じレシピでも違うバーテンダーが作れば何通りの味もあります。更に見た目も重視しないといけません」

「奥が深いものですね」

「ええ、それを探求するのもバーテンダーと言うものと私は思います」

「ねえねえ！次別の面白そうなモノ作ってくれない？」

感化されたのか穂乃果が無茶ぶりを振ってきた

後敬語が抜けているぞ！ア穂乃果！！

「そうですね………愛理ちゃんならどうしますか」

「そうだな………」

マスターと水戸部さんは気にすることなく冷蔵庫からオレンジジュースと牛乳、フランボワーズシロップを出した。

「ほお、それで行きますか？」

「はい」

全ての材料をシェーカーに入れて振り始めた。

「綺麗」

マスタートのシェイクする姿は渋く格好いいに對して水戸部さん見たいな美人がシェイクする姿は思わず見とれてしまうほどの美しく格好いい。

タンブラーグラスに淡いオレンジ色のジュースが注いで完成した

「お待たせしました」

「これ名前は何ですか？」

「コンクラーベと言います」

「コンクラーベってあのローマ法王を選出するときの」

「何故そう言う風と呼ばれた由来に定説がないのですけどそれもあつて私の中では印象に残っているカクテルなのです」

鍵のかかった部屋を意味するコンクラーベ。

この優しくてまろやかな甘さの部屋を開けるための秘密の鍵なのかもしれない

「ねえねえ、悠にい」

「どうした？」

「コンクラーベってなに？」

穂乃果の爆弾発言に俺達はおもいつきりズツコケた

「穂乃果ちゃん、この間社会の授業でやったじゃない？」

「ごめんごめん。その時ぐっすり寝ていて」

「……………海未」

「……………はい」

「穂乃果の練習量を次から倍で」

「甘いです！4倍にします」

「そ、そんな!!」

当たり前だろう

お前達はスクールアイドル

普通のアイドルと違って早退や補講はなくあくまでも一学生である

きちんと授業を受けないと赤点取って留年しても知らないぞ！

「はあ〜」

「大変だね。悠君も」

相変わらずの従妹の行動に悩みの種が尽きない。いままでからしたら贅沢な悩みで

もあるけど。

「でも、楽しいよね！こういう所も」

父さん曰くこれがバーの面白い所でもある

ただ単にお酒を提供するのではなく様々な職業のお客さんが来るのでお酒の知識だけでなく一般教養も熟知しないといけない

お客さんの好みに合わせた最高の一杯を提供するために、様々なお酒の特性を熟知し、技術を磨いていく

知れば知るほど奥が深い職業でもある。

バーテンダーというのは一つの職業であると同時に一つの生き方でもあるのがマスターの持論だ。

「すみません穂乃果さん折り入って頼みたいのですが」

他のお客さんに対応していたマスターが戻ってきた。

「少し歌って頂けないでしょうか？」

「え!？」

「実は……」

どうやらあるお客さんがスクールアイドルの話で盛り上がって穂乃果らにステージ

で歌ってくれないかと頼んできた。

「どうする?」

「やろうよ!」

考える間もなく穂乃果が即答する。

「折角の機会なんだし楽しまない」と

自分に正直に真っ直ぐに突き進む。

他の人達にはなかなか真似出来ない穂乃果の凄い所である。

「ありがとうございます」

店員達で即席のステージを作ってもらった。

「皆さん初めまして音ノ木坂学園スクールアイドルμsです」

穂乃果が最初の舞台挨拶を行った

「お客さんのオーダーということありまして急遽ステージに立つことになりました」

「こつりも脳が蕩けそうな甘い声で経緯を説明し……」

「まだまだ未熟な面がありますが聞いて下さい」

緊張した面持ちで海未が最後をめて……

「START:DASH!!」

今回は講堂と違ってスペースがないのでダンスを省いた歌だけの構成になる。

「いい曲だね」

初めてSTAY ART : DASH!! を聞いた父さんの感想だ。

「ああ、短い期間とはいえここまではどり着いた」

「でもびつくりしたよ悠君の口からスクールアイドルって言葉が出て」

「それ……前にも同じことを絵里から言われたよ」

「うふふ……そうね」

「まただ。」

さっきのライブの時に見たどこか懐かしむような表情。

「……絵里」

「はい」

「ありがとうな」

「いきなりどうしたの?」

「色んなところで穂乃果達のサポートしてくれて」

立ち上げてからライブまで本当に言葉で言い表せないほどサポートしてくれた。

穂乃果がいきなりライブ告知のポスター貼ったりとかライブを前提とした講堂の

セッティングなど色んな面で支援（尻拭い）をしてくれた。

「いえいえ私は出来ることしかやっていないし。それに彼女達の楽しそうな顔を見てみるとね、エリチカお姉さんも感化されちゃって」

「くっ」

「ちよつと／＼／何笑っているの!?!」

「ごめんごめん」

最初に感じたクールなイメージがガラスの階段如く崩壊していった
でも。

俺的にはそっちでもありだけど

この間も感じたけどこの子はちよつと?お茶目な子なんだなと思った

曲が終わり、俺のところに来た。

「お疲れ様」

「うん!」

「楽しかった♪」

「恥ずかしかった／＼／」

あのライブの直後と言うこともあって正直不安な気持ちがあったけどいらぬ心配

だったようだ。

依頼してくれたお客さん、たまたま店に来ていたお客さんの反応も上々！

今回のファーストライトは最低の出発だったけど決して最悪ではない。

良くも悪くもあのライブが穂乃果達に糧になった。

「高坂さん、本当にありがとうございます」

「これ、お礼のケーキです」

「わーい！」

「やった♪」

「ありがとうございます」

スクールアイドルとはいえまだ年頃の娘ともあつて甘いものには目がないね。

「もしよろしければまた歌って頂けないでしょうか？」

「いいのですか!？」

今後の事を考えると正直言つて、マスターの提案はありがたい。

「でも、店的には迷惑なのは」

経営者の娘でもあることが経営の面で聞いてきた

さすがμ'sの天使だよ

「迷惑なんてとんでもない！君たちが歌ったことでいつもよりオーダーが増えていま
す」

お客さんもこの話を聞いてまた聞きたいって声が聞こえてくる。

「よかつたじゃない！もし実現して事前に行ってくれたら僕も見に行くよ」

「私は店の売上が上がり、君たちは発表場所を与えられるお互いWin Winの関係」

お互いがそれぞれの思惑が一致しこの話に「デメリットはない。」

「正直、次の発表がいつになるか分からないけど、決まったらまた必ず歌います」

「ありがとうございます」

これで発表機会が確保できた。

ネットのPVだけでは伝わりにくいものもあるし

「さーて、みんなそろそろ出よっか」

時計の針は9時を回っていた。

明日も学校ある事だしこの辺りでお暇しよう。

「それじゃ・・・」

「いいよ。僕が支払うよ」

「でもそれじゃ・・・」

「いいっていいって、子供が変に遠慮するな」

「ここは父さんに甘える形になった

「ありがとうございます」

帰る方向はそれぞれバラバラだったので丁度入口で別れた。

「……それで本題は？」

「うん？ナンノコト？」

「とぼけるなよ。いくら子離れが出来ていないとはいえ」

「さすが悠君。気づかれていたか」

近くの自販機で酔い冷まし用のコーヒーを買って一口飲んだ。

「近々、アルテールスから人が派遣される事になりそう」

「アルテールスから？」

「そう。在日アルテールス駐留軍最高司令官であるミゼット海軍中将に情報を集めてくれるようお願いしてもらった」

「それで提督は了承したの？」

「ああ。ミゼット提督も元音ノ木坂学園の卒業生だよ。今回の廃校に加えて背後の影に」

「そうなんだ」

「こう見るとどこかで必ず繋がっているのだな。」

「しばらくは国防省にいるから・・・」

「分かつている。何かあつたら頼るよ」

「おや？今回の素直だね」

ちよつと茶化すように言つたが・・・

「・・・今度のは是が非でも穂乃果達の夢を守らないといけない！そのためならどんなものでも利用するし、悪党になつても構わない」

もう、あんな思いをするのはコリゴリだ！

「そこまで覚悟を決めているのなら何も言うことはないけど・・・だけど僕は悠君を悪党にする気はさらさららないよ。それは僕が被るから」

「でも」

今の父さんの昇任ペースや成果だと連合艦隊司令長官や軍令部総長になつてもおかしくない。俺のせいでそれが全てなくなるのは恐れたけど・・・

「僕はこう見えても朝霧家当主で朝霧流の正統後継者にして・・・悠君の父親だよ！子供の責任は親である僕が取るよ！だから悠君は自分が正しいと・・・自分の信じた道を突き進みなさい」

「・・・わかつたよ父さん」

その後は学校の話とかで盛り上がり、もう何年振りになるかわからないほど、久しぶ

りに親子で家に帰宅した。

第二章 ソレゾレノオモイ

1-1 やりたい事

ファーストライブ終了から1週間が経過しGWも過ぎてしまった

あの後父さんと一緒に不審者の情報を集めてみたら確かに正午辺りに出たというのは掴んだが穂乃果たちのライブ前後辺りからポツンと情報が途絶えた。警察は単なる不審者騒動でそませたけど、これは俺の想像だけど想像を超える闇があるかもしれない。

ライブ終了後はしつかり休養をとり再び練習が始まった。

なわけだが……

「ほえ〜」

現在アルパカ小屋でことりが白いアルパカと茶色いアルパカに急にはまりだしたみたいだ。

「ことりちゃん最近ここに来ているよね？」

「急にはまったみたいですよ」

「何でうちの学校にアルパカを飼育しているんだ？」

相変わらず謎なところが多い学園である。

これって理事長の趣味かな？それだったら娘のことりにもハマる理由なら納得できるけど。

「ことり！ たつたとチラシを配りに行くぞ！」

「後もうちよつと〜」

ダメだ。

完全に夢中になっていて聞く耳持たない。

これが穂乃果ならげんこつ一発下した首根っこ引きずることができるのだが、天使にそんなことも出来ないし、どうしたものかな？

「ゆうにいいも触ってみーひゃー!!」

「ことり!？」

事もあるうに家畜の分際でアルパカ共は我らの大天使であるこりの頬を舐めやがった!!

「許せん!!」

「悠にいい落ち着いてください！」

「離せ海未！俺はこいつらを始末しないとイケない！」

「私も弓で射貫きたいのですがそんなことをしたら動物愛護団体が黙っていませんよ」
「いいか海未この世のルールは人が定めたものだ！なら人が動けばおのずとルールは変わる！これは当然の帰結よ」

俺の怒りを見てアルパカさんも臨戦態勢に入りやがった！

いいだろう！相手してやろう！！

かつて訓練の一環とぬかし熊や狼とサシでやりあったことのある体術をとくとご覧あれ！！

戦闘開始5秒前になったところで体操服を着た生徒が現れる。

「ようしよし！」

その生徒は荒れていたアルパカを宥めて落ち着かせていた。

「あれ？小泉さん」

「あ、朝霧先輩お久しぶりです」

アルパカを宥めさせたのはこの学校で数少ない後輩の知り合いの小泉さん。

「ねえ！小泉さん」

「は、はい！」

「あなた・・・アイドルやりませんか？君には輝くモノがある」

「穂乃果、それどこの勧誘だ？」

いきなり穂乃果がアクドイ顔で勧誘始めた。

「こころ小泉さんが困っているぞ！」

「さて俺たちも戻るか」

俺個人的には小泉さんも入って

「さて、練習はここまでしよっか」

「ふう」

「今日もキツかったね」

放課後、いつもの様に神田明神で練習を行っていた。

といつも最初に比べたら倍近くの練習量に加えれダンスの練習も加わり内容は濃くなっているけどちゃんと付いてきている。

「でも、そろそろマンネリ化したな」

「そうっ？」

「今は感じないけど将来の事を考えると何か変化をつけないと」

あれこれ考えているとき社殿から1人の男性が出てきた

「おや・・・みなさん頑張っていますね」

「宮司さんこんにちは」

神田明神の宮司さんであり、カフェ&バーの『Secret Liqueur』の常連でもある千堂宗次さん。

「何かお悩みですね」

「ええ、練習がマンネリ化してしまっていてどうしようかな」

「ふむ・・・それでしたら裏側になってしまいますがバスケットリングを設置いたしまししょうか?」

「よろしいのですか?」

「ええ、実は町内会からそういう意見がありました」

千堂さんはバスケットボールの選手で高校時代は高校最高（最も高い）の男と言われているC（センター）で今でも近くのクラブチームに所属している。

「何より家にあるバスケットリングが邪魔で」

「・・・それが本音ですか」

「ねえねえ！これからうちによっていけない?」

着替えが終わりそれぞれ帰宅準備していたとき穂乃果から魅力な提案をしてきたけど

「ごめん、今日用事があって」

「これからですか？」

「アルテールスから知り合いがこっちに来てな。その案内を頼まれているんだ」

「アルテールスからですか？」

「ああ、昔からの知り合いで日本で仕事することになってな」

「でも、それじゃ練習に来ない方がよかったのでは」

「といつても到着時間に余裕があったからね。そろそろ行くよ」

「お疲れ様でした」

「お疲れ様」

「お疲れ〜」

三人と別れた後、そのまま羽田空港国際線ターミナルに向かう。

国際旅客ターミナル2階にある到着ロビーでその人を待つていた

「ミゼット提督から話は聞いていたけどまさかこうして再び相見えるとはな」

「ご無沙汰しております主！」

彼は杉並。

俺が最も信頼している人の一人で、俺と同じ国際武器ライセンスを所持して懸賞金をかけられている犯罪者を捕まえるフリーの賞金稼ぎだったけどある時を境に信頼関係を築き俺の右腕となり主として慕っている。

「元氣だったか？」

「主もど壮健で何よりです」

基本は賞金稼ぎを生業しているがそれ以外にも超常現象や、古代遺跡にも精通している。それもあつてか女性陣から近付きたくなく、違つた意味での残念系イケメンの一人。

マイペースで飄々とした性格だが、洞察力は鋭く、かの張良や諸葛孔明に勝るとも言える天才的な作戦立案、独自の地下組織を持ち、広大な情報網をもつ情報収集、工作活動に関しては全幅の信頼されている。

それで付いた渾名が奇術師トトリックスター

「それでこつちにはどんな用事で」

ただ例の結果を伝えるだけ来るはずはないし、おそらく本来の案件の別件という形だろう。

「ええ、ミゼット提督からの辞令で人事交流の一環で内閣府職員として出向することになりました」

「お前が内閣府の職員!？」

ブラックジョークにしては全然笑えないな!

「ひよっとして内調か」

日本版CIAとも言われている内調……内角情報調査室

可能性があるとしたらそこだけど……

「それは主と言え言えません」

不敵な笑みを浮かべるだけで、それ以上の発言はしなかった。

つまり察してくれ……か。

「それよりも俺としては主の色んな噂を聞いております」

「何の?」

「惚けても無駄ですよ。既にネタは上がっている」

さすがにこいつの前では隠し通せれなかったか

「その中で一番驚いたのはまさかスクールアイドルのマネージャーをやっているとは」

「まあ、いろいろあつてな」

日本に戻る前では想像も出来なかったよ

本当、人生何が起こるか分からないな。

さて、本題に入ろっか。

「それで成果は？」

「主の予想通りです。やはり廃校派のバックにはユニオンの影があります」

「でもどうして積極的にな？もう前政権の影響は残っていないのでは」

「今、ユニオン国内の経済が立ち回っていないことは知っているな？」

「まあニュースにも頻繁に取り上げているからな」

今のユニオン国内は経済が立ち回っておらず崩壊の危機にあると言われている。

それでも持ちこたえているのは情報を統制やシャドーバンクといった水増し統計でどうにか持たしている感じだ。

「あの事件以降俺達は秘密裏にユニオンの内部事情を調査していました。それで分かったのが連中の狙いはおそらく数年後にあるスポーツの祭典だろう。更に音ノ木坂学園を廃校した暁にはその企業の重役に取り込んでやるみたいなことをいったらしい」

「それであのかス共は了承したのか!？」

「その答えは主が一番知っているのでは」

あんな現場を見たからには正直何も言い返せれなかった。

「ただ、厄介な面子もある」

「厄介な面子？」

「UTXだ」

「!?」

まさかの名前に驚きを隠せなかった。

「UTX学園も廃校派の先生を取り込んでいる情報も入っています」

「……………」ここまで大人でも腐っているとは思いませんでした」

「調べられる限りはここまでです」

「すまない。助かった」

「……つから先は覚悟を決めない」と

「なあ、俺もμ□sの練習見に行ってもいいか?」

「どうした? 普段そういうのに興味のないお前が」

「何ですかね……多分名前に引かれたと思う」

確かにμ□sの意味を最初に教えて貰ったのは他ならぬこいつだからな。

東京駅で杉並と別れた後、俺は秋葉原に寄ってみたらいつもと同様多くの人でごったかえしていた。

今後の活動のことを考えていた。

かつて杉並から教えて貰ったμ□sの名前の9人の女神からの由来だと後6人入ることになる。

それに一体どういう考えで俺達をμ□sと付けて、ボックスにこの名前を投稿した生

徒も気になる。

路地を歩いていたら音ノ木坂の制服を着ていた女子生徒がうろうろしていた。

「よ。小泉さん」

「朝霧先輩」

「どうしたの？こんなところをうろついて」

「じ、実は……」

学校で西木野さんの生徒手帳を拾って届けていく途中で道に迷ったみたいだ

「ちよつと見せてくれる」

「あ、タブレット」

鞆の中からタブレットを取り出して生徒手帳に書かれた住所をマップ検索した。

「よし、場所もわかったから一緒に行こっか」

「え!?!ご迷惑では」

「もうこの後用事も何にもないし」

「こ、こいつは!?!」

「お、大きいですね」

歩く事数分……

生徒手帳にかかれた住所にたどり着くとそこにはとてつもなくデカイ家が建っていた

立札にも西木野と書かれているから間違いないだろう

土地も込めたら最低億は行くだろうな

お嬢様な雰囲気だったけどまさか正真正銘のお嬢様とはな。

「……とりあえずチャイム」

チャイムを押して暫くすると女性の声が出た

「私は音ノ木坂学園生徒の朝霧悠斗と申します。お宅のお子さんである西木野真姫さんが落とした生徒手帳を届けに参りました」

「朝霧?! ちよつとまってね」

しばらくして扉をかけて出てきたの西木野さん似ているがどこかほんわかしたお姉さんが出てきた

「始めまして。母の真里ともうします。」

「……え!?!」

お母さん!?

嘘だらろ……って俺の身内に年齢詐称の人たちがいるんだった。

「改めまして音ノ木坂学園の3年生の朝霧悠斗と申します。こちらは西木野さんと同じクラスメイトの小泉花陽です」

「わざわざ届けてきていただきありがとうございます。さあ、中へどうぞ」

内装も想像通りに豪華だシャンデリアに絵画と想像以上の品だ。

「今、真姫ちゃんは病院の方に顔を出していて、もうそろそろ帰ってくると思うから中で待っていて」

「あ、あの……病院って何か病気なのですか?」

「いいえ、私たち病院を経営していて。真姫ちゃんにはお父さんの着替えを届けにいつている」

病院を経営しているのか!

だからこんなに豪邸なのだな。

「病院って西木野病院ですか?」

「知っているの?」

「はい、この辺りでは大きな病院です」

西木野病院か……どっかで聞いたことがあるな。

「どうぞ」

「いただきます」

紅茶を出されて一口飲んだ。

「それで朝霧さん……間違っていたら申し訳ないのですがお母さんの名前ってひよつとして外科医の麻衣ではないでしょうか？」

「え!?!」

何故知っている!?!

「やっぱり麻衣先輩の息子さんなのね!」

「母を……存じなのですか?」

「ええ、麻衣先輩とは学校も病院でも先輩後輩の関係で最後まで仕事をしていたのよ」
思い出した!!

西木野病院って母さんが最後に勤めていた総合病院だ。

「……とごめんね。なんか身内の話になっちゃって」

「い、いえ」

「ただいまママ誰か来ているの?」

「よっ」

「お、お邪魔しています」

「何でいる…….のですか?」

相変わらずツンツンしているね。

「小泉さんが君の生徒手帳を拾って届けに来て、俺はその付き添い」

「あら? 真姫ちゃん、悠斗君の事知っていたの?」

「以前少しだけ」

それだけ言って他は何も言わなかった

俺も正直アレをほじくり返して欲しくないから俺も黙った。

「ここ、これ西木野さんのだよね? 廊下に落ちていたから」

「何であなたが」

「ご、ごめんなさい」

「何で謝るのよ…….その…….あ、ありがとう」

相変わらずこの真性ツンデレお嬢様は本当に素直じゃあないんだから。

「ね、ねえ西木野さんってμ☒sに興味あるの?」

「ぐええ」

「チラシの前に生徒手帳が落ちていたから」

「そ、それは……」

慌てて反論しようと勢いよく立ち上がったせいで、テーブルに膝をぶつけて、おもいつきり転けてしまう

「大丈夫か？」

「そう思うのでしたら助け……」

言い切る前にそつと手をさしのべた。

「ほら」

「あ、ありがとう……ございます／＼／＼」

顔を真っ赤にしながらお礼を言う辺りツンデレだなと思った

「私……西木野さんが放課後の音楽室でピアノを弾いている姿を良く見るの。歌声……とっても綺麗だから」

「それは同感だな」

あの歌声とピアノの演奏力、それに作曲のセンスはおそらく幼いからの努力した結果だろう。

「私ね……医学部に入ることが決まっているの」

「医学部？」

「そう、両親の後を継ぐ為に。だから私の音楽は終わったの」

「そうか」

紅茶を一口飲んだ。

「それじゃ何で音楽室でピアノを引いていたの？」

「そ、それは」

俺の問いに西木野さんは黙ってしまふ

「本当はまだ諦めたくないのじゃない？」

「・・・・・・・・」

おそらくまだ諦めたくないのって気持ちが続いているのだろう

この間のライブ時なんか夢中になって見ていたから本当は凄く音楽活動をやりたい
と思っっている。

けど自分のやりたいことと両親の後を継ぐ・・・

その2つに挟まれて迷い混んでいる。

「さて、ずいぶん長居したし、そろそろお暇させてもらおうか」

帰り際に俺は・・・

「時間は有限しかないのだ。それをどういう風に過ごすかは自分の自由だけど、その事

を頭の片隅に覚えていて」

「え!？」

最後にそう言い残した。

「少し待って」

玄関で靴を履いていたら後ろから真里さんが小さな箱を持ってきた。

「これをあなたに」

「これは……メスですか」

「ええ、あなたのお母さんが最後まで使っていたものよ」

母さんは亡くなる直前まで手術台に立ち、最後まで医者 of 本文を貫いた。

「先輩の遺言で息子が15才になったら渡してって言われていたけど、その時にはアルテールスに渡っていたって話だから預かっていたのよ。遅れましたがこれをあなたにお返しします」

「慎んでお受け取りします」

俺は小包をしっかりと受け取った。

後で父さんや紀衣さんに連絡して見せないで。

西木野さんの家を出た頃は日が沈みかけていた。

1 2 決意

西木野さんの家を出て俺たちは住宅街を歩いていった。

時間は19時を越えていて周りは薄暗くなつて街灯がの明かりがついていた。

「みんな……色々あるのだなと思ひまして」

しばらく歩いていたらとき小泉さんが何気なく呟いた。

「誰も悩みのない人間なんていやしないのさ」

俺もずいぶん悩みながら歩いてきた。

「あ、あの……朝霧さん」

「どうした？」

「少し相談事が」

「いいよ。ただ、立ち話もなんだし近くの喫茶店……そうだ！この近くに美味しい和菓

子屋があるつてそこでもいい？」

「和菓子屋ですか？」

「俺の実家でこの辺じゃあ有名でね」

「はい。ありがとうございます」

ついでに紀衣さんに母さんの遺品を見させないとな。

『穂むら』に着いた俺達は暖簾をくぐって店に入った。

いつもは裏の玄関から入っているからちよつと新鮮な気分だ。

店に入ると割烹着姿の穂乃果が店番していた。

「おっ!? 珍しく穂乃果が店の手伝いか・・・明日は槍が降るかな?」

「ちよつと酷いよ!! 私だって店の手伝いを」

だってそんなこといたって小学生の頃あんな作文を書いたのだよ!

未だに信じられない気持ちなのだが。

「あ! 花陽ちゃんもいらつしやい!!」

「は、はい・・・おじゃまします」

恥ずかしがって俺の後ろに隠れてしまった。

「それで今日はどうしたの?」

「この子がスクールアイドルについて相談事があつてな。部屋借りてもいいか?」

「いいよ。私ももうすぐ店番が終わるから先に上がつて」

俺達は裏口に向かった。

「なんだかずいぶん慣れていますよね」

「まあな。小学校卒業するまではここに住んでいたからな」

「そうなのですか！」

そりゃ驚くよな。

「俺の父さんが海軍士官でね。常に全国の基地や艦艇を転々していたからここに住んでいたのさ」

「と言うことは親子二代で？」

「俺のじいさんそのまたじいさんも海軍士官だったよ」

「軍人家系なのですね」

確かによくよく考えて見るとよく今日まで血統が残っていたよな

2階に上がって、穂乃果の部屋を開けると……

「みんな！ありがと〜!!」

そこにはありとあらゆる束縛・しがらみから解放された最高の笑顔でポーズングを決めていた海未がいた

その姿に俺は言葉では言い表せないような恐怖が全身を駆け巡った。

危険だ！

剣士である俺の五感がそう告げている。

おそらく小泉さんも同じモノを片鱗味わったはずだ

その証拠に隣を見ると小泉さんがガタガタと小動物のように震えている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺はそと扉を閉めて下に降りた。

「小泉さん」

「は、はい」

「俺たちは何にも見ていない・・・見なかった事にしよう」

「あれ2人ともどうしたの？」

店番を終えたのか割烹着を脱いで普段着になっていた。

「・・・・・・・・・・別に何にもなかったな小泉さん」

「・・・・・・・・・・はい」

そう

俺達は何も見えていなかった。

そう思った矢先。

階段を全力ダッシュで駆け下り、亡霊のような雰囲気を出している海未が降りてきた

「・・・・・・・・・・見ましたね」

海未よ……

どこでそんな技覚えたのだ。

穂乃果とは別の意味で海未の将来を案じながら沈んでいった俺である。

〈5分後〉

「まさか海未ちゃんがポージングの練習していたなんて」

／／／／／／／／

あの後、俺の首根っこをつかんで引きずりながら穂乃果の部屋に運んだあとぼろ雑巾のように放り投げようで身体全身に悲鳴が上がっていた。

そんでもって穂乃果はまるでなかったかのようにいたずらっ子よくするような笑みで顔を真っ赤にした海未を煽っていた。

ちよつとは俺を労わってくれよ。

唯一小泉さんだけだよ心配してくれたのは。

「お邪魔しま〜す」

しばらくするうちにことりが部屋にやって来た。

「よ……う……う……ことり」

「お、お邪魔しています」

「どうじたの悠にい?」

おおっ!!

こんなところにも天使がいたとは!

「いや、う・・・」「悠にい?」・・・いやなんでもない」

海末のドスの利いた声に敗北して俺自身、なかつた事にした。

なんだか最近幼馴染に完全尻に引かれている気がする。

「く、苦労しているのですね」

おおっ、この子だけだよ今の癒しは。

そうだ!

ことりはとデュエットを組ませて見よう

ダメだな

ステージで披露した瞬間に俺を筆頭に大量の萌え死にする人が続出するし、そもそもまだ入ると決まったわけではないからしばらく封印だな

「ところで2人はどうして集まったの?」

まだ、体中にダメージは残っているが、そろそろ痛みを馴れて復活した。

・・・馴れた時点で色々失ってしまうがもう気にしないことにしよう。

「そうそう、帰りにもちよつと気になったデータを見つけて急いで集まったの」

「帰りについて俺と別れた後で?」

「そうです。本当は悠にいいにも相談しなかったのですが用事があつたという事で事後報告だったのですがちよつとよかつたです」

パソコンの電源を立ち上げある動画サイトを開いてある1つの投稿動画を再生した
「これって!？」

そう、投稿されていたのは先日行った、sファーストライブ映像が流れていた。

「いったい誰が?」

そう・・・

俺達ライブ関係者が撮った動画ではない。

本当は絵里が撮る予定だったのだけど、あの事件ですっかり頭から抜け落ちていて、気が付いたのは随分後の事になった。

「それにしても凄い再生回数ですね」

動画の再生カウント数には初投稿の割には結構な数字を刻んでいた。

「ああ!!ここ上手くいっただのね♪」

「でも、この辺のリズムがずれています」

「あうくやっぱり振り付け間違っていた」

こうして見ると色々出来ない部分が見られたけど、一生懸命な姿が映し出されていた
実際にコメント欄にも応援のメッセージが書き並べていた

もちろんこれで慢心してはいけませんが、むしろ自分たちの結果が現れていることか
ら更にモチベーションが上がる。

画面に夢中で気付くのが遅れたけど小泉さんも真剣な表情で画面を見ていた。

「小泉さん！」

「は、はい!？」

「スクールアイドル、本気でやってみない?」

昼間勧誘した時とは違い、真剣な眼差しで小泉さんに問うてみた。

「え?.....でも私.....向いていないですから」

小泉さんはやんわりと断わりを入れるけど本心じゃないって直ぐに分かる。

目だ!

小泉さんの目にはやりたいって訴えている

だけど気弱なその性格が災いしてなかなか自分のやりたいことに一歩踏み出せれて
いない。

「私だって未だに人前に出るのは苦手です」

ポージングの練習していたのに？

「悠にい．．．．．何か不埒な考えしませんでした」

「気のせいだよ」

「ことりも歌詞忘れちゃうところもあるし、運動も苦手だし」

「私もすぐおつちよこちよいだよ」

ここの風に向かってみんな必ず何かの欠点を抱えている

「プロのアイドルならきつと失格の烙印を押されるだろうが俺たちはスクールアイドルだ！やりたい気持ち！自分たちの目標をもってやってみることはできる」

周囲がどう思うと輝いているのはキミたちだ！

キミ等が物語を作っていく。

そう．．．．．

μ☒sという名の物語を！

「最も練習は厳しいですが」

「さすが鬼軍曹殿．．．言うことは違いますね」

「あら？悠にい．．．もうひと眠りしますか？」

「はははっ．．．．．謹んでご遠慮します」

アルテールスにいたときは制裁キャラで名が通っていたのにこいつらといると被害

キャラに成り下がった。

「ゆつくりでいいから答え聞かせて」

「はい」

穂乃果の言葉に頷いて、改めて時計を見ると20時に指しかかろうとしていた。

「おや、もうこんな時間ですか?」

「それじゃそろそろお暇するよ」

荷物をまとめ始めた。

「近くまで送るよ」

「そ、そんな・・・ご迷惑では」

「君にもしもの事があつたら申し訳がないし・・・それに最近は何騒だし、君みたいなかわいい子を一人で帰らすのは主義ではないのでね」

俺の余計な一言で場の空気が変わった。

「悠にいい?」

「ゆうにいい?ことりのおやつにしちやいますよ?」

「悠にいい?少し話があります?・・・」

前に一回だけ小泉さん達としゃべっている所を偶然見つかつて

幼馴染の3人の目のハイライトが消えて、さっきの海末と同じ・・・いや、それ以

上の3人分のプレッシャーが襲い掛かった。

ここで選択肢を間違えると恐らく明日の日を拝めることはないだろう。
これは予感ではなく確信だ。

俺のとった行動は……

「それじゃ、去らばだああああああああ!!」

小泉さんの手をとってこの場からの戦略的撤退。

そう、今の俺にできるのはそれしか出来ない。

決して逃げたわけではない!

もし……あのまま残っていたらって考えるだけでもおぞましい!

「……よしここまで来たら大丈夫だろう」

ひたすら全力ダッシュで走り秋葉原の近くまで来ていた。

しかし、久々に危機を感じたな。

特にことり、君のが一番怖い！

何!?ことりのおやつって!?

その一言で撤退を決意するほどのおぞましきを感じ取ったぞ

「あ……あの／＼／＼お、降ろしていただけないでしょうか？」

「……………あ」

つい、小泉さんを所謂お姫様抱っこで出て行つた。

まだ人が少ない夜だったのが不幸中の幸い、これがまた希の耳に入ったら当分おもちやにされているだろう。

「朝霧さんはどうして先輩たちの協力をしているのですか？」

「そうだな……………」

「簡単に言うと、あいつらの行き着く先見てみたい……………からかな」

「行き着く……………先ですか」

「俺の父さんや爺さんの口癖だね。分野は一切問わず将来日本を背負っていく若者たちが道を歩み、どこへ向かっていくのかを楽しんでいる」

幕末の動乱から始まった戦闘一族朝霧

常に時代の片隅に生き、きれいごとではない戦場を駆け巡った。

例え罵られようとも血道を歩もうと子供や孫達が平和で自分の夢を歩める時代を築き上げるために、数多の戦場を駆け巡った。俺のご先祖様が常に思っていたのは次の時代の事だった。

善し悪しは兎も角、今も様々な出来事を歩み続けた結果、スクールアイドルが生まれた。

「それより小泉さんはスクールアイドルに興味あるの?」

玲次さんの話によるとアイドルに並々ならぬ情熱を持つと聞く

「正直言つて怖いです」

「怖い?」

「私、才能何て有りませんから。もし失敗したらと思うとどうしても・・・」

「ま、俺もそういう時もあつたよ」

「朝霧さんですか?」

「俺も昔・・・自分の才能の無さに嘆いて色々無理や無茶もやった」

才能は有限分しかない。

だから勝つために色々無茶やったり命を軽んじたりしていた。

「でもな小泉さん……自分の事才能ないなんて言うんじゃない。そんな人は全世界探してもほんの一握りしかない！そうやって自分を蔑むのを止めてくれ」

「……ごめんなさい」

「でもね……完璧じゃなくてもいいんだよ」

「え？」

突然の回答に小泉さんは目を丸くした。

「あいつらも見ただろう？全員何らかの欠点を抱えている。別に才能なくてもいいんだよ。自分のやりたいようにやる。そして足りない所はお互いにカバーしあう。それでいいんだよ」

「ありがとうございます」

小泉さんの顔を見るとそこには希望に満ち溢れた顔で自然と笑っていた。

もちろん不安もあるかもしれないけど俺が出来るのはここまでだ。

後は自分で考えて決断するんだ。

翌日の放課後・・・食堂で練習用のスポーツドリリンクを作って屋上に戻ると、そこには小泉さんと西木野さんが小泉さんの両腕をしっかりと掴んで確保されていた。

さつきスポーツドリリンクを作っていた時に「誰かタスケテ〜」って悲鳴が聞こえていたけどあれは小泉さんか正体だったのか。

「……………何があった」

素朴な疑問をぶつけてみると要約するとメンバーになりたいという事だけど、そこに至るまでの経緯が少し気になった

「はい！かよちゃんはずっとずっと……………アイドルになりたいって思っていたんです！」

「そんなことはどうでも良くて！この子、結構歌唱力あるんです！」

「どうでもいいってどういう意味よ！」

「言葉通りの意味よ！」

おいおい喧嘩しちやだめだろう！

小泉さんはまだ迷っていたけど二人の後押しもあつて自分の気持ちを言葉に表した。

「私！一年生の小泉花陽と言います！背も小さくて、声も小さくて、人見知りで、得意なものにもないです。でも！アイドルへの気持ちは誰にも負けないつもりです！だから……………だから……………？、sのメンバーにしてください!!」

「こちらこそよろしくねー！」

穂乃果は小泉さんに手を刺し伸ばせ、それを小泉さんがしっかりと握った。そしてその光景に涙流していた星空さんと西木野さん

「それでお二方はどうする？」

「え？」

「まだまたメンバーを募集中ですよ」

海末とことりは2人に手を差し伸ばした。

お互いの顔を見てどうするという表情だ。

「小泉さんには前に言ったけどスクールアイドルは自分がやりたい気持ちがあれば出来るんだよ!!」

「そうだよ！凜ちゃん、西木野さん一緒にやろう!!」

2人は無言ながらも小泉さんの差し伸ばした手を掴んだ。

そして再び時間が過ぎ翌朝。

ジャージに着替えて神田明神に行く途中で星空さんと西木野さんに会った。

「おはよう2人共」

「せんぱい・・・朝練ってこんなに早いのか？」

「……すまん練習取り仕切っているのが海未なもので」

俺もメニユーを考えているけど、あの子本当に練習に対してスティックで手を一切抜かない。

階段を上ると既に準備運動を始めていた小泉さんを見つけた。

「かよちくん」

「おはよう」

「あれ？小泉さん眼鏡は？」

「コンタクトにしてみたの……どうかな？」

「すつごく可愛いよ！かよちん!!」

「へえくいいんじゃない」

「ねえ……その……私の事も名前前で呼んでよ。私もあなたたちの事名前前で呼ぶから……」

凜、花陽」

嘘!?

あの西木野さんがデレだ!!

「う——真姫ちゃん!!真姫ちゃん、真姫ちゃん真姫ちゃん真姫ちゃん!真姫ちゃん!」

「う、うるさい／＼／＼」

「あ、照れてる照れてる」

凜は嬉しさのあまり真姫の周りをピョンピョンと飛び跳ねる

「そんじや俺も名前で呼んでくれ！真姫！凜！花陽！」

「今日からよろしくお願いします。悠先輩」

「お願いしますにやゝ悠センパイ」

「よ、よろしくお願いします。」

これでμ、sは6人（+1人）体制になった。

大空を見上げながらどンドンにぎやかになっていくμ、sに心を躍らせた。

1 3 襲撃

一年生組が加入してから3週間が立つ。

最近では以前宮司の千堂さんが近所の要望を受けて整備したバスケットリングを使つての練習をしていた。

「行くよ凜！」

「こいこい!!」

今は休憩時間を利用して凜ちゃんとバスケの1on1をやっている。

ちよこちよこことフェイントをかけて抜こうとしても持ち前の反射神経とバネで中々抜けない。

只単の筋トレや走り込みだけでは自分の体力が拳がつているのか分からないし、単調練習だったらマンネリ化になるからこういったミニゲームを取り入れた。

「ふう」

「おつかれ悠にい」

「ああ、ありがとう」

「でもすごいよね。あの時、なんであんなに動けるの？」

前にみんなの体力が本当に上がっているのか確認するためにバスケットでミニゲーム

心のない不良連中に怒った俺が3on1で挑みボコボコのミンチにしてやった

何をやったといわれたら最初に相手の軸足に重心が乗った瞬間切り返すことで発生するアングルブレイクをかまし、型にはまらない動きで翻弄し、レーンアップでダックをぶちかました。

「あの時は大人気なかつたですよ」

「すまんすまん」

あの時は久々に血がたぎったよ。

「それより悠にいい」

「ああ、この書き込みの件だな」

この2週間の間にあまりうれしくない事案が起こっていた

『あんたたちがアイドルを語るなんて10年早いわ!とつとと解散しなさい!!』と書き込みがされていた

結成時に比べて徐々に人気が高まりこういうことも予想されていたことだけど気持ちいいものではない。

再びバスケットボールを拾うとしたそのとき奥の方から変な気配を感じ取った!?

「海未」

「はい！あの角あたりから」

海未も気が付いたらしい。

「俺が意識を誘導させてみる」

「できるのですか？」

「まあ、任せな」

「悠さん、もう一度勝負にや!!」

「その心意気やよし!!ならとっておきのを見せよう！」

凜ちゃんの間合いに臆さず入る。

「悠さんそんな無防備に」

「行くぞ!!」

ストリートバスケットみたいな型にハマらない前後左右に激しいドリブルで翻弄。

「にや!？」

流石の運動神経随一の凜でさえ目が追い付いていない。

「さっすてボールはどこそこだ？」

「」「」「え!」「」「」

さっすきまで手についていたボールを変則ドリブルスピードの一瞬をついて背中に隠

した。

隠れていた不審者もドリブルテクニクに見とれられて体が出ていたことに気づいていなかった。

その瞬間、体を捻り遠心力でボールを不審者に当てた。

「ふん!!」

弾着を確認全身のバネを使って一瞬で詰め寄った。

「さて・・・どうして俺たちを見ていたのか説明」

季節外れもいいとこのロングコートにマスクとサングラスを身に着けたツインテールの

「あんた達とつと解散しなさい」

何をする気だ。

更に感度を上げて懐から・・・

「ドンチャク!?!」

!?とつさに交わしたのだが相手も季節外れの格好のせいで、手汗ですっぽ抜けたヌン

チャクが俺の・・・に直撃した!

「!?!?!?!?!」

!?!?!?!?!

いくら訓練の時に大きささまざまな怪我を追ってきたがさすがにここだけは!!
「悠にい大丈夫ですか!」

「だ、ダイジョウブ」

すっぽ抜けたおかげでそこまで力がなかったのが不幸中の幸いだ。

「……ということとはあの子がこの書き込みの犯人なのですか?」

「正直確証はない。本人もかもしれないし。別人が書いた可能性もある」
でも、気になる面もある。

あの気配……

「それでは新たなメンバーを加えた新生μ、sの練習を始めたいと思います」

時間変わって放課後いつもの様に着替え終わって集まったら恒例のいつのやつをやるみたいだ。

「いつまでやるんだ?もう2週間は言い続けているぞ!!」

「だってうれしいだもん!!」

その気持ちは分からなくもないけど、目を輝かせながら近づくな!!

海未とことりからまた変なプレッシャーが降り注ぐから!!

「だからいつも恒例1!」

「2!」

「3!」

「4!」

「5!」

「6!」

「くうく! 6人だよ6人! アイドルグループみたいだよねく!」

完全にやる気スイッチが変な方向に入ってしまったって練習が始まる前のこれがすっかり恒例になった。

「毎日同じ事で感動できるなんて羨ましいにや〜」

「いや〜それほども」

おい! ア穂乃果!!

それ一切褒めていないぞ!

嫌味すら気が付いてないなんて・・・こいつの頭の中いったいどうなっているんだと気になってしまう。

「それよりいつまで駄弁っているのよ! 練習時間なくなるじゃない」

「おお！真姫ちゃんやる気満々!!」

「べ、別に」

「またまたく凜知っているよ！一人でこっそり練習している真姫ちゃんを」

ほお！それは是非とも見てみたいな。

「あ、あれはこの間やったステップが酷かったから変えようとした」

「ちよつと待つて真姫ちゃん!?今ステップ考えている人つて」

「……………そうですか」

花陽が声を制してくれたが時すでに遅し……

「あのステップ……考えたの俺たち（私たち）なのですが」

今のダンスのステップは主に俺と海未で考えているのだけど後輩からここまでdisられると割とへこむ。

「気にすることないにや！真姫ちゃんは照れているだけにや！」

そういつて真姫に寄り添った。

本当にこの短期間で仲良くなつたねお二人さん。

それが俺にとつて最高の癒しさ……

disった本人が混ざっているけど。

「雨だ……」

「にしても日本の梅雨の時期ってよく振るな」

「ここ最近、雨のおかげでまともに練習ができていなかった。

「でもこうなってしまうたら棚上げしていた雨天でも使える練習場所を探さないといけない」

「区の体育館はダメなのか？」

「うん、放課後はすでに埋まってる」

でも確かにこのままでは死活問題だな。

国防省の福利厚生施設は家族のみだし、何より手続きの間に梅雨が明けてしまう。

この時、俺の脳裏に都合のいい場所が浮かんだけど……

「一応思いついたけど」

「ほんと!!」

「ただまあ……場所が場所なだけちよつと聞いて見ないと分からない」

あそこにはそこそこ大きいスタジオや音響一式が完備されているって聞いたことがあるけど、大丈夫かな？

モノの試しに連絡してみた驚くべき回答を得た。

「それでどうでした？」

「みんな！よろこべ！！先方から了承を得たぞ」

「本当ですか？」

「嘘じゃないよにや!？」

正直微妙な所だったけど以外にもOKと言う返事をだった。

「ただ、いくつか条件が出されて」

「条件ですか？」

「大したことはないのだが、これは施設の責任者が直接話したいからって言うからこれから向かおう」

幸い今は雨が一時的にあがっていたのでこの機会に走り込みを兼ねて向かった。

「さて、ついたぞ！」

15分ほど走った所に今回の目的地についた。

「ふいー疲れたよお」

「ほんとうにや」

大きく息を吐きながらけど、みんなは気が付いていないが普段のペースより少し早めには走っているのにまだ息が切れていないのは皆の体力がついている証拠だよ！

「あの・・・先輩」

「どうしたの花陽？」

「ここ、ここが目的地なのですか？」

不安な口調で質問してきた。

「そうだ」

「で、でもここ大使館ですよ!？」

「そう在日アルテールス大使館が今日の目的地だ」

アルテールス王国の国旗が立っている建物。

「よー！久しぶり」

「朝霧さん!!」

「ご無沙汰しております」

門番には昔一緒に仕事していた元同僚が立っていた。

「今大使は戻っているかな？」

「申し訳ございません。まだお戻りなられておりません」

「そうか……しばらく中で待たせてもらっても構わないかな？」

「大丈夫です。駐在武官から事前の許可をもらっておりますので」

流石大使！

事前に話を進めてくれて助かる！

「皆！中で待っていても大丈夫だって」

「あなたからの頼みとなると何事かと思いましたが、なるほどそういう訳でしたか」

大使館ナンバー2であるコーネリア・C・モーリッツさんと歓談していた

「すみませんモーリッツさん。私的な事でお伺いして」

「いえいえ、あなたには大変お世話になっております故この位でしたらお安い御用です」

「ありがとうございます」

これまで *μ*、*s* の面々は緊張のあまり挨拶以外一言もしゃべっていない。

あの真姫ですら縮こまっている

「ですが最終決定権は大使が持っております故」

「分かっております」

外から車の音が聞こえてきて扉から一人の女性が現れた。

「悠斗さん!!お待たせして申し訳ございません」

「いえいえ、私こそ突然の申し出を承諾していただきありがとうございます」

お互い握手したところで紹介に入る。

「みんな。紹介するよアルテールス大使館大使を務めているセリシア・アースラさんだ」
「μ、sの皆さん初めまして。私はセリシア・アースラです。悠斗君とは昔からの付き合いです」

元陸軍参謀で一時この大使館に駐在武官で勤務したことがあって、以前一緒に飲みに行ったとき大使館の地下にスタジオが置かれていのを教えてもらった。

「使用条件としましては申し訳ございませんが個人での使用は認められませんのでμ☒sとして団体で使用してもらいます」

「大丈夫です」

一つ一つ確認しながら話を進めていた。

「後は大使館という性質上非常時は申し訳ございません。以上が利用規約になります」

「衛兵長、彼女たちに地下のスタジオに案内してください」

「畏まりました」

俺と大使以外の面々は近くで待機していた衛兵長の案内で席を立った。

「あれ、悠にいは？」

「俺は大使と話があるから先に練習しておいて」

6人は衛兵長に案内されて地下のスタジオに向かった。

「……まさかあなたからスクールアイドルの練習場所を貸してくれと聞かされたときは耳を疑ったわ」

「ははは……」

最近同じことを部下と父親にも言われましたよ。

「でも正直驚いたわ。悠斗くんがスクールアイドルのマネージャーになってるなんて」

「幼馴染の熱意を受けてね」

「穂乃果ちゃん……でしたね。あの子を見るとあの人を思い出すわ」

「やっぱり大使も同じように感じていましたか」

「ええ」

紅茶を一口飲んで……

「まあ、あいつらと一緒に過ごして色んなモノを見てきました」

出された紅茶を飲んで本題に移った。

「それで話とは？」

先の電話の時、穂乃果達に直接利用規約の説明だけでなく直接俺に話したいことがあるらしい。

「これは本当に偶然な出来事でまだ詳細な情報が入ってきていないのだけど・・・ロシアマフィアの大本物中の大本物のヨランダが密入国した」

「あのロシアマフィアグラードのヨランダだと!？」

犯罪組織の中で世界最大の戦闘能力を持つロシアマフィアグラード。

その構成員の殆どを旧ソ連軍人で締めるだけではなく原潜や戦闘機も所有している世界一達の悪いマフィア。

「これがそのときの写真です」

顔に特徴のある大きな傷!間違いない!!

「・・・・・・・・このことは日本政府には？」

「既に大西総理に報告して動いているのだけど既に裏に潜った形跡だね。足取りが途絶えているのよ」

一歩遅かったか!!

「……しかし何で日本に来たのだ？」

「そう！そこが大西総理も気になっていたのでよ」

昔の民社党の連立政権ならゴロゴロ入ってこれたが、今では海上・空港の警備網は強力でちよつとやそつとでは入れない

「入ってきたのもヨランダを含む数人か……」

抗争が目的なら兵隊の数は明らかに不足でビジネスなら護衛と御伴でこの人数は分かるけど目的がわからない。

以前見たいな非合法のビジネスはしにくいしリクスもある。

「グラードがバックについているのって確か……」

「ええ、ユニオン政府が裏で手をつないでいるともささやかれている」

この件は昔から言われておるが物的証拠もなく、ユニオン政府からも公式に否定されている。

「目的が何なのかが分からないと手の内容がないな」

音ノ木坂学園の廃校の最中……その廃校派のバックについていると思われるユニオンの傘下が日本に来ている。偶然だろうか？

また突然走馬灯のように今度のは金髪少女の映像が頭に過った!!

「っ!？」

「………大使、常装薬弾と小銃……俺に渡すことってできないかな？ どうもいやな予感がする」

「いやな予感……ですか？」

「正直に言うとな俺のクラスメイトの女の子の顔が頭をよぎった。しかもその子祖母がロシア人のクォーターで……何かが引つかかっている」

「分かりました。すぐに本国に打診してみます」

正直言つて、この手のいやな予感は外れたためしがない杞憂であつてほしいのだが……

こうして雨天の練習場所を確保に成功した……と思われていた。

「………何で雨止まないの!!」

「仕方がないよ……それが自然の摂理」

俺たちは近くのファーストフード店に足を運んでいた。

「穂乃果、そんな風に食べていると……太るぞ」

「そんなことより練習場所どうするの？ 平日に大使館まで行くのに時間もかかるし」

「それに今回見たいな時に大使館は使えないですし」

今日は朝からアルテールス大使と内閣官房長官と会談することが分かっていたので大使館での練習はなくなった。

「確か前回練習場所を探していた時はきちんとした部活じゃないと借りられないって言っていたよな？」

「そうなんだよね、規定も変わって7人以上ならないと出来ないなんて」

「ちよつと待つて改正規定は7人以上だったよね？」

「ええ」

「……………今何人だ」

「……………え!？」

「今……………7人」

「穂乃果……………どういうことだ」

発起人である穂乃果に問い詰めてみると驚くべき回答が出た。

「……………忘れていた!!」

「忘れていたんかい!!」

パシーン

「それより忘れていたってどういうこと？」

「いや、メンバーが集まって安心しちやって」

更にもう一発！

「この人たちダメかも」

「面目ない」

盛大にため息をこぼす西木野さんに謝罪した。

「よし、明日早速部活申請しよう」

憂鬱な雰囲気から一転して一気に明るくなった。

条件はそろっているのだし廃校派の連中も露骨に嫌がらせはしてこないはずだ。

「……つとその前に」

俺は仕切りの向こうに隠れていた不審者（仮）に……

「よ、お嬢ちゃん。久しぶりだね」

「な、なん」

「何で分かったって？前にあったとき君の気配を覚えておいてね。さらに言ったらここに入る前からついてきたこともわかっていた」

「俺の急所を狙おうが頭から残飯ぶっかけようが大抵の事は笑って見逃すよ」

「・・・・・・・・でもな」

一呼吸おいて・・・・・・・・

「どんな理由があろうとこいつらを狙おうというのならガキでも容赦はしねえ!!」

「か、解散しなさいと言っているでしょう！あんた達は全然なっていない」

俺の気迫に怖気ついたのか言いたいことを言ったらそのまま逃走した。

だけど今度ので確信した。

ファーストライブに来ていた子に間違いない！

これで音ノ木坂の生徒だと分かったが一体何の目的で俺たちの活動を否定しているのが残った。

14 雨上がり

相変わらず雨が続いてうつとしい日々が続いていた。

HRが始まるまで絵里と他愛のない話をしていた。

といつても話題は基本 μ 、s 関係だけだ

「最近はどうな感じ?」

「いい感じだよ一年生3人も入ってくれてパフォーマンスの幅も広がって」

「3人……ということとは」

俺と絵里の会話を聞いていた希が間に入ってきた。

「俺含めて7人そろったから部活申請を申請するよ」

「でも、7人になったのは3週間前よね?どうして申請しなかったの?」

「………忘れていたらしい」

ズゴツ

「あはははっ……ハ、ハラショー」

我が従妹ならいったい誰に似たのやら

「だけどもめんなさい申請できない理由があるの」

「なんで!？」

「実はこの学校に既にアイドル研究部が存在するの」

「アイドル研究部が」

「まあ、今現在の部員は一人だけど、生徒が限られている中で悪戯に部を増やすなどこの間釘を刺されて」

絵里は誰とは言わなかったが、おおよその検討は付く。

「だったらこの話を終わらせないためにきちんとアイドル研究部と話をつけに行ってくる」

「部室は一階にあるから」

「ところで絵里……どうしてアイドル研究部の話を始めにしなかった？」

この2人には言葉で言い表せないほど世話になっている

だけどここの件に関して意図的に隠している部分がある。

「ごめん……これは私からいう訳にはいかなくて」

「……ま、理由があるなら仕方がない。忘れてくれ」

俺はこの案件を直ぐに昼休みにアイドル研究部に行こうと内容でメールを送った。

そして昼休みになって全員集まったところで一階のアイドル研究部に向かった。

「あゝ!？」

「げ!!」

まさかここでばったり会うとは思っていなかった襲撃者（仮）

同じ学校の生徒というのはわかっていたけどリボンの色から3年生でまさか同級生とは思わなかった。

しかもアイドル研究部に向かう姿から関係者というのも想定外だ。

「うにゃあああ!!」

警戒した猫のように唸り、腕をぶんぶん振り回して、怯んだすきに部室に入って鍵を閉めた。

「部長さん開けてください!!」

「おい!誰かヘアピンか何か持っていないか!？」

「わ、私持っていますが・・・いったいどうするのですか?」

「見とれ」

花陽から借りた2本のヘアピンを伸ばし、それを鍵穴に突っ込んだ。

所謂ピッキングってやつだ。

以前講習の一環でアナログからデジタル式のカギまで開けされたことがあった。

まさかこんなところで役に立つとは思いませんでした。

「よし！開いた!!」

俺がドアを開けたところには既に窓から逃げた後で部室の中は人っ子一人もいなかった。

「みんなはここに残ってくれ。凜！行くぞ!!」

「了解にゃ!」

μ、sの中で最速ツートップの俺たちから逃げられるなんて思うなよ。

研修の一環である警察教官が言っていた言葉がある

『地球は・・・丸いのだ』

つまりどれだけ逃げようが死ぬ気になって地の果てまで追つても捕まえて来いという意味だ。

そんな教官から訓練受けたのだ！地獄の底まで追っかけてやる!!

〈数分後〉

「凄いA—RISEのポスターだ」

「こっちには京都のスクールアイドルのポスターがあるよ」

あの後アルパカ小屋で気絶していたアイドル研究部部长さんを確認し、改めて部屋に入って明かりをつけると目に入ったのは部屋中に並べられていたアイドルグッズの数々だ。

ここまでいろんなものがそろっていると壮観だな。

「勝手に見ないでくれる?」

不貞腐れた顔で言っているけどどことなく顔が赤い。

「こ、これは!!で、伝説のアイドル伝説DVD全巻ボックス!持っている人初めて見ました」

「そ、そう」

花陽は今まで見たことのないほど目を輝かせていた。

「……何だろうこのパターンってやな予感しかしないのは

「これってそんなに凄いの?」

「伝説のアイドル伝説とは各プロダクションや事務所、学校などが限定生産を条件に歩み寄り、古今東西の素晴らしいと思われるアイドルを集めたDVDボックスで……以下略……」

いつもの気弱なで引つ込み思案な花陽ちゃんが一転して凄イマシンガントクで行っているが正直ついてこられない。

やっぱり嫌な予感は当たった。

周りにいる人らも花陽ちゃんのテンションに啞然としていた。

何?!この子もアイドルになるとスイッチ入る系!?

「通販、店頭ともに瞬殺だったけど2セットも持っているなんて」

「家にもう一セットあるけど」

「本当ですか!!」

部長の一言に更にヒートアップした花陽ちゃん

おい!誰か止めてくれ!!

あんなに気弱だけど天使だった花陽ちゃんはどこに行った!!

「じゃあみんなで見ましよう!!」

「ダメよそれは保存用」

「きゃび——!!」

部長の止めの一言に撃沈し、ようやく落ち着いた。

この子……アイドルの事になる時のテンションの落差が激しすぎる。

取りあえず花陽ちゃんの慰めは凜ちゃんたちに任せるとして……

「改めましてアイドル研究部さん！」

「にこよ、矢澤にこ」

「初めまして矢澤さん。私はスクールアイドル？、sのマネージャーの朝霧悠斗です」
「知っている。テスト生でよく話題になっっているわ。大体は希からある程度話は聞いている」

既に希から話はあると言っているみたいだけど、それじゃ生徒会室を出たあの顔の理由が分からない。

「でしたら」

「お断りよ」

やっぱりね。

この間の言動からそうじゃないかと予想していたけ

「そもそもあんた達……ちゃんとキャラ作りしている？」

「キャラ作り？」

「そうよ！お客さんがアイドルに求めているのは楽しい夢の時間でしょ！！だったらそれにふさわしいキャラってものがあるのよ」

確かに矢澤さんの言う事に一理ある。

アイドルはいついかなる時にも最高のパフォーマンスをしなければならない。キャラ作りというか・・・スイッチの切り替えとすべきかな。

「・・・つくしようがないわね。私が一例を見せるわ」

あゝ矢澤さん俺たち何も言っていないのですが。

こいつも嫌な予感しかししない！

「にっこにっこにー！あなたのハートににっこにっこにー！笑顔届ける矢澤にっこにこー！にっこにーって呼んでラブにこ!!」

これはどういうリアクション起こせばいいのだ？

確実に大気にヒビが入って梅雨でじめじめしていた部室が一気に氷点下まで下がった。

矢澤さんの言うキャラ作りには理解できる。

実際、さつきまで貶していてズキズキした空気が変わったのが分かる。

理解で来るけど・・・

「どう思う?」

もはや俺の理解の範疇を超えたため同性である穂乃果たちに意見を請うてみたが……みんな俺と同じ顔をしていたので期待は出来なさそう

「これはキャラというより……」

「私は無理」

戸惑うことり、完全に呆れる真姫。

「フムフム」

「ちよつと寒くないかにや〜?」

真剣にメモを取る花陽と矢澤さんにプラスチック爆弾発言した凜。

つて!!凜今の発言は不味いだろう!!

「ちよつとそこのあんた!!今寒いと言った!?!」

ほら〜完全に爆発したじゃないか!

「とにかく話はもう終わりよ!出て行って!!」

有無を言わさず全員まとめて部室の外に締め出された。

「やっぱり追い出されたみたいやね」

「希……」

「やっぱりってどういう事ですか？」

希は「ここでは言いにくそうだな。」

「ちよつと河岸を変えよう」

「ええで」

「みんなは先に帰つといて」

「分かりました」

「この話ちよつと長丁場になりそうなきかい。」

「失礼します」

「希!どこに行つて・・・悠斗!?!どうしたの」

「・・・・・・2人に質問したいのだけど矢澤さんに一体何かあった?」

「実はにこつち・・・一年生の時にスクールアイドルを結成していたんや」

「矢澤さんが!」

「今はもうやっていないけど」

確かにあの部室には俺たちを覗いて矢澤さんしかいない。

「一体何があった」

「1年生の頃、同じ思いでスクールアイドルを結成したのに、アイドルとしても目標が高すぎて一人止めていき・・・そして一人もやめて・・・気が付いたら自分一人に

なっても諦め……」

「ふざけるな!!」

希が言い切る前にブチ切れた。

「そいつらどこのクラスだ!!俺が社会の辛さを教えに行ってくるさかい!!」

目標が高かったからついてこれなかった!?

「落ち着いて悠斗!!」

「これが落ち着いていられるか!!」

どんだけの甘ちゃんなんだそいつら!!

本当の理不尽という名の地獄を教え込んでやる!!

「落ち着いて!!」

絵里に思いつき肩を掴まれる形でようやく頭が冷えた。

「………済まなかった」

「ええよ」

「そのこともあつて悠斗には言えなかったの」

確かにこれはおいそれと言えるモノじゃない。

あまりにも彼女の心の傷が深い。

「だから、あの子たちが羨ましかったのとちやうんかな?」

歌やダンスにケチをつけるのは興味がある裏返しだ。

「なかなか難しいね」

あの子の希望が高すぎるがゆえに孤立してしまった

「昔、ここつちから聞いたことがあるのやけど」

「アイドルは笑顔を見せるのが仕事じゃない！お客さんを笑顔にさせるたって言ってるね」

「……負けたな」

そこまでの理論まで思いつかなかった。

「一年の頃からずつと見ていたからね」

絵里たちに迷惑かけた詫びとして自販機で飲み物を奢った後急いで店に向かった。

また外には大ぶりの雨が降っていてそれが心に沁みてくる。

「みんなお待たせ」

「悠にいどうでしたか？」

「うん……ああ」

「あまりハッキリしないのね」

「……分かったありのまま話す」

希から聞いた話を何にも骨張することなく話した。

「……そんなことがあったのですか」

「ああ。俺も聞いて言葉を失ったよ」

「……ここまで精神的にキタのは久しぶりだな。」

「なかなか難しそうですねにこ先輩」

「そうだな。あいつ自身の理想が高くて、今の俺たちでは到底納得できるレベルではない」

「そうかな？にこ先輩はアイドル好きなんでしょう！それでアイドルにあこがれて私たちにも興味をもっているよね？」

「まあ……いちやもんをつけているという事は興味あるの裏返しだからな」

「それって、ほんのちよつと何かあれば上手くいきそうな予感がするんだけど」

「でも声をかけたら逃げそうですね」

「お!？」

「何か思いついたの!？」

「逃げるのならその状況を作らないようにすればいいんだよ!」

海未の一言で妙案が浮かんだ。

「でも具体的には？」

「それは」

「強行だ!!」

急いで頭に浮かんだ作戦をまとめそれぞれにメールで送った。

翌日昨日と同じピッキングでアイドル研究部の中に入って準備を始めていた。

もう俺のピッキングについて誰も突っ込まなくなってしまった。

・・・色々と不味いな!

「よし!後は昨日メールで知らせた通りの手はずで頼む」

「[[[[はい!]]]]」

「何だかウキウキしているのは気のせいかしら？」

俺も気のせいと思いたいのだが真姫から冷たい目線で見ているのを。

「冷たいこと言うなよ真姫!こういう作戦というのは僕のロマンなんだよ!」

「イミワカンナイ」

意味分らないとか言うなよ!!

つと無駄口たたたいている間に廊下から一人でこつちに歩いてくる人の気配がする。

もうそろそろだな！

「「「「お疲れ様です！」「」」」」

「な!？」

何でいるのよ!?!みたいな顔をしているな!

良し! 第一段階成功

「お茶です、部長」

「部長!？」

驚いている顔を無視して次々に案件を持ってこさせた。

「部長、下半期の予算表になります!」

「ところで部長、次の曲の相談したいのですが・・・」

「やはり次は正統派アイドルを意識した方がいいのかなと思います」

「こんなので押し切れると思っっているの?」

「何を勘違いしているか分からないが私たちはただ単に相談しているだけです。音ノ木坂アイドル研究所所属のμ'sの7人が歌う次の曲を」

「7人・・・」

「ここ先輩！」

「………厳しいわよ」

「分かっています」

「分かっているじゃない!!あんたたちは甘々なの!そこにあんたもマネージャーならもつと勉強なさい!!全然なっていないわ!!」

俺を含めて全員を辛口評価で指をさした。

「いい?アイドルっていうのは笑顔を見せる仕事じゃない!笑顔にさせる仕事なの!それをよ——く自覚しなさい!」

「お!?みんな!雨がやんでいるぞ!!」

外を見ると土砂降りだった雨がいつの間にか止んでいた

「それじゃ屋上で練習よ!アイドルの何とやらを叩き込んであげるわ」

「………はい!」

6人は屋上に向かったがにこが棚を探つて机の上に大量のテキストを置かれた

「それとあんたには私たちが練習している間にコレを読んでおくこと。いいね!!」

にこが部室を出るときに止まった。

「そ、それと………この間は悪かったね」

「うん？ナンノコト？」

思いつきりとぼけた様に行ってみた。

正直あの時の出来事はもうなかったことにした。結果的に危害を受けたのは俺だけだし……今後の事を考えるともはや些細な事だ。

「え？」

「別にあの時何にもけがを受けてないし皆もけがを負っていなかった……違った？」

「あ、ありがとう／＼／＼」

別に礼を言われる筋合いがないのだが。

この資料は本当によくできているな！

矢澤……にこの独自のアイドル理論からアイドルの歴史……そしてそれぞれのライブの所感。今の俺に必要な情報が全部入っていた。

部室におつても屋上で彼女たちの練習声がよく聞こえる。

窓を覗くとまるで俺たちを祝福してくれるように雲の隙間から太陽が照らされてきた。

15 頂上決戦

「取材？」

「そうやで」

にこが加入してさらに数日後、俺は今生徒会室で資料を整理していた。

絵里や希を始めとする生徒会の面々にはμ、sの活動にいろんな便宜を図ってもらっているのが定期的な仕事を手伝っている。

「今各部活を紹介するビデオ製作中なのだけどぜひμ、sもお願いしたいの」
「それなら断る理由はないよ」

恥ずかしがり屋の海未は拒否るかもしれないがこれもμ、sの為だ！

「ここは心を鬼にしないと!!」

海未が応じるのが先か！俺の命が尽きるのが先か！

さあ！張った張った!!

少しでも最悪の未来に明るく言ってみただけどやっぱり虚しさしか残らなかった。

「それに取材が終わればカメラを貸すこともできるしそれでPVが作れる」

「PV!? そうだ! 今のμ、sの動画は3人だけの時しかないんだ」

結局START: DASH!!の投稿者は長い時間かけていろんな手を尽くしたが結局誰かは分らず仕舞いに終わった。

これ以上搜索しようものならプロバイダーの照会が必要になってくるけど、別に害も何にもなかったし、むしろμ、sが知られる要因の一つになったわけだしムキに探す必要もないと言うことで一旦打ち切った。

そして始まったμ、sのインタビュ。ナレーションは生徒会副会長希の提供でお送りします。

「スクールアイドルとはいえ一学生である」

トップバッターはμ、sの発起人である穂乃果!

「プロのように時間外に授業を受けたり、早退が許されることはない」

最初は真面目に授業を受けている穂乃果であったが時間が経つにつれて肩が下がったりあくびをし始めた。

「よって……こうなることになる」

場面が切り替わってとうとう睡魔に勝てなかった穂乃果が机に伏せるように寝てしまった。

「昼食をとり……再び熟睡」

穂乃果はパンを頬張り……再び夢の世界に入ってしまった。

普段から心配していたけどこれを見された以上心配以上に情けないという気持ちが勝ってしまった。

「そして先生に見つかるといふ一日であった」

最後は先生に起こされて机ごとひっくり返されるといふオチで終わった。

「これが駆け出しのスクールアイドルとは言え、まだ若干16歳である高坂穂乃果のありのままの姿である」

「ありのまま過ぎるよ!」

希がナレーションで絞めたけど穂乃果の抗議が入った。

「とかいいつの間撮ったんだ?」

確かこの間来たとき、カメラアングルから穂乃果の横の席だけど確かその席には……
「上手く取れていたよ！ことり先輩」

「ありがとう〜コツソリ撮るのドキドキしちゃった!!」

やっぱりことりが隠し撮りしていたみたいだ。

ことりの中にいる天使……きちんと仕事しなさい!

「普段からだらけているからこうなるのです!これを機に……」

「さすが海未ちゃん!」

今度は場面変わって今度は弓道の練習していた海未が映し出されていた。

弓を放つ姿はもはや一つの芸術作品のように美しかった。

「真面目に弓道の練習……を?」

そばにあった姿見の前でアイドルスマイルを作っていた。

「プライバシーの侵害です〳〵」

顔を真っ赤にした海未がカメラのモニターを手で遮り電源を落としていた。

「そうそう実は悠斗の分もあるんやで」

「え!?何で!!俺って関係ないんじゃない?」

「そうなんやけど。来年度から入ってくる男子生徒の為に是非と理事長が言っていて

な」

あの親鳥!!

娘同様なかなかエグイ事してくださいな!!

「今現在この音ノ木坂学園でテスト生として居る唯一の男子生徒」

再び希のナレーションから始まった俺の紹介。

「成績優秀・運動神経抜群」

俺が授業中の風景や体育でバスケをやっていた時にダנקを決めたシーンが映し出されていた。

っつかいつ撮ったんだよ希の奴!!

授業中とはともかく体育は同じチームだったよね!?

しかし改めて見ると、女子生徒に囲まれている俺って周り

「そして紳士でもある」

場面変わって俺が小さな女の子が風で帽子が飛ばされたのを拾ったけど・・・

「だけどそんな彼にも弱点があった」

しかもこのシーン嫌な記憶しかなかった!

「最後までかっこよく決められないことだった」

立ち去ろうとした瞬間たまたま開いていたマンホールの中に悲鳴と共に落ちていった。

「これが音ノ木坂学園スクールアイドル、sのマネージャーである朝霧悠斗の意外な一面……」

「ふん!!」

希のナレーションを言い切る前にカメラの破壊を試みたが、寸前のところで交わされた。

「ふう〜危なかったやね」

「お嬢ちゃん! そのカメラ超越しんさい」

カメラを破壊し損ねて希と対峙していたら、にこが慌てて部室に入ってきた。

「し、取材が来ているって本当!？」

「もう来ていますよ! ほら」

手でカメラの方を指すといきなりスイッチが入りアイドルモードになったにこが……

「にっこにっこに〜! みんなに元気ににっこにこにこにの矢澤にこです! え〜つとお、好きな食べ物はある〜」

「ごめん、そういうのいらわないわ」

希が呆れた声で止めた。

でも本当にスイッチの切り替え早いな。心底にこのアイドル論には感服するわ。

ズレまくっているのは否定しないが。

「ええ？」

「部活動の生徒たちの素顔に迫る！……って感じにしたいんだって」

「素顔？ああ、オツケー、オツケー！そっちのパターンね！ちよくと待つてね！」

凜の説明を受けてにこは俺たちに背中を向けるや否や突然髪を結んでいるリボンをほどいていく。

あ！これって嫌な予感しかしないや……

捕まる前に戦術的撤退の提案にみんなは乗り、次々と部室から出て行って中庭に向かった。

今頃はこの悲鳴が部室に響いているが気にしないようにした。

「た、タスケテ」

「おいおい第一声がそれかよ」

カメラを向けられて緊張のピークに達している花陽。

「緊張しなくても平気！」

凜の後押しもあつて花陽のインタビューは終わった。

「私はヤラナイ！」

次のインタビューに移ったが拒否の一点張りしている真姫。

これはもう照れ隠しのツンデレではなく本気で嫌そうにしている。

「ええんよ。どうしても嫌なら無理にインタビューしなくても」

希は凜にアイコンタクトしてそのままカメラを回した。

何する気だ？

「真姫だけはインタビューに応じてくれなかった。スクールアイドルから離れればただの多感な15歳。これもまた自然な……」

「ちよつと！何勝手にナレーションつけてるのよ／＼」

見事に希の誘いに引っかかり、いやいやインタビューに応じた。

そして凜のインタビューをして終了。

「花陽！ちよつと遅れているぞ。凜は先走り過ぎている」

インタビューが終わって俺たちは屋上でダンスの練習に入った！

「にこー！この間言ったステップ間違えているぞ」

「分かってるわよ!!」

そういういつも実際に踊ってみるとイメージ通りには動

「穂乃果！もう疲れたか？」

「まだまだ!!」

「ラスト!!」

そして最後の決めポーズをして終了。

「かれこれ1時間ぶつ通しでダンスのしてやつと休憩。全員が息上がっているのに文句言う人は誰もいなかった」

「どうだ？」

「さすがに神社でやっている基礎練習に比べたら迫力あるね」

7人になった今、さすがに神田明神でダンスの練習ができるほどのスペースの確保が難しくなったので神田明神は基礎練習、学校ではダンス、発声練習完全に2つに分けた。

無論これ以外にも衣装の選定、作詞作曲作成とかも含まれている。

「前から思っていたのやけどμ、sのリーダーって穂乃果ちゃんだよな?」
「そうだ」

「それで練習の指揮を執っているのは悠斗や海未ちゃんなんよな? 普通リーダーが練習の指揮を執るもんじゃない?」

今のμ、sのリーダーは決起人である穂乃果になっている。

練習終了後この話をしたらにこの部長権限で緊急会議が開かれることになった。

「リーダーには誰が相応しいか……私が部長についた時点で一度考えるべき」

部室に緊張感が走る。

「私は穂乃果ちゃんがいいと思うけど」

「ことに同じく」

俺とことりは穂乃果を押ししたは……

「ダメよ! 今回の取材でハッキリしたでしょう!?! この子はリーダーに向いていない」

「それはそうね」

「にこと真姫はこぞって否定意見。」

確かにあのぐうたらでは示しがつかないのは同意見だけど・・・

「これを機会にはつきり決めましょう！PVの撮影も控えているし」

「確かに」

今練習中のダンスはμ'sの新曲。

元々1年生組が入った時から作っていたもので、このあいだにこが加入した時期に完成した。

ビデオカメラも生徒会から借りられてとは言え早めに済ましたことはない。

「リーダーとは！第一に誰よりも熱い情熱を持ってみんなを引っ張っていけること！次に！精神的支柱になれるだけの懐の大きさを持った人間であること！そして何より！メンバーから尊敬される存在であること！この条件を全て揃えたメンバーである事から・・・」

「海未先輩かにゃ？」

「何で!?!」

恐らくここで自分と言おうと思ったけど、ここにはそんな空気を壊す天然の破壊神がいること忘れたのかな？

浅はかなり。

「私がですか!？」

「そうだよ!海未ちゃん向いているかも!リーダーに」

「穂乃果はそれでいいんですか?」

「え?なんで?」

海未問いにピンと来なかったのかの穂乃果は首を傾げる。

「リーダーの座を奪われようとしているのですよ?」

「それが?」

「何も感じないのですか?」

「でもみんなでも、sをやっていくは一緒でしょ?」

確かにそうだけど何かが違うぞ。

「でもセンターじゃ無くなるのかもですよ?」

「おお!そうか!」

穂乃果はやつと納得したらしく、手を打ち少し考えた後・・・

「まあいいか!!」

「「「「ええ!?!」」」」」

数多のアイドルがセンターの座を巡って熾烈な争いをして中自分で放棄するとは!

まああんまり深く考えないところが穂乃果らしいけど・・・

「待っててください!! 私には無理です!」

「まあ・・・センターになったら真ん中に立つわけだし。そんな所に大の恥ずかしがり屋の海未が務まらないからな」

「めんどくさい人」

おい!! そのツンデレお嬢様! めんどくさいって一言で片づけるな!!

これでも当初に比べたら大分マシになったのだぞ!!

当初に比べてな!

大事なことなので二度と言いました。

「じゃ・・・ことり先輩は?」

「ことりもリーダー向きじゃないだろう。どちらかというと縁の下の力持ちだし」

「かといって一年生がリーダーやるわけにはいかないし」

「困ったね」

「仕方ないわね」

ここはなんか妙案が思いついたみたいだけど正直嫌な予感しかしないからここはス

ルー。

「やっぱり穂乃果が良いと思うぞ！ 実際今日まで回っていたわけだし」

「でも、さっきの取材見たでしょう？ あの体たらくを外に発信するわけにはいかないよ」
みんなの同じ気持ちだったのかにこの発言を華麗にスルーしてそのまま議論を続けていた。

「それじゃ・・・悠にいはどうかな？」

「それ・・・一瞬考えてみたけどそれじゃセンターの問題が残ってくる」

「それじゃ先輩はじよ」断る!!「・・・まだ言っていないのにや・・・」

何が悲しくて女装しなくちゃいけないんだ！

「し——か——た——な——い——わ——ね——!」

「嫌いぞーにこ!!」

メガホンに使わずにちゃんと聞こえているから。

お前さんの案はどこかズレているからみんなあえて触れてないようにしているだけだからからさっさとしまえ!!

取り敢えずこのままじゃ平行線しかならないので、にこの提案で秋葉原にあるカラオケ屋に俺たちは居た。

「歌とダンスで決着をつけようじゃない！」

「歌とダンスで？」

「その通り！一番歌とダンスが上手い人がセンター！これなら文句ないでしょう」
シンプル且つ潔い。

確かにこの方法なら後腐れなくきれいに収まる。

にこにしてはずいぶんまともな意見だな。

「ふっふっふっ……高得点が出やすい曲のピックアップは既に完了している！これで次のリーダーの座も私に……」

前言撤回

やっぱりロクなもんじゃなかった。少しでも見直した俺がバカだったよ。

「ふう……緊張しました」

最後の海未が歌い終わって、みんなの平均スコアが90点越えを記録した。
毎日発声練習していたおかげで俺も一緒に歌って92点を出すことができた。

「いっつら化け物か!!」

にこ先輩はあり得ないという顔をしていた。

だろうな日頃の練習の成果の賜物だけどこの記録は壮観だな。

カラオケでは決着がつかなかったので一旦出て、次に向かったのはゲームセンター。

「次はこのダンスゲームの最上級モードで勝負よ!!」

これもまたにこが指定しているあたりろくなもんじやないと一瞬で悟る。

「プレイ経験ゼロの素人がいきなり挑んでもまともな点数を出せるわけがなわ!!カラオケでは焦ったけどこれなら」

だからそんなあくどいことを考えていると・・・

「す〜い」

「なんかできちゃったにや!」

穂乃果のほめたたえる声が聞こえてふと振り向くと凛がプレイを終えたばかりだったようで、モニターにはハイスコアのAAの文字が出ていた。

「嘘でしょう・・・」

そんな浅はかな考えをやっているからもういう事になるんじゃない!

にこが落ち込んでいるのを無視してそれぞれのスコアを集計してみるとダントツと言っているほどの差がなかった。

「ここまで差が付かないとは・・・」

改めて、sメンバーの高スペックには驚かされる。

「だってついこの間まで普通の学生だった彼女らがここまで成長しているって感無量だな。」

「ぐぬぬ！こうなったら最後の手段よ！」

そう言つてゲーセンを出て表通りに出た俺たち。

「歌とダンスで決められなかった以上オーラで決めるしかない」

「オーラ？」

「そう！アイドルとして何か人を惹きつける魅力……今一番必要といつても過言ではない」

確かに一理ある

たとえ無茶苦茶な性格けど付いていける魅力なものは確かに存在する。

「理解はできるけど、どうやって競うんだ？」

「これさ!!」

「これつてμ、sのチラシ？」

「そう！これを誰が早く配り終えるかが——」

「にこ……言い終わる前に始めちゃっているぞ」

「何で!?!」

みんながにこのルールを聞く前にそれぞれチラシを取って勝手に始めていた。

おまえらもう少し部長を尊敬してやりんさい。

にこの最終案であるμ、sのチラシ配りを試みたけど結局大差なく終了した。

どこか苦手な所なら必ず別の要素で補っている。

改めてμ、sの高スペックというのを知った。

「結局どうなのさ〜」

一旦学校に戻って話は最初からの振り出しからスタートした。

「じゃあ・・・無くてもいいんじゃない?」

「「「「「ええっ!」」」」」」

「無くてもいいってどういうことだよ穂乃果?」

「だってリーダーいなくなつたって練習してきたでしょ?それに歌だつてちゃんと歌つてきたし」

「だけどリーダーがないグループなんて聞いたことないぞ!それにセンターだつてど

うするんだ？」

「それなんだけど・・・みんなで歌うってどうかな？」

「みんなまで？」

「ここに先輩が穂乃果に疑問を投げかける。

「他のアイドルを見て思ったんだ。なんかね、みんなで順番に歌えたら素敵だなっておもったの！」

穂乃果は穂乃果なりにみんなのために考えてくれていたんだなと俺は少し嬉しく感じた。

「確かに今の編成とカメラアングル変えるだけで実現は可能だけど」

「それじゃ！それでいいかな？」

「本当にリーダーがいなくてよかったですか？」

「もう決まっていますよ。そうですね！悠にい」

花陽がリーダーいない事に不安を覚えたが

「ああ、色んな事に怯まずにただまっすぐに・・・自分の正直な気持ちで進んでいくのは穂乃果にしかできない」

本当に言葉や言動にどんどんあいつに似始めたな
「さあ！始めよう!!」

穂乃果の元気な声で練習が始まった！

16 開催

みんなが来るまで部室でのんびりしている所に花陽が慌てて入ってきた。

「みなさん大変です！遂に今年のラブライブの開催が決まりました」

「本当か!!」

俺は花陽ちゃんからの朗報に椅子から飛び上がった。

「花陽、ラブライブって何？」

無論スクールアイドル詳しくない一年生組が首を傾げた。

「花陽、説明してやりんさい」

「分かりました。ラブライブというのは所謂スクールアイドルの甲子園です。まず8月上旬に西日本東日本の2つのブロックに分かれておりそれぞれ上位20位が予選に出場が出来る、そして各区ブロック上位2位のみ中旬に行われる本選に出場できるシステム全国のスクールアイドルナンバーを決める大会です」

「へえ〜」

初めて聞く大会概要に興味津々に聞いているりんまきペアー。

「東京でいったら東日本ブロックにはいるからそこで20位に入ったら予選出場という流れらしい」

「スクールアイドルをやっているものとして、目指すのも悪くはない」

「そうはいつでも現実は厳しいわよ」

「確かに」

ラブライブ出場するにはまず予選参加枠の上位20位に入らないといけない。1000近くあるグループがその限られた枠を争うのだ！ましてや？、sはまだ出来上がったばかりで地盤も出来あがっていない。

「1位はA—R—I—S—Eでほぼ決定ですし・・・今？、sのランクってどうなっていた？」

この間発表した『これからのSome day』を投稿した直後はまだ3桁の順位で到底大会に出場できるわけではない。

「みんな見て!!順位が上がっている」

「本当!?!」

「どれどれ?」

パソコンのキーボードを操作してサイトにアクセスしてみると・・・

「本当だ！急上昇のピックアップスクールアイドルに選ばれている」

「コメントにも新しい曲かつこよかったです！7人に増えたんですね！カッコいいマネージャーがいて羨ましいですとか」

「え？俺が格好いい？」

あの映像も公開されたことで本格的に音ノ木坂学園が来年度から男子学生募集が内外に示された。

「こらー！そこー！笑うんじゃない！！」

「そういう事ね」

「何かあつたの真姫？」

真姫はこの間の練習からの帰りの時に、校門から出たときに？、sファンの女子中学生の出待ちを受けたみたいだ。

その女子中学生は真姫と写真撮ってほしいと言われたけど反射的に断つたけど、余りにも落ち込んでしまつて結局カメラ撮影に応じたらしい

「出待ち!?!」

「嘘！私・・・全然ないよ！」

μ、sのリーダーにして絶対的なセンター（多分）の穂乃果が一切出待ちがなかった

ことに落ち込んだ

「そう言うこともあります！アイドルというのは残酷な各社社会でもありますから、いつも気弱な花陽から思えない発言が次々と出てきた。」

「でも写真だなんて、真姫ちゃんも変わったにや！」

「わ、私は別に／／／」

言葉で否定しているけど頬まで真つ赤に染まっていた

「ああー！赤くなつたにやー！」

「ふんっ！」

真姫の照れ隠しチョップが調子に乗った凜の額を直撃する。

「痛いよお〜！」

「あんたがいけないのよ」

まあ、調子に乗った凜もいけなかったけど以前に比べたら大分マシになったけど相変わらず素直じゃないな。

「みんな聞きなさい！！遂に開催されるよ！！」

思いつきりドアを開けて超ハイテンションのこが入ってきた。

にこの言いたいことは大体わかっている。

「ラブライブですか？」

「……知っていたの？」

「すまん」

凄まじい罪悪感が襲ったけどここは運がなかったという事にしよう。

皆が集まったところで今年のラブライブの概要を説明し始めた。

「さて、ラブライブに正式出場するにはいくつか課題がある。まず7月31日までランクを20位に上げないといけない。次に直後のある予選、そしてお盆にある本選。以上の事から連続してライブが行われるのであるため本選出場という大前提練習しないと間に合わない」

「でもどうして今年はこんなに詰めているのですか？」

「ちよつと調べてみたのだけど本来の開催日時に今年は会場に使われている晴海埠頭にアルテールス練習艦隊が訪れる予定みたいでそれで変更になったらしい」

「でもそういうのって普通軍港じゃない？」

「いつもならそうなんだけど、今年はいろいろ事情があるみたい」

「そういえば悠にいのお父さんから何か言っていますでした？」

「いや」

うちの父さん親バカで子煩悩だけどそういうところはきつちりしているからな。

それにレセプションの都合もあるし一概に言えないところもあるからね。

「一応参加するチームにはこの申し込み用紙を本部に送らないといけない。また学校の規則では大会に出る場合は生徒会に必ず申請を出さないといけない」

「それじゃ、みんなで行こう!」

「失礼します」

「あら? 悠斗にみんな? どうかしたの?」

「もしかして立て込んでいた?」

机に書類がまとめて置いてあった。

「いいえ。ちょうど生徒会会報の準備が終わったから休憩しようと思って」

「生徒会会報って?」

「午後からこの付近の生徒会長が集まって意見集会を行うの」

「それは大変だね」

俺はラブライブ出場に関する一通りの資料を絵里に渡した

「へえくラブライブね」

「ああ、資料の通り予選の段階でメディアに大きく取り上げられる。これを利用することで音ノ木坂学園のアピールにつながると思う」

「……うん運営会社も問題ないし、書類も不備もない。生徒会は受託の方針で進めます」

絵里の承認でみんなが喜んだ

よっぽど編な事が起こらない限りはほぼ確実に出場できる！

「ただし条件があるわ」

条件という言葉に俺たちは息を飲んだ。

「スクールアイドルとはいえ一学生です。勉強が疎かになつてはいけませんので、今度の定期試験で一人でも赤点を取ったらエントリーは認められないわ」

「なんだ！その程度か」

何事かと思っただけごく普通の当たり前のことに肩を透かした。

後ろでは壁に手をついてうつむいている穂乃果と床に崩れ落ちている凜、にこの三バ

力を見るまでは……

大丈夫だよね？

「大変申し訳ございません」

「ません」

部室に戻ってまずはア穂乃果とバカ凜の謝罪から始まった

「小学校から知っていたけど相当不味いのか？」

「数学だけだよ」

「7×4？」

「にじゅう……ろく？」

「……重症だな」

思わず頭を抱えてしまった。

昔から数字系は苦手だったのは知っているとは高校になってもこのレベルは泣けてくる。

けどマジでヤバイな。

これは廃校派のやつらにとって格好の攻撃材料なりかねないぞ。

「凜は？」

「英語！凜はどうしても英語だけ肌に合わなくて」

「まあ・・・確かに難しいな」

俺はほぼ半強制で学ばされたから

「だいたい何で凜が英語を学ばないと・・・」

「言い訳はいいからちゃんとやりなさい!!」

「は、はいにや!!」

凜の言い訳じみた言葉に真姫がキレた。

「これでテストが悪かったせいでエントリー出来ませんなんて恥ずかしすぎるわよ!」

「だよね・・・」

全く真姫の意見に同意ですよ。

「全くその通りよ、あ、赤点なんか絶対取っちゃダメよおく？」

「そういうにこは？」

「だ、大丈夫だよ！もうさつきから解けまくりよ！」

済まないが教科書を逆さ読みしている現状では全く説得力はないぞ！

「こうなつてしまった以上どうにかするしかないだろう！試験まで練習を控えて海未とことりで穂乃果の勉強を見て、花陽と真姫は凛の勉強を見てもらつて苦手科目の底上げを図ろう!!」

「にこ先輩は？」

「にこは俺「うちも担当するわ」・・・希」

いつの間にか部屋にお邪魔していた希が言った。

「言っているでしょう！にこは赤点の心配なんか・・・」

にこに気づかれないように背後に忍び寄り、そのまま胸を鷲掴みした

「本当の事言わないとワシワシするよ？」

「すみません。教えてください」

「はい！よろしい」

あのにこを一撃で撃沈判定を下しただど!!

一体あの2人の過去に一体何があつたんだ!

・・・気にしたら負けという事にしよう

「それじゃ海未・・・後任せた」

「あら？悠にいどちらに行かれるのですか？」

「ちよつと取りに行くものがあつて、また後で合流するよ」

学校を出て秋葉原駅に向かった。

もう秋葉原にもラブライブ開催ポスターであふれかえっていた。これを見ると街全体がラブライブに向けて臨戦態勢に入ったな。

「むううー!!」

「よ、絵里」

「あ……悠斗」

今日は生徒会会合で午後から休んでいた絵里と秋葉原駅で偶然会った。

何かむくれている？

「今日はもう帰りなの？」

「いや、今日は空港に取りに行くものがあつて早めに抜けた」

「取りに行くもの？」

「国際便なんだけど、手続きもあるから空港に直接来てくださいって言われて」

取りに行くものがモノだけに宅配便は不可だ。

「私も一緒に行ってもいい？妹が今日帰国するの？」

「妹さんって前にロシアに住んでいるって言った子？」

「そうよ！本当は4月の頭に戻る予定だったんだけど書類の手続きが長引いて
そこから一緒に環状線と空港線を乗り継ぎで空港に向かった。」

「へえ、父親は大学の教授何だ！」

「そうなの、父は歴史学でその傍らにロマノフ朝家の研究もやっていて母はその助手。
妹の亜里沙も住んでいたけど高校受験を機に日本に住みたいって言ってきたの」

「元氣そうに振舞っているけどどこことなく落ち込んでいるようにも見える。」

「何かあったの？」

「別に……何ともないよ」

「意地でも言わないつもりだな？」

「嘘こけ！絵里が嘘をつくとき必ず左手で右の二の腕を掴む癖があるぞ」

「嘘!!」

「嘘だよ」

「……え？」

「そんな癖、無いに決まっているだろう。少し引つ掛けただけだよ」

その反応からみてやっぱり何かあるみたいなのは確かだ。

「……はあ、あなたも物好きね」

観念したのか語り出した。

「さつき生徒会会報滞りなく終わって帰る準備をしていた時にUTX学園の人に学園の悪口を言われたの」

「!？」

「確かに今の音ノ木坂学園はUTXにいろんな分野で負けているけど」

少しずつしゃべるにつれて涙が出ていた。

初めて見る彼女の涙に我慢できず俺は絵里を抱きしめた。

絵里は驚いたけど解こうとはしなかった。

「ごめん、今はこのぐらいしかできなくて」

「ううん。ありがとう」

『まもなく羽田空港国際線ターミナルです。国際線のご利用の方はここで御降りください』

「それじゃ私はここで」

「ああ、それじゃ」

羽田空港国際線ターミナル駅で絵里と別れた俺はそのまま乗って国内線ターミナル駅で降りた。

．．．．．けど

「俺．．．電車の中でなんちゆう事をしたんだ!!」

たまたま人がいなかったのが幸いしたけど、もしそれを取られてSNSにアップして海未が見つければたら．．．．

というか日本に戻っても命の危機があるってどういう事!?

国内線駅から歩くこと数分空港敷地内にある警視庁東京空港警察署の中に入っていった。

「すみません私朝霧悠斗と申します。アルテールスから送られた銃火器類に荷物を取りに来ました」

警察署の中に入った俺は公安部に行き、大使館からもらった書類一式と免許を提示して、事務所の奥に案内された。

「これが頼まれていた一式です」

ケースの中にはアルテールス産の7.62mm小銃1丁と予備部品、常装薬弾の7.

62mm NATO弾と同じく357マグナム弾の予備弾が大量にあった。

俺が持てるのは刃物系と拳銃及び減装薬弾しか持っていない。以前アルテールス大使館に頼んでいた武器弾薬の発注品がようやく届いた。

モノがモノだけに送ることはできず直接出向いて所定の手続きを取らないといけなくなつた。

「しかし兄ちゃんいったい何者や？一般人がこれだけ揃えるなんてただものやない」
「まーあんた達警察が想像もできないことが世界にはいろいろあるという事さ」

中身を確認し終えて、公安の書類にサインして事務所から出ていた。
駅で電車を待つていた時、どうしても絵里が気になつて仕方がなかつた。

「ちよつとターミナル見学してからだけ帰ろう」

自分に言い聞かせて国際線ターミナルに足を運んだ。

「うーん・・・もう帰ちやつたかな？」

出発ロビーに来てみると絵里の姿が見えなかつた。

時間も時間だし帰ろうとしたその時案内板にプラチナブロンドの長い髪をした幼い少女がいた。

それだけなら気にする事はないのだが時折聞こえてくる鼻歌のフレーズがSTAR
T : DASH!!だ!

どうしてこの子を知っている!?

幾らまだμ、sが有名になったとはいえそれはまだ都内・・・ひいては日本国内だけ
なのに

「・・・あ!」

「よ、よお・・・」

「もしかしてμ、sのマネージャーの朝霧悠斗さんですか!？」

「そ、そうだけど」

「わわっ!本物だ!!」

目をキラキラ輝かせながら見つめてきたけどこんな場面・・・あいつらに知られた
ら・・・

『あれ?悠にい・・・穂乃果たちがお勉強してい』

『悠にい・・・勉強を監督している時によくそんな破廉恥な事をしますね』

『そんな節操のないゆうには・・・ことりのおやつにしちゃうぞ♪』

『悠センパイ酷いよ!! 凜たちはこんなに頑張っているのに幼女を誑かしているなんてにゃー!』

『え!? ま、まさか悠先輩にそんな趣味が!! ダレカタステテ〜』

『悠先輩……シネバイイノニ』

……もはや絶望しか視えてこない

「ごめん! 亜里沙お待たせ!!」

「絵里」

「お姉ちゃん〜」

「……………え!?」

まさか絵里本人と妹さんと鉢合わせするとは思いもしなかった。お互い顔を見合わせたがとりあえず俺たちはベンチに移動した。

「お待たせしました」

「サンキュー」

「ありがとう亜里沙」

妹の亜里沙ちゃんから買ってきてもらった缶を見てみるとおでんとデカデカと書か
れていた。

「おでん!?!」

「ごめんなさい、来たばかりでまだ日本文化に疎くて」

「いやそれはいいのだけど」

「ここは国際線のターミナルだぞ!!いくら日本自動販売機が有名なのは知っている
がもう少し常識のあるモノを置こうや!

「別の「いやこれでいいよ」いいの?」

外で飲むならノーサンキューだけど冷えている館内なら別に問題ない。

ただどここれだけは突っ込んでも変わりはないけどあえて言おう。

この国は色々とおかしい!

『ありがとう!それは最高の褒め言葉だ!!』

疲れているのかな?

どこからとなく天の声が聞こえてきたが幻聴という事にしておこう。

「あの子が妹さん？」

「ええ、妹の亜里沙よ。でも、まさか悠斗がまだいたなんて」

「ちよつと冒険心が擽つてな少しウロウロしていた」

「冒険つて……いったい幾つよ？」

「るっせー!!男はないつまででも冒険心を忘れない生き物なんだ」

「なにそれ」

少ししやべっただけで後は無言が続く。

「……………」

「……………」

き、気まずい!

本当なら遠目で見てひっそり帰る予定だったからなにしやべっつていいのかわからない。
い。

絵里も心なしか頬が赤く見える。

「お姉ちゃん変わりの飲み物買ってこようか」

「ううん。私が買ってくる」

この空気にいたたまれなくなったのか絵里自身が買い直しに行った。

当然俺と妹さんしかいないので絵里が戻ってくるまでしゃべっていた。

「へえ〜亜里沙ちゃんはスクールアイドルに興味があるんだ」

「はい！同じ学生がアイドルと同じようにステージで輝いているのが本当に好きなんです!!」

嬉しいこと言うじゃないか！

お兄さん泣けてくるぞ！

「そういえばお姉ちゃんバレエは今もやっているの？」

「バレエ？」

「うん！お姉ちゃんってバレエがとても上手なの」

そこそこ互いのプライベートを話す仲だけどそんな話は一度も聞いたことがない。

「ごめん。最近来たばかりで全然知らないや」

絵里が飲み物を買ってきて戻ったところで・・・

「それじゃ俺はここで」

「ええ、それじゃまた明日」

「バイバイ」

恐らく絵里本人聞いても交わされるだけだしここは大親友に聞いて見よう。

空港線と環状線を乗り継いで再び秋葉原に戻った。

「にこ♪わかんない〜」

「それじゃ・・・お仕置きやね」

「こんなところでやるな」

ファーストフードで試験勉強している希とにこの様子を見に行ってみるとお仕置きと称してワシワシする寸前だった。

前にも言ったと思うが場所と時間をわきまえろ。

「あら悠斗？今日は用事があったんやない？」

「それが終わって様子見に来た訳だよ・・・で、どんな感じ？」

「まくボチボチやね」

にこの頭から知恵熱が放出しているあたり相当今日一日で詰め込んだようだな。

「それより希この後生徒会の事でちよつといいか？」

「いいよ。それじゃ・・・にこつちの今日の勉強はここまでやね」

「ほっ」

「せやけど・・・復習せんかったら・・・分かってるよね？」

にこがほつとしたのもつかの間、希の一言に小動物の様に体を震わせるにこを見て合

掌した。

お互い店を出て神田明神に移動した。

今の時間帯なら人が少なくて話し合うにはちょうどいいみたい。

「それでどうしたん？生徒会関連は嘘やろう」

流石希、もう察しがついていたか。

「単刀直入に言う・・・絵里は・・・バレエの経験者って本当か？」

「!？」

「その反応から本当見たいやな」

「どうしてその事を？」

「本当に偶然だね。今日空港で用事に来ていたら絵里とその妹さんの亜里沙ちゃんと

あつてな。その妹さんから聞いた」

「・・・そうなんや」

「ファーストライブやバーでのミニコンサートの時、絵里は時折懐かしそうな顔をしていた。もしかしてそれと関係あるんじゃないか？」

「さすがやね。気が付いていたんやね」

「こう見えても洞察力と感はさえているのもで」

「えりちはな……」

少しは悩んだけど希は絵里の過去を語ってくれた。

「はあ……」

部屋のベットに転がり込んで希の言葉が頭から離れない

絵里は幼少期、ロシアで天才的な技量をもつバレリーナーだった。それは希から渡された動画を見ても素人同然の俺でも分かってしまうほどの洗練されたものだった。

だけどそれでも入賞することはできず……挫折した。

その時に塞ぎ込んでいたので祖父の祖国である日本に来て今に至った。

「挫折か……」

時折見せていた懐かしそうな顔は昔の自分を思い出していたのだろうか

「……俺はいつたい何がしたいのだろう？」

答えが出るはずもなくそのまま深い眠りについた。

17本音

『ねえ．．．手に持っているの何?』

また懐かしい夢を見ていた

『これは木刀、僕は．．．剣術をやっている』

靖国神社の帰りの公園で知り合った金髪碧眼の可愛い女の子を助けて一緒にしゃべっていた。

初めて喋る子では幼馴染みのようにはいかなかった。

『剣術?!もしかしてサムライ』

異国の子なのかやはりサムライって言葉に反応した。

『そういう事になるかな』

『ハラショー』

『僕は朝霧悠斗。君は?』

『私の名前は．．．』

そこで俺の意識は覚醒した。

「また、あの時の夢か」

アルテールズにいた時には一度も見なかったが日本に戻ってからもう2回も、しかも前回の夢の続きってこんな偶然ってあるのかな？

「でもあの子って絵里に似ているな」

昨日の話から絵里が日本に来たのもアルテールズに行った時期が被る。

「……まさかね」

他人の空似の可能性もあるしそんな筈ないと思つて記憶の隅っこに寄せた。

今日は休日だけど詰襟タイプの制服に着替えてある場所に向かった。

「すまないな。こんな無茶を頼んで」

「いえいえいほかならぬ主の頼みですよ」

少し前に杉並に頼んで文科省に精通している人物を紹介してもらうために俺たちは千代田区の衆議院議員会館に来ていた。

ロビーで待っていたら一人の男性がこちらへ向かってきた。

「お待たせしました杉並さん」

「すみません副長官。無理を言ってもらって」

「いえいえ、あの朝霧の若君に会えるのですから」

「主、紹介します。衆議院議員の東條晴彦内閣官房副長官です。以前は文部科学大臣政務官をやっておりますして各省庁にパイプ持っております」

「東條です」

名前はよくニュースで取り上げられ未来の総理候補とも呼び名は高い若手である。

「朝霧悠斗です。本日は私の申し出にに応じていただきありがとうございます」

「しかし噂に聞いていたのとずいぶんイメージが違っておりますよ」

「私ってそういう風に言われていたのですか!？」

「それは聞かない方がよろしいと思います朝霧の若君殿」

その一言で聞きたいという選択肢は自動的になくなつた。

良くも悪くとも朝霧の名前が浸透していると思つた。

「それでは私のオフィスに案内します」

東條さんに案内してもらつて館内に入った。

「官房副長官という事は」

「はい。前回の総選挙から今の役所についております」

内閣官房は内閣の補助機関であり、直接内閣総理大臣を補佐支援する機関である。そして関係省庁の統合調整を行うため官僚組織の中ですべての府省より上位組織である。

そして官房副長官は首相に近い比較的若手の人間や閣僚経験者就任することからほかの政務官や副大臣に比べて重要ホストである。

「ここが私のオフィスです」

互いに椅子に座り始めた。

「それでお話とは……」

俺は現在の音ノ木坂学園の状況を説明した。

民社党を中心とした連立政権の負の遺産。学園内の存続派と廃校派……その後ろにユニオンの影と思わしき幽霊。

「姪からそのことを聞いていたのですが、まさかそこまで闇が深いとは思いませんでした」

「姪？東條さんには親戚がいらっしやったのですか？」

「ええ、音ノ木坂学園に通っておりまして、今は3年生です。廃校の件は姪から聞いて存

じておりました」

東條で3年生!?

「……もしかしてその姪は3年生の東條希ではないですか」

「希を知っているのですか?」

「ええ、私と同じクラスメイトでしてテスト生で転入当時から色々世話になっていました」

「そうだったんですか!?!」

よくよく考えていたらたった一人で都内に住んでいるんだ。近くに親戚がいても不思議じゃない。

「それにしてもスクールアイドルで入学者を増やすか……とても凄い計画ですね」
「もう音ノ木坂学園に後がないからな。一か八かの最初で最後の大博打さ」

正直、理事長や絵里達の支援が無ければ更に苦しかったかもしれない。

「東條副長官、少しよろしいでしょうか?」

「どうした岡本さん?」

後ろに控えていた公設秘書官の岡本さんが話に入り込んできた。

「関係あるかどうかわかりませんが私も一つ情報を持っておりまして」

「ぜひ！お話ししていただけないでしょうか？」

今はどんな些細な情報もほしい！！

「私の娘が今年高校受験なんです」

「そうなのですか!？」

今年受験ということは雪穂と同じ年か・・・

「それでどこの高校を受験の予定なのですか？」

「俺も奥さんも子供も最初は音ノ木坂学園を希望していたのだけど、廃校の可能性があるとこの事で近くのUTX学園を考えていたのですが娘があそこはあんまり乗る気ではないのです」

「どうしてですか？」

「・・・あまり表ざたになっていないのだけ」

急に小声で話してきた。

「UTXは秋葉原駅の直ぐ近くにあるではないですか」

「はい」

「それで入学料とか授業料とか高くて、大抵の子は富裕層なのですが・・・」

私立の高校ならありえる話だけどそれだけならほかのところも一緒のはずだから問題ないはず。

「無論成績優秀者用の授業料免除もあるのだけど……あそこ……娘の先輩曰く生徒同士のいがみ合いや、先生の派閥争が激しいと言っております」

「そうなのですか!？」

この間見た感じはそんなことはなかったと思っただけど、以前絵里の生徒会会報の件から一概にあり得ないとは言えない。

「まあ、専門科になればなるほどそれが躊躇でね。中には先生の派閥争いの為に生徒を利用するという噂もある」

「そこまで出回っているのですしたら何故騒動に発展しないのですか?」

「理由はいつくかある。まずは私立校で中々行政の介入を受け辛い。もうひとつは学校生活という閉鎖的な環境で中々正確な情報があがってこない所謂噂レベルってことです……この程度ですがお役に立てましたか」

「いいえ。大丈夫です」

おかげでUTXの有意義な内部事情を知ることもできた。

「それじゃ私からも一つ情報」

これだけの情報をくれたからにはリターンしないとない!

「これは表沙汰にはなっておりませんがユニオンと繋がりのあるマフィアの大幹部が密かに日本密国しているのはご存知ですか?」

「はい！朝霧さんもご存知でしたか」

「アルテールス大使とは顔なじみで、その人から」

「後、音ノ木坂学園で新入生歓迎会の時に不審者騒動があつたのはご存知ですか？」

「希から聞いておりましたがそれは事件性はなかったはずでは？」

「いいえ。父の知り合いに警察関係者がいるのですが、その人曰く警察が動く前に強制下校の指示が学園動いています。しかも発生時刻も終わった直後とその時行われた？」

「sファーストライブ終了後に目撃情報が途絶えました」

「……ここまで聞くと一気にそれも黒に近づいてきましたね」

腕を組み悩み始めた。

「……で、朝霧さんは何を望む？」

「できるだけ政府内……特に前政権と文科省の官僚勢力を知りたい」

今の大西政権政府内には前政権の影響は残っていないが官僚までそうはいかない。おそらく前政権からつながりがある文部科学省の官僚が何人か残っているはずだ。

「分かりました」

「助かります」

今の立場では個人で調べるのには限界があるからなこれ政府内の情報が入る。

今日は学校が休みだけど試験まで残り日数が少ないので休日返上で部室で勉強していた。

「本日のノルマはこれね」

希が机の上に大量の参考書が置かれた。

「「鬼!!」」

「おや? まだワシワシが足りていない子がいるん?」

「「まさか!!」」

流石の3バカも希のワシワシにはもう懲りたのか素直に応じている。

自分たちの勉強もしないといけないので正直楽になれる。

試験まで残り4日に迫り穂乃果と凜、にこのテスト勉強のラストスパートをかけた。

けどこの数日間俺は絵里のバレエの映像が頭から離れない。

俺が見てきた中でも一二を争う技量に加えて、人を惹きつける魅力をも感じ取れた。

一体ここまでたどり着くにはどれだけの努力を積まないといけないのか俺も剣術を

学んでいる身として分かる！

恐らく相当な時間をかけて身に着けた。

でもそれでも入賞には至らなかった。

あれだけのセンスと努力を有しても表彰台に立てれない。

「わりい……ちよつと飲み物を買ってくる」

「分かりました」

じつとしているとつい余分なことまで考えてしまう。

一旦部屋を出て頭を冷やそう。

中庭にある自販機で缶コーヒーを買ってその場で飲んだ。

μ、sの試験勉強を見ているおかげかどうかかわからないがすれ違っていたため今日まで話す機会はなかった。

「本当どうしたんだろう？」

空を見てぼやいた。

足音が聞こえて振り向くと希が近づいてきた。

「希……どうしたんだ？」

「遅いからみんなが心配しとったで」

「え？」

携帯を覗くと海未や真姫から何件かメールが来ていた。

「すまない」

「自分の心に聞いてみ」

「自分の……心」

その言葉に霧がかかっていた心に一筋の光が差した。

「その顔……いったい何思いついたんや」

「ふう……希には隠し事できんな」

相変わらずこのスピリチュアルさんには隠し事は通せんらしいな。

「絵里に……ダンスを教わりたと思った。絵里が持っている技術を少しでもあいつらのモノが出来たら更に底上げに繋がる」

俺たちで昔の楽しさを再び伝えるんだ。

「ふふっ……うちが思いついた通りや」

「希……」

「でも先にやることあるんじゃない？もう試験まであと少しよ」

「……そうだったな」

確かにその前になすべきことが事がある！

コーヒーの缶をごみ箱に捨てて、俺は急いで部室に戻った。

「お前ら!!」

「ゆ、悠にいい？」

「悠センパイ？ 凄い笑みにや!!」

今のやるべきことは兎に角こいつらの赤点を回避することだ!!

そうじゃないとラブライブ出場ができない上絵里の心の闇を払う機会が永遠に失われてしまう！

だから俺も今やるべきことをやり遂げる!!

そして音ノ木坂学園の定期テストが終わって数日後。

今日はそのテストの返還日だ。

良かったもの、悪かったものリアクションは人それぞれだけど、流石に3年生という事もあってか最悪な結果という人はいなかった。

「どうだった？」

「悠センパイ見て!!」

凜が英語のテストを見せると余裕で赤点回避の50点を超えていた。

「ここはどうなん?」

「ここに任せればテストなんて余裕よ」

にこのテスト用紙も赤点一つはなかった

後は穂乃果だけだ。

「どうだった?」

いつもと違う反応に内心焦っている。

「じゃーん!!」

穂乃果は俺たちに手に持っていたテスト用紙を見せてVサインした。

「よかった〜」

これで心置きなくライブに向けて練習ができる。

「そんじゃ!俺は生徒会室に行って報告してくるから先に練習しておいて」

「お願いします」

テスト期間でロスしたため少しでも早く感を取り戻さないといけないので穂乃果た

ちに先に練習を行かせて俺は生徒会で申請手続きを済ませるため生徒会室に向かった。

「ふう……とりあえず1件落着だな」

まだいろんな案件が残っているが確実に一歩ずつ歩んでいる。

「絵里いるか？」

「絵里なら理事長に呼ばれているで」

「理事長に？」

「大分慌てていた感じだけど」

生徒会室を出て急ぎ足で理事長室に向かった。

これまでのとはケタにならないほど頭の中で警告音が鳴り響いている。

マジで嫌な予感しかない！

「そんな！説明してください」

「ごめんなさい。でもこれは決定事項なの」

既に理事長室で南理事長と絵里が言い争っている。

「失礼します」

「悠斗」

「悠斗君」

「いったい何がありました?」

「つい先ほど文科省から通達がありました。……」

「文科省から!?!」

まさか!?!

「音ノ木坂学園は……来年度をもって新入生徒の募集を停止し……廃校」

「ふざけんな!!まだ指定された日に達していませんよ!!!」

「もちろん条件であるオープンキャンパス後なのは変わっていませんが、これようが無しにもう廃校は決まっていると決めつけて送られてきたの」

そう言っておそらく廃校派の官僚が持ってきたと思われる通知表を見せた。

「くそつたれ!!」

もう向こうの官僚共は音ノ木坂が規定数の生徒が入らないと高をくくっているのが気に入らない!!

見とれ!!

あんたらの思い通りには進みませんぞ!!

オーブンキャンパスまで残り2週間

それで本当に悪かったジ・エンドだけどそれをつくがえしてやる。

理事長室を出たらタイミミングよく東條官房副長官から電話がかかってきた。

「もしもし悠斗さんですか」

「東條さん」

「文科省は予定通りに音ノ木坂学園を廃校に持つていく方針みたいです」

「その話は先ほど理事長から聞きました。情報は確かなのか?」

「まず、間違いはない」

「・・・・・・とうとう来てしまったか」

「正直言つてこれほど露骨に廃校確定という空気が入りません」

「それで官僚の勢力図は分かりました?」

「まだ完全ではないが、少なくとも廃校派には前政権時に要職ついていたものや、先輩が繋がっているのは確かだ!しかも・・・・」

「何かあったのか」

「俺が政府案で廃校回避の上聞を出した際に露骨にほかの話題でそらされている。

しかもユニオンの軍事絡みで到底無視できない内容だからなおたちが悪いことです」
「そりや、達が悪いな」

今政府がユニオン情勢には敏感で悩まされている。

この時期に話題が出るという事はやっぱり裏でつながっているかもしれない。
「何かありましたら連絡いたします」

電話を切つて急ぎ屋上に向かった。

今の話を伝えると想像通りみんなが憤怒を露わにした。

そして練習が始まったわけだか……

「1、2、3、4、5、6、7、8」

「よし！みんな完璧だよ！」

穂乃果はそう言うけどイメージ通りの出来ではない！

「よかった。これならオープンキャンパスにも間に合いそうだね！」

「……ダメだ」

いい感じの空気を壊してしまうのは承知で自分の意見を言った。

「どうしてですか？」

「俺たちはダンスに関しては何人同然、どうしても細かい動作やバランス、タイミングには限界があった」

「ですがこれ以上は」

海未の言うとおり今の俺たちではここまでが限界。

「……一人心当たりがある」

「本当ですか!？」

「ああ、少し話をしてくるから。みんなは休憩しといてくれ」

そう言つて俺は屋上を後にした。

だけど絵里は生徒会室、教室にもいなかった。

中庭、講堂、体育館……校内のくまなく探してみたけどどこにもいなかった。

今日は諦めてまた明日にしようと思つてふと校舎を見たら俺たちの教室の窓から金髪の髪がなびいているのが見えた。

絵里だ!

俺は駆け足で教室に戻った。

教室に戻ると絵里は自分の机に座って窓の外を眺めていた。

「あら？悠斗……どうしたの？」

「絵里を探していたんだよ。生徒会室にも教室にもいなかったから探し回ったぞ」

「それはごめんなさい。ちよつと校内を散策していたの」

そう言つて再び窓の外を見た。

「絵里……少しいいか」

絵里の過去を抉るかもしれないが腹を決めて言つた。

「単刀直入に言うあいつらに力を貸してくれないか」

「何言っているの？いつも協力しているじゃないか？」

「そういう事じゃない！絵里が持っているバレエの技術をみんなに教えてほしいんだ
！」

「っ!?!どうしてそのことを？」

「この間、空港で亜里沙ちゃんから経験者と聞き、希から概要は聞いた」

「そうなんだ」

「頼む！今のあいづらには絵里が必要なんだ!!」

今のμ、sはある一種の限界に達した。

これ以上成長させるには絵里が持つバレエで培った技術が必要不可欠だ！

「……………ごめんなさい。私には無理よ」

「どうして!？」

「だって私は……………バレエから逃げたもの」

「!？」

「もう私には……………その資格はないもの」

確かに希の説明からバレエを辞めて日本へ来てからは一度もバレエをやっていない。

「それじゃ何であの時懐かしそうな顔をしていたんだ!!」

「気が付いていたの?」

「映像見てて思ったよ！本当に楽しそうにやっていたのを！まだ自分の心に燻っているのじゃないのか!」

幼少時点で俺たちですら感動する踊りを完成させたのには裏で壮絶な厳しい練習が行われていたのに違いない。

しかしそれでも演技中絵里は心底楽しそうに踊っていた。

「私だって本当はやりたかったのよ!!」

初めて聞いた大きな絵里の声。

「正直彼女たちがスクールアイドルで生徒を集めようと言い出した時嬉しかったの! 私も参加しなかった! でも私は生徒会長なのよ。いったい誰が彼女たちを守るの!」

生徒会長としての責務と自分のやりたい事の二つに挟まれた彼女・・・

真面目な彼女は生徒会の責務を選択し、自分のやりたかったものを心の奥底に封じ込めた。

だけど完全にごまかすことはできず支援という形でμ、sに関わった。

「悠斗は知らないと思うけど相当学校側から圧力がかかって・・・」

「そんなことは知っている!!」

絵里が言い切る前に話をぶったぎる。

「もうこの廃校の話は一学校を超えて前政権のレベルの置き土産つてことも分かっている!!」

父さんからの情報・・・アルテールスからの情報、そして東條副長官の情報。

それらを精査すると前政権、そしてユニオンに繋がった。

「いままで絵里が守ってきたモノ．．．俺が引き継いでいいか？」
「で、でも」

「俺は朝霧家の人間だ！朝霧一族は常に国防の最前線に立ち人々を守る防人だ」
それが幕末から続く朝霧家の家訓であり、俺たちの誇りだ！

朝霧は大切な人を守るためならどんな手段も選ばない！

「だからよ．．．そろそろ自分を許したらどうだ」

今までの絵里は大好きだったバレエから逃げた罪悪感から苛まれ、自分自身の贖罪で
μ s へ支援続けていた。

中々首を縦に振らずどうしようかと考えていたら後ろから足音が聞こえた。

「みんな!!」

休憩中だった穂乃果たちがいつの間にか教室に来ていた。

「絵里先輩！μ、s に入ってください！私たちと一緒に歌ってほしいのです!!スクール
アイドルとして!!」

「でも私．．．」

「話は全部希が言ったわ」

「「え？」」

希が!?

「まったく。本当にやりたいのならやればいいのに」

「それ・・・に先輩に言われたくないけど」

「それを言い出したら真姫もな」

俺のブーメラン発言に真姫の顔が真っ赤にしてうつむいた。

「別に理由なんていらなと思います」

「そうです!スクールアイドルはやりたいって気持ちがあればできるのです!!」

海未と花陽がそれぞれの気持ちを伝えた。

「やりたい・・・気持ち」

それがスクールアイドルの強さだと俺は思う。

その言葉に押されようにゆっくりと・・・穂乃果の手を握手した

「よろしくね!穂乃果」

「これで8人だ」

「いや、うち入れて9人やで」

「希も!?!」

この発言に絵里も含めて全員が驚いた

「占いで出たんや。このグループは9人になった時、未来が開けるって。だから付けたんや・・・9人の歌の女神の『μ s』って」

「希だったんだ。あれを投稿したの」

若干そんな気はしていたけど確証もなく心の奥底に封じ込めていたけど今思い返すとどことなくみんなを導いていた時に必ず希がいた。

「そうやでうちが名付け親♪」

「まったたく。最後の最後まで」

呆れたように言っただけど口は笑っている。

久し振りに見る絵里の笑顔。

勢いよく椅子から立ち上がり・・・

「さあ、みんな！いくわよ!!」

「「「「「はいー!」」」」」」

この日、μ、sは本当の意味で9人の女神になった。

まだまだ無限の可能性を秘めている女神たちの背中を見て希の占いの通り本当に未

来が開けそうな予感がする。

18 オープンキャンパス

あの日、絵里と希を含んだ新・μ、sの練習が始まった。

ここで驚いたのはバレエ出身の絵里はともかく文系よりの趣味である希この短期間でダンスに適應する器用さを見せた。

一体どこでも習ったのか聞こうとしたけど背後のどす黒いオーラーで聞くのを止めた。

それに9人というのもセンターや他の配置、3人一組のユニットも作れてバランス的にいい。

今後ミニユニットを企画するときにも足かせにはならない上、レパートリー豊富で逆の意味で悩んでしまう。

凄い贅沢な悩みだけど。

「それじゃ、5分の休憩に入るぞ!!」

「お疲れさん」

みんなにスポーツドリンクを渡し、各々日陰で休みに入った。

「やっぱりすごいよ絵里」

「ちよつと褒めないでよ／＼／＼」

「ううん。本当に凄かったよ」

一番苦労した柔軟性も絵里の指導で劇的に改善できることになった。

「それを言ったら悠斗も凄いやない！踊り未経験者でここまで教えているなんて」
「逆に言えばそこまでが限界だったのだ」

俺の場合幼いころから体で覚えさせられていたからなかなか人に教えるのに苦労したけど、やっぱり経験者からのアドバイスって全然違うな。

俺も学ぶ点が多かった。

「ありがとうな絵里」

「ううん、お礼言うのは私の方よ」

「え？」

「悠斗のおかげで過去の自分と向き合えることができたのよ」

「そうか・・・」

正直あの時は自分が汚れ役になってもいいと思っていたけど、より

「でもそういう風に思っているのなら今後も生徒会の仕事手伝ってね♪」

「え!？」

「だって今までもギリギリなのが、ツートップが一気に抜けて大変なのよ」

た、確かにそうだ。

廃校の影響で万年人手不足でんやわんやなのに更に引っこ抜いた形になっている。

「分かっているよ。俺も手伝わさせていただきます」

「頼りにしているね♪」

前に比べて・・・いや、加入する前と後で全然笑顔の輝き具合が断然に違う。

心の鎖がほどけた今これが彼女の素顔だろう。

もうちよつと見ておきたいけどあらぬ誤解を生んで命の危機には去らされたくない。

「よし!みんな休憩終わりだ!練習を再開するぞ!」

「お!悠センパイもやる気だにゃ!」

「あたりめーだ!!こんなにも楽しいものは他にないぞ!」

気温も夏に近づくにつれてどんどん気温が上がっていくがみんなは嫌な顔一切せず
に楽しそうに練習をしている。ダンスのキレが日に日に上がるのが目に見える。

それがどれだけ楽しいことやら。

自分の予想を遥か上回る成長にこれ以上の喜びはない。

父さんも師匠も俺を育てていた時もこんな感情を抱いていたのかな？

今度会ったら聞いてみよう。

「よし今日の練習はここまでに」

「ふう・・・疲れた」

みんながクールダウンしている時に絵里が声をかけてきた。

「希、悠斗この後生徒会室に来て」

「分かった」

「りよゝかい」

「生徒会の仕事ですか？」

「そうよ」

「絵里先輩、手伝いましょうか？」

「だいじょうやで海未ちゃん。悠斗が3倍働いてくれるのやし」

「え!？」

突然希がありもしない事を言い出した。

「そうよ。悠斗が働いてくれているから今生徒会が回っているのよ! 所謂生徒会の裏番長よ」

そこに絵里が更に便乗して煽りだした!

「そうなのですか!？」

そんなにまぶしい目で見ないでくれ幼馴染&後輩たちよ!!

「それってただ単にいいように利用されているんじゃない」

横は横でにこが爆笑していたけど、気を付ける後ろから忍び寄る奴に!

「人聞きの悪い言うのはどいつや!!」

久々に見ました希のワシワシ攻撃

俺は何も見えていないスタンでスルーした。

関わりたくもないし、ガチで見えていたら幼馴染の殺気に合うのは経験で分かる。

「希、先に行っているよ?」

「うちはもう少しにこつちとしやべっている」

絵里すらもう見なかったことにした。

「それじゃみんなお疲れさま」

「「「お疲れ様でした」」」」

後ろからにこの助けてという悲鳴が聞こえてきたが、以前被害受けた真姫、穂乃果、凜はとぼつちりを受けたくないのが上回ってに悶わる気はなかったみたいだ。

それ以外の人は手を合わせて心の中で・・・

南く無

と唱えていた（多分）

「今日は何やるの?」

「ちよつと書庫で資料を整理しようと思って」

「資料の整理?」

「うん。この前オープンキャンパスの資料探すときにいろんなものを出したからちよつと散らかつちやって」

「大変だね」

生徒会室から2つ教室離れた先にある書庫。場所だけ知っていて中に入るのは今日が初めて。

「()が書庫よ」

「これは凄いな」

書庫に入るとぐちゃぐちゃ……とまではいかないけど無数の段ボール箱が床や机に無造作に置かれていた。

「それじゃ、始めましょう!」

資料が入っている段ボール箱にはそれぞれ表題が書かれていたから何処どこにしまうかは分かったけど量が膨大

「……どうしたの悠斗?」

「いや、この資料が音ノ木坂学園の歴史なんだと思って」

この膨大な資料には今までの生徒が残していった喜びや失敗談、楽しいことや悔しいことも全て収めてある

「……絵里」

「何?」

「この後少し付き合ってくれない?」

「あら？それってデートの約束？」

おっ!?絵里が乗ってきた。

ここはさっきの仕返しにストレートで……

「そうだ」

「ち、ちよつと／＼何言っているのよ／＼」

「先に仕掛けてきたのは絵里だろう」

逆に絵里の方がやられて顔を真っ赤にしてあたふた始めた。

「それではどこに行くの？」

「それは着いてからのおたのしみさ」

生徒会の仕事を早めに終わらせてあるところに向かった。

俺たちはもうすぐ音ノ木坂学園の命運を賭けた一世一代の大勝負に挑む。

だから絶対にここの参拝だけはいかないといけない。

「ここが目的地？」

「そうだ」

幕末動乱明治維新から始まり今日までこの国で殉じた全英霊たちが祭られている

靖国神社に再び足を運んだ。

「ここには何か思入れがあるの？」

「ここには俺のひい爺さんを始め朝霧一族が英霊として祀られている。最初のファーストライブの時もここを訪れていた」

「そうなんだ」

「うちでは強制ではないと言ってきたのだけど重要なことがあれば必ずここに参拝するのが習わしになっていて」

「それって私が来てもよかったの？」

「構わないさ。寧ろ喜んでいさ」

本殿に赴き、お参りを済ませてその帰りに・・・

「絵里・・・次のライブは成功させような」

「ええ。もちろんよ!!」

雲のない青空に向かって改めて成功を誓い、そしてオープンキャンパス当日。

この付近の中学生だけではなく少し離れたところからも訪れている学生もいると絵里が言っていた。

μ、sで廃校回避の案は決して間違いないしなかった。

最初は先生に興味あるんと言われ続けていたけど諦めなければここまでたどり着くことができると思った。

「おっ！男子生徒もいるのか」

このオープンキャンパスから男子生徒も参加可能になっており全体の割合から少ないけど

今回は男子生徒は初めてと言事もあつて集団行動が前提だけどそれは学校側も学生側も安心できる措置。

「頑張りたまえ」

そう呟やいて自分の中でもそろそろテスト生のレポートを総仕上げに移るかと思えた。

職員室の前を通ると廃校派の先生方がこの光景に歯を噛みしめた様子だ。

中には顔を青ざめて震えている先生も見受けられる。

この廃校で理事長に完全に逆らう形で押したのだ。

恐らくすべてが片付いた暁に自分たちが処分されるのではないかと恐怖に落ちいて

いるようだ。

完全に自業自得なだけにかわいそうとも一切思わなかったが、これを決めるのが陽菜さんだけはどういう判断するか見ものだな。

「おはようございます黒井先生」

「……………おはよう」

明らかに機嫌が悪いのは目に見えている。

「先生見ましたか？あの廃校の危機があつた音ノ木坂学園のオープンキャンパスにこれだけの人が集まるなんて」

「……………」

黒井先生は何も答えずさつきより表情は険しくなる。

「凄いですね。人の力って」

「何が言いたいのか？」

「別に何もありませんよ。ただ思ったことを口にただけですよ」

先生は何にも言わず逃げないように立ち去る。

過ぎ去った後携帯を取り出して杉並に電話をした。

「もしもし主ですか？」

「杉並！そっち独自で廃校派の人間を監視しといてくれ」

「分かりました」

昔教官が言った。

人は固定概念に惑わされやすい。他人の思考が手に取るように分かるというが実際はそんなことなく、思考を予測するのではなく思考を指定していくことだと言う。

俺が嫌味たつぷり言ったことにより、中途半端にプライドが高い先生たちが何らかのリアクションを起こす確率が上がる。

それを利用して一網打尽！あわよくばバックの組織ごと壊滅してやろうとも思ったがそれは取らぬ狸の皮算用というものだ。

少なくとも廃校を回避して廃校派の影響がなくなればいい。

「あら？今度は父さんから？もしもし？」

杉並の電話が終つたとたんに父さんから連絡が来た。今日は電話が多い日になりそうだな。

「やつほー悠君!!」

「どうした父さん？」

相変わらず、ハイテンションな父親だ。

「今日あれだろう！音ノ木坂学園のオーブンキャンパスだろ？激励を送ろうと思って」
「ありがとう」

「それでどんな感じ」

「リアルタイムで公開しているから見てみ。凄い出来だよ!!」

「そっか！それは楽しみだよ」

父さんとの電話って基本ロクな案件しかなかったから、こんなにこやかで電話するのは久しぶりだな。

「それと近々ちよつと個人的な事なんだけど相談事に乗ってくれないか？」

「相談事？」

「そう」

あの父さんが個人的な相談事!?!マジでロクな案件じゃなければいいが。

「ま、そういう訳でよろしくね♪」

「おい！父さん!!」

そう言っって電話を切られた。

この後のライブの事もあるし相談内容は気になるが今は気にしないでおう。

、
s
幼馴染で従妹である穂乃果の廃校回避という思いから始まったスクールアイドル？

短い期間だったけどやるべきことは全てやってきた後はこの本番に全てを出すだけになった。

準備を終えて俺たちは舞台袖で待機していた。

「希は大丈夫か？」

この中で唯一ライブやPVに唯一参加していない希。

「うちは大丈夫や」

涼しい顔をして落ち着いているように見える。

いらぬ心配だったかな？

「うちより心配せねばあかん人いるんやない？」

希は目線で絵里の方に向けた。

「……まったく希は何でも御見通しかよ！」

「まあね♪」

叶わないと思いつつ絵里の方に寄った、

「大丈夫か絵里？」

久しぶりの舞台で緊張していないか心配していたけど……

「心配しなくても大丈夫だよ！それに生徒会長でいつも壇上にあがってしゃべっているから平気よ!!」

「そうだった……言う訳ねえだろう！」

「いたっ！」

「見え見えなんだよ」

嘘丸見えの絵里にデコピンを食らわした。

「あははっ、ハ、ハラショーやっぱり分かった？」

「幼馴染を除いて一番接する時間が長いのは絵里何だぞ」

よく見ないと分からないレベルだけど明らかに緊張の色が見える。

「……うん。まだ少し」

「それじゃ！この間付き合ったお礼に今度は絵里が行きたいところに行こう！」

「私の？」

「そう、俺だけじゃ不公平だし、これでお相子って事でどうかな？」

「うん！じゃ、その時になったらお願いします♪」

気が付いたら絵里の手の震えが止まっていた。

これで絵里の緊張が解かれるのなら俺の財布何て痛くもかゆくもない！

穂乃果の提案でエンジンを組むことになったが・・・

「もう！悠に何も入れればいいのに」

「バカ言え！俺はμ、sの影だ。影が光に混ぜっっちゃダメだろう」

さつきから穂乃果が俺も円陣入ろうとしつこく言ってくるがこれは俺のポリシーに反するし、？、sの意味がなくなってしまうだろう！

「それじゃ、行くよ！ー！ー！」

「2！」

「3！」

「4！」

「5！」

「6！」

「7！」

「8！」

「9！」

「「「「「μ、sミュージック・スタート!!」「」「」「」

9人になって初めての掛け声。

「それじゃ、俺は外から見ている」

ステージの外に行き、客席エリアには多くの学生や保護者で溢れていた。部活紹介で来ていた在校生も教室の窓から見ていた。

「よお、雪穂」

「あつ、悠にい！久しぶり」

「こんにちは悠斗さん」

「亜里沙ちゃん！君も来ていたのか!？」

「はい！」

「あれ？悠にい亜里沙ちゃん知っていたの？」

雪穂から凄いい気迫の目で迫られていたけどもう俺にはその耐性が付いているので平気だ!

.....耐性が付いた時点で色々負けてしまっているけど。

「亜里沙ちゃんのお姉さんと同級生で一度だけあっていた」

「そうなんだ」

納得したのか気迫が収まった。

俺って女難の相があるのかな?

「雪穂と亜里沙ちゃんって同じ学校なの?」

「うん!一番の親友なの!!」

雪穂と別れた後、少しウロウロしていたら関係者とも保護者とも違う異質の人が立っていた

「東條さん!」

「やあ、朝霧君」

まさか政府高官の一人である内閣官房副長官自ら訪れているとは思ひもしなかった。

「どうかしましたか」

「姪が出るライブを見に行かないでどうするんですか!?今日は仕事とは関係ないです」

「といつても今日は関係者か保護者しか入れないのに入ってきていると見ると内閣官房副長官の権限をゴリ押しで入ってきたのだろう。」

「もかしてこの人……シスの文字が見え隠れするのかな?」

「時間です」

時計を見ると開始時間になり、ステージに目を向けると9人が一斉に並びだした。

「みなさんこんにちは!音ノ木坂学園スクールアイドルμ、sです!」

最初は穂乃果の挨拶から始まった。

「私たちはこの音ノ木坂学園が大好きです!この学校だからこの最高のメンバーに出会いました」

「これまでも軌跡を一つずつ言葉に表していき……」

「これからやる曲は私たち9人になって初めてできた曲です。私たちの……スタートの曲です」

START:DASH!!はμ、sの始まりの曲であり、この曲はμ、sの意味である9人女神が集まって最初の曲……ここから本当のスタートである。

「それでは聞いてください！」

「「「「「僕らのL I V E 君とのL I F E」」」」」

もう言う事がないほど文句なしだ！

練習で見せた以上の出来だ！

「いい笑顔じゃないか」

もう俺の予想が斜め上どころかZ軸に飛び出るほど予測するのが困難。

一体彼女たちはどこまで伸び続けるのか・・・

マネージャーとしていや・・・一人の？、sのファンとして彼女たちの行きつく先を見て見たくなくなってきた。

俺の頭の中で絵里が加入してからの出来事が走馬灯のように過る。

皆でファーストフード店言ったときまさか絵里が初体験とはさすが驚かされたよ。どこまで脅かせてくれるか

その中でさらに驚いたのが、希がバーガーに何かの呪文をかけていた。すごく怖いよ！

それ以外にもいろんな出来事を思い出してきた。

「彼女たちいい笑顔ですね」

東條さんがそう呟いた。

「ありがとうございますございます朝霧さん。希が……人前であんなに笑顔で踊れているなんて兄貴分としてとして感無量です」

含みのある言葉が気になったが……

「まだまだこれからですよ。彼女たちが輝くのは」

敢えてそれは聞かず、このライブに集中した。

そしてライブは終わり、みんなは汗をかいている。けれど皆の顔を疲労感よりやりきった感のいい笑顔があふれていた。

そして見ていた中学生・保護者・関係者・その他一名が盛大な拍手を送った。

ライブは大成功だ。

「みなさん！本日はありがとうございますございました。私たちはこれからラブライブに向けてスタートします！どうか応援の方よろしくお願いします」

穂乃果が最後の言葉を締めくくってライブは終了した。

「……私も頑張らねば」

「何か言いました？」

「いいえ。それでは朝霧さん、私はこれで」

「はい。今日のご足労ありがとうございました」

こうして、s9人のライブは終了し、オープンキャンパスは無事終了した。

後はここに来てくれた中学生がどういう気持ちなのかは後になってみないと分からないがとにかくみんな……お疲れさま!!

19 依頼

「……つまらん」

オープンキャンパスが終わって最初の休み。

日本に戻ってから初めて休みらしい休み。

ファーストライブから今日まで休み返上まではいかなかったけどそれでも半日だけ練習が多かったので今日と明日は休みにしたわけなのだが……

結局いつも通りの時間に起きてしまつて、結局は暇で外でランニングしたり、部屋の掃除や洗濯物や洗い物とか全部終わしても時間が余り、本も今持っている分は読み終わった。挙げ句の果てテレビをつけても余り面白くない番組ばかり。ここまで面白くなかつたら何かの陰謀だと思ふほど全然面白くない。

「……外に出かけるか」

このまま下手に部屋で過ごすぐらいなら外に出るほうがまだマシか。

部屋からソフト帽を被つて家を出た。

「……いい天気だな」

外は雲も殆んど無く快晴の天気だ。

秋葉原に出ると相変わらず観光客やらなんやら相変わらず駅前には多くの人で込み合っている。この街を歩いてみるとこの前の事件がつい昨日のように思える。あの出来事が合ったから絵里と知り合うことが出来たんだ……ってそうだ！絵里を誘えばいいんだ！

以前の約束もあるしちょうどいいと思つて携帯を取り出し、電話を掛けようとしたその時

「悠斗？」

人混みの中から呼ばれて振り返つてみれば、ついさっきまで電話を掛けようとした女の子が立っていた。突然の出来事でもあんまり浮き足立たないように平常心！平常心！！

「よお、絵里。なにしているんだ？」

「家ですることがなくなつたらなんだか落ち着かなくて外に出ちやつた悠斗は？」

「俺も似たようなものさ」

「それじゃ悠斗！本番前に行つていたアレ今行けるかな？」

「いいぞ」

そう言うと絵里の鞆から二つのチケットを取り出した。

「これは？」

「前に希から日本航空宇宙センター内にあるプラネタリウムのチケットを貰ったけど、期限は今日までなの」

日本航空宇宙センター（Japan Aerospace Center）と言えば、お台場の人工島を更に再開発してできた日本の宇宙開発の総本山。

ここの職員も少ない予算でビックリドッキリメカを作っている防衛技術庁（新装備の研究開発・調達を一元に行っている機関）のキチ・・ゴホン、ゴホン技術者にも勝るとも劣らない実力者の集まりで、日夜宇宙開発に必要なエンジン、装甲などをあそび研究している。それ以外にもプラネタリウムや展望台といった施設は一般に開放されている。

「へえ・・・面白そうだな」

「でしよう!!」

「それじゃ行くっか」

「ええ！」

・
・
・
・

「悠斗は星とか興味あるの？」

「母さんがそう言うのが好きで小さい頃によくプラネタリウムに連れて行って貰った事がある」

「お母さんは今どうしているの」

「・・・俺が中学上がる前に亡くなったよ」

「!? ご、ごめんなさい。無神経な事を言つて」

「気にするなよ。もう昔のことだ」

「でも・・・」

落ち込んでしまった絵里の頭を撫でた。

「あっ／＼／＼／＼／＼」

「落ち込むなって。俺はぜんぜん気にしてないから」

確かにあの時は酷く落ち込んでいたけど今は平気さ。

寧ろ父さんの方が心配だ。

今でこそそれほどじゃないが、母さんがなくなつた後、離島勤務や南極観測艦や遠洋航海やら日本から離れる任務を引き受けている。

「ここがJAC」

「しかし結構変わったな」

「あら？来たことあるの？」

「昔母さんに連れてもらった事があって」

もう10年前の話だけど当時の面影が一つも残っていない。

ここまで来ると悲しい以上に逆に清々しくなる。

俺たちは受付で2人分のチケットを係員の人に渡して、半券と一緒にパンフレットを買った。細い通路を進みドームの中には既に多くの人が埋まっていた。

時間になりドームの入り口は係員の人で閉めた。

次第に薄暗くなり、ざわめいた声も静寂になつてきた。

『本日は星のタイムマシンにご搭乗頂まことにありがとうございます』

アナウンスの声と共に始まる幻想的なBGMと光りが溢れてきた。

ドームスクリーンに星が写しだされる。

サザンクロス(南十字星)から始まりカメレオン座、テーブル山座、はちぶんぎ座、ふうちょう座日本では見られな

い星座や、孔雀座一角獣座と幻想的な動物の星座

「すいん」

まさに幻想的な一言に尽きる

さらに大マゼラン星雲をも青色に染めるオーロラ、赤色星雲エータカリーナ
プログラムの終わりも近くなり東から太陽が昇り始める。

科学館を出た後、近くのベンチに座って休憩した

「しかし凄かったね南天の星空って」

「ああ！日本からじゃ殆んど見ることが出来ないからな」

石垣島とかの先島諸島辺りなら見えない事も無いが一部の星座は南極付近だから見ることも出来ない

「この後どうする?」

「そうだね・・・まったく考えていない」

「このまま帰るのも忍びないしせつかくだしこのあたりをうろつこうかなと持っていたとき

「そういえば今のμ、sのランクって何位?」

「そういえばオープンキャンパス以降確認していなかったな」

あの時はオープンキャンパス成功やゴジップ系に神経に全力を注いでいたからラン

キングまで確認していなかった。

終わった後もなんだかんだで確認していなかった。

持っていたタブレットを起動させてサイトを開いた。

「何だと!？」

「どうしたの悠斗?」

「これは言葉で説明するより見せた方が早いと思つてタブレットを見せた

「ウソ!?55位!!」

最後に確認した時は100位だったからたつた1ヶ月強で二桁台中盤に入っていた。

ラブライブ予選出場資格である20位に一気に近づいた。

「凄い」

「やっぱ、絵里が加入して女性ファンが加わったのが大きかったかな?」

「鼻根抜きにして背も高く足も長い!しかも大人っぽくてスタイルも抜群と来たものだ。」

「ふふん!どうよ」

「でも本当は凄いいおつちよこちよい何だよな。この間おもちやのチョコレートを置いたら間違つて食べたときのリアクションが最高だったよ」

「ちよ、ちよつと／／／あれ置いたの悠斗だったの／／／」

この間、何を血迷ったのかガチャガチャで取ったおもちゃのお菓子を生徒会室の机に置いて少しのあいだ席を離れて戻ったとき絵里が食べようとしたので笑いこらえ見ている。

「あれは傑作だったよ」

絵里の顔が瞬間沸騰の如く一気に真っ赤に染まる。

「ゴメンゴメン！まさか食べるとは思わなかった」

「うゝ／＼／＼」

真っ赤に染まった頬を膨らまして抗議。

何!?このかわいい生き物は!!

いつもの賢さはなくなっただけどそれを上回る

普段しつかりしている人がこういったギャップ萌えにノックアウト寸前だ!

「さー次々／＼／＼」

あの後からかったせいでショッピング付き合わされて散々な目に合った。

女の子の買い物は本当に長い。

ただ単にひたすら長い。

しかも荷物持ちさせられている上、ランジェリーショップにも寄って周りの目線が痛かった。

そろそろ遅めの昼食を取ろうとしたとき……

「悠君!!」

いつぞやと同じ俺の名前を連呼しながら父さんが近づいてきた。

「……はあ何でこんなタイミングで会うのかな」

「お久しぶりですおじさん」

元練習艦隊第一練習隊司令改め第一航空機動艦隊首席幕僚になった俺の父親

昔は現場バンザーイ! デスクワーククソ食らえと公言していた人がどういう心境の変化だろう。

「おお、絵里ちゃん久しぶりだね」

「それでどうしてここにいる?」

「うん。ちよつと用事でね」

制服姿と言うことは仕事で来ているのだけど首席幕僚自らJACに訪れているのを見ると何か面倒事にならないといいが。

「悠君、絵里ちゃん子の後時間あるかな?」

「うん? 絵里も?」

「ちよつと私的なことで相談があつてぜひとも絵里ちゃんの意見も欲しい」

「?」

?マークが頭の中で発生したが、取り合えず父さんの後ろをついて行ってJAC内部に入った。

「父さん……ここから先って」

「大丈夫さ。許可なら取ってあるから」

ホントかよ

疑問に思いつつもついていくしかなかった。

JACの管轄は内閣府、国防省、総務相、文科省、経産省が共同で管理していてセキユリテイーも厳しいはずのだが……気にしたら負けと言うことにしよう。

「ところでどうしてJACに来ていたんだ?」

「ちよつとね」

つまりこっからは機密で触れるなどということか。

俺たちはラウンジに案内して椅子に座った。

「それで相談とは?」

「うん。ちよつと面倒事が起こっちゃって」

「それってこの間言っていた件」

「いや、それとは別件。むしろもう解決しそうだから忘れて」

解決した？

「……………まあ解決したのならそれに越した事はないけど逆に気になってしまおう。」

「2人供7月に横須賀で行われる海軍サマーフェスタって知っている？」

「サマーフェスタって毎年7月に横須賀鎮守府で行われる艦艇一般公開を含んだイベントよね？」

皇国海軍の相互理解を深めるため毎年7月に行われるイベントで、基地内で音楽隊の演奏や艦艇の一般公開を行う。

「本当に悪いのだけどスクールアイドルsに出演以来を申したい」

「いきなりだな。いったい何があった？」

「実はサマーフェスタで幾つかのスクールアイドル、バンドとかを呼んでいたのだけどその内の1組のメンバーが体調を崩して辞退してしまって、もう再考する時間も予算もない。今は知り合いでもなんでもいいから探してこいって訳さ」

「なるほど」

「そしてもうひとつ頭痛の種があつて」

「頭痛の種……ですか？」

「ああ、各参加グループには夏若しくは海をイメージした曲と空のをイメージした曲を

作って」

「そりやム、sでもちよつとキツイぞ」

サマーフェスタの開催時期はもうまもなくだ。今から新曲作ってダンスの練習しては到底間に合わない。

「それなんだが」

父さんは二つの封筒を出した。

「これは母さんが残した楽譜だ」

「晩年、自分の生きていた証を残したいと言って作って来たのだから完成前に……」

「そうか」

「だからこの楽譜を君たちム、sに託したい」

「よろしいのですか？」

「このまま埋もれているよりかは君たちの手で使われる方がいい」

「一先ずこれ……預かっていいかな。流石に俺の一存じゃ決められないから」

「分かっている。返事を待っているよ」

封筒を俺の鞆に入れた

「下まで送るよ」

会話らしい会話がないままセンターの外に出た。

父さんはまだ仕事でしばらくはJACに泊まり込みみたいだ。

「大変な事になったね」

「それで・・・悠斗はどうしたいの？」

「出来ることなら使いたいけど決めるのは俺じゃないあいつら達だ」

正直どんな反応を示すか分からないが

「とりあえずはオープンキャンパスの結果が出るまでしまっておきましょう」

「そうだな」

「さーて気を取り直して続き行きましょう」

「え!？」

「だってこのまま帰るのはもったいない」

確かにまだまだ時間はたっぷりある

「分かった絵里」

「それじゃ食べてみたかったパフェがあるからそこへ行きましょう」

こうして絵里に連れられて買い物の続きをした。

空を見上げると少し雲がどんよりしている。

「あれ？」

「こりや、一雨降るかな」

「そうね。急いで戻りましょう」

俺たちは急いで秋葉原に戻ったが時既に遅し大粒の雨が降っていた。

「これは当分止みそうにないな」

「傘は？」

「持つていないから走って帰る」

買ひ物袋を二重にしているから大丈夫だけど

だが雨の勢いは増して行き強風で傘ごと腕が持つて行かれそうになる。

ここまで行くと傘が用をたさない。

「これは流石にアカン！一旦俺のマンションに避難しよう」

「ええ」

ずぶ濡れになりながらも何とかマンションに辿り着いた。

雨に濡れていたおかげでだいぶ体が冷え切りすぎて感覚がない。

「タオル取ってくる」

洗面台からタオルを2つ持つてきて片方を絵里に渡した。

「ありがとう」

震わせながらタオルで体を拭を吹いていたが部屋の中は外よりかはいくらか暖かいがそれでも寒くて体温も低下していた。

「絵里、このままだったら風邪引きそうから先にシャワーを浴びといて」

「悠斗は？」

「俺は絵里の後に浴びるよ。幸い昔に寒中水泳をつき合わせられたからある程度平気」

コイツは本当だ。

前に訓練の一貫とぬかしてやらされたことがあってマジで死ぬ所だった。

いや！本当に！！

『そうですか・・・お姉ちゃんは』

絵里がシャワーを浴びている間にアリサから電話が来た。大雨が降って絵里の帰りが遅く心配で俺に連絡してみたんだ。とりあえず簡単に現状報告を言った。

「そう言うわけで雨が止むまでうちで雨宿りをさせておくよ」

『ありがとう。悠斗さん・・・あつそれと』

「なに？」

『お姉ちゃんと2人きりだからと行って襲ったりしないだね』

「な、なにいつているんだ!!」

トンデモ発言で「それじゃくね」と言つて電話を切られた。

コーヒーを入れて落ち着こうとしたが、同年代の女性がシャワーを浴びていると思うと良からぬ想像してしまう

恥ずかしそうに呟いているけどいかんいかん!!このままでは冗談抜きで理性が崩壊してしまう。

何か気を紛らわすものは!?

「お風呂上りました」

「.....了解」

振り向くと脱衣所のほうに振り向くとそこには今日買ったばかりの服を着ていた。

これがラブコメ系ならカッターシャツ一枚をいったシチュエーションだけどそんな現場を幼なじみに知られるともう置いとく俺の人生は終わる。リアルに!

「ふう.....いい湯だ」

こう言う時こそ湯船に浸かって心を落ち着かせよう。

「ちよつと待て.....ついさつきまで絵里が浸かっていたよな」

つまり.....

.....

「うんが!!」

俺は浴室の壁に思いっきり頭を打ち続け、心身滅却を計った。

落ち着け俺! 落ち着くんじゃ!!

もう余分な事は一切考えるな!

耐えろ! 耐えるんだ俺の理性!!

「ちよつと悠斗凄いい音がしたけど何かあった!?!」

「ゴメン。ちよつと風呂桶を倒してしまつて」

適当な言い訳をして早めに上がった。これ以上は理性が持たない。

風呂に上がると絵里は柵に置いてある写真を興味深く見ていた。

「この写真は?」

「アルテールスにいたときに知り合つた友人で男性がウイル、女性がクラエス。2人と

も俺と同じ時期に銃火器ライセンスを取得してそれ以降の仲さ」

「でも何故軍服を?」

「.....俺の剣術の先生が近衛師団の教官でね。色々あつて3人とも予備役の

訓練を受けていた」

余りアルテールスの事は話さないけどたまにはいつか。

「ただ.....いつらも性格が吹っ飛んでいるからな」

「そうなの?」

「例えばウイリアムはでいつもナンパしているほどの女好きで好きあらば女性を口説いていて、そして幼なじみであるクラエスは銃火器類マニアで家には世界各国の火器類が置かれている。中にはどこから調達したのやら既に旧式になっている64式小銃が置かれていた。」

今思えばどうやって手に入れたのかも謎である

「ウイリアムがナンパしていたらクラエスが制裁、そして俺がその後始末。なんだかんだでこの三人でうまくいっていたのは事実なんだよな。」

そいつらも趣味も性格も吹っ飛んでいたが根はいいやつらばかり。

「……とまあこんなことがあったわけよ」

「そうなんだ」

懐かしいなと思いつつ写真を見た。

良いことばかりではなく最悪な事もあったがそれが今の俺に繋がっている。

いつの間にか雨が止んでいて、乾燥機も止まっていた。

「ちよつと行って来るね」

絵里は乾燥機のある脱衣所に着替えを取りに行った。

絵里には簡単には話はしたが、あいつらの話でいずれはアレの事をみんなに話さない

といけないと思った。

俺がアルテールスで行った正義と悪の諸行。

俺が犯した罪。

20我ココニ戦ヲ宣ス

オープンキャンパスが終了して1週間が経過していた。

この日は朝イチに理事長から連絡が来て俺と絵里は理事長室に呼び出されていた。ついにこの時がやってきたのか、それとも来てほしくなかったのか……そんな複雑な思いを抱きつつ学校へ急いだ。

「失礼します」

「朝早くからのご足労ありがとうございます」

いつも通りの位置に理事長が座っていた。

「それで理事長、話とは？」

「ええ、この間のオープンキャンパスの結果が出ました」

来た！

「それで……どうなったのですか？」

絵里はおそるおそる理事長に聞いた。

「集計の結果・・・受験希望者が我々の予想を超える数値に達しました」

「それでは!？」

「はい!このことを文科省に報告したところ廃校決定は無期限の延期になりました」

「本当ですか!!」

理事長の報告に絵里は跳び跳ねるように喜んだが・・・

「ですが・・・」

「ええ、まだ油断はできません。決定の無期限延期という事は白紙撤回ではないという

事です」

「!?そうね・・・時と場合には復活することもあるという事ね」

「それでも幸先のいいことです。当初の予定では判断を先送りという事だったので

この通知を届けた東條内閣官房副長官が尽力してくださったようです」

「官房副長官が!？」

オープンキャンパスの帰り際に「頑張らねば」と聞こえていたがこの事だったのかな

?

「ですが!それだけ中学生たちがこの学校に興味をもってくれたという事ですよね」

「はい!これまでにない言い手ごたえです」

まだまだ死んでいないという事だ。

今後の対策を話しつつ別れた。

「よかったね悠斗」

「ああ、これで心置きなくラブライブに向けて練習できる」

とある少女の何気ない思い付きから始まったスクールアイドルμs。

さまざまな経験と一つ一つの想いを積み重なり、最初は不可能と思われていた国の決定を動かすことができ、廃校の撤回に道しるべが立った！

「でも予選と本選の曲も同時進行でしよう？大丈夫かしら」

「それをどうにかするしかないでしょう」

とりあえず廃校は暫く延期になったが後一手が足りない。

その残りの一手がラブライブの結果如何で決定する。

予選開始まで後一ヶ月半

無論まだ不確定要素が残っているし、父さんの案件もある。

一度みんなで話し合おう。

「おはようえりち。悠斗」

「おはよう希」

「それで理事長の話はどうなったん？」

「まだ余談は許さないけど一先ず廃校の無期限延期が正式に決まった」

「よかった」

「だけど希の顔はあまり浮かばれていない。」

「希……何かあったの？」

「実は今朝……学校に来る途中でUTXの生徒会会から手紙を渡されたんや」

「UTX から!?!」

「希から渡された手紙を見ると、宛先は生徒会になっているが明らかに俺へのメッセージだ。」

「内容を要約すると女子校の音ノ木坂学園のテスト生の俺に対して挨拶周りへの要請だ。」

「何で今さら」

「絵里曰く4月に一度挨拶周りの計画を立てていたけど、UTXが拒否つたためこの話自体流れた経緯があった。」

「でも断つたら最も面倒くさい事になりかねない」

「それじゃいくと言うことでいい?」

「頼む希。それと絵里には同行役をお願いしてもいいかな?」

「私でいいの?」

「この書面は1名だけとしか書かれていない」

この書面のどこにも生徒会長若しくは生徒会役員は同席してはならないとも書かれていない。

「分かったわ」

「助かる」

以外にも何にもリアクションが起こらなかつたのが不思議でたまらなかつた。

あきらめたのか・・・或いは何か企んでいるのか。1つ結果が出ててもそれ以上に面倒臭い事になっていく。

はあ・・・

やれやれだ!

その後HRで正式に廃校の無期限延期が正式に伝えられた。この発表に大多数の人が喜んでいる中更にぶつきらぼうになったら先生が何人かいる。

いつも通り授業を受けて放課後・・・

「悠に〜い!!来て来て」

「穂乃果・・・とりあえず落ち着け」

「いいから早く早く!!」

部屋に向かう途中、ハイテンション状態の穂乃果に引つ張られた。

「じゃーん!部屋が大きくなりました」

「おおー!」

今回の件からアイドル研究部の隣にある使われていない部屋の使用が認められた。

部屋自体ロッカーと長椅子だけの部屋だけど部屋自体広く、雨天時の練習にも使える

レベルだ

「まだ安心できないわよ」

「絵里先輩」

「今回の決定はあくまでも廃校検討の無期限延期であって白紙撤回では・・・」

「うううう」

すると絵里の隣で海未が号泣していた。

「・・・どうした海未？」

「嬉しいです！ようやくまともなことを言ってくれてくれる人が入ってきて」

「それじゃ・・・凜たちはまともじゃないみたい」

「ちよつと待って海未！それって俺も含んでいるのか？」

「それはおいといて・・・ほな練習はじめるで」

あれ？

スルーですか!?

希の一声でそれぞれ練習着を持って更衣室へ向かおうとした。

ちよつと待ってみんな!?!何で否定しないの？

「あ、ごめんなさい。私ちよつと用事で」

オープンキャンパス以降ことりは用事とかで早退が多くなった。

「どうしたのでしょうか？」

「まあ、ここしばらくハイペースで来ていたから溜まっていた用事もあるだろう」

というより俺たちもそうだけど。

「ごめん。私たちも今日は用事があるの」

「そうなのですか」

「急に出た話で・・・まあ簡単に言ったら周辺高校のあいさつ回りかな」

簡単に説明した後今日この練習メニューを海未に伝えてから荷物を持ってUTXに向かう。

「でもさ、この時期に悠斗の紹介っておかしくない？」

「そんなもの言われなくても分かっている」

廃校が無期限延期の案が出て直ぐの要請。

恐らく何らかの形でUTXに漏れて、慌てて俺がどんな人物か確認したいのだろう。

「でも行くよね？」

「ああ。この目でUTXを確認できるからな」

「相変わらず目に鼻がつく建物じゃのう」

「・・・本当ね」

おいおいおいおい!!

あの絵里が俺の冗談に同意したぞ

・・・よっぼこの学校にキレているんだな。

事務所で受付を済まし終えて構内に入った。

それにしてもいけすかねえ場所だな

「監視カメラは・・・結構な数があるな」

それ以外に金属探知機や赤外線センサー、下手したら対人レーダーやトラップが幾つかあったり学校にしては阻止装置が大げさすぎる。

「ふう、相変わらず息苦しいね」

絵里ですら息苦しく感じるのに俺なんかもういつ条件反射が出るかで落ち着かない。

「いらつしやい。絢瀬さん」

「ええ」

生徒会室に入ると早速UTXの会長と会った瞬間一発触発の戦闘モードに入った。

前に希が言っていたが本当に蛇とマンガースだな。

どっちがマンガースかは敢えて言わないが・・・

「音ノ木坂学園テスト生の朝霧悠斗と申します」

「UTX学院生徒会長の皆沢です」

おい！それだけかよ!?

「失礼ですが会長さんは外交辞令って言葉は知っていますか？」

流石に今の無礼には腹が立った!

絵里はよくこんなやつらと渡り合ったな。

「あなたから招待に応じて馳せ参じ参りましたのにお世辞の一つも言えないようではトッブとしていかがかな?」

「あら?失礼しました。てつきりそこまでも教養がないと思っていましたわ」

こ、このガキ!?

いくら音ノ木坂が廃校の危機に瀕していたといえ、そこまで落ちぶれていないぞ!

よお絵里はこいつの言葉に耐え切れてきたな。

ならこれ以上の無駄話を避けて本題を済ましてとつとと帰るか

「それで生徒会長さん私が呼ばれた理由をお聞きしてもよろしいでしょうか?」

「ねえ、あなたUTXに入らない?」

「な!?!」

「はい!?!」

いきなり何言い出すこの子は!!

「この間の音ノ木坂のオープンキャンパス見させて貰いましたわ。あなたの頭脳に感服しましたわ。うちには政財界に多数の知り合いです。このままUTXに入られますと・・・」

「あなた！いきなり言いだ・・・悠斗」

絵里の前に手を出して、言葉を遮った。

「かのUTXの生徒会長からここまで行っていただけののは光栄の極みです。では私の回答です」

俺は一呼吸おいてこういつてやった。

「寝言は寝て言えバカヤロー」

「な!？」

「生憎とも政財界には興味がなくてな。今は音ノ木坂の廃校回避が一番重要で・・・まあ本音を言ったらあんたらみたいなの礼儀知らずの学校に入るなんてこっちから願い下げじゃー!アホンダラ」

「・・・いい度胸ね!私たちの誘いを断ったのはあなたが始めてよ」

「そりやーどうも」

その言葉に相当引っこ抜きがあったと予想できた。

「しかし、折角及び致しましたのに私どもの面子は潰れまし・・・」

「うんなの知らんじゃな。その程度で潰れる面子なら傷つけんように懐に仕舞うときん

「さいや」

言い切る前に言い返してやった。

皆沢の顔見ただけでも怒り浸透なのはよう分かるわ。

プライドは人一倍高そうじゃもんな。

「そういえばそちらもラブライブに出場なさるのですよね？」

「そうじゃ！」

「ふふ、A—R—I—S—Eに負けてみっともなく晒しなさい」

「なんだと！もういつペン言ってみろや!!」

胸ぐらを掴みそうになったが間一髪絵里に止められた。

「そつちこそ吠えずらかくんじゃねえぞ！」

「宣戦布告……と見なしますよ」

いつの間にか黒沢の後ろにA—R—I—S—Eが来ていた。

流石にスクールアイドル界の頂点に君臨しているだけにいい面がまえしとる。

「上等だ」

ここで引いたら弱腰と見られかねない。引いても地獄、進むもの地獄。

なら前に進むしかない！

普段怒っていない人間の怒りに火を入れるとどうなるか歴史が証明している。

「μ、sのみなさん。今度の予備予選楽しみしております」

「ああ、お互い悔いのないよう最高のパフォーマンスをしましょう」

「どうやらA—R—I—S—Eは皆沢より話が通じそうで安心した。」

UTXを出た俺と絵里はそのまま駅に向かって歩いていった。

「……………絵里の言うとおりマジでムカつく学校だな」

「……………そうね」

「いったいどんな教育したらあそこまで傲慢な性格が出来上がるんじゃないの？」

「でも本当にあんなこと言って大丈夫だったの？」

「正直言うてラブライブの予選結果は問わない。恐らくあの人はわざと挑発して俺たちの本来の目標である廃校の白紙撤回を逸らす意図が見えた」

「恐らく上層部の辺りが言ってるのだらう。」

「優勝だけ意識し過ぎるとかえって足元がすくわれて目標を見失いかねない。」

「それじゃ宣戦布告を受け入れたのは？」

「やんわり返すだけじゃ弱腰と見られかねない。今後の戦略を考えると強気にいかないと」

敵はA—R—I—S—EというよりはUTX 学院の上層部だらう。官房副長官の秘書が

言っていた派閥争いに利用されている可能性は否定できない。

駅を通り抜けて電気街に抜けると見知った面々がいた。

「・・・・・・・・なあ絵里」

「何？」

「・・・・・・・・あれ」

指を差した先に季節はずれのブラウンのコートとマフラーにサングラスとマスクをつけた見覚えのある8人組がいた。

「・・・・・・・・なんのつもりだあいつら？」

「どうする絵里？」

「どうしよつか？」

正直スルーしたい気持ちなのだが、このままじゃμ☒sがおかしい目線で見られるのは戦略上良くない。

「お前たちいつたい何のつもりだ？」

「悠にい！絵里先輩」

「これはどういふこと？」

もはや絵里も怒りを通り越して半ば呆れていた。

海未の言う通り確かにマトモな人がいない。

「実は……」

花陽曰く俺たちが出ていった後にこがしなきやいけないことがあるらしくで、今に至る。

「にこ……どういうことか説明してくれ」

「これがアイドルに生きる者の定めよ！」

……相変わらずこいつのアイドル理論には言っている意味が全然分からん。

「だけどこれは……」

「……逆に目立っていませんか？」

「馬鹿馬鹿しい」

μ、s 随一のクール組である絵里と海未が苦言を言い、真姫にいたっては言い切るのと同時にコートとマフラーサングラスを外した。

流石にこの暑さじや熱中症になりかねない。

真姫に釣られてみんなも外した。

一人だけ不服そうな顔をしているやつがいるけど聞かないことにした。

「うわー!!すごいにゃ」

俺たちが入っていた店はスクールアイドル専門ショップ。

スクールアイドルの爆発な人気に連れてこういったショップが随時作られている。

店内を見渡すとA—R—I—S—Eだけではなく全国各地のスクールアイドル達のポスターやグッズが置かれている。

制作販売著作権管理はスクールアイドルランキングサイトに一括で行われており、各スクールアイドル達はそのランキングサイトに登録するとライブ予選の出場資格を得るがその代わり各地にある加盟店のスクールアイドルショップに自分たちのグッズが販売されその売り上げが大会運営費に充てられるシステムになっている。

今のスクールアイドルは全国で1000組近くあつて流石に全部が全部作れる訳ではないので、その中で上位やその地元優先にグッズが作られている。

「結構にぎわっているね」

「ライブライブが始まるやからね」

初めてこの手の店に入ったけど所々売り切れの表示が目につく事から想像以上の賑わい。

「悠先輩見てみて!!この冠バッチ・・・かよちゃんにソックリだにゃ」

「そっくりって・・・というより花陽だぞ」

凜の後ろ側にあつたコーナーを除いてみると・・・

「みんな！ここにμ、sのコーナーがあるぞ！」

「嘘!!」

スクールアイドル界の中でもμ、sの名前の大分広がっているみたいだけどこんな風に彼女らのグッズが店頭に並んでいるのを見るところらしい反面複雑な気持ちもある。

「ううう海未ちゃん！これ私達だよ!?!」

「おおお落ちつきなさい！穂乃果!?!」

「まず2人が落ちつきなさい」

いつも穂乃果を抑えている海未までもがテンパリでしたら収集が着かなくなる。

「退きなさい!!それより私のグッズは?」

他のみんなを押し退けて自分のグッズを探し始めたにこ。

本当ならここで小言の一つでも言おうとしたけど自分のグッズを見てにこの目には涙が滲んでいた。

ずっとアイドルになりたくて、人一倍アイドルに強い思いを持っていたけど一度は挫折した

だけど諦めきれずにずっと部室を守り続けてようやく同じ思いを持った仲間たちに

出会えた。

今回のことは見なかったことにしよう。

しばらく店内を見てみると穂乃果が、sのコーナーとは違うところを見ていた。

「どうした？何か面白いものが見つかったか？」

「悠にいこれなんだけど……この写真ことりちゃんにそっくりじゃない？」

………えっ！

穂乃果の指を指した方向を見るとメイド服を着たことりの写真がかざってあった

「………確かにことりだな」

しかしどういうこっちゃ？

スクールアイドル初めて4ヶ月弱。一度も撮影会みたいなものはやっていなかった

し、運営会社自らやるときはアポがあるはずだし。

「あ、あの……ここに私の写真があると聞いて……」

腕を組んであれこれ考えていたら隣で聞きなれている声が聞こえて振り替えて見

ると

さっきの写真と同じメイド服を着たことりがいた。

「……何していることり?」

「きゅぴー!」

俺に驚いて一度後ろに振り返り開封済みのカプセルを目に当てた。

「コトリ? what ? ドウナタディスプレイ?」

「……すまないなことり」

それで騙されるほど俺たちは……

「あ!外国人!」

訂正、凜は騙されていた。

本当ならことり事で集中すべきなのだがあまりにも素直と言うか天然と言うか……正直凜の将来が気になって仕方がない。

いつの間にか来ていた絵里も呆れているぞ。

「ことり……よね?」

「チガイマース!ソレデハミナノシユー!サラバ!!」

メイドさん@ことりは逃亡を始めた

「穂乃果、海未頼む!」

穂乃果と海未がことりを追いかけたけど複雑な裏路地に入り込まれると流石に追い付かない可能性がある。

「あれ？悠斗は追いかけないの？」

「こういうときはな、相手の逃亡ルートを絞り組んで……って希は？」

「いつも間にか希の姿がなかった。」

「希先輩なら先程『カードに導かれて』と仰ってどこかに行きました」

俺の疑問に花陽が答えてくれた。流石スピリチュアル巫女さんだ。

逆に恐ろしくなつて来るけどもう俺の出番は要らなさそう。

「センパイ追いかけてなくてもいいんですか？」

「心配せんでもいずれ終る」

すると希からこことを確保したと連絡が入った。

「ほらな」

最早何か異能力があつても不思議じゃないがとりあえず希が指定した店に向かうことになった。

21自由

ことりを捕まえた希から指定された場所に向かうと、その店はいわゆるメイド喫茶だ。

メイドの格好時点で察していたけど、何でバイト始めたのか皆目検討がつかない。

取り合えずあれこれ考えていても埒があかないので意を決して店の中に入った。

これがいやらし系統の店なら直ぐに東條副長官に連絡して公安を使って店長以下関係者を地獄の底に叩き込んでやると思っていたが店内は少しメニューの名前があれなだけで以外にもクラシカル風をイメージした内装だ。

メイド服もロングスカートの風で至って普通の店っぽいで客層も以外にも女性客が多いのが驚いた。

さて本題に入ろっか。

店長のご厚意でスタッフルームの一室をお借りしてことりから事情を聞いていた。

「ええ〜!!ことり先輩が伝説のメイドミナリンスキーさんだったのですか!?!」

「なあ．．．にこ、そんなに有名なのか?」

もう一人アイドルに精通しているにこにも聞いてみた。

「そうね。もうこの業界で知らない人はいないんじゃないかな？」

「そこまでかよ」

確かに前回リーダー決めるときのピラ配りもことが一番速く終わっていた。

「酷いよことりちゃん！何で言ってくれなかったの？」

「うっ」

幼なじみである穂乃果にも黙っていたんだやはり思うところもあるんじゃないだろう

「言ってくれたら遊びに行ったのに」

「そこかよ!!」

そうだった。

こいつはそんな小さな事にはこだわらない奴だった。

「それじゃこの写真は？」

「前に店のイベントで歌ったのだけど隠し撮りされていたみたいで」

「なるほど」

確かに店の注意書には勝手な撮影はご遠慮くださいと書かれていたし、恐らく隠し撮りした写真が何らかの形で運営会社へ送信されて本人が知らない間にプロマイドが販

売していたわけか。

「一応サイトの運営会社に問合せて外すように頼んでみる」

「ありがとう悠にい」

問合せるといったけど時間が掛かりそうなら副長官に頼んでウラで掛け合って貰おう。

「それで・・・どうしてこのバイトを始めたのかしら？」

「自分を変えたいと思って」

「自分を？」

「私・・・いつも悠にいや穂乃果ちゃん、海未ちゃんの後ろをついていつているだけで何にもないから」

「何にもない？」

「穂乃果ちゃん見たいにみんなを引っ張っていけないし、海未ちゃん見たいにしつかりもできない。悠にい見たいに影に徹する覚悟もない」

「そんなことないぞ！歌も躍りも上手だよ」

「衣装だつてつくれるし」

「少なくとも2年生の中では一番まともね」

穂乃果は言わずとも三バカの筆頭で、海未はトレーニングジャンキーだし。その点真姫の言うとおおり一番マトモなのはことりだけだ。

「みんなありがとう」

みんなにお礼の言葉を言ったがまだ表情は暗いままだ。

時計を見ると結構時間が立っていて、これ以上長居する訳にはいかないから一度解散する事になった。

「後この事はお母さんに・・・」

「分かっちゃる。内緒にしておくから心配するな。な、皆」

みんなは力強く頷いた。

「悠にい・・・みんなありがとう」

この時今日初めて明るさを含んだ笑顔を見た気がする。

店でバラバラになってそれぞれの家に帰った。

俺と絵里と穂乃果、海未は途中まで一緒だ。

「以外とみんなも抱えているかもしれないよ」

「え？」

「自分が優れていると思っっている人なんて一握りしかないよ」

「絵里の言う通りだ」

「確かにその通りかもしれませんが」

「それじゃ私たちはここで」

「ああ、また明日な」

穂乃果と海未とも分かれて絵里と二人つきりになった。

「ねえ、悠斗今なに考えているのか当ててみようか？」

「言わんでもいい。多分正解だ」

最近絵里に何でも見透かされているような気がするよ。

「それじゃこの間の話は」

「ああ、受ける様に説得する」

恐らくμ、sにもことりにとってもいい機会になるだろう。

「ライブですか!?!」

「しかも横須賀で!?!」

翌日、この間の父さんの話を早速みんなにした。

「理由はさつき話したとおり。本来参加予定の1組が体調不良で辞退、そして再考の時間もないと言うことで、sにオファーが掛かった」

「でもそれっていいのですかね」

「その辺も父さんが各方面に根回ししているから問題ない」

以外にも様々な省庁にも顔が効いていて、外部からなに言われようがごり押ししてでも通すみたいなのは言っていたからな。

「まあスクールアイドルメインのイベントではないが毎年多くのお客さんが入ってきていることもあってラブライブに向けて大きな一歩につながると思うのだ・・・」

「やろうよ!!」

俺が言い切る前に穂乃果の声で遮られた。

頼むから最後まで言わせてくれ。

「だって面白そうじゃない!」

「こういう時の穂乃果の決断は助かる。だってみんなの目がやる気スイッチに入れた。」「決まりだな」

「それで人数はどのくらい来るの？」

「去年のデータだけど訳2万人の来場者が来た」

「2万人!？」

「す、すごい人ですね」

「海未よ・・・人が来なかつたら広報の意味はないぞ」

「わ、わかっています」

相変わらず海未は人前に立つことにまだ慣れないな

「ただ一つ問題があつて」

「問題？」

「これも再考が間に合わない理由になるのだけど参加団体には海か夏と空をイメージした曲を必ず披露するのが前提条件」

「ちよつとそれはきつくはない!？」

作曲担当の真姫が難儀を示した。

「実は夏と空に関しては心当たりの曲がある」

「ホント!？」

「この間父さんから渡された母さん遺品に2曲の楽譜が残されていた」

鞆の中から夏色えがおで1, 2, J u m p ! と書かれた楽譜と歌詞に W o n d e r f

U1 Rushの楽譜を見せた

「晩年母さんが書いた楽譜に間違いない」

「おばさんが!?!」

「でもよろしいのですかこれを使っても?」

昔から母さんを知っている海未

本当に使っているのかと思っているとと思うのだが

「問題ない。むしろ使ってほしいのが俺や父さんの思いだ」

このまま誰も目に当てず眠るよりかは誰かの手によって世の中に出してほしいと楽譜と一緒にあったメモにそう記載されていた。

「編曲や歌詞に関しても俺は真姫と海未に全権を委ねる」

「分かったわ」

「分かりました。必ずやいい作品に仕上げます」

「これで後は空の歌詞ですね」

「ああ」

「それなんだけど悠にい・・・私が作ってもいいかな」

突然のことからの志願。

話し合いが終わってのその帰り道……

「ねえ、悠斗本当によかったの？」

「妹に甘いかもしれないけどいい機会だと思ったよ。絵里は反対か？」

「ううん。賛成よ」

ことりの悩みを聞いたときこの構想は頭に過った。

穂乃果や海未から逐一報告が上がっているけどあまり芳しくないみたいだ。

夏色は元々が出来上がっていたので編曲と微調整で完了したけど、Wonderful Rushだけはまだ未完成で歌詞すら出来上がっていないようだ。俺もちよくちよく様子を見に行ってみると完全に迷走状態だった

「ねえどうする?..」

「そうだな」

これ以上の遅延ははっきり言って不味い。既にメロディーは完成してダンスの練習に入っているが肝心の歌詞が出来上がらないことにはどうにもならない。

どうしようか手をあぐねていたとき電話が掛かってきた。

『ヤッホー悠君！今度の休み空いている?』

「いきなりどうした？」

相変わらずのハイテンションで突然電話がかかってきたと思いきや行き成りの用件。

『一応本番前に確認に来て欲しいのだけど大丈夫かな？』

「確認？」

『そ！他の参加メンバーには既に伝えているけど、急遽決まったム☒sだけ細かい説明していなくて』

「それって全員参加した方がいい？」

『いや、2、3人でいいよ。流石にあの狭い艦内じゃ』

「分かった。決まったすぐに連絡する」

『お願いね』

「おじさんから？」

「ああ、一度打ち合わせに来てくれて」

メンバーねえ……

俺は絶対だし、残りはどうし……そうだ！これを利用したらいいんだ！

「………と云うわけで打ち合わせの為に横須賀鎮守府に行く事になったの」

「行きたい！」

「ずるいにゃ」

部室に戻ると早速打ち合わせの件を伝えると今度は誰が行くかで揉め始めた。

頼むから最後まで人の話を聞いてくれ！

「お前ら落ち着けて……そんなことだろうと思つてくじを作つた」

「くじですか？」

「艦内はみんなが思っている以上に狭くて大人数の移動が困難だ。だからくじ引きで俺を除く3人まで絞り混む」

そして用意された9本のくじをそれぞれ引いた結果、行くメンバーは絵里、ことり、希に俺と決まった。

「ううう、悔しいにゃ」

「凜ちゃんドンマイ」

「何か作為的な組合せなのだが」

「失敬な。ちゃんと公平公正で決めたものだぞ」

流石勘が鋭いこと。

実はことりが行き詰まったので気分転換で見ても悪くないやろと思ってちよつと工作しちやつた。

「それじゃ土曜の朝8時に秋葉原駅に集合」

土曜日になり俺たちは秋葉原駅に集まって環状線で一度品川で横須賀駅行きの電車に乗り換えた。

「それで悠斗、この組み合わせで何か作威的なものをかんじるんやが？」

「流石希！完全にばれていたか」

「・・・まあ今回の組み合わせにはこたりの息抜きと俺のサポートに絵里」

「私は？」

「実はこれに関しては俺の個人的な」

「個人的？」

「あくまでも噂レベルなのだが・・・つと漸く着いたか」

「凄い！大きなフネがいっぱい!!」

「ここにくるもの随分久しぶりだな」

「うん。この海の香りも全然変わっていないね」

横須賀鎮守府

横須賀市内複数の地点にある港湾施設、陸上施設群と横須賀海軍施設の総称。

皇都に近いこともあつて連合艦隊司令部、護衛艦隊司令部、潜水艦隊司令部、機動艦隊司令部等海軍中枢的な基地。そのよう事もあり停留する艦艇も多く、その時代の最新艦が配備されている。

自前の整備用大型艦用が2つ、中小型が4つのドックが用意してある。各艦艇のミサイル弾薬類の備蓄もここに嚴重に保管管理をしている。一部海軍の試作兵器もここに保管・管理・運営を行っている。

「あれ？ことりもきたことがあるの？」

「うん。子供のころ悠にいとおじさん、穂乃果ちゃん、海未ちゃんで来たことがあるの」
子供のころ護衛艦の船務長だった父さんと一緒に艦艇見学に連れて行ってもらったことがある。

それから10年経っているけど雰囲気は昔のままだ。

「悠くん！ことりちゃん！絵里ちゃん！希ちゃん!!」

基地内で大きな声でこの間着ていた海軍第三種夏服ではなく、参謀飾諸を付けた第一種夏服で父さんが迎えにきた。

衛兵が呆然としているからもうちよつと自分の立場を理解して自重しろよ！

「本当に参謀になっていたのだな」

「今の今まで我がままを押し通して貰ってからな」

「こんにちはおじさん」

「おひさしぶりです」

「こちらこそこちらの依頼に応じてありがとう」

父さんに案内されて久しぶりに横須賀鎮守府の中に入っていった。

今日は休養日ということも合って人が全然いなかった。

「ここが君たちのメイン会場となる空母蒼龍だ」

「・・・・・・凄いい!!」

「こんなに大きいんだ」

蒼龍型航空母艦一番艦『蒼龍』

全長320m、飛行甲板74m、排水量10万トンを越す日本最大の大型艦だ。

ラツタルを渡り舷門（艦艇の一般受付窓口兼警衛場所の総称）で手続きを済まして艦内に入った。

舷門に立っている隊員も不動の姿勢を維持している

「思っていた以上に狭いのだね」

「そうやね。それに段差も結構あるやね」

「まあ軍艦だからね狭い艦内を効率よく活用するためや被害を最小限に抑えるため一定間隔に非常扉を設置したりとかしているからな」

艦内に入って02甲板にある士官室に入っていた。

「失礼します」

「音ノ木坂学園スクールアイドルμ、sのマネージャーをやっている3年生の朝霧悠斗と申します」

「音ノ木坂学園スクールアイドルμ、s3年生の絢瀬絵里と申します」

「同じく東條希です」

「2年生の南ことりです」

「初めまして。艦長の若林です。さあ、席にお座りください」

お互いの挨拶も終わり本題に入った

「この度は私たちの申し出にに応じていただきありがとうございます」

「いえいえ私たちも」

艦長の立ち会いの元、当日の日程や準備期間の説明を受けた。

「いや、無事終わってよかった」

「まったくだ」

会議が終わった後、下層にある科員食堂の自販機で一息ついていた。

少しドタバタする日程ではあるが滞りなく終わった。

「それで悠斗……ひとつ気になったのやが」

「どうした？」

「上手く言えないけど何か……気配を感じるんやが」

「やっぱり感じ取ったのか」

「やっぱりって確信していたの？」

「半信半疑だったけど」

一息ついて……

「艦魂って知っているか？」

みんなは一斉に首を降り始めた。

「いいえ。知らないわ」

「これは昔から船乗り達から受け継がれている、所謂フネの妖精とも言うべきものかな」

「フネの妖精？」

「解釈は多種多様で一概には言えないけど、一言で言ったらフネの化身若しくは分身と言うべきかな」

「希は靈感とか強いと思つて試しに連れてみたけど、まさか本当にいたとは……」
流石日本と言うべきかな。

「ちよつとそれつて体のいい実験やない!？」

「そうとも言う」

「それしか言わない」

こいつには俺の好奇心が勝つてしまった。

希には申し訳ないことをしたが、いつもやられていることだし。

「それじゃ、会場となる飛行甲板見に行こっか」

軽く抗議をかわした後に父さんの提案で飛行甲板見に行くことになった。

「凄く広い!」

展示用の航空機数機を除いて後は格納庫や航空基地に入れていた。

「けどこうして蒼龍の飛行甲板に踏み入れるなんて思つてもいなかった」

「全くだ」

しばらく飛行甲板をウロウロしていたら不意にことりが真ん中に足を運び、そのまま

立ち止まった。

「どうしたことり？」

「おじさん達はいつもここで訓練をしているの？」

「ああ」

昔から空母の訓練は類を見ないほど厳しいと言われている。軍艦の花形であるイージス艦で厳しい訓練を受けている隊員ですら空母の訓練をキチ〇×と言わしめるほどトチ狂ってるらしい。

「僕はこう見えても艦載機のパイロット経験者でね」

父さんは潜水艦乗りだけでなく戦闘機も取り扱え、特殊部隊顔負けの戦闘センスも持っている。

「乗り始めた頃は二刀流・・・艦艇操艦とパイロットの二つを目指して意気込んでいたけどやっぱり上手く行かなくてね20年前のスクランブル発進を最後にライセンスを返納した訳さ」

初めて聞く父さんの経歴にみんなは耳を傾けた。

「どんな感じだったの？」

「こういつちゃ何なんだけど・・・ある意味自由だったよ」

「ある意味？」

「軍人である以上指揮官の命令は絶対だけど飛んでいるときは自由だった」

父さん曰く、冷戦終結とソ連崩壊のどさくさ紛れにユニオンが東シナ海の制空権を巡って小競り合いが起こった

その時にスクランブル発進して一度空に上がればそこには上司も部下も、上座も下座もなかった。お互いの技量を持って制空権を争っていた。皮肉にもあの時が一番自由であつたらしい。

「全部が全部難しく考える必要もないのさ。時には自分が思うがままに・・・自由にやってみるものだよ！そうしたらまた違った見え方する」

「・・・自由に」

父さんの一言で吹っ切れたのか制作は順調に進み、そしてサマーフェスタ当日、天気は快晴で多くの人で賑わった。

開会式、音楽隊による演奏も終わり、次に俺たちの番だ。

「ふええ〜いろんなグループが来ているね」

「今話題のスクールアイドルだけでなくバンド、ダンサーありとあらゆるアーティストを選択したからな」

俺たちは今艦首側の格納庫に設置された控え室にいた。

今回の広報で控え室用と広報用に格納庫の艦首側と艦尾側をシャッターで締め切った構造になっている。

「ことり大丈夫か？」

「うん！大丈夫だよ」

白を基調としたボックススカートのアイドルらしい衣装。

衣装に関しては特に制限とか設けておらず中にはかつこよさ重視も見受けられた。

「ありがとう悠にい」

「俺は何にもしていないさ」

本当今回は何にも手助けはしていないさ。自分で気がついて自分で進んだ結果さ。

「それでもありがとう」

μ、sの番になりエレベーターで飛行甲板に上がっていった。

俺は控え室に設置されているモニターで会場の様子を見た。

「それでは聞いてくださいWonderful Rush」

これぞ日本本場の夏！

「悠にいはなんだか平気そうですね」

「はつきり言つてキツイぞ」

「でも全然そういう風には見えないですけど」

昔・・・訓練の一環でフル装備で火山口に強行山したことがあつたおかげで暑さに慣れれている。

・・・もう二度と行きたくはない。

「そうだ！合宿しよう！」

「いきなりどうした？暑さで脳がやられたか？」

「やられていないよ！失礼しちやう」

それは今までの自分の行動を胸に当てて考えて見なさい。

「それはともかく合宿は確かにいい案ね」

「そうですね。ここ連日の猛暑では体もきついですし」

「でもどこでやるのですか？」

「そうやね。お金の問題も大切やで」

「だよね」

合宿自体いい案なんだけど交通費、宿代だけでもすごくかかるし。

この人数ではとても部費ではまかないきれない

お金の問題は深刻だからね。

「そうだ真姫ちゃんの家なら別荘とかあるんじゃない!？」

「おいおいいくらなんでもお金持ち〓別荘持っている」

「あるにはあるけど」

あるんかい!!

凄いな!西木野家は・・・

「仕方ないわね。聞いてみるわ」

そういつてスマホで電話していたら・・・

「ねえ悠斗先輩。ママが先輩に変わって」

「俺に?」

不思議に思いつつも真姫からスマホを受け取った

「はい変わりました朝霧です」

『ごめんなさい』

「いえいえどうなされましたか？」

『真姫ちゃんから聞いたのですがμ、sで合宿するのですか？』

「はい。細かい詳細は決まっていますが、sで合宿するのですか？」

『それで頼みたいことがあるのですがその合宿に一緒に行ってくださいませんか？』

「それはいいですがなぜですか？」

『お願いします』

ただならぬ思いにこれ以上は聞いてはいけない気が来た。

「分かりました」

『ありがとうございます』

通話を切りスマフォを真姫に返した

「ママからの電話なんだったの？」

「流石に女子高生だけじゃ物騒だから俺も一緒にについていってこれてくれたことだ」

あの言い方に引つ掛かったけど何があるのかな？

「あるもの用意してくれない？」

「あるもの？」

真姫に耳打ちしてその物があるかどうか聞いてみた。

「あることはあるけどそれどうするの？」

「まあ、見ておきんさい」

そして合宿当日

「おはよう絵里」

「おはよう……ってどうしたの？そんな小難しい顔をして」

「してた？」

「してたよ」

まあ……このぐらいなら別に言っても差し支えないか。

「この間の真姫の母親からの電話内容が妙に引っかかって」

「別に妙なところなんてなかったと」

「そうなんだけど……やっぱり引っかかって仕方がないんだよ」

何だろう？

何かが引っかかる。

結局もやもやがわからないまま絵里と一緒に合宿当日東京駅改札口に着くと結構な人数が来ていた。

「おはようございませう悠にいい」

「お、穂乃果が時間前に来ているなんて明日は」

「酷いよ!!穂乃果だつて早置きできるもん!!」

「それは修学旅行とかの場合でしょう」

「だろうな。」

横から海末の容赦ない突っ込みが襲つたけどそれは自業自得だぞ。

「みんながそろつたところで私から一つ対案があるの」

「提案ですか?」

「この合宿から、先輩後輩をの壁をなくすために先輩禁止にしたいと思つてるんだけど」

「え!?!先輩禁止ですか!?!」

「以前から気になつていたの、先輩後輩も大事だけど踊つているときにそういう風に気

にしていたら動きが硬くなると思うの」

「確かにそれは思うときがあります」

絵里が「ここ」数日何か考え込んでいたと思つていたらそのことを考えていたんか。

「だけどそんな気遣い感じなかつたけど」

「そりゃあ・・・あれだ・・・にこだから」

俺の一言でみんなは納得の声が上がった

「それ! どういうことよ」

「だってここ先輩あまり上級生って感じじゃないにやー」

「先輩じゃなかったらなによ!!」

「後輩?」

何もためらずに言い切ったここの子は!!

そこに痺れる!! 憧れる!!

「ていうか子供」

「むしろマスコットかと思っていた」

真姫と希の本当に容赦ない一言でここは撃沈した。

それに導火線にいった俺が言えた義理じゃないけど先輩後輩の壁を取り払うのはいいけどもうちよつと敬ってやりんさい。

完全に落ち込んだじゃないか!

「それじゃこれより合宿に出発します。部長の矢澤さんから
「うえ!? しゅ．．．しゅつぱあ〜っ!!」

落ち込んでいたところに絵里が行き成り振つてきてたつた一言で終わった。

「．．．．．それだけ?」

「考えていなかったのよ!!」

今日で分かった事．．．．．にこはアドリブに弱い!

自分で言っておいて割と同でもよかったな。

東京駅から電車に乗って3時間後目的周辺の駅に着いて改札口を出たその時．．．

「うん？そこにいるの西木野さんじゃないか」

「なんであいつが!？」

真姫の顔が一瞬で歪めた。あんな顔をするのは初めて見た

「知り合いか？」

「中学時代付きまといっていた医者」

いつも照れ隠しでそっけない態度するけど、そんな感じは一切ない。

「うわさで聞いているよ。スクールアイドル始めたのだな」

「あなたは関係ないわ。むしろ生きていたんだね」

男はひどい言われようだねと肩をくすめていたけど、いつのも真姫のノリではない。

あるのは声のトーンでも分かるぐらい真姫の声にはすさまじい嫌悪感が漂っている。

正真正銘心底嫌っている事だ。

「おや？そちらの方は？」

「私はμ、sのマネージャーをやっている朝霧と言うものです」

童顔で分かりにくいが医者ということは少なくとも社会人というのは間違いないだろう。

いくら真姫が心底嫌っているとはいえ最低限の礼儀をもって話しかけた。

「アサギリ？もしかしてあの呪われた朝霧の一族の者か」

こいつ!?

政府関係者しか知らないことをなぜ知っている!?

「しかし君たちも可愛そうだね。そんな呪われた男がマネージャーで・・・」

「いい加減にしてよ平沢!!」

「平沢だど!?!」

「悠斗・・・知っているの?」

「ああ、前政権時各省庁の情報を他国に売りさばいて国家反逆罪容疑が掛けられていた」

あの時の関係者は全員死亡か獄中に入っているとけど平沢だけ不起訴処分になった。

「キサマこそよくあの無人島のことで殺人罪で捕まらなかったものだね!!」

こいつ!?!よくもまあベラベラしゃべりやがって!!

「何のことかか?そちらこそよく国家反逆罪で捕まらなかったな」

「まったく無実の罪を人に擦り付けるとは・・・まあいい。いずれ君には天罰が下るだ

ろう」

そういつて平沢は駅のホームに消えていった。

そういえば真姫のお母さんがえらく気にしていたのはこいつが原因か!?

「悠にい・・・今の話って」

「いずれは話さないといけないと思っただけ・・・まさかここでばらされるとは」

「そういえば悠斗ってあまりアルテールスの時のことは話さないよね」

「流石にもう限界か……うん分かった。今晚話すよ」

「……なら今は何も聞かないでおくよ」

「ありがとう。ただこれだけは知ってほしい」

一呼吸を置いてみんなに言った。

「みんなを信じていないわけではない。この案件は元々日本皇国内でも総理を初めとする極少数の人間しか知らない最上級機密事項である。そう易々としゃべれない内容が多々ある」

「大丈夫だよ。悠にいい」

「私たちの身近にもいましたので」

「うん。悠にいいのおじさんが穂乃果ちゃんの家に行ったとき凄くまどろっこしくいたんだ」

「ありがとう」

平沢のひと悶着もあつたが、駅から歩くこと10分、俺たちは西木野家が所有する別荘に無事着いた。

「すごい真姫ちゃん！」

「すごいにや〜!!」

「ぐぬぬ……」

そのあまりのスケールの大きさに各々感嘆の声を上げる。

真姫の家も別スケールだったけどここも勝るとも劣らず。ここまでの別荘を維持するだけでどの位維持費がいるんだろう。

「ここは西木野家が所有していることになっていて、けど病院の従業員なら申請さえ出したら利用できるの」

「へえ〜珍しいね」

「一年の内たまにしか使わないのなら従業員の福利に使おうってパパが行っていたわ」

一度は真姫の親父さんに会ってみたくなくなってきた。

中に入ると外見だけの見掛け倒しではなくそれ相応に相応しい内装も整っている。

正直言って下手なホテルとは比べ物にもならない。

「ここなら思いっきり練習出来そうね」

「ああ、砂浜も近いし合宿しかできない練習もできるし」

「そういえば真姫ちゃんに何か頼んでいたけどなんなの？」

「まあ……せつかくの合宿何だから思考をこらせないとね」

砂浜や海といった普段ない環境を大いに活用しないと合宿の意味をなさない

「真姫、この部屋って?」

「そこ?確かパパがお酒置き部屋って言っていた」

「何!?!」

こんな別荘を持っている西木野家が所有するお酒だぞ!?

しかも見た感じ部屋丸々一個使っていると見た!

ぜひとも見てみたい!!

「……ちよつと中のぞいてもいいか?」

「いいけど」

真姫が持っていた鍵で開けるとそこにはワインだけでなく、スコッチウイスキーやバーボン、ブランデー、ジン日本酒、焼酎ジャパニーズウイスキー古今東西のありとあらゆるお酒が収められていた。

「これは凄い」

中には市場には滅多に出回らないモノもあった。

「あなたってお酒飲めるの?」

「アルテールスはバーといった飲食店なら15歳から飲めることができてよく飲んでい

たよ」

いま日本にいるのが残念だよ。

「それより平沢の件大丈夫か？もし不安なら父さんに頼んでみようか？」

「大丈夫よ。あんな男」

もう隠す気がないといつていいほど嫌悪感を出している。

「……なあ真姫とあいつの関係は一体何があった？」

「平沢は元々パパの病院で働いていた医者で元婚約者だったわ」

「婚約者!？」

「勘違いしないで婚約者といっても親が勝手に決めたことだし、そのとき中学生だったから最悪は断つてもいいよってママが言っていた」

「やっぱり病院経営者ならどうしても自分の子供に継いでほしいと気持ちがあるのかな？」

「元ということは今では破棄されているということかな？」

「そうね。あいつがパパの病院を辞めて自動的になくなっただわ」

辞めた時期も話を聞く限り丁度政権交代直後みたいだし、原因は国家反逆罪容疑かな？

「どうして辞めたんだ？」

「分からないわ。ただ……」

「ただ？」

「普段はニコニコしていたパパがあの時珍しく怒っていた」

怒っていた……か。

普段温厚な人が怒るということは医療事故かそれに付随するのだろう。

その後の足取りも一切不明だったらしく真姫自身ももうくたばっていたと思っ
たらしい。だけど奴が政府内しか知らない俺のことを知っているということは退職後
は旧民社党の連立政権と繋がっていただろう。

暫く散策していたら柵から良いモノを見つけた。

「おっ!?!これは!」

「何か気になるもの見つけたの?」

「こいつだ」

柵から一つのボトルを取り出した。

「ボウ……モア?」

「そう。ボウモア。スコットランドのアイラ島のボウモアにあるウイスキー蒸留所で作
られたウイスキーでアイラモルトの女王とも呼ばれる気品あふれる香りが特徴のお酒
で、ボウモアの輝きには女神が宿るともいわれている」

「女神って!？」

「μ、sが音楽の女神を関するようにボウモアは数あるウイスキーの中で説明文に女神が宿ると記載されている」

アイラ島の女神は昼間は白い鷗となつて蒸溜所を見守り、夜は蒸溜所の灯台火となり海を照らし、貯蔵庫の樽たちに安らぎの光を与える。ボウモアのボトルの輝きは女神が宿る証ともいわれている。

「お酒つてただのアルコールというわけではないんだね」

「そうだ長き時にわたる堆積された技術・思いを職人たちが後世に伝え、そしてそれらを次の世代へ紡いでいく。所謂伝統の継承だ」

「伝統……継承……」

そしてアイラ島の職人も祖先から託された神からの恩恵や、たとえ非効率と言われている工程でもすべての遺産を大切に次の世代へ伝えていき、それを怠らなければ女神は微笑みいいウイスキー作り続けられると信じられている。

「……ねえそのボトル……外に出さない?」

「え?」

ボトルを元の棚に戻そうとしたとき真姫がそう提案してきた

「えっと・・・その・・・居間にお酒を飾る台があるのだけど今何にもなくて・・・この後片付けようと思ったけど、その・・・せっかく女神の宿っているのだし・・・」

「ありがとうな真姫」

「ど、どういたしまして／＼／＼」

おっ!! 久々に照れてる姿が見れたな。

平沢の件で心配していたが大丈夫のようだな。

ここの棚に収まっている歴々方、申し訳ございませんが一時お借りします。

そして居間に行き真姫が言っていた台にボウモアを乗せて手を合わせた。願掛けというわけではないけど、俺たちがこれから行く道ははつきり言って真つ暗の状態だ。アイラ島の女神を宿りしボウモアよ。音楽の女神を関するμ、sの灯火となり、灯台かのように俺たちの行く道を照らして下さい。

23 合宿②

しばらくして、玄関前に集まった俺たちは練習メニュー担当の海未からこの合宿期間の練習メニューの発表があった。

ここ数日は生徒会を手伝っていたこともあつて内容を見るのも今日が初めて。

さて・・・どんな内容になっていることやら

「これが合宿の練習メニューです!!」

いつの間にか用意されていたホワイトボードに海未作成した練習メニュー表が張られていた。

1日目

遠泳10km

ランニング10km

腕立て腹筋20セット

精神統一

発声

ダンスストレッチ

2日目

遠泳15km

ランニング15km

腕立て腹筋20セット

発声

ダンスレッスン

精神統一

「凄い！こんなにびっしり」

びっしりってレベルじゃないぞこれは!!

「……ってそれより海は!？」

「私ですが?」

海末の天然ボケに思わず笑いそうになるけど堪えた。

今ここで笑った確実に消される。

え!?誰について?そんなの怖くて俺の口から誰とは言わないよ。

「違うよ!海だよ!海水浴だよ!」

「ああ!それならここに」

そういつて指を指したが・・・

「遠泳10km!?!」

「その後、ランニング10km!?!」

俺は訓練でやったことあるけどみんなを殺す気か？

はつきり言つて無理だぞ!!

「最近、基礎体力をつける練習が減っています。せつかくの合宿ですしここでみっちりやつといた方がいいかと思ひまして」

確かにここしばらくはライブ続きで基礎体力練成の機会は減っていた。

無論そのころにはライブを続けれる分の体力は出来上がっていた。

「それは重要かもしれないけれど・・・みんな大丈夫かしら?」

みんなのお姉さんである絵里が代弁を試みるけど

「大丈夫です! 熱いハートがあれば!」

凄い!

一体何を経験させたなら彼女をここまでストイックさせたんだ!!

海末のやる気スイッチが痛い方向に入っている。

このままでじゃ地獄の練習によって力尽きてしまう。

「やる気スイッチが痛い方向に入っているわね・・・兄貴分何とかしなさい」

「……よし分かった」

ちらつとアイコンタクトを取ったら通じたみたいで心が一つになった

「GO!!」

俺のサインどおりみんなは一齐に海に向かって走り出した

「あなたたち!!」

「……悠にい……どういうことですか」

「折角海に来たのだから楽しまないと損だよ」

「ですが練習は!？」

「おおい!!海未ちゃん悠にい!絵里ちゃん」

「まずは今を楽しもうや」

イマイチ納得していない海未だったけどしぶしぶ了解して一度着替えに戻って行った。

穂乃果と凜とにこは既に着替えていたので海ではしゃいでいたけどそれ以外の人ら

は着替えに一度各々の部屋に戻った。俺も着替えが早く終わって準備体操しつつ皆を待っていた。

「どうしたの悠斗？ここでぼーと立って」

「あれ？悠斗は泳がないん？」

「……いや」

すると絵里と希が先に出てきたけど、俺も男の端くれでどうしてもその自己主張するモノに視線を向けてしまう。

普段から一緒に行動していてスタイルの良さは実感していたがそれはあくまでも服の上からの妄s・・・想像だけど、実際水着姿で出た2人を見るといやでも実感してしまう。

「それでどう？うちの水着は」

「え!？」

絵里は気が付いていないけど一瞬だけ見たことが希にバレて意地の悪そうな笑みを浮かべながら聞いてきた。

正直言うて・・・目のやり場にもものすごく困るし、どう答えようとした瞬間後頭部に衝撃が走った

「痛てー！ー！ー！ー！！！！！！」

後頭部を抑えて躡っている足元からバスケットボールが転がっていた。

「まったく悠にいはいつからそんなにだらしなくなったのですか」

「悠にい……」

前にも言ったと思うがハイライトさんちゃんと仕事してください!!

また幼馴染も目からハイライトが失っているぞ!!

以前みたいに凍えるような殺気がないのは不幸中の幸いだけだ。

「ところで海未ちゃん、そのバスケットボールは？」

「これですか？居間にありましたので持ってきました」

「それ……俺のボールだ」

「え!?海でバスケットボール？普通ビーチバレーのボールじゃないの?」

絵里の意見ももつともだ

「せっかく砂浜に来ていることだしちよつと試したいこともあった」

「それでどう私たちの水着は」

「ちよつと待つて今全員分感想をまとめているから」

「……前々から思っていたけど悠斗って女の子の扱いが上手いよね」

「うん……それ……うちも思っていた」

「勘違いしないで！親友が聞きもしないことをベラベラしゃべって……ってその目！！全然信じていねえよな」

幼馴染引き続いて絵里と希のハイライトも消えかかっていた。

「でも、スタイルが一番いいといえば悠センパイじゃないかにや？」

「俺!？」

みんなが集まってきたのか海で遊んでいたはずの穂乃果たちがいつの間にか戻ってきて話に加わった途端爆弾発言した。

「言われてみれば確かにそうかも」

「そうやね。すらつと長身で細身なのに筋肉質で、本当いい体って感じやね」

各々と感想を述べてくるがやめてくれ恥ずかしすぎる!!

「まあ……剣術やっているからなそれなりには鍛えているけどあんまり見ないでくれ」

「えーいやだよ」

「逆に俺がジロジロ見てたら引くだろう!」

「うん。割と引くわ」

「ちよつと!!」

冗談が一切感じない一言にショックを受けた。

「冗談だよ悠にい」

いや。嘘だろう!!結構本気だったよね!?

「ちよつと触つてもいいですか?」

「い、いいけど」

「すごい!人の身体つてここまで」

「あ——!!かよちんだけずるいにゃ!!凜も触りたい」

ペタペタペタペタ

なんだろうかこの状況は・・・

恥ずかしい気持ちもあるといえはあるけど、sメンバーは鼻屑目なしでかわいい美少女達にさらわれるのは悪い気はしないけど・・・

「人気者やな悠斗は」

希は希で相変わらず意地悪そうな笑みを浮かべながら煽っていた。

さんざん玩具にされて精神的に疲弊しきって何とか脱出して、パラソルの下で優雅に過ごしていた真姫のところに行った

「隣・・・いいかな」

「いいわよ」

真姫に許可をもらって空いているもう一つの椅子に座った。

「いいところだね」

「そうね」

「あなたは遊ばなくてもいいの？」

「男一人が女の子の群れに飛び込む勇気がなくてな」

「あら？以外に小心ものね」

「悪かったね」

ハーレムがうらやましいとかほざいている奴もいるけどいつて余りいいことないぞ
はつきり言つて今の俺は弱小勢力だ

さつきみたいに体触らせて言ってきたら断ることもできないし、じつくり見てい
たら変態扱いされるし・・・何にもいいことないぞ！

「さて・・・」

「どこかに行くの？」

「ちよつとあるモノの準備にな」

暫くたった後、合宿前に真姫に頼んでいた例のものを立ててもう一度みんなを集めた。

「いまから5 on 5のバスケのミニゲームをやります」

みんなの顔はキョトンとしていた

普通海と言ったらビーチバレー

「でもゴールは？」

「それならすでに用意している」

砂浜にはみんなが遊んでいる間に設置したバスケットリングが立てられていた。

「面白そう！」

「ルールは体育の授業と全く同じで行く」

※1時間後※

「思っていたより疲れたよね」

「はい。思っていたように動けませんし」

1ゲーム10分休憩5分1セットでプレイしていつて今が4回目終了した。

「休憩が終わったら今度は室内でダンスの確認だ」

「え!?もう室内ですか」

「この気温じゃ熱中症になりかねないし。交互にやりながら行く」

この数カ月でみんなは体力だけでなくダンスのキレも向上した。だけど一つ一つの動作にまだ無駄があるというかバタつきがある。大切なのは体を支える足腰の強化とバランス感覚。本来ならランニングだけでもいいのだけどそれじゃ飽きてしまうからミニゲーム方式を取り入れた

屋内と屋外、休憩を挟みつつ交互でやりながらしていくうちに夕方に差し掛かった

「っ、疲れた・・・」

「にこ・・・もう動けないニコ」

「ふえ〜ことりもう動けない」

負担にならないようにやっていたけどやっぱりダンスでも使っていない筋肉を使ったことで久々に見る光景だった。

練習の片付けと体の手入れを終えた後晩御飯の買い出しに俺、希そしてこの辺の地理に詳しい真姫と一緒にいった。

最初は真姫一人で行こうと言いだした慌てて俺も一緒に行った。

平沢は都内へ向かう電車に乗ったのを確認したが一応安全の意味も込めて一緒に
行った。

「きれいな夕日だな」

「そうだな」

買い物が終わって別荘の帰り道丁度日没前ということのあつてきれいな夕日が写つ
ていた。

「というよりどうして私に絡むのよ!!」

「ほっとけないのんだよ。真姫とよく似ている子を知っているから」

「何それ」

本心をひた隠しし、勝手に己に自己解釈したり

「別に今すぐ変えれなくてわけでもないんだ。真姫は真姫のペースで歩めばいいんだよ」
別荘に戻ってすぐに食事の準備に入った。

今夜のメニューは穂乃果の家に父さんが置いて行った海軍の調理養成学校である第
四術科学校秘伝のレシピを使ったカレーをお見舞いした。

え？何でそんなものがあるって？

シラナイ。

穂乃果曰く借りてきたというけど真相は定かではない。

そして食事を終えて・・・

「ごちそうさま」

「穂乃果、食べた後に横になるなよ。牛になるぞ」

「ぶー悠にいもお母さんと雪穂と同じこと言わないでよ」

おいおいおいおい！紀衣さんだけでなく妹にも言われているかよ。
本当にだらしないんだから。

「みんな先に風呂はいつといで、洗いものは俺がやっておくんけん」

「いいのですか？」

「いいよいよ。みんな練習で疲れているんだし」

「それじゃお言葉に甘えましょう」

みんなは各部屋に戻っていった。

カチャカチャ

「ふう……終わった終わった」

最後の洗い物が終わってソファで一息ついていた時

『海未ちゃんの髪も』

『そ、そうですか／＼／＼』

……え？

『やっぱ絵里ちゃんも希ちゃんもスタイルいいよね』

『羨ましいにや』

おいおいおいお話を丸聞こえだぞ!!

風呂の会話ってこんなに聞こえるもんだけ!?

『そんなにお望みならうちがワシワシしたるで』

マジですか!?

ちよつと見てみた……

「……部屋でシャワー浴びよう」

このまま聞いていたら本当に何かを失いかねない

こういう時はシャワーを浴びて頭を冷やすのが一番いい。

頭が冷えて居間に戻ると丁度みんなが風呂からあがって入れ替わりで風呂に入っ

「さて・・・改めてみんなに話す前に注意事項が幾つかある。まず本内容は皇国が指定する特別国家機密の一部であり俺の過去の話の中には軍機も含まれている。それらについては一切答えない。あくまでも俺自身起こった事しか話さない」

「わかった」

「よし。みんなに話す前にある人物に一声かけておかないといけない」

「ある人物ですか？」

「ああ、やっぱり俺自身の事とはいえ指定に入っているのは変わりはないから知り合いの政府高官に一声入れる」

みんなに見えるようにタブレットのテレビ電話機能を使った。

『はい東條です』

「ご無沙汰しております東條副長官」

「え!?!おじさん？」

「希知っているの」

「うん。東條晴彦うちの叔父で政治家なの」

『始めまして、sの皆さん。希の叔父である東條晴彦です。大西政権では内閣官房副長官を務めております』

挨拶を終え早速本題に入った。

「それで東條副長官ちよつと面倒な案件が発生しました」

『面倒な事案?』

「ええ、副長官は先の事件の平沢という官僚はご存知ですか?」

『ああ、覚えている。国家反逆罪の容疑にかけられていたけど不起訴になった人物だな。』

「ここ数年は公安の監視下に置かれていた」

「やっぱり公安の監視下に置かれていたか。」

「でもそれじゃ何で不起訴になったと思ったけど今は後だ。」

「実はそいつが彼女らに俺の日本皇国最上級秘密の一端をばらされました」

『何だ?!』

流石の東条さんも珍しく頭を抱えた。

「もうここまできたら彼女らに打ち上げるしかないと思ひ報告した次第です」

『……分かった。総理と官房長官には俺から話しておく』

「ありがとうございます」

『それで黒沢はどうした？』

「俺に対する天罰云々言つて離れていきました。後ほど逃げたと思われる座標を送ります」

『分かったそつちの件は国家公安委員長に話しておく』

「ありがとうございます」

テレビ電話機能をOFFにして再びみんなに対峙するように向けた。

「さて話すといつてもどこから話そうかな」

自分の過去を思い出すように振り返り始めた。

24 悠斗の過去

穂乃果の突然の思いつきで始まったμ、s合宿だったがその開始早々公安から監視対象に指定されている黒沢に俺と現政権、前政権の闇が暴露されてしまった。

いつか離さないといけないと思ひ真姫の別荘で始まった俺の過去の話。

「まずは朝霧の歴史を語ろっか・・・穂乃果は俺の実家をどういう風に聞いている?」「え?お母さんからは代々軍人の家系って聞いているけど」

「うん、その認識でも間違いない。朝霧家の歴史は幕末の長州派維新志士の新撰組や幕府からの刺客から維新志士を護る遊撃刺客が始まりとされている」

「するとあの坂本竜馬や桂小五郎とか・・・」

「もちろん一緒に戦った。そして戊辰戦争は政府の要職についていた」

「それは凄い!」

「でもその割りに、ゆうにいの家ってその・・・」

「普通すぎる・・・か」

「う、うん」

「ことりの言うとおり、一般に維新志士の末裔に比べたら朝霧はあまりにも普通すぎる。」

「西南戦争は習ったよな？」

「土族の反乱で日本史最後の内戦よね？」

「実はその旧薩摩藩土族の中に維新志士時代の同期がいて後に明治政府の方針に失望をして脱退。そして土族反乱に加わり西南戦争に参加。西南戦争末期に俺のご先祖率いている部隊と交戦して最後に……殺した」

「……………」

「西南戦争後に明治政府を離脱してしばらく故郷の赤穂で隠遁生活をしていたが、日清戦争時に戦列に復帰。そのときの戦果から『国家の危篤に朝霧あり』と言われた」

「それじゃ、悠斗も……その……軍人になるの」

「医者の娘として生まれた真姫らしくその部分が気になつたらしい。」

「むしろ、それしか道がない。それが朝霧の嫡男として生まれ、俺が歩む贖罪の道」

「どういふこと？」

「朝霧家は一度も女の子が生まれたことがない男系の家系で生まれたものは例外なく身体能力は極めて高く全員が自分の意思で軍人になっていた」

圧倒的な身体能力と一人で1個隊と渡り合える朝霧流剣術を持ち、前大戦まで国家存亡時の最前線には常に朝霧の名前が必ず上がる事から政府内でも下手な世襲議員よりもある意味有名な一族でもあると同時に時代の節目には必ず混乱が起こり朝霧の血筋には必ずその混乱に参加する因果があつた。

朝霧に生まれた者は否応がなしに軍人になり血の道を歩む事になる

この事から代々の当主は子供たちに後を告がなくてもいいといつても絶対に軍事関係の職についている事から子供達の夢を優先という風潮がある。

だけどそんな願いもむなしく世界の理不尽が襲う

爺ちゃんやんは冷戦初期の代理戦争、父さんは冷戦終結後の航空戦

そんなことが頻繁に参加していたことから

呪われた戦闘民族

と陰口も増えてきた。

そしてそれは手以外なく俺にも当てはまる。

6年前、母親をなくした俺は父さんの進めもあつて剣士としての高波のためアルテール王国近衛師団で教官をやつていた父さんの知り合いで御神流剣術の正統後継者である御神咲夜の下で修業を開始して2年が経過していた。見た目は欧州の国なのだがどこか日本にそっくりであつたお陰で生活はすぐに慣れた。

今日も御神教官の元、実地訓練を行つていた。しかも寸止めではなくお互い急所をためらず狙つていた。無論使つている刃は本物で一步間違えたら大けがを負つてしまう。しかし、そんなのは気にせず、お互いの急所をためらずに狙い続けていた。

「よしー今日はいいまで」

「ありがとうございしました」

御神先生は元々皇室護衛部隊―皇室近衛師団―の出身で日本とアルテールで結ば

れた官民技術交流条約に基づいて王室近衛師団の教官をしていた。

「それでこの後はどうする?」

「ウイルとクラエスが買物に行こうと約束しました」

「ウイルとクラエスってこの間言っていた国際銃火器ライセンスを取得した子らよね?」

「はい。あの後何回かあって今では親友です」

国際重火器ライセンスの取得年齢は各国の事情があるということ各国ごとの法律で定める。日本じゃ25歳からだけどアルテールスでは15歳から取得可能。

理由としては資源大国であり特に白人系国では珍しくキリスト教ではなく独自の自然崇拜を信仰しているアルテールスは常に某赤い国や欧州に目を付けられていた。かと言って徴兵は維持費がかかることからそれで直ぐにでもモノになるようにした措置であった。

私服に着替えて約束場所であるメインストリートに俺と同年代でチエロケースみたいな物を持っている少女と金髪の優男が既に待っていた。

「遅いですよユウト!」

「お前が遅刻なんて珍しいな」

「すまん訓練が長引いてな」

最初に声をかけたのがクラエス・ラングバート。大学教授の娘だけど俺と同じ国際銃火器ライセンスの所持者で狙撃の達人。見た目はフェンランド系の美乳白銀髪ロングヘアの美少女だが部屋にはぬいぐるみの代わりに古今東西の銃火器類が置かれている銃火器類のマニアに加え撃ちたがるハッピートリガーな残念お嬢様。何でも曾おばあさんがとある北欧の国で赤い大国と戦争していたときに一緒に同行していた世界最高峰スナイパー直伝らしい。

そしてクラエスと一緒にいる男がウィリアム・ジョースター。彼も国際銃火器ライセンスの持ち主でクラエスの幼馴染で海軍士官の父を持つ軍人家系。見た目はハリウッドに出そうなイケメンなのだか趣味はナンパでいつも女の子にちよっかいをかけてはクラエスに制裁を受けている残念男子。しかも母親の実家が喫茶店ということもあって営業スマイルがとても旨い。俺が周りから女性の扱いが上手いだのなんだの原因は大体こいつが原因だ。

「それで今日はどうする？」

「折角ライセンスも手に入れたことですし武器屋に行ってみませんか？」

「何か掘り出し物があるのか？」

「ええ!!いい掘り出し物が入るといふ噂が出ております」

目をキラキラさせながら昇天していた。

「もうちよつと女の子らしい趣味をしたらどうなんだ？」

「あら？ナンパが趣味のあなたに言われたくありませんね」

この2人が顔を合わせるために痴話喧嘩ないし夫婦喧嘩が始まる

仲が良いのか悪いか・・・まあ喧嘩するほど仲が良いって言うしな。

「ウィル、クラエスあれ！」

角の方を見ると一人の女の子が複数の男に囲まれている

「どうする?..」

「もちろん助ける。まず俺が切り込んで見るからクラエスは後方で援護射撃を頼む」

ウィルは状況を見ながら臨機応変に頼む」

「任せなさい」

「了解した」

俺とウィルは懐から拳銃を出したがクラエスだけチェロケース（みたいなもの）から日本皇国軍が採用されている64式小銃を出した。

「ちよつと待ちなあんたら」

「何だ貴様は!!」

「大の大人が寄つてたかつてか弱い女の子を囲んで恥ずかしくないのかよ」

「貴様には関係ない」

懐に忍ばせていた閃光手榴弾数個を地面に叩き付け激しい閃光と爆音が鳴り響いた。さすがに閃光手榴弾を想像していなかった黒服たち油断してしまい目と耳を塞ぎこんだ。ついぞと言わんばかりに外からクラエスの援護射撃をお見舞いした。

流石に殺すのは不味いので手足だけを狙つて足止めした。

狙撃スコープは反射して敵にバレるのを嫌がつて照準は照星と照門だけで有効射程距離ギリギリによる精密狙撃ができるのはクラエスだけだろう

「何とか逃げ切つたな」

「ええ」

「だけど今の手持ちじゃ次は持たない」

確かに俺とウイルの装備は9ミリ拳銃とコルト・パイソン357と閃光手榴弾6つ、煙幕弾3つ、予備弾装が6つと刀1本とナイフ数本しかない。

クラエスに至つては20発入り弾倉1つしかない。

「あなたたちは？」

「俺たちは国際銃火器ライセンスの所持者です」

そう言つて不安がる彼女に俺たちのライセンスを見せた。

「つと自己紹介がまだだったな。俺はユウト・アサギリ日本人だ」

「私はクラエス・ラングバットよ」

「ウイリアム・ジョースターですどうぞよろしく可憐な・・・」
「ウイル？」
「冗談だよ」

こんなときにナンパするウイルに容赦なく頭に銃口を向けるクラエスにため息つきながら頭を抱え、彼女はクスつと笑っていた。

場面変わつて真姫の別荘・・・

「改めて言つて見ると本当に懐かしいな」

もう数年前の話なのにいまだに昨日の様に覚えている。

「それで・・・その助けた子はどうなったのですか？」

「以外にも俺らとノリが合つて一緒に買い物としていたな。特にあいつの正体を聞いたときはひっくり返りそうやったわ」

「ひっくり返る?」

「そうだ」

謎の黒服から助けた女の子、リズ一緒に街を歩き回って、ある程度買い物を終えて夕方に差し掛かったとき・・・

「うくん・・・何だか囲まれたっぼい?」

「っぼいじゃなくて、完全に囲まれているぞ」

周囲から尋常じゃないほどの殺気を感じ取った。

「そんじゃ、俺が囷になるから援護お願い」

「了解。ウイルはも一緒に来て」

2手に別れた後、俺とリズは裏通りの奥にある広場に出た。

するとゾロゾロと黒服の男が現れてきた。手には何も持っていないけど服の膨らみから拳銃があるのが伺える。それに屋上にもスナイパー数人が控えていた。

「見つけましたぞお嬢さん」

「あんたらの目的は何ぞよ?」

「答える義務はない。おとなしく引き渡したら」

「それはそれはご丁寧に」

「ただどな……それはあんたらも同じことだ。」

無線で一声「Fire」

伸ばしてきた手に銃弾が命中した。

「どこからの攻撃だ！狙撃か？」

「しかしこの周囲500メートル以内には誰もいません」

「そうこうしているうちに屋上に配備していたスナイパー達が次々とやられていった。」

「残念！あんたらの考えている場所にはいないぞ」

「じゃ、どこか……ハッ!!」

「どうやら気がついたようだけどもう手遅れだ。」

クラエスが撃った場所

それは現在地から1950メートル離れた長距離による精密狙撃

さつき分かれた後クラエスたちが向かったのはいつの鼻屑してくれている武器屋。

「流石クラエスだな」

「ひいおばあ様からあの人のこと聞いて育っていたんだよ。このぐらいできないとあの人には近づけないよ」

そしてウイルはスポッター（観測手）として

普段中が悪い二人だけど

「よし！悠斗の前に男の太ももを狙うぞ！」

「馬鹿な！こんな餓鬼どもに・・・あり得ない」

「一言教えてやる！あり得ないなんてありえない」

俺が言いきった瞬間太ももを撃ち抜かれ悶えた

完全に浮き足立った瞬間をねらって近接戦闘をぶっかけて

「行くぞ!!」

リズの手を取ってその場から離れた。

「ウイル、クラエスは回避してポイントD27Rに向かってくれ」

『了解』

その後次々と寄せてくる軍勢を攪乱しつつ長距離狙撃で行動不能にしていた。

上手い具合に翻弄していったけど途中で御神師匠が電話がかかってきて、その内容に

人生で初めて顔を青ざめたよ。

そして……

「バッカモン!! 貴様等王女殿下を連れ回すとはどういう」

眉間の血管が今にも切れそうなくらい怒り心頭なのはアルテールス王室侍従長のフリツベグル・ジームス。

そう……助けた彼女はこのアルテールス王国第一王女エリザベス・D・アルテールス

そしてしつこく付きまとっていた黒服の男は直属の近衛兵。

リズはちよくちよく王宮を抜け出す癖があつてあの時もいつものように王宮を抜け出して市内をうろうろしていたらしい。

そしていつもなら連れ戻したところに俺たちと出くわして誘拐犯と勘違いした俺らにボコボコにやられ、再度展開するも返り討ちにあつた。

流石の俺たちもあの時ほど顔を真っ青になった日はなかったな。

「まあそのぐらいにしなさい侍従長」

「ですが陛下!」

その後ろで侍従長を宥めている人こそ、フォルス陛下の愛称で国民に慕われている現アルテールス国王フオルスタナ・Z・アルテールス。

陛下もリズ以上に放浪癖が強いお方で時には海外に言つてテロリストを退治してきたとにこやかな顔で言つたらしい。

「そもそも、連れ戻しに行つた近衛兵が油断していたとはいえ返り討ちに会つたのはどういう指導していたのかな？」

「うーそ、それは」

侍従長は過去の経験則をもとに近衛兵の監督もしていた。

「このまま彼らを処罰するといかに我が近衛兵が無能ということを世間に騒がしてしますよ」

今回の損害は死者こそ出なかったが展開した一個小隊は全滅、再度展開した大隊も大打撃を受けて損害は馬鹿にならない。

「かといつて無罪放免というわけには行かないのも事実だけど、たった3人で近衛兵をかき回した指揮能力と狙撃センス。わが軍にもいない人材」

俺たちは国王陛下の次の言葉を待っていた。

「……それです。どうなつたのですか？」

「結果的に言えば罰則はない代わりにリズ直属の近衛兵として勤務せよと命じられた」

国王陛下の恩赦で条件付のお咎めなし。処罰の変わりにリズ直属の特務近衛兵となつてくれが条件だった。リズは脱走癖が強く、よく大人たちを苦しめてきたが、同年代ならマシにはなるかと思つたらしい。こうして俺は特務近衛長（中尉）、クラエスとウィルは特務近衛副長（少尉）を与えられて行動を開始した。

「ところがそんな大人たちの予想を見事裏切つたのさ」

「予想を？」

「ああ、最初のころはおとなしくしていたけど、慣れてきた途端に再び脱走を始めたさ。しかも今度はたまたま見かけた痴漢を半殺ししたり、マフィアの事務所に踏み込んでボスに喧嘩売つたり、麻薬密売組織を火達磨にしたり……数えたらきりがいいよ」

下手をすると以前より悪化している。俺も連日関係機関に謝罪と根回しと損害賠償の手続きの日々が続いている。しかも同時進行である陸軍特殊部隊出身のやつらまで加わり手が付けられなくなった。

そんな生活が続いているせいで酒にも飲むようになって周りから言われたのが一気

に老けたらしい。

アルテールス大使であるセリシアさんとはこの時からの付き合いで、リズ搜索兼現場制圧用にいつも部隊を借りていた。

「いかん：：思い出して来たらお酒が飲みたくなってきた真姫、倉庫にあるスコッチウイスキー飲んでもいいか？」

「あなた・・・アルテールスにいたときそんなに飲んでいるの？」

「自慢じゃないがおれは下手な大人より飲めるぞ」

「それ全然自慢なっていないよ」

うんなこと言ったってマジでストレスが多くて酒を飲まないとやっていけない仕事だもん!!

余談だがリズが与えた損害賠償学は日本円にして10億にも遡り、この賠償金の捻出も俺が担当していた。

今でも支払いは続いている。

「ここまでが俺が軍属になった理由だ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

流石の、sの面々でもアルテールスの知り合いの破天荒具合を聞いて言葉を失った。

「でもそれじゃあいつが言っていた無人島の出来事の話は」

時間をかけて説明下つもりだったけどもうここまで来てしまったか

「みんなスクールアイドルが生まれたきっかけって知っている？」

「それってA—RISEの・・・」

「いや・・・そのきっかけ。なぜ全芸能事務所やマスコミが大打撃受けたのか知ってる？」

「それってマスコミの偏見報道に芸能事務所が一緒になって煽った結果信用が一気に失って次々と廃業になったって言うけど」

「それもああるけど実はもう一つある」

「ここから先は比喻でも何でもなく冗談抜きの・・・前政権の闇の部分決して開けてはならないパンドラの箱。」

25 悪夢

俺がアルテールスに渡って1年後、日本は解散総選挙を行って自由党の政権が崩壊し民社党の連立政権が誕生した。当時日本はユニオンマネーによってマスコミ界・芸能界が乗っ取られ、そいつらの画策により自由党は選挙に敗れ・・・民社党連立政権が設立。

事の発端は俺が国際銃火器ライセンスを取得してリズの特務近衛兵になって1年後のことだった。

「日本陸軍の大西大将から電話!？」

あの日も執務室でいつもの始末書を整理していたところ突然日本陸軍を統括する参謀総長である大西大将からの突然の電話。

しかも正式な電話ではなくアルテールス大使館にひそかに設置された極秘回線系だった。

「もしもしお電話変わりました朝霧です」

「はじめまして朝霧さん。私は日本皇国陸軍参謀総長の大西圭吾と申します」

「ご尊名はかねがね伺っております。本日はどのようなご用件で」

「実はあなたに頼みたいことがあります」

「頼みたいこと？」

大西大将から聞かされた日本国内の現状は悲惨なモノばかりだった。

政策もユニオン寄りで、国防省の軍事機密をも密かに流したり、ユニオンのための補助金政策といった国民のためというよりユニオンのための政治を行っていた。

更に芸能界を使ってユニオン政府高官の接待といった枕営業も行っているなど非道ともいえる行動も平然と行っている挙句テロ組織にもつながっているという情報を耳にする。

「私の父は今どうなっていますか？」

「あなたの父上である朝霧悠介二等海佐はここ数年、辺境地にいており現在硫黄島航空基地隊に勤務しています。」

「この時期に硫黄島って完全に左遷ですよね？」

「はい。ここ数年は離島基地司令など現場から離れております。本来なら彼に頼みたいのですが生憎彼も政府に目を付けられ思うように動けずにあります」

父さんは予めこのことを予感していて万が一に備えて俺をアルテールスよこしたの

はこれが理由かもしれない。

「しかし大西閣下、どうしてそのような話を私に？」

「この極秘回線は万が一に備えてアルテールス大使館と近衛師団本部直通回線の故、日本人で信頼且つ自由に行動できる人はあなたしかいないわけです」

確かに御神師匠は協定に基づいて派遣されている。

そのため政府が戻ってこいと言われたときにいなくなったら不審に思われかねない。

「わかりました。このことはしかる筋の人に必ずお伝えします」

「ありがとうございます」

僅か20分足らずの会談だったが内容は驚くモノばかりだった。

俺はこの話をすぐにリズに伝え、国王陛下へ進言してくださった。

「それは由々しき事態だな」

「はい」

陛下もリズも今の日本を憂いている。

「国防大臣に伝えてくれ。今空いている原子力潜水艦を使える状態にして」

「ありがとうございます」

「セフィリア・C・エストレイン陸軍大佐を指揮官に特別部隊を編成。悠斗君、ウイリア

ム君、クラエス君にも加わってもらいます」

「よろしいのですか？」

「はつきり言つて国軍の正規兵を導入するわけにはいかないのが現状です」

確かに俺たちが今からやることは外交問題に発展しかねない

「私の私財で集めることは出来ませんか？」

「リズ!？」

「つまりリズは自分の私財を使って私兵団を設立する気だな」

「はい。無論所属者はアルテールス国民と同じ地位を与えますので、批准している『傭兵の募集、使用、資金供与及び訓練を禁止する条約』で禁止されている傭兵ではありません」

特にリズの破天荒は諸外国でも有名な話でそれを救出する特別部隊といつておけば一応諸外国には説明できる。しかも同じ欧州圏内に事実上の傭兵部隊もある国もあるのでなおさら万が一ばれても批判はかわせる。

「よろしい。リズはそのまま計画準備しなさい。私は行政府に言つてくる」
「分かりました」

最終的にはリズや自分たちのツテでかき集め20名が集まり特別部隊を編制。

国王陛下も勅名もあってかすぐに準備が整いセフィリア大佐を指揮官とする特別上陸部隊の編成を乗せた2隻の原子力潜水艦で目標地に向かった。

この作戦は完全秘密裏に行うため目的地までは原子力潜水艦の最大特性である無限の航続距離を生かし完全潜航及び最大戦速で向かった。

「まもなく目的地50マイル前になる。至急発令所に来てくれとき」

「杉並か」

以前、リズが麻薬組織を火達磨したときに居合わせた武器ライセンスの持ち主でその時助けた縁で共に行動していた。

「……すまん」

「確かに危険な仕事でもありますが。主やリズの頼みでもあるし、それに以前の借りも返せていなかったら」

元々根なし草だった杉並だけど以前助けたのが縁で俺の事を主と呼んでいる。ちよつと照れくさいけど。

発令所に行くときセフィリア大佐と運航幹部が既に集まっていた。

「しかし本当に地図に載っていないな」

最新版の電子海図と照らし合わせても島がある座標には載っていないかった。

「国土地理院も連立政権が抑えている。彼らに都合の悪い島はあえて乗せてないかもね」

「ここまで徹底するとは鬼が出るか蛇が出るか」

「よし！ブリーフィングを行います」

メンバーが全員集まりセフィリア大佐に一声で始まった事前ブリーフィング。

「事前情報ではこの無人島には日本の現与党の大物政治家が所有する島で数々のユニオン関係者が集まっています。今目的は可能な限り証拠収集であり、戦闘は控えることではありません」

事前に大西大将から送られた島の地形と建物の構図と地对空ミサイル装置の配置そして最新版の衛星画像を元に話が進められた。

「それにしてもよく手に入れましたね」

「ああ、大西大将曰くこのデータを手に入れるために関わった人は自分の首と引き換えたらしい」

「そこまでですか」

当時の日本は酷いというのを通り越していた。

異議を唱えようものならマスコミ総出でバッシングを行いありもしない報道でその

人の人生を狂わす。

この作戦の成功させるのがせめてもの手向け。

「意外なのは地对空ミサイルが数機もあるという事だ」

ユニオンが絡んでいることから相当の武器があるとは思っていたけどいきなり予想を超える。

「それにこの建物の構造物……これ対空レーダーじゃないか!？」

「これでは4連装地对艦ミサイルもあってもおかしくはないぞ!できればこれを無効化にしたいがそんなことをしたら俺たちの存在が露見するし……」

「ソーナー、何か反応ない?」

「今の所パッシブ反応なし」

単音音が発信されていないことを確認した艦長は小型特殊潜航艇の発進準備を下令した。

「セファイリア大佐!朝霧悠斗、杉並両名はこれより先行偵察に行つて参ります」

「気を付けて下さい」

俺と杉並率いる隊がドライ・デッキ・シエルター（艦首に設置た）から小型特殊潜航艇を使って先行で上陸した

俺は上陸地点で橋頭保を築きつつ周囲の警戒を行い、その間にピストン輸送を行い人員移送。

「済まない。待たせた」

「中の様子はどうだった」

先行上陸してすぐに杉並が施設の先行偵察を行って捜索が終わって戻ってきた。

「……………」

「どうした？」

「……………」

杉並が中で撮影した映像を戦術データリンクシステムで隊員全員に標準装備してある多機能モニターに表示した。無論、艦内にも見える仕組みになっている。

大西大将から芸能界を使ってユニオン政府高官の接待といった枕営業も行っているという情報を聞いていたが、俺がそこで見たものは正直悲惨という言葉もかわいいと思えてしまう。

彼女らは自分の夢を叶える為に日々努力している。

だけど当時のマスコミは完全にユニオンに乗っ取られそれらの為にいいように扱わ

れていた。

その夢を餌に糞汚い大人がいいように扱われている彼女らを見てもはや我慢の限界だった。

「こ、こちらAー．．．お、応答せよ」

『こちらOQ、どうぞ』

あの時の俺は完全にブチ切れた。

「今作戦を．．．囚われている彼女らの救出およびこの島の人員の完全排除を要請」

とどのつまり殲滅戦だ。

もうこの島の関係者全員を肉塊にする事しか頭になかった。

『分かりました。では悠斗と何人かで敵を引き付けて下さい』

「いえ。全員を救助するには多くの人手がいります。囹は私一人で」

『ダメです』

「このまま黙って見ちよというんか!!」

『なら私の小隊で遠距離狙撃を援護します』

俺とセフィリア大佐との話は平行線をたどっていた処にクラエスの提案。

「クラエス」

「それなら大丈夫でしょう」

『……分かりました。悠斗それでいいですか?』

「ああ」

大佐の了解をもらってすぐに各隊は各々の配置についた。

俺とクラエスは施設入り口から500m地点で待機して入り口の様子をうかがっていた。

入り口には警戒としてアサルトライフルを持っていた男5人がいた。

持っているライフルも日本が正式採用しているモノではなく、旧ソ連製のAK-47らしきモノで、無論日本には一切出回っていない代物だ。

そして建物の構造物にも対空レーダーが起動していた。

「それで作戦はどうするの?」

「無論、正面から派手に引き付ける。クラエスは後方300m地点から援護射撃」

「了解」

さらに200m近づき、定位置についた。

館入り口で警戒していた奴の間合いにすかさず入った。

「なんだ!おまえ!!」

「どけ!!」

一太刀

5人の男の急所を一切容赦の一太刀で切り付けて、手榴弾で扉を破壊した。

その爆発音を聞きつけて億からゾロゾロ武装した連中が出てきた。

「何者だ!!」

「……あんだ等全員を地獄へ案内する水先案内人だ」

その言葉が殲滅戦の合図になった

俺とクラエスで敵の目を引き付けるため徹底的施設を破壊し、ウィルが率いる別動隊が被害者の少女を優先的救助した。その間杉並が可能な限り顧客情報やセンサーの情報を集めていた。

俺がまず向かったのは通信施設とFCS（火器管制装置）、レーダー室の破壊だ。特にFCSを破壊せんことには後続艦が被害を受ける可能性がある。外部の通信を隔離する。無論予備で個人携帯が可能な衛星電話は原潜による妨害電波で使えなくした。

配電盤を破壊しなかったのは今杉並がパソコンやサーバーからデータを抜き取っている最中や

「被害者の少女たちは一人も残すことなく全員救助しろ！そしてそれらを食い物にした腐れ外道は一人残らず……!!」

そこから先は正に地獄絵図

この現場で初めて朝霧の剣技の真価が発揮された。

朝霧の剣術は所謂殺人剣術。

如何に人を効率よく多く殺すことを目的とした流派。

並外れた身体能力に加えれば通常の銃火器ぐらいでは押さえつけることはできない。通ってきた道には血だるましかなく、硝煙や血の匂いが周りに充満して聞こえてくる声も悲鳴に似た怨嗟しかなかった。

あの島は狂気と殺気に包まれ、その中で俺はひたすら敵を殺し続けた。

「後30分で救出は完了します」

「わかった!!」

急に組み立てた作戦だったけど、何とか予定通りに進んでいた。

この時までは……

「悠斗!! 大変だ! 第3小隊と連絡が途絶しました!」

「なんだと!!」

「ただど敵の抵抗も凄まじくここで上陸部隊にも戦死者が出た。」

「必ず戦友の遺体は持ち帰るぞ! ウイル! 小隊を率いて第3小隊の援護に回れ!!」

「了解!」

敵の戦力を当初の予定より幾らか多めで装備も予想以上で一番驚いたのは旧ソ連製の装甲車と言った重火器も多数あった。

そして最後の人員と遺体を小型特殊潜航艇に収容してすぐさま撤退した。

「隊長撤退完了しました!!」

「QQへ。島からの全要員退去を確認!これより帰還する」

最後の人員を確認したのち小型特殊潜航艇に乗り込み島から脱出した。

脱出後、生存者がいないように完膚なきまで破壊するため5マイル先で待機していた原子力潜水艦からVLS 16セル計112発の対地巡航ミサイルをもって島を徹底的に破壊し尽した。

後の衛星画像からその光景はもはや島の形を維持していなかった。

「お疲れ様です。それで状況報告お願いします」

「民間人53名を救出。死者3名重軽傷者11名」

「……そうですか」

予想以上被害が出て如何に俺が怒りに囚われていたことが分かった。

あの時冷静になっていたらと思うときもある。

「申し訳ございませんでした」

「いえ。戦闘を指示したのは私です。実際に悠斗が相当数敵を引き付けてくれたおかげ

でこの数字かもしれません」

「……………はい」

作戦終了後、救助した少女を乗せた原子力潜水艦は日本国内には戻らずなかった。国内は民社党の連立政権に傍若無人状態でこのまま素直に戻ったたら彼女たちに危険が伴う。

「どうする？流石にアルテールスマでつれて帰るには今の彼女達の精神は持ちません」
長い間拘束されていた彼女達はひどく衰弱していた。

原子力潜水艦の最大特性である無限の航続距離は今の最新技術を使えば理論上は一回就役したら廃艦になるまで一度も燃料補給はいらなくなるが、それを操る人までは耐えられない。厳しい訓練を積んだ原潜の乗組員ですら3か月が限界値と言われている

「パラオに行きましょう」

「パラオに？」

「パラオ領海内には前大戦から使っている秘密基地がある。そこへ退避した後アルテールスへ護送しましょう」

パラオ領海内には前大戦開戦前より租借地として無人島を借りていた。

その無人島を使つて当時の画期的な秘匿兵器の製造・整備補給基地を担つていた。

戦後でも租借地として継続していて、その島には通常の指揮系統ではない別系統の指揮に組み込まれている多弾頭を搭載した通常弾頭搭載の潜水艦発射弾道ミサイルを搭載した戦略原子力潜水艦を6隻配備している。おそらく今の政権すら知らされておらず寧ろ、血眼になつて探していると思うが多分見つかからないだろう。

「わかつた。艦長、進路をパラオに向けて」

「了解。航海長、進路を・・・」

こうして救助した女の子53名を乗せた原潜はパラオ領海内にある秘密基地に向かつた。

26 悠斗の覚悟

パラオ領海内の秘密基地入行後直ぐに指揮官であるセフィリア大佐と現場指揮を務めた俺はヘリで本島に行き、国王陛下と非公式の謁見を行った。

パラオ国王陛下は親日派で今の日本の現状に憂いて事情を説明したら快く事件の被害者である彼女らを手厚く保護してもらうことが決まった。

謁見が終わった後、すぐにヘリで秘密基地に帰還した

「何とか保護の目処は立ちましたね」

「はい。しばらく彼女らはこの島で過ごしてもらいます」

「それがいいですね。ここは過ごしやすい島です」

ヘリポートからドックに向かう途中には島民が暮らす居住区があり表向きは海洋調査という名目で乗組員とその家族が駐在している。

島自体の気候は安定していて養生するには最適な場所である。

今回作戦に参加した原子力潜水艦は秘密基地のドックで点検を行っていた。

と言っても艦事態戦闘は行っていないなかったので弾薬と食料飲料水の補充だけ済んだけど特殊小型潜水艇は少し損傷しているみたいで本国に戻ったら直ぐに修理を出さないといけないが……

「それで……今後はどうする?」

「まず、杉並に今回手に入れた資料を日本に持ち込み中立寄りのマスコミやネットテレビニュースサイト、警察、公安、公正取引委員会、野党等各方面にばら撒く予定です」
無論モノによつては一般の方には流さないがそれでも十分なダメージを与えられる

そして杉並は資料を纏めてパラオ経由で日本に飛んで各方面と接触して情報を提供した。

そして公開された情報はインターネットを通じ、日本中……世界にも配信され、連立政権に協力した企業やユニオン系の企業の株価が一瞬で大暴落し多くの経営者が路頭に迷いこみ、捏造記事・偏向報道の影響でマスコミ各社の前で大規模なデモが起こりこれに乗じた芸能界も巻き添えを食らう形で廃業に追い込まれた

日本国民のこの時にはマスコミの偏見報道に完全ブチ切れて信頼は地に落ち、株主総会で上層部の批判が強まり、そしてこれを好機杉並から入手した証拠で警察公安は未来の若者たちを食い物にしている芸能界やマスコミ界を徹底的につぶし、大量の逮捕者を

出した。

無論その余波は民社党の連立政権の政治家や政府高官、大臣にもおよんだけど議員の不逮捕特権で逮捕起訴はされなかったが、良心的な議員が内閣を批判したのをきっかけに内ゲバを起こし大量の離党者を出し、完全に分裂・議員数が与野党と逆転した。

今がチャンスとばかりに野党が内閣不信任案を提出。

そして自由党や内ゲバで離党した議員、連立政権に参加していない野党の賛成多数で可決成立し、内閣は解散総選挙を行うことになった。

大西大将は同時期に軍を退役して衆議員に出馬。

そして選挙の結果再び自由党が政権を取り、自由党の後藤俊夫推薦で大西さんが内閣総理大臣に就任した。高野大将は元帥大将に昇任、統合幕僚長として日本国防軍の統括する事になった。

無論落選した民社党の連立政権議員は議員でない為不逮捕特権はなくなるため、かわった人らは全員逮捕。

3年4か月だけの政権だったがその間に日本はずいぶん弱体化していた。

大西政権は早速汚染された各省庁の前政権の悪行に加担し、ユニオンに媚びを売って

いた官僚に対して懲戒免職を下し、国防軍でも直ぐに軍再建プログラムが開始された。

予算削減で一番被害食らったのは他でもない国防省だ。必要な部分まで削減したおかげで現場は悲鳴を上げている。陸軍と海軍は大西総理と高野元帥が不満を抑えていたが空軍は民社党の連立政権の一番の被害者で早々大神元航空総司令官を辞めされて色々大変だったらしい。

大西政権が今重要視しているのは経済の立て直し。

ユニオン系企業の補助金打ち切りやスワップを停止して国内企業の再建を務めていまに至る。

「俺はあの時初めて人と人の殺し合いに参加した。そして憎しみや怒りを込めて敵を殺し、仲間が死んでいく姿を見ていった。．．．それが前回の総選挙の裏で行われた争いでありあいつが行っていた殺人者の意味だ．．．これが俺の話せる全てだ」

長い、長い話が終わってみんなはさつきから俯いたままだ。

そりやそうだ。

普通に生活していたらまず除くことも関わることもない闇の世界だから。

「それで・・・悠にいや・・・救助した子達はどうなったの？」

「その秘密基地で養生した後、政権交代のドサクサにまぎれて全員アルテールス退避した。本当は直ぐにでも親元に返したいのだが身の安全が確保されるまではアルテールス国内で保護することが両国首脳陣と本人たちの意思で決まった。俺らは原潜でアルテールスに帰還後は再び特務近衛に復帰した」

「・・・やめるって選択肢はなかったの？」

「もう俺は一度手を染めた咎人さ」

絵里の質問にそう答えることしかできない。

この作戦は当初は情報収集を目的としており 完全極秘なため参加者の家族には一切の真実を知らせることができず、事故死の扱いになっていた。

当時どう詫びればいいのか分からなかったが軍を辞めるって選択肢はなかった。生き残った者のけじめをつける意味でも俺は一生軍人として生きる。

「……ちよつと夜風にあたつてくる」

そういつて席を離れて砂浜に出た。

内心さつきの話でみんなに嫌われていないかピクピクしていた。

「真姫の言う通り以外に小心ものかもしれないね」

何時かは離さないといけなかったとはいえ本当に言ってもよかったのかなと思う自分がいる。

しばらく海を見ていたら後ろから足音が聞こえて振り替えてみると絵里が立っていた。

「どうだった。今日の話は」

「どう……言葉にしているのかわからない」

「だろうな」

普通の日常しか知らない彼女らがいきなり殺し合いや人のドス黒い部分の話を聞かせてしまったんだ。

「俺を軽蔑するか」

「っ!!そんなこと言わないで!!」

「絵里？」

「確かにその話を聞いて怖いと思ったよ!!でも悠斗はずっと苦しんできたんだよ」

「……どうしてそう思った？」

「馬鹿にしないで！悠斗が私を見抜けたように。私も見ぬけたんだから!!だから……
自分自身を蔑まないでよ」

あの時以来の涙声。

知らない間に自分でもサインに出していたことに驚いた。

「……すまん」

本当にどうしようにもならない男だな

「一緒に行こう！みんなが待っているよ」

「ああ」

差し出された絵里の手を握って別荘に戻った。

別荘の居間に戻ると机は撤去され代わりに布団10枚が敷かれていた。

「……何これ」

「あ！悠サンと絵里ちゃんが戻ってきたニヤー！」

凜に腕を引つ張られ、みんながいるところに連れて行かれた。

「悠にいが外に行っていた時に私たちで話あったのです」

「え？」

「あなた……変なことで考え込む癖があるよね」

確かにそうかもしれないけど真姫に言われてくないよ。

「確かに決して許されない事をしたかもしれない！」

「ですがそのおかげで救えたモノもあります」

アイドル人一倍強い思いを持つているにこと花陽が前の政権がアイドルたちを使って私利私欲に利用していたのを憤りを感じていた。

「にこつちの言う通りやで。もしあのまま何にも起こらなければもつと被害が出ていたかもしれない」

「正直言つて私は馬鹿だから一体何が正しくて何が悪なのか分からない」

穂乃果のいう通り何が正しくて何が悪なのか。

時代、国、宗教……人間の主観立場によってそれは変わってくる。

「みんな……」

「けどどうしてあの人はゆうにいの事、犯罪者つて罵つたのかな？」

「こりはどうしてもその部分だけ納得していかないようだ。」

「実際に俺はその島の関係者の殲滅プランを立ち上げたから良し悪しはともかく本来許されないことを実際に行われたから文句も言えないよ」

「でも納得いかないよ」

「それは我慢してくれ。それも含めて俺の選んだ道だから」

それが現代の人々に恨まれようが憎まれようが、咎人と言われようが、次の世代に負の遺産を継がせないために血を流し血みどろの道を進むのは俺たち軍人だけでいい。

「改めて思ったけど凜はこんな大人になりたくないニヤー」

「全くさ」

実際に前政権で甘い蜜吸っていた連中や元大手芸能事務所上層部や元マスコミ経営者らは現政権に対して鬱憤がたまっていて裏ではあれこれ内閣の支持率を下げようと

いる海未を起こしたがその後の記憶がなく。

気が付いたら全身に痛みを感じて庭に転がっていた。

それ以降俺たちは寝ている海未を冗談半分で起こしてはならないと誓った

誓ったが、今開けてはならない枷が外れた

海未が持っていたはずの枕が突然消えた

その瞬間轟音と共ににこにヒットして気絶した

「ちよ、超音速枕!!」

花陽はそう命名したけどそんな生易しいものじゃない

人は何かアクションを起こすときに必ずと言っていいほど予備動作がある。

一流であれば僅かな予備動作が先が読めるけどしかし海未にはその予備動作は見られなかった。

いかなればノーモーション超音速枕投げだ!

海未が扱えばもう寝具という常識を通り越して殺人兵器に変わり果てた。

「どうしよう穂乃果ちゃん！」

「生き残るには戦うし……」

「ごめん！海m」

言い切る前に穂乃果と絵里にヒットして2人がやられた

「落ち着こうum……おわ!!」

今は何とかかわしているが全滅するのは時間の問題。

俺と花陽と凜に気を取られているスキに真姫と希が追撃してくれたおかげで何とか海未を鎮めることができた。

「ふう……何とか助かつ……た」

一気に気が抜けてしまったのか意識がそこで途絶えた。

「う……ん……あれ？」

誰かが電気消したのか居間の明かりが消えていた

問題はそこではなく

「何で体が動かないんだ？」

おれの右半分はピクリとも動かない。左半分は動いているから金縛りではないのは
 確実。

それに右腕は何か柔らかいものに挟まれていていい匂いがしている

「……………まさかまさか」

意識がはつきりして恐る恐る右を見ると絵里が俺の腕にしがみついていた

「……………+*」*(!!)」

危うく声が出掛けたのを抑えたがこんな光景……………もしかまた無理やり起こされた海

未が見たら……………もしそうなたら今度こそ海未に……………

いや……………考えるのはやめよう。

絵里さん!?!さらにしがみ付かないで!!

今俺に残されている選択肢は

①・絵里を起こす

だけどこれはせっかく寝ているのを起こすのは忍びない。しかもこの状況下で起きたら悲鳴上げる可能性がある。そうしたら……（以下略）

②・諦めて別のところで寝る

これが無難な選択肢だけど絵里がガツチリホールドしていて抜け出せないし、無理やりやったら起こしてしまつて選択肢①に戻る。

となつた俺の取るべき選択肢は……

「あきらめて寝直そう」

もう俺に残されたのは運命にすべて委ねるしかなかった。

このまま起こしても地獄だし、もし朝までにこの拘束が説いていなかったら海未の制裁を受ける

ちらつと絵里の横顔を除いた。

昨年度末にはこんな風になるなんて全然想像できなかった。

鳥の鳴き声で目を覚まし。

次起きてみると両腕にしがみついていた絵里といつの間にか離れていた。

助かったと思いつつももう少し味わっていたかったなと2つの相反する気持ちがあつた。

流石に3度寝する気はさらさらなかった。

部屋からバイオリンをもってきて海辺に出ると空は群青色に染まっている。

しばらくバイオリンを弾いていると別荘の方から2人の足音が聞こえて演奏を辞めた。

「おはよう悠斗。早いんやね」

「おはよう。目が覚めて気分転換に」

振り返ると希と真姫が2人並んで歩いていた。

「あn・・・悠斗のバイオリン見るの久しぶり」

「あれ？真姫ちゃん知っていたの？」

「最初の頃、作曲の依頼しに行つた時以来だな」

中々人前に披露する機会はなかった。

いつの間にかみんなが起きてきて海辺に集まつてきた。

皆が並んできたことで俺は今の気持ちも明かす。

「最初のファーストライブ以降からおれは……μ、sの行き着く先を見てみたくなつた」

昨日穂乃果の言う通り正義と何ぞや？悪とは何ぞやと思つた。

「ついこの間まで俺は自分の命を軽んじていた。だけど今ほど命を惜しむことがない」

「だけど穂乃果や海未、ことり、花陽、凜、真姫、にこ、希、絵里……9人の女神？、sのおかげで道筋が見えた。」

「だから俺は死なん!!生きて必ずこの目で?、sの行き着く所を見届ける」

正義や悪なんて関係ない全力全開全身全霊を賭けて大切な人の日常を守る

「ラブライブ出場を目指して頑張ろう!!」

ありきたりな言葉だけどそれはどんな言葉よりも力強く、頼もしく勇気を与えてくれる。

随分遠回りをしてしまったけど、ようやく1歩を踏み出せたかな？

27 先の事

夏の合宿も終わり、ラブライブ出場を目指してトレーニングに励む日々を送っている。
μ、s。

だけど俺と絵里、希の生徒会役員はスクールアイドル付きっ切りという訳には行かない。
い。

夏休みに行われる学園祭に向けて練習の合間をみて生徒会でこの夏休み中に仕込み出来る物は仕込んでおかないと間に合わなくなる。

今日はその作業日だ。

絵里達3年生にとっては最後の大事な仕事である同時に2年生たちに色々仕込む時期でもある。

いつも通り朝食を食べ終り、お茶を飲みながらテレビのニュースチャンネルに切り替えると堅苦しいキヤスターの声が聞こえてきた。

『昨晚から未明に掛けてユニオン海軍艦が我が国に接続水域を航行しており。舞鶴所属

艦艇が追跡を開始 ユニオン政府に対して外務省は……」

「うん？今回ののはAGIも出てきているのか」

日本に戻ってきてから何回、何十回とも聞いているニュースだけど今回ののは毛色が少し違った。

いつもならフリゲート艦2隻なのだが今回はAGI艦も加わっている。

AGI艦……一言で言うのならスパイ船であり、主に電子情報の集積といったシグント活動する船であり、現代の情報戦にはなくてはならない強力なルーツになる。

「あんまりいい感じしないな」

黒沢と遭遇してから数日が立ったが未だに何にも行動を起こしていないのが気になる。

面倒を起こされてもかかったものじゃないが、何にも行動を起こさないのも変に勘ぐってしまう。

「……つと、いかんいかん！」

今から出ると遅刻はしないが時間ギリギリになってしまう

俺は荷物を持って急いで家を出た。

「遅れてすまない」

「悠斗が遅刻だなんて珍しいね」

「何かあつたん」

「夜遅くに父さんから電話が来て『もう陸上勤務イヤー!!艦艇勤務に戻りたい』云々の愚痴を聞いていた」

「それはご愁傷さまね」

「でもうち・・・不思議に思つたんやけど普通昇進つて喜ぶものやない?」

「他はそうかもしれないが海軍は上の階級になればなるほど艦艇勤務から遠ざかるから嫌がる人は本当に嫌がるよ」

尉官や佐官でも艦艇勤務の船務長や砲雷長、副長艦長といったホストが多いがそれが将官になれば艦艇勤務は幕僚か司令ぐらいしかホストがなく窮屈な幕僚任務に嫌気がさしたらしい。

「悠斗も来たことだし、始めよつか」

絵里の一声で始まった生徒会業務。

俺は専ら会計と事務処理。

屋台の食べ物やかは保健所の申請や、ステージ組み立て業者の打ち合わせなどやるべきことはいっぱいある。

それは机いっぱい置かれた書類の束が物語っているが、こんなのもアルテールスに比べたら月とスッポン。

アルテールスにいた時は、仕事始めにまずリズがやらかした内容の書類を見て発狂。

次に来るのは終わることのない書類に、そして各方面の根回し、日に日にたまっていく請求の数々。

仕事が終われば街の酒場で飲み明かし……

翌日また書類を見て発狂。

その繰り返しを2年間やり続けた結果、もう平和過ぎて涙も出てくる。

「それじゃ少し休憩しよっか?」

「さんせい」

仕事は順調に進みいったん小休憩に移る。

「朝霧君、ちよつと予算会計が合わなくて」

「ちよつと見せて」

生徒会役員の子が持ってきた書類とパソコン内のデータを相互参照した

「ええと・・・ここがこうなって、ああなっているから」

「むう・・・」

「絢瀬会長どうかなされました？」

「・・・いいえ、何でもないわ」

「何でもない・・・ねえ」

「・・・何よ希」

後ろの方で希が薄笑いをしていたけど気にしないことにした。

「よし！これであっていると思うから」

「ありがとう」

書類を渡して背筋を伸ばした。

「さくでコーヒーでも飲もう・・・ってどうした絵里」

「・・・別に」

どっからどう見ても不機嫌な絵里。

あれ？

俺彼女に何か変なこと言ったかな？

心の中で今日の出来事を思い出していたら扉から元気いっぱい女性の女性がやってきた。

「やつほー！絵里、希！元気にしている？」

「水谷先輩!!」

「お久しぶりです先輩」

「この人は？」

「水谷彼方先輩絢瀬さんの2代前の生徒会長で今は防衛大学校の2年生」

「へえ。防大の生徒か」

所謂、士官育成するための学校で4年間横須賀のキャンパスで学んだ後候補生たる曹長に任命されそこからさらに陸海空の士官学校を経て現場に入る。

「そういえば2人の噂も来ているよ♪今やスクールアイドル会に現れた超新星？、sの

一員だって！」

「あはは／／／」

「まあいろいろありまして／／／」

絵里はともかく希が珍しく頬を赤く染まっている

「その色々って音ノ木坂が廃校になるって話か？」

「それなのですが最新情報で一先ず無期限の延期が決まりました」

「いやー！よかったよかった!!私の時から少し怪しいと思っていて心配していたのだよ」

「理事長の案で共学に向けてのテスト生を今年度から」

「3年生の朝霧悠斗です」

「防衛大学校2年生の水谷彼方です」

お互い握手してそれぞれ自己紹介した。

「2年生という事はもう進路の方は決まっていますのですか？」

「おや？君は結構詳しい口かな？」

「はい。父が海軍所属で」

「そうかそう・・・うん？海軍で・・・朝霧!？」

あ・・・このリアクションでもう察しがついた

「ひよつとして朝霧悠介一佐の・・・」

「あ！やつぱり有名ですか親父殿は・・・」

「そ、そうね……。皇国海軍一の秀才にして変人？親バカ？」

……やっぱりうちの親父は軍内部じや相当言われているな。

そして何一つ間違っていないので何も言い返せない。

「それで今日はどのような件で？」

「そうそう！今年も大変だろうと思って……差し入れを」

「今年もありがとうございます」

両手の袋いっぱいの中身は飲料水やカロリーメイトやら非常食となるものが詰め込まれていた。

「なんか……すごい人だな」

「うん……確かに仕事はできるのやけど……その……」

「あら？絵里……あなた成長したんじゃない？」

言葉を濁した理由は分かった。

この人……男子がいる前で平気で希の胸を揉み始めた

「ブー!!」

「ち、ちよつと水谷先輩!!今男子もいるのですからいつものノリやめてください!!」
いつも!?

危うくコーヒを落としそうになったけど、この人現役時代何していた!?

「え、どういいう事?」

「この人・・・仕事はできるのだけどその・・・親しい同性に対してはコミュニケーションとして・・・」

「ああ、分かった」

アルテールスにも同系統の人間がいるけど今ここで確信した。
間違いなく希のワシワシはこの人から受け継がれている。

見て見ぬ振りをしようとした時

「大変だよ、悠にいい!!」

タイムミング悪く幼馴染3人組が来た。

グッバイ・・・俺の心の平穏。

「・・・悠にいい、何見てるの?」

「・・・言い残すことはありませんか?」

「そんないけないゆうにいを……」

もう、幼馴染3人の目のハイライトが消えているツツコミは諦めた。

他の役員の子らも3人の異常な気配にビビって、部屋の四隅に行った。

出入り口や窓には穂乃果とことりががちり固めていた。

俺は腹をくくり、コーヒーカップを机の上に置いて……

「ふう……さあ！思いつきr」

目にも映らない速さで海未の拳が鳩尾に入りそのまま回し蹴りを食らって外に放り出された。

流石海未……一切容赦ない

30分後

「さて……どうした穂乃果？」

復活して生徒会室に戻ると絵里が説明したお陰で穂乃果たちは平常運転に戻っていた。

スクールアイドル系の話みたいなので、他の生徒会役員は席を外してくれていた。水谷先輩も帰りまた会いましょうと不気味な言葉を残していった。

できることなら関わりたくない。

「これ見て!!」

穂乃果が持っていたスマフォを俺の顔の近くまで見せ、画面にはスクールアイドルのランキングサイトが開いていた。

「そういえば今日が最終ランキング発表日だったな」

「にじゅ．．．い!?!」

「20位!?!」

俺だけでなく絵里や希が画面に釘付けにした内容だ

リストにもランキングリストにも20位にμ、sの名前が入っていた。

「よっしや!!」

「これって夢じゃないよね?」

余りにも出来事に珍しく希が素で言っていた。

特に東京は全国的に見ても激戦区でもありこの短期間で上位に上り詰めたのは奇跡に近い。

「ただど……」

「まだ浮かれるのは早いぞ」

「そうね。この結果は予選に参加可能であって本選に出れるわけではない」

これが終わりではなく始まりに過ぎない。

古人曰く、勝って兜の緒を締めよとある。

どうにかこうにか20位には入り込めたけど、ここから先は王者A—RISEを始め油断できない強豪が控えている。

「となつたら楽曲だね」

日程の都合上、予選と本戦の間は1週間しかなくほぼ同時進行で練習に挑まないといけない……この間のサマフェスに行った時、いろんな人がいたじゃない」

すると穂乃果がある提案を出した。

「あの時は丁度海外に行っていた艦艇が戻ってきたから交流がメインだったし」

「私たちっているんな人たちに助けられて支えられて今があるよね。その時に家族や友達、μ、sのファンとか自分たちにかかわってくるあらゆる人たちに好きって伝えたい!!っていう曲を作りたいの」

穂乃果が自分で作曲をしたいと言ってきた。

実は穂乃果は?、s結成以来、作詞作曲や振り付け衣装など楽曲に関する事に全くと言っているほど関わっていない。

それでもリーダーとしていられるのは決して曲げない混じりっ気がない真っ直ぐで素直な気持ちを押しているからである。

「いいんじゃないか」

「そうね」

俺たちは穂乃果の案に賛成した。

だつてこいつの純粹で真っ直ぐでキラキラな目を見ると期待しちやつたりするんだよな。

「ところで歌詞は出来上がっているの？」

「まだ未完成だけど、今なら完成させられると思う」

一旦穂乃果たちは帰り、俺たちの生徒会の仕事を終わらせてから帰宅した。

「すごいね穂乃果は」

「ああ」

「なんだかあの子を見ているとこの間までウジウジ悩んでいた私がバカみたい」

「俺だって悩み続けている」

寧ろ穂乃果が何にも悲観的な事は考えず、考えなしで突っ走っているだけかもしれない

「その時に立ち止まって自分の大切なものを考えるさ」

すると携帯の着信音が鳴り響いていた。誰かなと思ひ、着信画面を見ると東條副長官からだった。

「もしもし……」

『済まないが急いで議員会館の私のオフィスに来てくれないか』

「何かありましたか？」

『電話ではちよつと・・・』

「分りました」

『ありがとう。君のマンションの近くに岡本秘書の車に乗ってください』

「ごめん！ちよつと用事が出来た」

「ううん。構わないわ。それじゃまた明日ね」

「ああ、また明日」

電話を切った後、絵里と道中別れた。

指定された場所に行くと岡本秘書官の車に乗り込み議員会館に訪れていた。

「すまない突然呼び出して」

「それは構わないけどセリシア大使だけでなく岸国家公安委員長まで出てくるあたりあまりいい話ではないことを察するよ」

執務室に入るとセリシア大使だけでなく岸国家公安委員長、杉並が座っていた。

「ああ、本当に洒落のならない話ですよ。今回の話は2つあります。悪い話と最悪な話・・・どっちを先に聞きたいですか？」

杉並の一言で、もはやロクでもない話は確定した。

「最悪な話で……」

「6月ぐらいにロシアマフィアの大物中の大物のヨランダが密入国した話は覚えている？」

「!?何か進展でも」

すると岸国家公安委員長の懐から一枚の写真を出した。

「此奴は!?!」

「君も知っているようにこの間君たちと、sに接触したあの平沢と食事をしているのを公安が撮影したものだ」

「……もう冗談が冗談ではないな」

まさしく最悪な話だ!

頭が痛くなるほど災厄の組み合わせに頭を押さえた。

「ところで黒沢はどうして起訴されなかったのだ?あの顧客名簿には名前が載っていたけど」

「あの資料もとに関係者の裏を取っていたのだけど黒沢だけ巧妙になっただけ起訴できなかった。」

「なるほどな……確かによく考えればあの証拠だけでは起訴することはできないな」

「なので公安は今日まで監視対象を続けていました」

「それは向こうもわかっているはず・・・分かっていながら接触したということは」

「おそらく近日中に何等か行動を起こすだろう」

今朝から懸念事項だったけど・・・ラブライブが近づいている時にここで起こすか!?

「ところで平沢は何故西木野病院を辞めたんだ」

「公安で調べたところ辞めた理由までは分からなかったが当時の証言から相当院長を激怒させたらしい」

真姫の話から相当な人格者と伺えるけどそんな人を激怒させるなんていったい何やらかした。

「辞めた後は厚生労働省の技術系職員で入省。以後アノ事件が起こるまで民社党連立政権下で働いていた」

これ以上の事は当事者から聞かないと分からないな。

「悪い方の話なんだけど・・・日本海側でユニオン艦船とキッチンレースしているのは知っていますか?」

「今朝から嫌というほど聞いているよ」

「実は今月に入って内容まで解らなかったが衛星を使ってユニオン大使館が本国を経由

しない通信が一気に増えている。」

「本国を経由しない通信？」

「ああ、それが今日日本海でキチンレースを広げているユニオンの軍艦とロシア内の政府施設以外のところにも通信した形跡がある」

「本国経由しないのが気になるな」

「それに合わせて前言っていた廃校派とユニオンとの間にも動きが見られた」
「なるほど」

「これまた胡散臭い話だな。」

「それと前に頼まれていた前政権と文科省官僚とのつながりなのですが、表立っていないのですがある局長が音ノ木坂学園を廃校に積極的に関与していました。後、財務省の官僚も一枚噛んでいたようだ」

「やっぱり財務省も絡んでいたか」

「国立学校の跡地を利用するから絶対に財務省か国交省の官僚が関わっているとは踏んでいたが……」

「まだ、叩いたらほこりが出そうな身体なんだけど、下手に追及し過ぎると野党が追及始

めるかもしれないし」

「確かにね」

前回の総選挙以降完全に野党勢力が崩壊し現在野党の支持率は二桁もっていないというありさまだ。

唯一野党保守系第三勢力の日心党が9%台で比較的まともな政党だ。

残りは5パーセント台で民社党至つては事件の影響もあつて2%しか支持者がいない。

あの手この手使つて民社党や共産連合はやっているけど効果がないどころか自分の首を絞めている感じだ。

連中が復活することはないけど可能な限り政権のダメージになる出来事は控えてほしい。

「それとこの前頼まれた件だけ」

「何かわかった？」

政府側の話が終わり次は6月ごろセフィリア大使に頼んでいた絵里の身上調査の結

果を聞いた。

日本政府に頼まなかったのは依頼した当時は日本政府とのパイプが無かったからだ。

「絢瀬絵里さんの父親は日本人の大学教授で母親はロシアハーフで神田出身その祖母も音ノ木坂学園に通っていた記録もあった」

一通り書類を見てみると一枚の写真に目をついた。

「この人は？」

「絢瀬絵里さんの母親の絢瀬タナーシャさんです」

「黒髪なんですね」

祖母は金髪だけどハーフである母親の髪の色は黒色だ。

「一般的に金髪碧眼はハーフでも遺伝が難しい劣性遺伝子ですからクォーターで遺伝しているのは珍しいケースですね」

この辺りも以前絵里から聞いた事と一致する。

「ただ・・・」

「ただ・・・どうした」

「総務省の記録上、祖母の出生地が稚内市になっています」

「稚内市!?!ロシア出身じゃないのか？」

純血ロシア人が本国ではなくて日本最北の町が出生？

「ええ、それより前の記録がないのでそれ以上のことは」

祖母の年代は明治終盤から大正時代か・・・

そのころロシアと日本の出来事はたしか・・・

日露戦争とロシア革命

「当時の亡命記録って残っていますか？」

「残ってはいるのですが、そのリストの中には該当者はいませんでした。また難民としての受け入れもありませんでした」

公式記録に一切残っていないか・・・

「それより今後の動きだ。今日までおとなしくしていたけど今後ともそうとは限らない。今の所の日本政府としてはどうしますか？」

「・・・しばらく泳がせようと思う。正直連中の目的も知りたい。万が一を想定して日本側は警視庁のSATや軍の特戦群をいつでも動かすことができる。いざという時は空挺部隊を投入する用意もある」

「分かりました」

この辺りは俺が口を言える立場ではないが、敵はロシアマフィアの中での一大勢力である「グラードファミリー」だ。私の全力を以ってこの危機に立ち向かうという意思を感じ取った。

「それで・・・悠斗はどうするの?」

「俺は今μ、sのマネージャじゃけんもう、そう勝手には動けんが邪魔するなら・・・全滅させるけんもう」

「そりゃ、頼もしい言葉だな」

「でもそうさせないために私たちがいます。もうこれ以上君には手を汚して惜しくない」

「お心遣い感謝いたしますが生憎、私の手は真つ黒に染まっています。ここで降りたら先に死んでいた者たちに顔を向けません」

「そうですか」

「心配せんでもμ、sの行き着く先を見届けるまでは簡単には死なんよ」

「本当に変わったね」

「何にも変わっていませんよ」

会談を終えてその場で解散することにした。

「……なあ杉並、少し頼みごとを聞いてもらえないか」

「頼み事？」

「実は……」

俺はある調査を依頼した。

「……室長に頼んでは見ますけどそれ本当なのですか？」

「ああ」

確証はないけど確信はある。

「それでしたら少し付き合ってください」

俺らは議員会館の屋上に足を運んだ。

まもなく日没という事まって西の空は茜色に染まっていた。

「主はあの子のことどう思っているのですか？」

「……それはどういうことだ？」

「恍けないでください！主……あの子のことが好きなんですよ！」

「っ!？」

さすが杉並……わかっていたか。

でもな……俺の手はすでに真っ黒に染まっている。そんな奴が付き合っても絶対に幸せにはなりはしないよ。

「俺が望むのは？、sの行き着く先と血塗られた朝霧の歴史もここで幕引きだ」

「幕引きってまさか主……死ぬ気ですか？」

「まさか！俺は死なねえよ！この目でみんなの人生を見届けるまではな」

「でしたら……」

「それでもよ。あいつの隣に居るのは俺じゃない。死なねえよと言いつつも正直言ってしまうのかわからない世界だ。ひよつとしたら道端でゴミ屑のように野たれ死んでい
る可能性もある」

「……」

杉並は何も言わなかった。

「だから、俺じゃないんだよ。絵里の隣に居るやつは」

朝霧である以上必ず戦争に駆り出される。

その運命から逃れる気はない

俺では絵里を幸せにすることができない。

「でしたら主の母親はどうなんですか?!」

「っ!?!」

「主の母親もそれもすべて受け入れて主の親父さんと付き合つて結婚したので……すみません主。出すぎたことを言つて」

「いや……いゝ」

杉並はそれ以上何にも言わずに屋上から立ち去る。

これで正しいはずだ。

こんな男と付き合うよりは他の奴と付き合つた方が絵里のためでもある

「……あれ？何で涙が」

何故か涙が止まらない。

もう、自分自身で答えが出たはずなのに何で悲しむんだ！

この日は日が大分沈んだのを見計らつて帰つた。

28追いかけてっこ?

8月某日、真夏の炎上天下の中、俺は秋葉原駅の電気街口で絵里と希を待っていた。杉並のあの一言を言われてから数日が経つ。

穂乃果の考えた作詞の完成度は高く、これと母さんが残した最後の作詞を使ってラブライブ予備予選を通過して来るべき予選に向けて練習に励んでいた?、s。

けど、意識をしないようにしているけど心のどこかで絵里との間に見えない壁ができってしまった。

しかも絵里が何故か機嫌が悪くて余計に拍車がかかった。

それを察知したのか希が練習の休養日に遊びに行こうと提案してきた。

本当にこういう時はありがたい。

「あ……」

「よお……絵里」

……

……最近は一言二言で会話が終わってしまう

周りは真夏なのにここだけ極寒の気まずい空気が流れている

早く希来てくれないと思っていたら携帯に希から電話がかかってきた。

「希！今どこにいる？」

『ごめんちよつと行けそうにないや』

「何かあったの？」

『うん。ちよつと神主さんが腰を痛めてヘルプでバイトに出ないと』

「大丈夫なの？」

昔バスケット選手だった神主でも年には勝てず最近腰を患っている。

『怪我自体は大したことはないのやけど、誰かか出ないと回らない』

「了解。神主さんよろしくと伝えて」

「希から？」

「何でも神主さんが腰を痛めて急遽ヘルプに出ないといけないみたいだ」

「大丈夫なの!？」

絵里もいつも?、sの練習を見守っていた神主さんが心配になった。俺は大したことはないと言って安心させた。

こうして絵里と2人つきりというシチュエーションが出来上がった。

いつも会っているはずなのに何故かドキドキする反面この間の杉並の言葉が胸に刺さる

「それにしてもよ。最近悠斗の様子おかしくない?」

「そ、そうか?」

「そうよ!」

「それ言ったら絵里もだよ」

「うっ!!」

本当にここ数日の機嫌の悪さに困惑していたが、今日の絵里はそんな感じは受け取れなかった。

「まあ……せっかくの休みだしめいっばい楽しもつか」

「そうね……今日一日楽しみましよう♪」

どうにか気まずさはなくなった事だし、この企画を提案した希に感謝しつつ秋葉原の街に歩き出した。

そのころ悠斗達より後方10メートル離れた路地にて・・・

「よし、まず第一段階成功だな！」

「ですね！」

希と水谷は路地に隠れて2人の動向をうかがっていた。

今回の件、実はこいつらが裏で糸を引いていた。

「それにしてもこの2人がな・・・」

「そうなんです。」

「さて、このまま追跡するぞ」

「ラジャ」

そのまま路地裏に消えていった。

「うん?」

「悠斗? どうしたの?」

「いや……」

「おかしいな? 誰かに監視されているような気がしたのだけど……辺りを見回してもおかしい所もないし、変な気配もが殺気もない……気のせいかな?」

「で……どうする?」

「それじゃ、時計屋に寄ってもいいかな?」

「時計屋さん?」

「この時計を直してほしいのです」

彼女が持ってきたのは年代物の手巻き式懐中時計

「実はこの間誤って壊してしまったの」

「だから機嫌が悪かったのかな?」

「それだったらうってつけの店知っているよ」

「本当!」

昔世話になった人が秋葉原で店を開いたと聞いたことがあった。

当時の記憶をたどりながら裏路地を進んでいくと看板とか出ていないが1つだけ場違いの壁色をした店がある。

間違いないと思うが些か不安ではあるが意を決して扉を開けると壁には大小の振り時計が複数飾っており、柵の中にはこれまた高そう・・・と言うより歴史を感じる食器類が並べてある。

どうやらここで間違いないようだ。目的の店である〈機巧屋〉だ。

店の奥には一人の女性が立っている。

「やあ・・・悠斗君久しぶりだね」

「ご無沙汰しております。羽黒さん」

店の奥にコーヒーカップを持っている女性が機巧屋の店主である羽黒沙織さん。

羽黒さんのおじいさんはアルテールス王家の御用達である独立時計師で本人も独立時計師の資格を持っている。

俺とは特務近衛兵として勤務してからの付き合いで彼女から懐中時計とか買っていた。

「君が訪ねてくるとはな。何か面倒ごとかな？」

「俺が訪ねる＝面倒ごとという認識はやめていただけじゃないでしょうか!!」

確かにリズの件で迷惑かけたと思うが個人で迷惑かけたことはないぞ！

・・・多分

「それは冗談として……今日はどんな要件なんだ？あいにく今日は掘り出し物はないぞ」「いや……掘り出し物目当てじゃなく……」

絵里が持ってきた懐中時計を見せた。

「どうでしょうか？」

「ぱつと見ただけではなんともいえんな。少し中をのぞいても大丈夫でしょうか？」

「大丈夫です」

絵里から許可をもらって、カウンターの奥にある作業部屋にお邪魔した

「コーヒーです」

羽黒さんは工具を使って懐中時計のカバーを外し、時計用ルーペを使って構造を見つみると外の外装は綺麗に細工してあるの中には以外にも単純でシンプルな構造となっている

「もしかしてほかの店に行かれたとき店員は中まで覗いていませんよね？」

「!?そうです!!ほかの店に行っても扱っていないとかで」

「おそらくそれはこの外装のせいでしょう」

素人の俺が見ても高級店と思えるほどの丁寧な装飾だ

「それで、直りますか？」

「大丈夫です！一度分解掃除して注油したら動きますね」

しばらくして……

「これで大丈夫です。ただ経年劣化していますので定期的に作動油を指してください」
「ありがとうございます」

久しぶりの笑顔らしい笑顔。

やっぱ笑顔じゃなきやだめだな。

「ちよつと悠斗君いいかしら」

「絵里……先にカウンターで待ってくれないかな？」

「分かったわ」

作業室には俺と羽黒さんだけ残った。

「悠斗君……彼女この時計どこで手に入れたのか聞いている」

「何でも彼女のおばあさんからくれたという話です……何かありました？」

「いや……中身を覗いたら確認すればするほど外装と内装のギャップに驚かされるなあ
と思つて」

羽黒さん曰く作られた年数はおそらく1900年代と推定され、所々にロシア語があることからロシア革命前後に作られたものだとわかる。

外装には手の込んだ細工、それこそ王家に使える細工師が施しているが内装は単純な手巻き式だが構造が頑丈で手入れさえ行えば一生使える品物だけど所々時計の機構から独立している部品も多く見られ素人が作ったのかそれともワザとなのかは定かではない。

「なるほどね」

「もし、由来が分かって差し支えないのなら教えれられないかな？」

細工師として気にはなるとは思うけど絵里が了解したら教えると言っただけ言っただけ出て来た。

「お待ちませ」

「早かったね」

「まあちよつとした世間b・・・!？」

ふと窓を覗くと一瞬だったの間違いないあの後ろ姿は希と水谷先輩だ!

何であいつら・・・まさか!?

余りにも今日のタイミングが良すぎる

つまり俺たちが偶然2人だけでなく最初から仕組まれたことだったんだ!!

「……絵里! 店を出たら走るぞ!」

「え? どうしてですか?」

「希と水谷先輩が尾行していた」

「嘘!?!」

「本当だ! さつき2人を確認した。丁度柱で死角になっていたおかげで気付かなかったけど」

あいつら!!

「あいつらに一泡吹かせる」

一緒に念入りに逃走経路を相談して、裏口からひっそりと抜け出し、一瞬の間を見て絵里の手を引つ張って走り出した。

完全に虚を突かれて慌ててこつちを見る希と水谷先輩がいた。

「本当にいたんだ」

絵里は驚いたように内心呆れていた。

「このまま一気に巻くぞ」

「りよーかーい!」

裏路地に入って巻こうとしたが以外にしつこくなかなか巻けない。

「流石防大生、この手も心得ているのか」

「ただ俺にも特務近衛兵の意地がある!!」

「まだ現場に出ていない若造なんかには負けはしないけどこのままじやいたちごっこだ。」

「仕方がない」

裏路地にある更に細い路地の入り口に身を隠す。ここならなかなか見つかりにくく丁度いい場所だが、今俺達は抱き合うように隠れている状態。全力疾走したせいで息が首にかかってくすぐつたい。そして何より抱き合っている状態なので服の上からも分かる大きなマシユマロみたいな胸に押されている。やばい!これはマジでやばい。状況的にも理性的にもマズイ。

「何とか巻いたかな?」

「そうみたいだな」

あの2人の気配は感じない。

諦めてくれたかな?というか諦めてくれ

「さて・・・次どこに行こうか?」

「そろそろご飯にしない？」

言われて見ればもう6時になっていた。

「そうだね」

あの逃走劇で体力より精神的にきていから腰を置きつきたい

この辺で俺たちが良く店と言えば……

「いらつしやいませ。おや、お久しぶりですね」

『Secret Liqueur』

やっぱりここで食事するのが一番いい気がする。

「久しぶりっていう程ですか？まだ3週間しかたつていませんよ」

「3週間も売り上げを貢献するカモが来なったからですよ」

「ひどいよ」

親父と全く同じことを言っている気がする。

「あれ？結構来ているの？」

「まあ練習とかで夜が遅くなったときとか」

一人暮らしたと夜遅くなるともう飯作るのも面倒臭くなるし

「絢瀬さんもお久しぶりです」

「覚えていたのですか?」

「ええ、彼がこの店に来るたびにいつも話していましたので」

「マスター／＼／＼」

「おつと口が滑りましたね」

「こ、この人は!!」

ある意味危険だな。

これ以上根掘り葉掘り言われる前に大量にご飯を注文して待っていたとき……

「あのーこの時間って空いていますか?」

あれ?この声聞き覚えが

目線だけ入口の方を見ると

「透子さん!?天海透子さんではないですか!!」

「悠斗君!?久しぶり!」

「透子さん何時日本に来られたのですか!?!」

「ついこの間よ。いや〜久しぶりの日本っていいよね」

「この人は?」

「天海透子さん、俺が経済学の恩師で、いろいろ助けてもらった」

「初めまして天海透子。以前はアルテールスで経済顧問を務めていました」

「初めまして。朝霧君のクラスメイトの絢瀬絵里と申します」

「一緒に食事をしつつ昔話に花を咲かせた

「へえ〜」

「結構儲かったけどそれなりの損失も出たわ・・・やっぱ金で金を稼ぐのは難しかったよ」
「私も投資家といっても金融投機に走らずやる気や能力があっても資金が足りていない
企業への支援する「あしながおじさん」的スタイルみたいだし」

絵里は俺たちの話を興味深く聞いていた。

「それで今回は日本にはどの様な」

「うん。ちよつと悠斗君に確認したいことがあって・・・ねえ、悠斗君はきちんと決算処理をして帰国したよね？」

「ええ、請求が来たものは全部処理は完了しました。これは咲夜さんにも確認済みです」
かつてリズが出した損害は3月を目処に処理が終わってから帰国した。

「そうだよね・・・」

「なにかありました?」

「実は今年度に入って未決算分が出てきたの」

「未決算が?」

「とりあえずこの資料を見てくれない?」

透子さんが持つてきたタブレットを見て驚愕した。

「……………これ、俺も心当たりがないです」

「ねえ……………報告漏れとかないよね?」

「いや……………そもそも被害箇所を全部見ているので流石にないと思います」

あのお姫様が関わった現場には全部足を運び被害状況から復興状況まで全部確認したが、リストに上がっている所はどれもこれも心当たりがまるでなかった。

「……………ちなみに透子さん、これ……………総額どの位になりますか?」

「今の為替レートなら10億円はあるよ」

「じ、10億?!」

一般人の絵里からしたら途方もない数字

俺が特務近衛兵務めていた2年間で10億円の被害が出たけどたった数日でここまでの被害が出るって!!

あのお姫様は一体何やらかした!!

「すみませんが一度大使館に問い合わせさせて下さいませんか？」

「ええ、もちろんだけど・・・大丈夫悠斗君」

「・・・この顔を見て大丈夫といえますか？」

もう、あのお姫様の行動には呆れて言葉も出ない。

「悠斗大丈夫？私も力になる」

「ありがとう。絵里」

何だろう・・・何気ない一言だけど涙が出てくる・・・

「しかし10億か・・・」

しばし食事をしていたがどうしてもこのワードが頭から離れない。

よくもまあ、短期間でここまでの被害を出したものだ。

怒りや呆れを通り越して感心する。

「そういえば合宿の時そのお姫様が出した損害は悠斗が払ったんよね？」

「あの時と今回とでは事情が違う」

「そうね」

確かに最終的には10億の被害額だけどそれは2年間のトータル数であって1件1件の額はそこまで高額ではない

それでも数100万から1千万単位の損失だから決して安くもないがな

「だからあの時は透子さんに教えを請うたり資産を運用してもらって損害金を捻出した」

「だけど今回ののは本当にまずい。」

あの10億だって2年間どうにかこうにかねん出できたお金であつてもう一回同等の金額にするものなら一体何時かかる。

「大使には悪いけど今度ばかりはあいつにも泣いてもらおう」

「そうね・・・今回は差し押しさえも視野に入れないとね」

2人して盛大な溜息

ウーロン茶が入っているグラスを一気に飲み干した

そして俺の記憶はそこで途切れた

絵里 side

「大変ですね・・・」

これで私の中の一つの疑問が解けた

一緒に生徒会の仕事をしていくにつれて出てきたもう一つの疑問

前々から生徒会の業務で見た悠斗の事務処理能力

それだけ破天荒な処理をしつくしているのなら納得できる

「あれ？私が頼んだウイスキーストレートは？」

「え？」

透子さんの前に置かれていたはずのコップがなくなっていた。

代わりウーロン茶を飲んでいるはずの悠斗の前には飲み物が入っているグラスが置かれていた。

「・・・・・・・・・・ふう」

透子さんが頼んだのはロンググラスいっぱいストレートのウイスキー

それを一気に全部飲んでしまった。

「あ、あの・・・悠斗君大丈夫？」

恐る恐る彼に聞いてみた。

店内が薄暗くて顔色の変化は分からないが変わっていない気はする。

「大丈夫マスターもう一杯ウイスキーのロックお願い」

「ダメダメダメ」

前言撤回

やっぱり酔いが回っていた

「いいだろう！もうあのバカと付き合うにはもうお酒が必要なんだよ!!」

「まあ、まあ落ち着いて」

「これが落ち着いていられるか!!10億だぞ!!もうあのバカに一体どけだけ……」

今度は泣き上戸になった。

お酒は人を変えるっていうけどここまで変貌するものなのかな

「よし!!明日大使館に抗議してくる」

「待って待って!!」

今までのパターンからだとホントにカチコミしそう!

何とか悠斗を宥めている時透子さんがマスターに何か相談事していた。

「こうなったら仕方がない。マスター……って作れる?」

「そりゃ作れますが……大丈夫ですか?」

「この際四の五の言っではいられないよ」

マスターは何かに観念したのかカクテル作りの準備を始めたが、選んでいるのは私で

も知っているアルコールが強いお酒3つをシェーカーに入れて綺麗なフォームで振り始めた。

「はい。お待たせしました」

「お!? 飲んだことのないカクテルだな」

悠斗は躊躇いもなくカクテルが入っているグラスを一気飲みして、顔を真っ赤にしてうつぶせのまま倒れた。

「ふう・・・静かになったか」

「何を飲ませたのですか?」

「これ? アースクエイクって言って、ドライジン、ウイスキー、アブサンっているアルコール度数40近くのお酒をシェイクして作った。」

マスター曰く、ドライ・ジンの辛みとアルコール度数(35度〜40度)の高さから地球が揺れるような刺激があると言われている。

「しかもベースのウイスキーはカスクストレンジスといまして樽から直接ビン詰めしただけ調整していないお酒で、アルコール度数が60を超えるものを使ったのです」

「それ!? 飲ませて大丈夫なのですか?」

「普段の彼なら大丈夫だけど、久しぶりにお酒飲む人はきついだろうな」

アルコール60%なんて・・・

「しかしビックリしました。まさか彼がここまで変貌するなんて」

「それだけ今回の事で頭来ているのさ……全く殿下はいつたい何をお考えなのか」

「それで……彼……どうするの?」

「……あ」

マスターの一言で私たちは完全酔いつぶれた悠斗を見て、大人しくさせたことには成
功したが今後の事を考えていなかった。

29 間近

「う、うん~~~~いて」

寝返ると同時に体中に激しく痛みが走り、一気に目を覚ました

一瞬何が起こったのかわからなかったが、少しずつ頭がはつきりしてきた

「いてて……あれ?ここどこだ?」

見知らぬ部屋のソファで寝ていてそこを寝返ったときにソファから落ちて目が覚めた。

軽い頭痛を抑えながら昨日の事を少しずつ思い出していった。

昨日は絵里と一緒に買い物して、希と水谷先輩と逃走劇を繰り広げた後、バーに行つた記憶までは覚えているが、それ以降の事は思い出せない。

この吐き気と頭痛……思い当たるのはもうお酒しか残っていない

「……まさか間違えてお酒飲んだ!」

それはともかく……ここどこだ?

「おはよう悠斗」

「おはよう絵里」

ああ、よかった昨日の事が夢オチじゃなくて。

いつもみたいに絵里が挨拶してくれ……何で絵里がいる!?

え!? 俺いつたい昨日何やらかした!?

記憶にない分、不安で仕方がないんだけど!!

「昨日の事どこまで覚えている?」

「……バーで透子さんに会ったところまでしか覚えていない」

どんなに思い出してもそこまでしか覚えていない。

リズの件は死ぬほど覚えているが、正直……そっちの方が忘れたかった。

「昨日透子さんのストレートのウイスキーを間違えて一気飲みしてダウンしてしまったのよ」

「マジで?」

「それで起こしても起きなかったから私のマンションに連れて帰ったのよ」

あくあ……やってしまった。

でもウイスキーの一杯で酔いつぶれるとは俺も衰えたのかな。

「すまん。迷惑かけて」

「全然迷惑なんて思っていないよ。ただ・・・何かあるときは相談してほしい」

「・・・結構愚痴っていた？」

「そうね」

絵里の苦笑いですべてを悟った。

「もう、起き上がって大丈夫なの？」

「ああ、それにもう少しで時間だし・・・俺は一旦家に戻ってから部室に向かう事にする」
時計を見るともうそろそろ集合の時間だ。

何とかだるい体を起き上がらせて玄関に向かった。

「後、透子さんから伝言で『こっちで調べてみるからいつも通りに過ごして』って
言っていたわ」

「ありがとう」

助かりますよ透子さん

「暑う・・・」

マンションを出ると真夏の日差しが照らした。

訓練で暑さに慣らしたつもりだったが、全く別次元の暑さ・・・というか湿気が高い!!

これなら訓練の方が大分マシだ。

プルルル

しかもこんな時に電話かよ

「はいもしもし・・・」

『すまない悠斗！至急来てくれないか？』

声の主は東條副長官からだけどもと様子が違う。

この反応はただ事じゃない

「わかりました！集合はいつもの場所でお願います」

電話を終えて直ぐに某ショッピングモールの駐車場に向かった。

いつの集まるときは何処かの公共施設の駐車場で落ち合っている。どこに目や耳があるか分かったもんじやないから念には念を入れないとな。

指定された駐車場に行くと同崎秘書官の車が待っていた。直ぐに車に乗り議員会館向かう。

執務室に入ると・・・

「いつもいつのすまないな」

「それは大丈夫なのですが、いつのも定例会は明日では？」

俺と東條副長官はお互いの情報を交換するため定期的に連絡会を設けていたが

「それ何だか明日から集中審査が始まるから」

東條副長官がいくつかのファイルを持ってきた。

「実は調査していくうちにとんでもないやつに行き着いた」

「とんでもないやつ？」

「こいつだ」

東條副長官から書類が挟んでいるバインダーを渡された

「こいつは!? 現文科省事務次官じゃないですか!! 官僚のトップまでもが奴らの手先か

!？」

「奴らとは関係ないのだが利用される可能性は大いにある」

渡された書類には内偵で撮った数枚の写真には某喫茶店で女の子とイチャイチャしている姿が映し出されていた。

「おいおいおい、事務次官殿がこんなんでいいのか?」

「そう・・・本人も前政権とは離れた位置のおかげで助かったのだからか性格には問題ある」

調査によるといずれも本人はどっちも付かず、ただ単に自分が事務次官になれるのを虎視眈々と狙っていた。

「このことは大臣や政務官はこの事はご存知なのですか?」

「いや・・・政務官だけだ」

たまたま街を歩いていた時に事務次官を見かけた時に若い女性と一緒に歩いている姿を偶然見かけたのが始まり。

「その政務官は俺の同期でこの間議員食堂で一緒に食事していた時に相談を受けてな」

「大臣には報告しなかった?」

「この事が大臣黙認かそうでないかが判断がつかなくてな。一先ず裏付けが取れるまでは僕が預かっている」

ああ……これが大臣黙認だとまたややこしい問題になってくるな。

「こいつ辞めさすことは出来ないのか？」

「そうしたいんだけど……実際省内の蠱毒の壺で生き残った猛者で、証拠もないし」
確かに、下手したら政権を覆させられかねないから。

「しばらくは様子見ですか？」

「そうだな。それに近いうちに総理は官僚の整理を考えているようだ」

「官僚を？」

「ああこの間の解散総選挙の時は政治家を一掃したが、官僚までは手が出せなかった」
政治家にとって政争はお手の物だが政策を立案実行できるのは官僚

幾ら政治主導といっても細かい政策立案となったら官僚ほど知識を有している人は
いない。

「そういえば前回の総選挙の時ってユニオン派の官僚たちは処分したの？」

「したのはしたけど、それ以外の一派までは手が回らなかった。政策の方も安定してい
るし、ここらへんでメらせる」

「そのあたりは私が口を挟むことではなさそうだな」

幾つか連絡事項を伝え終わった時、副長官からどんでもない発言が出た。

「そうそう、今度のスクールアイドルの予選だけど、非公式にアルテールス国の蔵相（大蔵大臣、日本でいう財務大臣／財相）が見に来るらしいよ」

「蔵相が!?なんで!？」

危うく飲みかけたコーヒーを吹きそうになった。

「たまたまスクールアイドルをやっていたアルテールスの留学生のSNSを見て今度の後藤財相との会談のついでに見に来るらしい」

「……マジか」

確かに国内じゃ大きいイベントだけど、幾ら自国の留学生が出るからって一国の大臣自ら来るか!?普通!!

まあ……リズの国だしな。

一癖も二癖のある人が大臣になってもおかしくないか。

俺は考えたくもないけどな。

「ちなみに来るのは蔵相だけですか？」

「今の所はそう聞いている。後はお付きで秘書官が来るぐらいかな？」

それを聞いて俺は安心した。

流石に2人だけではリズの奴、紛れて日本に来ることはないだろう。

これが何人かで来ることになっていたら絶対に紛れてくる筈だ！
もし来たら確実にあの世の境目に飛ばす自信がある。

「最後に、予選時の警備状況なのですが蔵相が来ることが決まりましたので通常の警備に加えて密かに警備局の人間を派遣することが決まった。それ以外に要人保護を名目に習志野の1空挺や木更津の1へり団や要人輸送に輸送へり隊を即時待機状態にする予定だし、大使館の方からも駐在武官を中心に可能な限り対応するみたいだ」

第一空挺旅団に戦闘へり団に輸送へりか・・・
それだけかき集められたら上出来か。

話し合いが終わっていつも通りに岡崎さんの車で送って貰って、部室に着くとみんながまんべんの笑顔で出迎えてくれた。

・・・・・・顔を真っ赤にして俯いている絵里以外

本能的に体が出の方向を向いたがしつかり海未がガードし、窓にもことりがスタンプについて逃げ道なし

ああ、これは積んだな。

「ねえ悠にい・・・昨日絵里ちゃんとデートしたんだって？」

「ええと・・・」

さっきの事務次官の話が自分に帰ってくるとは思いませんでした。

どうやら希から言ったのではなくたまたま居合わせていた穂乃果達だった

昨日穂乃果と海未の2人でここのアルバイト先に遊びに行くときに2人きりの所を見られて、その事をこつりに言ったらビラ配りに言っていたメイドさんからリアルタイムに情報が回っていた。

無論追いかけてこの件まで知っていた。

メイド集団、悔りがたし！

そこから一気にメンバーに広がって今に至る。

「あんだ達、自分がアイドルというのを理解しておきなさい」

「すまん」

自分が蒔いた種でもあるけど、いつもにこのズレているアイドル理論にツツコミを入

れているけど今度ばかりは何も言い返せない。

にこの横でお腹を抱えながら笑っている希がムカつくが!!

「でもよかったです。仲直りが出来て」

「本当よね。気を使う私たちにも感謝してよね」

1年生は1年生で気を使わせてしまった。

別に喧嘩したわけじゃないけど、ギクシヤクとしていたのは事実だし、その辺は迷惑かけてしまったな。

「そういえば遅れてきましたが何かありました?」

.....どうやら絵里の家で一晩過ごしたことは漏れていないようで助かった!!

こんな話がみんなに知られでもしたら.....

考えるのは止めよう。

これ以上考えて禿げたくないし。

「いや、いつのも定期連絡会が早まってな……」

みんなには定期的に政府側の人間と情報交換会をしているのは知っている。

「ちよつと気になっていただけけど、いつも何話しているの?」

「大体は身上報告や政府からの情報……本当にお互いが知っている情報の相互共有が目的だよ。今日は予選の警備状況の確認で終わった」

流石に今回の話は正直に話せない。

教育……そしてスクールアイドルの行政管轄である文科省のトップが援交紛いしているのを知ったらパフォーマンスに影響しかねない。

いずれは明るみに出て失脚するがえて言うべきことでもないし。

今日の練習は動作の確認だけで終えた。

予選まで週明けに迫っており、今日からのメニューはコンディションの維持

考えられる戦略や広報活動……やるべきことは全てやった。

「いよいよだね!!」

本当にここまで来たんだな!!

A—R—I—S—Eに勝つことは難しくても今のμ、sなら周辺にも遜色ないレベルまで

達し、当日のコンディション次第では予選を通過できるだけのポテンシャルを身に着けている。

「ねえねえ……今更ながら……中止という事はアリエナイよね？」

「流石にそれはないと思う、事前情報に今回は某国の政府高官が非公式に予選の方見に来ることもあつて警備は前回に比べたら……やっぱりアイツのことが気になるか？」

「ええ……」

ヨランダと平沢が会談して以降、全く動きは見られない。

アカにもこれと言つて動きもなければ抗争が起こつたつて言う情報も入っていないし、はつきり言つて不気味なほどまで沈黙している。

「大丈夫さ。当日の警備には公安の人間も当たるし、非常事態には軍を導入するみたいだし」

皆に安心させるように言つたが、不安要素である廃校派とその関りがある行政機関と不確定要素であるユニオンやロシアアマフィアがどう動くか分からない。

正直……細かいことを悩んでもキリがない

後は用意できる分だけの戦力をかき集めて、発生したら現場に迅速に導入する。

その時はどんな手段を用いるうが、
s や . . . 次の世代を担うみんなを

30 戦い

ラブライブ予選当日

この日の天気は少しどんよりとした曇り空だけど雨の気配はなさそうだ。

俺は恒例となった靖国神社へ願掛けに訪れていた。

今日までやるべきことは全てやり終え、後はベストを尽くすのみ!!

「.....」

だけど、結局今日まで連中は動き一つ見せずに不気味なほど沈黙していた。

ここまで来ると逆に気味が悪いほどだ

このまま起こして欲しくない

「どうした杉並?」

『主!今どちらに!?!』

「靖国神社にいるが...何かあった!?!」

『以前調べていた事なのですが主のほぼ予想通りの結果が出ました』

やっぱりか...

以前俺の予測が当たっているかどうか杉並に調べてもらった。

正直外れてほしいとも思っていた。

『しかも最悪な事に何者かにハッキングされた形跡があります』

「まさか!？」

「ここ最近ユニオン海軍のAGIが本国を經由しない通信がロシアに向けられていたけどまさか!？」

頭の中に最悪のシナリオが浮かんだ。

「分かった。杉並はそのままアルテールス大使館に来てくれ」

杉並と電話切った後直ぐに大使に電話した。

『何かありましたか?』

「以前言っていた例のプラン・・・発動します」

『!?動いたのですか?』

「見たいです!細かい説明は杉並に聞いてください。私もすぐに向かいます」

万が一に備えて合宿以降?、sに危険が伴えば大使館に集まると大使と皆で相談して決めていた。

直ぐにみんなに連絡してアルテールス大使館に集まる様に指示した。

正直、起きて欲しくはなかった。

「悠にいい?! いったい何が起きたのですか?」

大使館に付くと第一声にし少し興奮気味の海未が訪ねてきた。

海未を落ち着かせ周りを見るとメンバーがそろっていたが絵里の姿はなかった

「絵里はどうした?」

「朝一に先生から呼び出しがあったから先に行つといてメールが来たんやけど」

それ以降音沙汰なし

スクールアイドルに手を出せば公安が動くから連中も誘拐という手段は講じないと思っていたが……

「……大使」

「分かっています。ジャケットに予備弾倉ナイフ手榴弾……後他には?」

「車と2名借りていくぞ」

アタッシュケースに収められていたアルテールス製7.65ミリ小銃に、持ってきてもらったジャケット、ナイフ、弾倉手榴弾を身に着けた。

「待つてくださいい主!! 私も行きます」

「杉並は……他のメンバーと一緒に会場に行つてくれ。これはお前しか頼めないんだ」

「主……」

「頼む」

もし……

標的が絵里だけじゃないかもしれない。

もし、俺がいなくなっても杉並なら皆を託せる

「分かりました。」

「悠にいい!!」

穂乃果に呼び止められて振り向いた。

「ちゃんと戻ってくるよね?」

あの時の話が現実味を帯びて皆の目には不安を浮かべていた

「もちろんさ」

不安にさせないように笑顔で言った。

外で待機させてもらっていた車に乗り込み急いで音ノ木坂学園に向かった

夏休み中であってか学園は部活動に励んでいる人たち以外は静かなものだった。

「黒井先生……」

「あら？朝霧君どうしたのそのコスプレは？」

「どうやらこの正規軍のジャケットをただのコスプレとしか見ていないか……
なら好都合だ。」

「ここに絢瀬さんが来ていると伺ったのですが……実は連絡が付かないので様子を見に来たのです」

「ごめんなさい。私は見ていないわ」

障りのない返事だけど一瞬視線がブレたのは見逃さなかった。

「そうですか。まあ……公安が動いたので直ぐに見つかると思います」

「……え!?公安!？」

「そうですよ。現役スクールアイドルの行方が分かっていないのですこれで公安が動く理由にはなりませんよ」

「し、しかしいきなり動くモノかな？ただ単に電波が入らなかったかバッテリー切れか
もしれないし」

公安のキーワードを聞いて声にも揺動が見られた。

「東條さんの叔父が現役の国会議員でして。しかも現政権の上層部で事情話したら直ぐに公安を動かしてもらえましたよ。いや、助かりますよ。何でも先代にはお世話なっ

たらしいので快く引き受けてくれたみたいです！ここ最近きな臭い動きがあるみたいで助かりましたよ」

一気に畳みかけるように言う。黒井先生の顔がどんどん真っ青になってきた

「で、でもひよつとしたら・・・」

「この服なんだかわかりますか？」

改めてジャケットの紋章を間近に見せた。

「アルテールス近衛師団直轄部隊特務近衛隊の制服です。既に日本政府からの依頼でアルテールス駐留軍も動いています。」

ですのでつと一言置いて・・・

「絵里をどこにやった」

黒井の胸倉を掴んでそのまま壁に押しつけて拳銃を突き付けた。

もう絵里救出なら俺は・・・

「な、なにを!？」

「とぼけるな!! あんたらの行動は以前から全て把握していた。お前が文科省の廃校推進派だけでなくユニオンに繋がっている事すべてわかっている」

「わ、私は本当に知らない!!」

「この期に及んでそんな他我事を……」

「本当に知らないんです！私のはた、ただ言われた通りにしただけで……」

「ちっ！」

鳩尾に一発入れて気絶させた。

「よろしいのですか？」

「ああ。こんな三下に関わっている時ではない」

とはいっても行き詰ってどうしようかと思っていたら杉並から連絡が入った

「何かあったか？」

『主、絢瀬さんの携帯通信履歴を調べたところ川崎市の湾岸地区の倉庫が最後になっています。書類上は数年前から使われていないようです。今東條のダンナが国交省から東京湾全域に全船舶停船航行禁止令が発令されましたのでまだそのあたりにいるはず！ただ、理由は適当にでっち上げたのでいつまで持つかはわかりません』

「すまない助かる！」

それでも時間は稼げる分だけ遥かにマシだ

「お前たちは大使館に戻れ」

「何故です!!」

「どうもこっからはテロ組織とも対峙する気配が漂ってきた。ここから先は俺だけでい

「い」

「いいえ。私たちも行かせてください」

「まったく……リズの国の兵つてどうして皆そろって頑固者かな？」

「それでお二方の元の配属は？」

「私は元空挺団所属です」

「私は警察の元特殊部隊に所属していました」

「練度は十二分過ぎるか。」

「改めて参戦を決意した2人を車に乗せて可能な限り吹っ飛ばし、川崎市の湾岸地区の倉庫たどり着いた。」

「書類上この倉庫は廃棄されてから数年たつていとされているが……何が廃棄から数年だ」

「地面を見るとここ最近車の出入りがあったと思われる痕跡が見受けられた。」

「見張りはいないようだ」

「よし。安全装置解除」

小銃の安全装置を外し倉庫の中に入っていく。

元特殊部隊出身という事もあってスムーズにハンドサインを出しながら慎重に扉を開けていく。

しばらく搜索して隊員の一人が見つぶやいた。

「朝霧さんおかしくありませんか？」

「確かに」

路面状態を見る限りここ数日の間に利用の形跡は見られたが倉庫内をくまなく調べてみるもの誰も居ず、もの抜けの殻状態だ。

すると変に隠されていた扉を発見した

ハンドサインでそれぞれの配置についてゆっくりとドアノブを捻った。

次の瞬間！

絵里 side

「.....」

目を開けると倉庫と場所で横たわっていた。

朝先生に呼ばれて学園に向かったのは覚えてはいるけどそこからの記憶は無い。

「この場所に心当たりはないけど」

「ようやく見つけまぞ!! 忌々しい王族の生き残りが」

声のほうに振り向くと一人の大男が座っていた。

「一体何の目的で私を攫ったの!?!」

「我ら偉大なる同士の宿願の為だ」

「どういうことですか?」

「お前は……我々が探し求めていたロマノフ家の一族の末裔だ!」

男の口から発した言葉に混乱した。

私がロマノフ家の末裔!?

「ですが!! ロマノフ家は一家全員殺されたはずでは」

「だが、一部の遺伝子学者からはそれらのDNA鑑定は誤りという説もある」

「まさかそんな!!」

「それをお前の両親は熱心に研究していたのさ」

「……え!?!」

まさに寝耳に水とはこのことをいうのだなと思ってしまう。

私の両親がロシアで研究していたとは言っていたが内容までは知らされていなかった

た。

「おかげで俺たちはそいつらを監視するだけでよかった。これで我々の目的は達成される」

男は身の丈の大剣を振りかざした

するとこれまで悠斗と過ごしてきた事が走馬灯のように横切った

「(悠斗!!)」

だけど大剣が私を切ることはなかった。

「俺の大切な人に何をした」

全ての身を委ねたくなるほど暖かくて力強い声

「ゆ、悠斗?」

ゆつくり目を開けると、今にも私を殺しそうだった大剣を黄金色に輝く刀で悠斗が受けていた。

「すまない遅くなった」

正直もう諦めていた。

もう助からないと思っていた

抱きつきたかった！

「おおおおおっつ!!」

黒服の男は切られた反動で、そのまま後ろに10メートルほど下がった。

「なるほど……あなたがボスが言っていたサムライか」

「初めましてというべきかな？ 旧ソ連残党兵ども」

初めて見る悠斗の怒り。

「しかしあのトラップをよく避けられましたね」

「生憎目はいいもので」

その一言一言に凄まじい怒りを感じた。

悠斗は刀を収めて男を見て構えなおした。

「さて……絵里を返してもらおうぞ！」

「それは出来ない相談だな」

「なら……力づくでも奪い返す!!」

そういつた瞬間悠斗の体が消えて10メートル先の男に斬りつけていた。

瞬間移動？

そんな言葉も生易しいようなスピードで相手の間合いを詰めていた

眼前に迫る悠斗に大剣振り上げる

だけどその瞬間に悠斗の二つに分かれるような錯覚を感じた。

悠斗は目にも止まらないスピードで相手の死角を徹底的に狙って急所を躊躇いなく

切りつけていた。

相手も身の丈ほどの大剣だけど重量を感じさせず自由自在に太刀筋を操り悠斗の太

刀筋を防いでいる。

悠斗も一撃でも間違ひなく即死するであろう大剣を紙一重に交わし、切り付けてい

る。

余りにも人間離れのスピード……いやすでに人間の領域を超えていた

その超速力に残影しか私の目は追えていない。

「これが……」

かつて悠斗が言っていた戦闘一族である朝霧の戦い方

人を殺めるのに特化した殺人剣の真骨頂

まさに言葉の通りとしか言いようがなかった。

だけど少しずつ悠斗の体にも傷がつき始めた

絵里 side out

「はあ、はあ……はあ……」

ほぼ間合いなしの超近距離の高速戦闘に持ち込んでいるがほとんど防がれてしまわずいぶんいい感と反応速度の持ち主だな

「惜しいな。その怪我さえなかったらいい所まで行けていたのに」

しかもこちらは先のトラップの爆風をもろに受けてしまった。

受けた刀が弾かれその隙に相手の大剣が肩に燃えるような激痛と共に明確な血線が走り、鮮血が舞った。

「くっ!?!」

「やれやれ、では戦力差で終わらせますか」

そういつて奥のほうから小銃を持った男がずらっと出てきた

しかも銃口が絵里に向けられたのを見て、直ぐに絵里の前に立ち、発砲してきた弾を

刀で叩き落した。

「まだ動くのですか！呆れますね」

「はあ．．．はあ．．．」

体に弾を数発くらってしまっただがまだ、体は動く！

相手は10人近く

こっちはさっきのトラップで2名が負傷してとても援護に回れない

「悠斗！もう止めてよ！！このままじゃあなたの命が！！」

「惚れた女を守れずして何がみんなの未来を守るだ」

「．．．．え？」

俺は大切な人を守るためなら悪魔とも契約しても構わない。

例えここで命燃え果てても守り通せるなら．．．

「駄目だよ！！」

「私たちと一緒に見届けるのじゃなかったの!？」

「……そうだ！」

俺はあの時に思ったのだ、sの行き着く先を見届けると誓ったのだ

「すまない絵里……約束を違えそうになった」

俺は刀を鞘に納めた

「おや？ 諦めたのですか」

そういった瞬間、男の胸に風穴があいた。

そして遅れて銃声が聞こえた

「そ、狙撃!？」

あり得なさそうな顔をしている

確かにこの辺数百メートル以内に狙撃ポイントはない

「ま、まさか……」

「ご想像通り」

ここから1600メートル離れているレインボーブリッジの桁橋からの遠距離狙撃。

「助かったぜ。クラエス」

毎度の事ながら惚れ惚れする精度だな

「なあ・・・俺が何も策も打たずにここに来たと思うか?」

万が一に備えて突入前に部隊を展開するように要請していたのがようやく到着した。入口から陸軍の制服を身に着けたセフィリア大使が先導を切って日本、アルテールス合同軍が突入して大男とその兵を拘束した。

彼女の部隊に一体何度助けられたかなと思うほど世話になった。

「大丈夫悠斗?」

「このぐらい何ともない」

絵里の肩を借りて何とか後方の救護班の所へ連れつけてくれる。

「ねえ・・・さつき言っていた惚れた女云々は告白と受け取ってもいいのかな?」

「何言つて・・・いてて」

突然の爆弾発言で痛めている部分を動かしてしまった。

「ちよつと大丈夫!」

「誰のせいだよ」

「まったくおかげで血が足りなくなりそうだよ！」

「その事なんだけど・・・後日改めて言っつていいか」

俺も男としての意地がある

流れで言っつたのではなくきちんと正面で言いたい。

「うん♪待っつているよ」

あともう少して半年続いた戦いに終止符を打つことができる。

ずっと彼女を蝕んでいた廃校という名に蝕んで来れられたが、s9人でライブを

臨むのだ！

必ず打ち勝つことができる！

俺はそう思う。

3 1 終結

倉庫周辺には神奈川県警だけでなく警視庁や公安、軍、アルテールス軍の人たちでごった返している。

ただ、県警や警視庁の面々は完全に出し抜かれた形で少しばつの悪そうな顔をしている。

一方俺らは後方の簡易救護施設で治療を受けながら報告を聞いていた。

「……そういう分けで背後関係は黒井の証言で分かりつつあります」

あの後直ぐに公安が身柄を確保して取り調べを受けたが、自分の保身のためだけか言ってもないことをペラペラとしゃべり始めた。

「これで一斉摘発できるかな？」

何処からか出たのかこの一連出た警報は訓練という形で広まっているみたいでまだ表沙汰になっていない今はチャンスである

「あいつらは無事か？」

「ええ、幸いにも命の別状はなかったけど、怪我が怪我なだけ現場復帰には時間かかるわ」

あの時俺は爆発する瞬間に反応できて間一髪で直撃をさけることが出来たが、ほかの二人はもろに直撃をくらってしまった。

配下に被害が出てしまった以上責任は俺にある。

「悠斗さん。こちらにいましたか」

「晴彦さん！」

報告書に目を通していたら東條官房副長官自ら現場入りしていた。

「実は、とある筋からの情報で国内にいるロシアマフィアが一斉に動きだしました」
「……マジで!?!」

連中にとって今回の一件は失敗どころか、公安が本格的に摘発に乗り出し一気に国内の勢力を失い、このまま帰ってもしたら血の粛清を受けるのは確実のは必至。

だけど素直に撤退した方が最小限の被害で済むのに一体何考えているのやら。

今対峙しても何にもメリットがないどころか折角築いたシマを失って完全にダメ

リットが上回るのに連中血迷いでもしたか!!

「もうすでに会場の方に紛れているみたいで、当初の戦力では足りないので今軍を招集かけていますが真面な戦力が揃うのは時間がかかります」

「まったくのまま大人しくしていたらいいものを・・・」

「応急手当も終わったところで2人に声をかけた。」

「ウイル！クラエス」

「はい！」

「すまないがもう少し付き合ってもらおうぞ」

乗ってきた車に俺、絵里、クラエス、ウイルを乗せて発進した。

車は首都高に入り、最短距離で会場である晴海埠頭へ向かう。

しばらく無言が続いていたが絵里が訪ねてきた。

「……………ねえ、悠斗」

「何?」

「いつから疑問に思っていたの」

「・・・6月にロシアマフィアが密入国したと一報を聞いたとき、ふと絵里の顔が頭に浮かんだ。もしやと思ったのがあの懐中時計さ」

あの後羽黒さんが調べて分かったことはあの懐中時計は間違いなくロシア王室御用達の職人が作ったもので間違いなさそうだ。

「先に行つとくがそれすら怪しいかも」

「・・・え!?!」

正式に遺体を確認されたのはソ連崩壊から数年後の事だ。

しかも発見されたのは夏季には気温も高い地方で、古いうえに遺体の損傷が激しいと聞く。そんな状態で鑑定したにしては、正確な結果が出るはずもない。

余りにも詳細すぎる結果が出ていると指摘し、一説によるよ、研究者のDNAが混じったという噂もある。

「こんな状態では正確なDNA鑑定が出来やしないし、しかも適合したのが絵里のみ。母や親や亜里沙には引つかからなかったそうだ」

「そうなの！」

杉並が直ぐに絵里の両親を務めている大学に問い合わせて直ぐに正規分のデータを送ってもらった。

連中、ハッキングでデータを抜き取ったのは絵里だけみたいで2人の結果は取り出していなかった。

電話が鳴って宛名を見ると予想外の人物からだ。

「……何でこのタイミングでかかってくるかな？」

出ないとまためんどくさいし、意を決して電話に出た

『よお、悠斗久しぶりだな』

「……いったい何の用ですか！張のダンナよ」

電話の主は台湾独立の立役者にしてマフィアのナンバー2と謳われている二丁拳銃使いの張信奔氏

昔、アルテールスで近衛師団所属時代に杉並が仕入れた情報で麻薬カクテルが拠点と

している街を制圧するため軍と警察の合同部隊を編成して挑んだ時に偶然に居合わせ
てなぜか三つ巴の抗争に発展した。

最終的には両者とも多大なる損害をだしたとして痛み分けで終わらせることになっ
た。

正直あまり思い出したくない損害だった

『色々と聞いたぞ！ロシアマフィアとドンパッチ起したって』

もうすでに耳に入っているか・・・

流石表向きの企業は世界有数の情報通信会社だな。

「悪いが今はそれどころ」

『今一緒にいる絢瀬さんの妹を助けたといってもか』

「どういう事だ！」

『実はですな・・・』

台湾内でもスクールアイドルに人気は高く、その将来性を見越して視察に訪れていたが偶々亜里沙と仲良くなって、連れ去ろうと目論んでいたユニオンの工作員を秘密裏に張のダンナについていた護衛が片付けたみたいだ

更にあの時出た警報を訓練として流したのも張のダンナみたいだ。

抜かりがないというかなんというか

「亜里沙は無事なの!?!」

『大丈夫ですよお嬢さん』

張氏の一言を聞いて安堵する絵里。

「すまない助かったよ」

『これである時の貸しはなしですよ』

「わかっている」

そう言って電話を切った。

「お母さんは大丈夫なのかな」

「ロシア国内にいるなら安心だろう」

何よりあの人が収めているロシアだからな。

自国内テロ行為に走ったらあいつが黙っているはずがなく、下手なところよりかは安

心できる。

それよりも……

「絵里……足大丈夫か？」

どこかで怪我したのか膝が赤く腫れている。

「正直言つて違和感はあるけど、この日のために今までかんばつてきたのだよ！ なら後は今の全力を尽くすのみ!!」

どうやらライブを辞退という選択肢はなさそうだ

会場に着くとM、Sの控室に入るとみんなは衣装に着替え終わっていた

「絵里ちゃん」

「ごめんみんな……心配かけて」

これまでの途中経過は杉並から皆に伝わっており、花陽に至つては今にも泣きそうな顔になっていた。

「ちよと絵里！ あんた足怪我しているじゃない」

「このぐらい大丈夫よ。」

ライブを辞退する気はないと察したみんなは一緒にステージに向かつていった。

俺らは控室のモニターで見守った。

いよいよ予選が始まる。

春から始まって様々な出来事を乗り越えてついにここまで来た。

俺ができるのはここまで

後は彼女たち次第

この予選初披露である絵里をセンターとする曲『LONELIEST BABY』が始まった。

μ'sの曲では初めてカッコいい系統の曲でストレートにダイスキダイスキ連発する当たり恋愛ソングにも見て取れるけど実質的には応援ソングに近い曲調。

ただど足の痛みなのか練習の時よりワンテンポ遅れていたりいつも絵里の動きではない。

顔色も痛みを引きずっているのか汗が凄い事になっている。

本音を言ってしまうえば膝を悪化させてしまうと今後のアイ活以前に日常生活にも影響きたしてしまうから正直、ステージに立って欲しくはなかった。

だけど嫌な顔をせずに懸命に夢中になっている絵里をつい見とれられてしまう。

ただ、ひたすらに現在を懸命に生きて、自分の精一杯をみんなに伝えている

ライブが終わり観客から大きな拍手をもらった。

練習通りみたいな動きはできなかったがそれでも観客たちに何かを響かせることはできた。

控室に戻る通路で俺の顔をみて安心して気が緩んだのか倒れてきた絵里を受け止めた

「お疲れ様」

朝から緊張の連続で精神的にも肉体的に限界に達しているのによくやり遂げたな

「裕にい……ありがとうね！絵里ちゃんを取り戻してくれて」

「こつちこそ無傷で取り返せなくてごめんね」

「あのね……あんたそんな体しているんだよ」

長袖のシャツ着て分かりにくいが体中に包帯がまかれていてみんなは察しがついた。

「ねえ……パパの病院で診てもらった方がいんじゃない？」

「大丈夫さ。それよりそろそろ結果が発表されるぞ」

応急処置も終わっているし、この程度の怪我で入院しちや務まらないよ。

優勝は予想通りA？RISEで決まった。

予定調和と言え、あの生徒会長の微笑み面はムカつくけど

次々と結果が公表していき、最終的にはμ、sの名前は載らなかった。

まあ・・・あの肘の状態では優勝どころか入選も難しかったけど意外なのはこの結果に納得いかない観客からブーイングの声が聞こえた。

優勝はA？RISEで間違いないがμ、sも素晴らしい!!なぜ入賞しないんだ!

といった声は次々と広がっていった。

予選に出れる分のファンを獲得していたけど実際に自分たちを押ししている人たちを見ると感無量なところがある。

その光景にみんなは涙ぐんでいる。

俺も泣きそうになるが、会場の外に不審なトラック数台とこれまた日本人ではなく白人と思わしき大量の不審人物で全部台無しにされた。

しかも旧ソ連製の武器持って

おそらくロシアマフィア『グラード』の構成員だろけど、パツと見た感じ全員に武器を持つている感じだけどよく日本に持ち込めたな。

構成員のメンツはマフィアに落ちたとは言え流石元軍人なだけにきっちり身を隠している。

どんだけ緩いんだよ!!

もしくは前政権の置き土産か？

この件が片付いたら取り締まってもらわないとな

「杉並……」

「分かっています」

泣き言言ってもしょうがない。

この少ない人数で一般人を守りつつ制圧ははつきり言つて不可能に近い。
なら、今できるのは援軍が来るまでの時間稼ぎ……

「静聴——」

……と思つていたら一部の証明がつき、声の主を照らす

「何であいつが!?!」

その声の主は俺たちのよく知っている人物だ。

「どういふことか説明……」

一緒についてきたはずのウィルとクラエスの姿は見当たらない。

この時点で頭の警報が鳴りっぱなし。

「?、sのパフォーマンスは素晴らしいものであった。何故蔑まなければならないのか!!」

「諸君らのその行動に大義はあるのか?」

透き通るようなきれいな声であり力強い声でもある。

「否、諸君らは己の欲望のためメンバーを攫い、これを不届き以外ない」

待てコラ!

こつちの計画があるのに何勝手にバラしているんだあの阿呆は!!

「粋がつているお嬢ちゃんや一人で何ができる?こつちには数百人が控えているんだぜ」

口封じる気なのか、ユニオンファイアと思わしき東洋人が後ろの方からのこのこ出て

きたよ。

頼む！あんたらはアイツを煽らないでくれ！！

「ならお見せしよう！私たちの力を」

もうこいつが来た時点で物凄く嫌な予感しかしないのはなんでだろう

「ねえ・・・ユウさん。何か変な音がするにやー？」

すると湾港ターミナルの向こうから甲高い音が聞こえてきた。

「この音どこかで聞いたことあるような」

穂乃果と海未、ことりが首をひねっていた。

そりゃそうだこの音・・・昔よく聞いていたからな。

「なんだか音が大きくなっている気がするんだけど？」

ああ、都知事や政府の面々の頭を抱える姿目に浮かぶ・・・

「じ、地震!？」

この地鳴りと共にくる音はガスタービン機関特有の甲高い音!

湾港ターミナル施設が崩壊し奥から船が乗り上げ、メインマストにはアルテールス海軍旗と見慣れた旗が掲げられていた。

間違いない今回アルテールス海軍遠洋航海に随伴している強襲揚陸艦

オワツタ・・・

本当に色々終わった

「全軍降下せよ」

艦首左右に付いているハッチが解放され、歩兵連隊や戦車大隊が次々と降下し、さらに空から大量の輸送ヘリが来てこれまた大量の人員をヘリボーンで降下した。

「改めて聞きましょう。あなたたちが数百人ならこちらは1500人の近衛第五戦闘団が相手になる」

アルテールス王室を護衛する五個の連隊で構成されている近衛師団の中でもあの事件をきっかけに新たに設立した小隊から始まった実質リズ独自の傭兵部隊と言っても過言ではない。

数々の修羅場（リズの尻拭い）を潜り向け、世界最高の人材が揃い最強と謳われ、その戦力は戦車や戦闘ヘリに果ては戦闘攻撃隊一個隊といった従来の近衛部隊の常識を

超える戦力を有している。

そしてその戦力で一個師団クラスとも渡り合える。

「私は……アルテールス王国第一王女、エリザベス・D・アルテールスである」

そしてその周りにはいなくなっていたウイルやクラエスに蔵相もいた
こいつら!! そろいもそろって!!

「悠斗! 援護に来ましたよ」

俺は持っていた鞘でこいつの頭を勢いよくぶん殴った

「おんどりや!! ようわしの前にのこのこ現れたもんじゃのう」

「悠斗……しゅん!?!」

今こいつに聞きたいことは山ほどあるが、この収まり切れない怒りをお前にぶつける
ただだ
!!!!

「まあまあ朝霧さん、ここは落ち着いて下さい」

「蔵相もこのことはご存知だったのですか!？」

「ええ、今回大臣との会談にもこの港湾施設の補償について話を行っていますので」

「………え？」

「俺たちアルテールスは少し前からユニオンが裏で動く情報は知っていました」

「でもバレてはいけなかったのでリズにも協力してもらいました」

「………それってこの間出てきた10億円の件？」

リズの協力という言葉で俺は直ぐに透子さんから知った支出不明金にピンときた。

「そうです！リズの破天荒は世界各国知れ渡っているので何にも思われずに資金集めに成功しました」

何でだろ？

今無性にお酒が飲みたくなってきたのは？

何でって？

絶対10億で収まっていけないからに決まっているからだ!!

もうすでにこの湾港施設だけで一体どの位金が吹っ飛ぶんだよ！

それ以外に燃料に弾薬人件費、各方面の根回し・損害賠償・・・もう考えたくないよ

「・・・・・・・・ちなみにこのことは政府の人たちは知っているのか」

「・・・・・・・・いいえ。埠頭でドンパッチやるのは知っていますが・・・その・・・私止めたのですが」

つまりこの突撃はリズの独断であることを蔵相が顔を真っ青にしなが説明した。

・・・・・・・・もう言葉が見つからない。

せめて政府関係者が医者 of 世話になっ ていないことを祈ろう

すでに蔵相が胃でも空いているのかお腹抑えている時点で無理だと思 すが

すると何を血迷ったのかテロリストの一人がM、Sに銃口を向けていたのを確認し て発砲される前にそいつの利き手に向かってコルトパイソン357で打ち抜いた。

その行為に連隊の連中は青ざめているけど

「……………まあいい、でだ……………どうする？マフィアがバックに付いているとはい え国家戦力どう対峙する？明日ある眠りにつくか明日のない眠りにつくか今ここで選

べ！3秒以内に選ばないとぶちのめす!!!いゝち」

伝令員に甲板で待機している砲兵隊へ敵陣のど真ん中に榴弾発射のハンドサインを出した。

戸惑いながらも5門用意してあつた150ミリ榴弾砲から次々と発射した。

「2と3はアアツ!？」

「知らないそんな数字！男はただ覚えていれば生きていける」

「そんな無茶苦茶な」

「おめくらはやってはならんことをした……その罪は自分自身の命をもつて償え!!」

幾ら温厚な俺でもあんなことをされちゃ黙つてはいられない。

俺の血迷つた行動を見て引き下がりはじめた。

「全軍！進軍を開始せよ！！テロリスト共を殲滅せよ」

これを逃さんとばかりにリズの力ある声で隷下の部隊に号令を発し作戦開始した。
丁度民間人とテロリストとの間に突入したおかげで憂いなく大暴れできる

「それじゃあ戦線をこじ開けてくるね」

「あのバカ」

毎度のことながらどこの世界に指揮官自ら前線に突っ込むバカは何処にいるんだ！！
周りの静止も聞かずに前戦のほうに突っ込んでいった

これが被害拡大の原因だけでももう突っ込まない

「どうしますか？」

「ほっとけ、どうせ死にはしないし。それよりウィルは2個小隊を率いて公安と一緒に
一般人を安全な場所に誘導せよ。クラエスは狙撃支援」

もうここまで結構な損害が出ているし、最終的にアルテールス側が出してくれるなら
思う存分暴れてやる!!

「それより杉並……ここ任せるぞ」

「お任せしてください」

杉並にみんなを任せて俺も弾薬と小型武器を補てんして敵陣に突っ込んだ

あんな真似されて黙っちよるほどお人よしでは無いので、きちんとケジメをつけない
といかんなあ……

リズの武器は長槍を主軸とした槍術

その華麗な槍捌きはまるで戦乙女演武を演じているような感覚

このお姫様は一通りの重火器の扱いに長けているが、武器には俺の刀と同じ鉄隕石を
使われている

しかも鋼を混ぜず純粹の隕鉄で作られた数少ない業物でもあり世界でも実物は10
本とも満たない。

「二丁暴れるか」

敵もそれなりの装備は持てついているようだが、それで俺たちが抑えられるほどのものではないわ

杉並 side

いつ以来だろう主の全力を見るのは？

日本に帰国する前はずっと事務作業で現場から遠ざかっていたがまるで戦闘の感鈍っていない。

凄まじい量の弾丸を浴びされたが瞬速の領域に入っている主にはかすりもしない速度を一度も緩めることなく弾を避け、時には叩き落した。

通り過ぎ間に容赦なく切り捨てる

小銃みたいな長モノの火器を扱う場合一度でも相手の火線の中に飛び込んでしまえば同士討ちを恐れて二の足を踏む。

こう言った近距離戦闘は拳銃やナイフみたいな小回りが利くものが良い

「凄いー」

他のみんなも呆然としている

一緒にいた時間が長い穂乃果さん達ですら呆気に取られていた

「例えば……」

主の背中に向かって銃が構えられていたけどまるで後ろに目があるのみたいにノールックでかわしただけでなく反撃もしている

視野が広いだけでなく、ほぼ予知に近いセンシング能力やそれを生かす反射神経と動体視力

そして速く見せるための急激な緩急差

相手は的を絞れず、時には同士討ちまで発展している

身体能力も空中を蹴り上げ、上空を闊歩し、機関銃を発砲したがそれを全部弾いて、ヘリを真つ二つに切り落とした。

その勢いで次のヘリに向かい今度はパイソン357の弾倉に弾を込め、ヘリの燃料タ

ンクに目がけて発砲し、タンクに火が付きヘリが炎上し墜落

その光景にテロリスト共は後ずさりした。

「これが文字通り主の全力・・・かつて一個師団をも太刀打ちできた朝霧の血統」

「しばらく現場を離れたとは思えない動きだね」

「むしろ以前よりキレが増していないか」

先の戦闘で鈍っているのかと思っていたが寧ろ今のほうが全盛期以上の動きで驚いている。

杉並 side out

「さて・・・どうするか？」

ヘリ2機は落とし相手の士気は落ちてき始めた

避難する民間人のまえに戦車を盾としてバリゲートを築き甲板から榴弾砲で後方の橋を落として敵の退路を断たせた。

これで敵は後退も出来ず前に進むしかない

一方ロシアマフィアの連中は元軍人崩れなのか他の連中とは動きは違うが小銃しか持ち合わせていない連中では、戦車や砲兵、戦闘ヘリが出しやばってはどうにもならない。

連中もまさか揚陸艦が上がってそこから戦車や砲兵、戦闘ヘリが出るとは思いもしなかっただろうが、それがリズクオリティー!!

あのバカはいつも俺たちの常識を超えるような事をしで下さつて助かるが、それ以上の厄介ごとを舞い込んでくるから始末が悪い

戦車による正面火力と砲兵部隊による火力支援、戦闘ヘリで空域を抑えてしまえば完全に逃げ場を失ったテロリスト共は全員降伏した

「しっかしこれ・・・どうしよう?」

まだ何組かのこっているけど会場は全壊で湾港機能も完全に停止
特設会場は瓦礫の山になって周囲には硝煙と砲弾の跡が残っている。

今警察と軍の施設科でガレキの撤去作業やタグボートで強襲揚陸艦を離棧作業を
行っているが絶対数時間では終われないレベル

まあ、リズが出てきた時点で俺は予想していたが、政府もまさかここまで損害が出る
とは思ってもよらず今頃頭を悩ませているだろう。

特に財務省の方々は

「悠斗・・・大丈夫だった?」

「このぐらい何ともないさ」

かつてリズが出した被害の中でも一番ひどかった街が全壊に比べたら大したことは

ない

ないがこれでは開催は難しいだろう

しばらくして会場の放送から正式に予選中止のアナウンスが流れた。

「やっぱり中止か」

「残念だったね」

委員会も人選には慎重をきたしていたが実際にここまで審査員に紛れ込んでいたのは想像を超えていただろう。

この結果を受けて裏でユニオンへ支援していた連中は青ざめて高跳びしようと思うがスクールアイドルに手を出したのは運の付きで今頃高跳びする準備を始めているだろう。

明日には逮捕者のニュースとかかわった会社の株は暴落するだろう

それ以前にユニオンはこの落とし前どうする気なのかな？

ロシアマフィアとのつながりがあるのは公然の事実で間違いなく国交断絶レベルのことをしでかした。

極右政党は開戦してユニオンを徹底的につぶすって絶対声を上げるだろう

逆に極左政党は一連の事件に関与もしているし余り大きな声で反論できないと言うより声をあげたらブーメランで跳ね返ってくる。

しばらく国会は荒れるに荒れるな。

「それじゃ、帰りますか」

後の始末は連中に任せて会場を後にした。

今の俺は一学生だし、この場の面倒な事はアイツらに任せてさっさと退散としますか。

はっちゃめっちゃになってしまったがこの予選でファンの声が間近に感じ取ることが出来た

小さな一歩から始まったスクールアイドル μ 、s

歩みは遅くとも止めたりせず、ゆっくり、確実に前に進み

結果は・・・まあ・・・優勝どころか入選もできなかったがファンが異議の声をあげてくれたのはうれしかった

入選できなかったが入選以上に確かなモノを感じ取れた

それは μ 、s全員も感じ取れた

μ 、sは廃校回避への確かな道標を残していつてくれた。

後は俺ら政治屋の仕事だ

彼女らの最高のパフォーマンスを無駄にしないためにも!!

3 2 事後処理

予選の翌日、朝から理事長と今後について会談していた。

「悠斗君、このたびは本当にありがとうございます」

ネットの記事には音ノ木坂学園スクールアイドル、sの輝跡とアルテールス王女が大暴れ、そして予選にロシア・ユニオンマフィアによる不正疑惑、大会組織委員会の上層部の辞任した記事で埋め尽くされていた

おかげで朝から各地で大騒ぎ、東証はユニオンと協力的又は工場を持つている企業の株は大幅下落から始まり、予算委員会は与野党の大乱闘で審議停止状態の大混乱

だけどリズのドヤ顔が腹が立ったからそれだけ燃やした。

そして新聞には絵里の誘拐事案や今回の廃校疑惑の記事も乗っていた

「でも、ほんとうに公開してよかったの？」

「俺は公開しない気でおったけどあのバカが全部暴露したおかげで公開せざるを得ない」

あの会場でリズが大ぴらに言ってしまったのだからもう隠し通すことはできず、しばらくアルテールス大使館の事務室の一室を借りてマスクミ対策に覆われることになった。

何でアルテールス大使館の執務室を借りたって？

そこなら大使館の治外法権で合法的にお酒が飲めるからだ！

もう本当にお酒を飲まないとやってられないよあのバカがやりだした事は・・・

ちなみにリズ本人も大使館の執務室で大暴れした時に発生した大量の始末書の山に覆われた半監禁生活が続いている。

でもまあ、この記事のおかげで廃校派だけでなく官僚のあぶり出しが成功して廃校の白紙撤回、来年度の生徒受け入れに総理が構想していた官僚の整理が実現を帯びてき

た。

何がどう転ぶのかわからないけどあいつに感謝する気は更々ない。

「実際にこの記事のおかげで音ノ木坂の入学希望者は増加して廃校白紙撤回と最終決定が下りました」

「ラブライブという試合には負けたが、廃校回避という勝負に勝った」

あのUTXの会長の自尊心に冷や水かけられて清々してうまい酒が飲める！

「それでこれからμ、sはどうするの?」

「みんなで話し合ったのですが、とりあえず夏休み明けの文化祭が終わるまでは続けま

す」

一応最大の目標である廃校回避の目的は達成されたがそれ以降のビジョンは見えてこない。

帰り際に話し合つてとりあえずは学園祭までは答えは出さないと決めた。

「さて、最後の仕上げに学園のゴミどもの廃除が待つておりますが、理事長はどのような考えをお持ちですか？」

「ええ、もうすでにその人らの辞職願が出されました」

あの会場でリズが大ぴらに言ってしまったのだからもう隠し通すことはできず、本当なら大会終了後に一斉摘発する手筈だったけど新聞に大きく取り上げた結果、関係していた先生全員が辞職願を出して海外にとんずらした

全て吐いた黒井先生は一応法令の例外規定が適用されるが、それ以外の先生やかかわった関係者は全員共謀罪、破壊防止法違反数えたらきりが無い

すでに外国へ高跳びしている先生たちは政府から国際指名手配に確実に指定され一
生日の目を見ることはないだろう

結果、学園からの排除は達成できたが今度は深刻な人材不足に陥る

幸い今年に一学年は一クラスだけなので今年度はどうにかなるけど来年度以降は
につちのさつちもいかない状態

「その件なのですが何とかあります」

「本当ですか!？」

「ええ、まず穴埋めの方はアルテールス大使館から打診がありまして、アルテールスの教
員たちが異文化交流という名目で音ノ木坂に派遣することを考えております。もちろ
ん日本語も堪能で日本文化に精通人たちばかりで、理事長が承認なさるのなら来年の春
から勤務可能です」

「それはとても助かります」

「次に共学化に伴う校舎の増築ですがこれは私の知り合いに建築会社から仕事を依頼します。これも先方には了承済みです。また資金の方も私の知り合いである個人投資家からの援助で賄えることができます」

流石に今の政府予算にそこまで出せれる気力がないのが現状………というか暴れすぎて晴海ふ頭が文字通り壊滅的な状態で海上流通に障害が出始めた。

幾らアルテールスから支援を受けるといっても今のユニオン情勢の悪化………というより永田町の一部では開戦間近とも声が出ているみたいで予算はギリギリで、文科省と財務省には金はこっちで出すから出張ってくるなどは言ってやった。

「後……勝手なお願いなのですが……」

「分かっています。工事開始は学園祭終了後に始める予定です」

金の方は透子さんからの融資で問題ないのだが

問題は建築の方なんだよな

学園祭終了後からやらないと間に合わないけど当てがないとはいえあの人に頼むものな・・・

色々大丈夫かな？

「後もう少しで学園祭ですけど進み具合はどうですか？」

「滞りなく進んでいます」

理事長に一礼して理事長室を後にした。

廊下には夏休み中にもかかわらず多くの生徒が学園祭の準備を行っていた。

廃校の白紙撤回は既に全生徒に知れておりみんな春先には考えられないハキハキした表情であふれていた

「悠斗おお」

生徒会室に戻ると涙目を浮かべている絵里が考えられない情けない声をあげていた
「……………どうした絵里」

これから言う事は分かっているが確認の為に尋ねてみた

「ねえ……………そろそろ練習に戻っては……………」

「駄目だ!」

あの後膝の調子は戻らず西木野総合病院で一度見てもらったら一発でドクターズ
トツプが掛かってしまった。

少なくとも数日は絶対安静にしないとイケなくてこの機会に溜まっている書類を整理していたのだが朝からずつと練習したい練習したいと嘆願している。

「でもでも、学園祭まで時間がないのだよ」

「きちんと先生の言うとおりにしておれば絶対に間に合うって何回言ったら分かるのかな？」

「まったく今日で何回目だ」

「ここまで駄々をこねる絵里なんて見たことないぞ」

本人は気づいていないが朝からこんなやり取りが続いて他の役員は目を丸くして
たんだぞ。

時に体をこすりつけるように嘆願してくるから質が悪い

・・・つたくしよよがないな

先生からトレーニング方法教えてもらったけどあまり使いたくないんだよな

「ああ、あんまり膝に負担をかけないトレーニング方法があるけど・・・一つ条件がある」
「条件？」

「他のみんな・・・特に幼馴染には黙つといて」

「え!?何で？」

「何でも」

「この練習方法がばれたら今度こそ俺の人生はジ・エンドで丘に俺の墓が建てられるだろ」

「それじゃ俺たちちよつと外回りに行ってくる」

「どちらまで？」

「区の保健所まで、この間提出した模擬店出店の申請が通ったから取りに来てくれて」

「本当は既に俺の家にあるのだがまだ他の役員には伝えておらず、これをダシにして行く」

役員には今日はこのまま帰る趣旨を伝えて学校を後にした。

「それで・・・どこに行くの?」

「国防省内の福利厚生施設にプールがあつて、水の浮力を使ってトレーニングをする」

「へえ・・・つてプール!?!」

「だからあいつらには言えないんだよ!分かるか!?!」

「う、うん・・・分かるわ」

絵里も俺が幼馴染たちから制裁を受けている姿は幾度となく見ていたので一発で理解してくれた。

考えただけでもおぞましい

一旦お互いの家に戻り水着を持って再び最寄りのメトロの駅で合流した。

国防省の福利厚生施設は家族且つ非常時ではない限り利用できるようになってい

俺はまだ傷口が完治していないため、水着と長袖のシャツを着た

一方絵里はつきり普通の水着で来るのかと思っていたら

「絵里さんや、何でそれで来たのや」

なぜスク水!?

「だって公共施設だから学校指定水着の方がいいと思って／＼／」

実は音ノ木坂学園では水泳の授業はないけど何故か学校指定のスク水を持っていて合宿で見たビキニ以上のドキドキだ

だからって反則だろう!!

ただでさえスタイルいいのにスク水みたいなピチピチ着たらある部分が更に協調されるだろう!!

それしか持っていないならもうあきらめよう。

どのみちバレたら俺の命はないんだ。

ならこの状況を目の擁護と思って楽しもう！

人生は楽しんだもん勝ちだしな！

「最初はゆっくりから始めてよ」

水中では陸以上に水圧による抵抗力が強く、その値は10倍ともいわれている

そのため何気な動作だけでも負荷はかかるが、肩までつかると浮力により膝や腰の負担が減少したり普段使わない筋肉を使うこともできる

更に浮力により身体が不安定なり体感を鍛えることもできる

プールに浸かっているだけで体温が奪われ、それに対し身体は体温を上げるためエネルギーを消費していく

これにより関節にかかる負担を減らしてしっかりと筋肉に刺激を与えてくれる。

膝を痛めている絵里にとっては理想の練習方法

「よし！今日はもう終わりだ」

「え!? もう?」

「先生に念を押されて短時間でやってってくれって」

「そう・・・分かったわ」

「あれ? 素直に上がるんだ?」

あれだけ我儘を言ったのだからもつと続けるのかと思っていたが予想外の回答に少しビビる

「ここまで我儘を言ったのだからこれぐらいは聞かないとね」

出来ればあまり言ってほしくなかったのが本音だがいいもの見れたし

着替えて国防省の敷地内を歩いていた時・・・

「・・・・・・・・」

「どうしたの?」

「いや・・・何でもない」

何だか国防省内の空気に違和感を覚えた。

靖国神社に行く時は何時も前を通っているからなんとなく今日の雰囲気は違った。

この張りつめたような空気

俺には覚えがある

作戦開始前の本部の空気と同じ雰囲気だけど、ニュースでは国会が大荒れ以外は目立った動きはない。

周りの動きもこれと言って目立ってはいないし、軍用トラックが街中を走っているわけでもないし

気のせいかな？

「そういえば模擬店の書類ってどうなっている？」

「ああ！俺の家においている」

「じゃ、それ取りに行つていい？明日の会議まで整理したいから」

「分かった」

幼馴染からは今日の練習結果が送られてきただけでノーリアクション

無事誤魔化しきれたかな？

「今開け……?!?!?」

部屋の鍵を開けようとした瞬間俺の脳内に言葉では言い表すことが出来ないイメージを過った

「どうしたの？」

「……………今すぐここを離れよう」

絵里は分からなそう顔をしているが俺の本能が今すぐ離れろと警告音が響いている

全身から鳥肌が立って冷汗が半端なくあふれている。

この感覚はマジでヤバい！

絵里の手をつないでこの場を離れようとしたが・・・

「う、海未!?! こ、ことり!?!」

通路の左右から凄まじい気配を出しながら現れたのは海未とことりだけだけど様子がいつもと違う。

顔は笑っているが目が一切笑っておらずそのハイライトの輝きは失っていた

そして俺の部屋の扉が開いて現れたのは・・・

「よお・・・穂乃果」

かつて凜にナンパ疑惑かけられた時以上の凄まじいプレッシャーと共に出てきたのはハイライトが消えたμ、sのリーダー

「ねえ・・・悠にい、今日は何処に行っていたの?」

「く、区役所だよ。学園祭に近いしちよつと色々調整を」

質問一つで間違いなく地獄への片道切符が強制的にプレゼントされる

「その割には髪の毛が濡れているのはなぜですか？」

「あ、暑かったからね。区役所の人が融通聞かせてくれてシャワーを借りたのよ」
絵里も3人から只ならぬ覇気で冷汗が出ている

「でもでも、何でタオルが見えているのかな？それって水着袋よね？」

ことりの一言でチェックメイト

積んだな

「続きは悠にいの部屋で聞きましょうか」

「………はっ」

俺と絵里は連行される形で部屋に入っていた。

そこからはまるで地獄の審判を受けるような凄いプレッシャー

その殺気は死神の鎌が首筋に当てられる感覚で指一本も動かしたら首が飛びそう。
俺も絵里も正座をして審判を待っていた。

今年に入ってから一番の恐怖

「確か……絵里はドクターストップがかかってしばらくは練習できないと聞いていました」

先に声を発したのが閻魔大王如く構えている海未からだ

「それは……ごめん。私が我儘言ったから」

「でも、何でプールなの？」

「水の浮力で膝に負担にならず運動ができるって先生に聞いたから」

「では最後です。なぜ区役所と嘘をついたのですか？」

「お前らにバレると後々面d・・・」

「ふん!!」

今起こったこと話そう俺は絵里と一緒に尋問受けて発言していたはずだ

だけど俺は宙に浮いている

そう・・・

海未のきれいな背負い投げで11階の窓から投げ出されていた

こんな状態でも冷静に分析ができるってすごいな・・・人間って

「つてバカヤロー!!!」

数分後

「いってて」

地面に強く叩きつけられて傷口が開いて包帯を巻きなおして貰った。

「全くきちんと大人しくしてくださいよ。ちゃんと絵里のための練習メニューを考えていたのですから」

「本当にごめんなさい」

結局は俺が投げ出される形で何とか収まったがあの時たまたま人がいなかったからいいもの俺以外なら100%事件もんだよ

「でも何で分かったんだ？」

「おじさんがLinkで教えてもらったよ」

穂乃果のlinkというSNSアプリを開いて

あの糞親父!!今度こそ帰ってきたらとつちめてやる!!

「……って何で国防省に来ているんだ？」

基本艦隊勤務で横須賀にいますね？

「さあ？」

海未は分からない

あの時の空気って各々司令の気迫だったのかな

マジで開戦じゃないだろうな？

冗談抜きで不安しかないのだが

「後こんなのが送られてきたよ」

「何々？」

Linkには9月の連休に佐世保鎮守府にて海軍カレーグランプリを行う

これはグランプリを名目に各基地の艦艇を佐世保に集結させて対ユニオン戦線の

布石だろう絶対に

「しかしこのまま不問にするわけにはいきません」

だよ

寧ろこのまま終わって後の爆弾にもなりかねないし

「今度悠にいいのお母さんのお墓参りに連れて行ってください」

「……それでいいの？」

いつもの過激な要求に反してこれでいいの？って思うぐらい不安感はある。

「ええ。そこで悠にいが不埒な真似をしているとご報告するので」

おい!?

「冗談だよ！ただここ最近全然いけていないなって練習の時に話している」

「うん！本当に久しぶりに行きたいなあと思ったただだから」

「お前たち……」

確かにここしばらくはμ、sの活動が忙しくいけてなかったからそういう事なら久しぶりに連れていくか

「ねえねえ!! だったらみんなで行こう!!」

「みんなってμ、sの皆で!?!」

「いいですね」

いつもなら穂乃果の突然の思い付きに対しては否定的な海未が乗り気になっている「それならその帰りにまた奢ってもらえるね♡」

ことりの発言を聞いてやっぱりあれだけでは収めてはおられないという事か

普段抑え役の海未の乗り気なこの現状でストッパー不在のこの状況を止める人間はいないので勝手に話が進んでいく

「ゆ、悠斗・・・これは私も払うから」

流石に自分にも責任の一端があると思っただのか絵里がそういう申し出を出したが・・・

「いや・・・この程度で済むのならこれに越したことはない」

11階から投げ出され、μ、s全員に奢るだけで今回の件はチャラになるのなら安いものだよ。

11階投げ出されている時点で色々アウトだと思いが気にしないでおう。